ミッシングリンク・online

ちきんぽっとぱい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミッシングリンク・ｏｎｌｉｎｅ

【Ｎコード】
Ｎ０８３５Ｙ

【作者名】
ちきんぽっとぱい

【あらすじ】
かつての大ヒットＭＭＯＲＰＧ「ミッシングリンク・ｏｎｌｉｎｅ」が、１０年以上の時を経てまさかの最新型ＶＲＭＭＯとして完全移植されることになった。河原雪乃（３３）とその娘美亜（１４）はサーバー上に残されていた過去のキャラクターデータを元に、２人１組でカムバックユーザーとして新生ミッシングリンクの世界へと招待される。そこは、雪乃が引退した旧ミッシングリンクから１８０年後の世界だった。／／ＶＲＭＭＯ系ものので、この先（かなり先）トリップ予定ですが主人公最強とかデスゲームものではありま

せん。シナリオ系クエストを中心に物語は進んでいきます。イントロ部分は母親視点ですが、メイン主人公は中学生の娘と、２７歳の童貞男です。※１１／７　時間の概念など、解り難い点が多くなって来たので簡易年表などの資料を作ってみました。
よろしかったら見てみてください。

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ３１９１ｙ／

0．失われたもの（前書き）

初投稿です。拙いですがよろしくお願いします。
Ｒ１５タグは念の為入れましたが、基本的にあまりそういうシーンはありません。

0. 失われたもの

――遥か遠き昔、この地に神が降り立った。

神は孤独であった。

神は大地に根ざした一種族に知恵と力を与え、その無聊を慰め共に生きるようにと諭した。

神は豊かなる海と大地を育み豊穣の実りをもたらした。

選ばれたる大地の種族はその恩寵に感謝し、この地で徐々にその数を殖やしていった。

その力は野を越え山を越え、遥か遠き海の彼方の大地までも覆い尽くすようになった。

多くの街が生まれ神の叡智により次々と各地に高度な生活様式を持つ文明を築き上げていった。

やがて神の覚えめでたき大地の種族は更なる力を欲するようになった。

大地の種族は神に願った。

「神よ。我々にこの地に棲まう何者にも劣らぬ強い力を与え給へ」
と。

神は愛する大地の種族に望む力を与えてやった。

力を得た彼らはその力を己自身以外の全ての者に対し振るうようになった。

「何者にも劣らぬ力」の為、とうとうこの地には何者をもが残らなくなった。

神はまた孤独になってしまった。

――これは遥か遠き昔の話　。

大地の種族と我等とを繋ぐものは何もない。

失われた環（ミッシングリンク）。

◇◆◇

秋の夕暮れが少し霧の懸かった湖面を緋色へと染め上げていた。

湖畔へと続く小道を1人の少女が足早に歩いている。

象牙色の肌に少し気の強そうな大きく澄んだ黒い瞳。形の良い赤い唇。
華奢な体躯は、大人の女へと成長を遂げる過渡期に差し掛かっているようだ。
銀に近いプラチナブロンドの長い髪は、夕陽を受け今はほんのりと薄紅色に染まっている。

「本当に行く気なの？」

突然、背後の木立から現れた影に声を掛けられ、ピクリと少女の肩が揺れる。
足を止めたものの決して振り返ろうとはしないその背中に、女はもう一度問い掛けた。

「…どうして？」

追って来た女の面差しは、何処かしら少女と似ている。
いずれ少女が成長し、この女のように成熟した大人の身体を持つようになれば、瓜二つだと言えるようになるかも知れない。
それにはまだ5年程の歳月が必要となりそうではあるが…。
しかし、女の髪は少女のような輝くプラチナブロンドではなかった。
限りなく漆黒に近いモスグリーンの髪が何物にも染まる事なく風に揺れている。

「…もう決めた事だから。…ごめんなさいとは言わないよ？」

サーッと一陣の風が吹き上げ、紅葉したプラタナスの葉がヒラヒラと舞った。
腰まで届く少女の長い髪も踊るように舞い、夕陽を浴びてキラキラと乱反射している。

小さく詠唱の声が聞こえたと思った時には、既に少女の足元に白緑に輝く魔方陣が完成していた。
くるくると魔方陣が回りながら大きくなり眩い光がその姿を包み込んで行く。

「さよなら。お母さん」

「待って！」

女は慌てて駆け寄り、娘を抱き寄せようと必死で手を伸ばす。

しかし、そこには僅かな魔術の残滓がキラキラと残るのみだった。

――――そして、また失われた絆（ミッシングリンク）。

1．お届け物です

――始まりは、ある晩届いた一つのダンボールからだった。

◇◆◇

ピーンポーン！

インターホンが鳴ると同時にやたらテンションの高い声が玄関から聞こえて来る。

「ばんわー！　河原雪乃さん宛てにお荷物でーすっ」

慌ててフライパンの上の餃子にジュワーッと水を回し入れて蓋をし、つまづきそうになりながらも何とかインターフォンのスイッチを押して応える。

「はーい　ちょっ…ちょっと待って下さい」

月末という事もあって普段よりも2時間ばかり多めに残業して帰って来た為、今日はちょっとばかり慌しい。
ベランダですっかり冷めたくなってしまっていた洗濯物を慌てて取り込み、遅くなった夕飯の支度に取り掛かろうと、つい先ほどようやくキッチンに立ったばかりなのだ。

「ちょっとー！　美亜っ　出てよ」

「ムーリー　今あたし、手ぇポテチの油でベタベタだもん。お母さん出てよ」

娘の美亜に声を掛けるも、もごもごと口いっぱいにポテチを頬張ったままリビングのソファの背もたれに片足を引っ掛けだらしなく寝そべったまま手の平をひらひらと振って軽く流されてしまう。

おいこら！こっちだって忙しいんだっつーの。
あんたポテチ食べながらテレビ見てるだけじゃん！ったく、誰のおかげで食べていけてると思ってるんだか。
年頃の娘なんだし、気を利かせて洗濯物のひとつくらい取り込んで置いておいてくれたらいいのに。
後できっちり親のアリガタミってものを分からせてやる必要がありそうだ。
独りごちつつ、梃子でも動きそうに無いぐうたら娘をジロリと横目で睨み、仕方無しにチェストから取り出した印鑑を片手にパタパタと玄関へと走る。

「すみません。お待たせしました」

「いえいえ。お忙しい時間帯にすみません」

爽やかな笑顔が眩しい青と白のストライプのシャツのお兄さんから

ダンボールを受け取り、送り状へと目を走らせる。
送り主はグローバルオンライン。国内最大手のオンラインショッピングモールを運営するインターネット総合サービス企業だ。

一体何の荷物だろう？　化粧品の通販なら昨夜届いたばかりだし、他には特にこれと言って何か買った覚えも無い。お中元やお歳暮が届くような家でもないしね。
…何だかとても嫌な予感がする。

「美ーー亜ーー！　ひょっとしてあんた、私の名義でなんか買ったんじゃないでしょうね？」

「ふぇ？　あらひ別ににゃんにも買ってないよー？」

と、口にポテチを2枚咥えたアヒルのような間抜け顔でふごふごと返事をしてくる。

…全く。黙って大人しくしてればそれなりにモテそうな我が娘、中学3年の美亜（１４）の実態は、実にダラシナイ残念系美少女なのである。
色白でぱっちりした瞳にふっくらとした赤い唇。ふわふわと柔らかい猫っ毛のショートボブ。
身長１５８ｃｍ。ショートパンツから伸びて黒のニーソックスに包まれた足はスラリと長く、全体的に細身の体型だ。
まだまだ発展途上だから胸は大きくないけれど、そこは如何せん我家の家系。
うちの母や叔母達そして私自身がそうであるように、将来はそれな

りにボリュームのあるサイズになるんじゃないかと思っている。

そろそろ彼氏の1人や2人出来たって良さそうなものなのに今のところまるでそのような気配もない。…というかあまりに色気が無さ過ぎる。

一応は年頃の女の子らしくそれなりにファッションやメイク、流行ものに気を遣っているようだけど、あくまでそれは自分自身の為といった感じで、自分が異性にどう見られているのかといった事は考えた事もないようだ。

よって産まれてからここまでの１４年間、色恋事には見事なまでに無縁で来ているのである。

まぁまだまだ子供って事なのかな？あまり気にしなくても、こういう事はいずれ時が来ればなるようになるもんだろうしね。

色恋を覚えたとしても、男に現を抜かして生活がこれ以上自堕落になるようじゃぁ目も当てられない気もするし。

溜息を吐きつつ、とりあえずは届いた荷物に意識を戻す。

縦横の幅はＡ３サイズぐらいだろうか？高さは１５ｃｍってところ？

品名の欄にはただ「精密機械」とだけ書かれている。

おーーい。精密機械とかあまりに漠然としすぎじゃないですかい？

一体何が入ってるんだか全くもって見当が付かない。

これはひょっとすると送付先間違いなのでは？という可能性も考えなくはないけれど、何が入ってるかわからないとなると如何せん人間逆に中身が気になってしまうものだ。

…宛先は一応ちゃんと私宛になってる事だし、万が一間違いだったとしてもちゃんと送り返せば問題ないよね？

あ、その時はきっちり着払いにさせてもらおう。

そう結論付け、思い切って開封してみる事にした。

◇◆◇

ダンボールの中には、さらにボックスティッシュぐらいのサイズの箱が２つ。
その上に二つ折りにされたＡ４サイズの紙が１枚。

…なんだろう？請求書？

開いたその紙に印刷されていたのはこんなメッセージだった。

――こんにちは。「ミッシングリンク・ｏｎｌｉｎｅ事務局」です。

この度は「ミッシングリンク・ｏｎｌｉｎｅ～ＶＲ～」カムバックキャンペーンにご応募いただき誠にありがとうございました。
厳正なる抽選の結果、ご応募いただいた方々の中からあなた様が『ミッシングリンク・ｏｎｌｉｎｅ～ＶＲ～・カムバックユーザー（ＶＲバイザー同梱Ｖｅｒ.）』に当選されました！

※ミッシングリンク・オンライン～ＶＲ～のプレイ方法、ＶＲバイ

ザーのご利用等の詳細につきましては、下記サイトをご覧ください。

今後とも「ミッシングリンク・ｏｎｌｉｎｅ」をよろしくお願い致します。

ミッシングリンク・ｏｎｌｉｎｅ事務局

2．母と娘の時間

「はぁぁぁぁ！？」

思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。
ミッシングリンク・ｏｎｌｉｎｅ～ＶＲ～・カムバックユーザーキャンペーンっ！？（しかもＶＲバイザー同梱Ｖｅｒ．）…何ソレ？おいしいの？

「美ーー亜ーー！？」

これはもう間違いない。どう考えても我が娘の仕業だ。
残念系美少女、河原美亜（１４）はこのところこの手のオンラインゲームに夢中なのだ。
いい若い娘がネトゲ三昧ってどうなのよ？と思わなくもないけれど、これについては実は私もあまり人の事は言えなかったりする。

私自身ゲームは嫌いじゃないし…というかむしろ大好物の類？
子供が出来てからは忙しくなり、すっかりゲームから遠のいてしまったけれど、若い頃はそれなりにいろんなネトゲを渡り歩いたものだ。
その中でも、この「ミッシングリンク・ｏｎｌｉｎｅ（略してＭＬＯ）」は、ほとんど生活の中心になってしまっていたんじゃないか？と言えるほど、どっぷりと片足を突っ込み（むしろ両足…いやいや下手すると腰くらいまで漬かっていたかも？）ディープにハマってしまっていたＭＭＯＲＰＧだった。

当時はまだ２Ｄ描画が主流で、ＶＲどころか３Ｄゲームもほとんど無かった。
ＭＬＯは３頭身の可愛いキャラクターを操作し、低スペックなＰＣでも遊べるという事で女性や子供のライトユーザーでも気軽に入っていきやすく、当時国内のＰＣゲームとしては他の追随を許さないユーザー数を誇っていたゲームだ。
とは言え、それも１５年近く前の事。
その後ＲＭＴ（現金によるゲーム内アイテムや通貨の取引）やＢＯＴ（ＡＩによる自動狩猟キャラ）の氾濫、ＧＭの不祥事など次々と問題が起こり、ユーザー離れを引き起こしてしまった。
運営会社が幾度も代わり、何とか細々とサービスは継続されていたようだけれど、やがて時流に乗って次々と後発のＭＭＯＲＰＧが美しいグラフィックの３Ｄ描画で展開されるようになってくると、ほとんど話題にも上がらないようになり、いつの間にやらひっそりとサービス終了。
「ＭＬＯ２」という３Ｄバージョンも作成されたもののユーザーの要望などはまるで無視の内容と不具合の続出でオープンβの段階で大コケ。おかげで運営会社の株価は急降下し、会社更生法の適用を余儀なくされたらしい。
あまり興味もなかったので、その後の運営や開発チームがどうなったのかまでは知らなかったのだけれど、美亜曰く、現在はどちらもグローバルオンラインに吸収合併されているのだそうだ。

◇◆◇

「…で？」

夕飯の後、改めてグローバルオンラインから送られて来たものの中身を確認しつつ話を聞くことにする。

「あー　その…勝手な事してごめんね?…でも、あたしお母さんと一緒にゲームしたかったの」

「ＶＲバイザー」を両手で握りしめ上目遣いで瞳を潤ませつつ、美亜が白状する。

我が家は母1人娘1人の2人きりの母子家庭だ。出来るだけ家族の時間を大切にしようとは思っているけれど、最近はお互いに仕事や塾などですれ違う事も多かったし、休日もあまり一緒に出掛けたりも出来てなかった。周りからも「友達親子」って言われるような関係だっただけにやっぱりちょっと寂しかったのかも知れない。

「ほら、クリスマスにモンスターテイマー買ってもらったでしょ?お母さんとプレイしてすごく楽しかったから…また他のゲームも一緒にやってみたいなって…」

モンスターテイマー。超人気ＭＯである。

ポータブルゲーム機でオンラインでもオフラインでもどこでも気軽に協力プレイが出来るソレは、年が明ける頃には４００万本を超える大ヒット作になっていて、職場の同僚や決してもう若いとは言えない私の友人達の間でもかなり話題になっていた。

今まで美亜がやっていたＰＣやコンシューマーゲーム機のゲームと違い、家中のいたる所、移動中の車の中、待ち合わせの店など…いつでもどこでも場所を選ばずに彼女が楽しそうにプレイしている姿を横目で見ているうちに私もやってみたいと思うようになっていたのである。

気が付いた時には自分用のGSP（グローバルステーションポータブル）本体とソフトを購入していて、この春休みはついつい美亜と2人して狩り三昧。いい年こいてゲーム熱を再燃させてしまっていた。

――河原雪乃、33歳にしてモンスターテイマーデビュー。遅い春であった。

慌しく過ぎていく毎日の中、夕飯後、お風呂上がりなどのほんの僅かな自由時間にリビングやベッドでごろごろしながら「ちょっと一狩りだけ行こっか！」と親子2人で過ごしていた時間は、雪乃が思っていた以上に美亜にとって大切な時間となっていたのかも知れない。

「それでね。ここ最近、雑誌とかゲーム関連サイトでＭＬＯがＶＲに移植されるって話題になってたのを見て、そういやお母さん、あたしが産まれる前にＭＬＯをやってた。って話をしてたなーって思い出して…」

え？何ソレ？

ミッシングリンクがＶＲＭＭＯ－ＲＰＧ（仮想現実体感型多人数同時参加オンラインＲＰＧ）として移植…？

今流行のばーちゃるりありてぃーってヤツですか？　えぇっ？マジで？今更あの２ＤのＭＭＯＲＰＧを？なんでっ？

「最近、過去のヒット作のリメイクとか移植が流行ってるでしょ？

ＶＲバイザーもまだ出たばっかであんまり普及率高くないから、過去の大ヒット作を移植して何とかハードの方も売ろうっていう魂胆なんじゃないかなぁ？」

美亜曰く、ミッシングリンク・ｏｎｌｉｎｅ～ＶＲ～自体は現在第３次クローズドβテスト中なのだそうだ。
過去のＭＬＯのキャラクターデータをそのまま移管する事も可能で、本サービス稼動時にはクローズドβ、オープンβのデータをワイプなしでそのまま継続使用出来る。という事になっているらしい。
…とはいうものの所詮はβテストだし、実際のところ本当にそうなるかどうかは怪しいもんだと思うけどね。

◇◆◇

ＶＲ（仮想現実体感）システムは、ここ数年で急激に発達して来た技術だ。
初期のＶＲシステムは酸素カプセルのような大きな卵型の筐体だった。
ＶＲで再現される世界は非常に精巧で、一度その世界に入ってしまえば、意図的に視界にアイコンやコンソールなどを表示させなければ、現実との区別するのはほぼ不可能なのではないかと言われている。
「誰でも気軽に世界旅行や宇宙旅行が楽しめる」そんな触れ込みで、大手家電店にはデモンストレーション機が並べられた。
あまりの精巧さに、一時は旅行業界などこのまま淘汰されてしまうのではないか？と危惧されたものの実際にはそうはならなかった。
如何せん日本の一般家庭に置くにしては大き過ぎたし、価格の方もまだまだ誰もが手軽に買える。というような物では無かった。

第一、世界旅行なんて毎日行くようなものじゃない。旅行なんてものはたまに行くからこそ楽しいのだ。
尚且つ、旅は1人よりも家族や気の置けない仲間と楽しみたいと思っている人の方が大多数なのである。
ＶＲで旅行を楽しみたくとも、1家に1台だけＶＲ筐体が鎮座していたところでどうしようもない。
それを回避しようと思えば、友人や仲間同士で揃ってＶＲ筐体を購入するか家の中に複数台のＶＲ筐体を並べる他ないのだ。

…結局、カプセル型のＶＲ筐体は企業や一部の富裕層には受け入れられたものの一般家庭にはほとんど普及しないまま家電店の片隅に並べられた「お試し」専用の高級マッサージチェアと似たような扱いになってしまっていた。

2．母と娘の時間（後書き）

モンハ〇のもっとハイスペックなヤツみたいなイメージで。

3．日本の技術力恐るべし

旅行業界に限らず、家電業界、ゲーム業界もＶＲシステムへ積極的に参入して来ていた。
開発費用が莫大に掛かる為、ある程度大手には限られてはいたものの、カプセル型ＶＲ筐体用にもいくつかのゲームタイトルも作られていたらしい。
けれど、ＶＲシステムで再現する事により一番の売れ筋商品となりそうな肝心のＭＭＯＲＰＧの開発は難航していた。
サーバー上にひとつの世界を作り出し、いわば異世界での冒険や生活を楽しむ事が目的となるＭＭＯは今までの使われていたようなサーバーマシンではとてもじゃないが処理速度が追いつかない。スーパーコンピューターを超える演算処理機能がべらぼうに高いマシンの開発が必須とされていた。
さらに３ＤＭＭＯＲＰＧとは違い、リアルであるが故に突然のサーバートラブルなどで回線が遮断された場合、ユーザーへの反動も大きくなる。たびたび緊急メンテナンスが入るようではお話にならない。

それに加えて、ＭＭＯＲＰＧの世界ではシステムや世界観もさる事ながら、実際にどれだけ多くのユーザーが参加して活発にプレイしているかに成功が左右されるところが大きいのだ。
例えどれだけおもしろい作品を作ったとしても、そこへ参加する為の手段のハードルが高くては、誰でも気軽にログインする事が出来ない。人が少ないＭＭＯなどあっと言う間に寂れて過疎ゲーになってしまう。
高額なサーバーを多数導入して、あっさりコケたとあってはしめしが付かない。

とにかくＶＲシステムにとっては、ソフト面の開発よりもハード面の開発の方が大きな課題だったのである。

◇◆◇

美亜曰く、そのＶＲシステムをたったの数年でここまで小型軽量化し、家庭用ゲーム機のＧＳ（グローバルステーション本体）と接続可能にしたのが、このグローバルオンライン社なのだそうだ。
（日本の技術力恐るべし！）
しかも、ＭＬＯは別にＶＲバイザーが無くてもＧＳ（グローバルステーション本体）とＧＳＰとイヤホンマイクがあれば簡易接続が出来るようになっているらしい。
もちろんその場合はＶＲモードではなく、３Ｄでのプレイ画面になるけれど、リアリティ溢れるＶＲシステムを利用したユーザーとポータブルゲーム機で一緒に遊べるなんてすごく画期的な事なんじゃないかと思う。
実写映画にアニメキャラを合成するような感じなのかな？
…にしても…技術の進歩というのは日進月歩なのでございますね。
なんつーか…おばちゃんちょっと付いていけそうにないや。

と、思わず遠い目をしていたら美亜に肩をガクガク揺さぶられた。

「ちょっ！おかーさん！おかーさんってば！現実逃避しないでよー。ねっ？カムバックキャンペーンでせっかくＶＲバイザー当たったんだから、一緒にＭＬＯやろっ？」

ハッと我に返る。
そうだ。ソレ！そもそもカムバックキャンペーンって何なのよ？
もちろん私だって、かつて隆盛を誇ったオンラインゲームがユーザーを呼び戻す為に行うカムバックキャンペーンの存在くらいは知っている。
基本無料のネトゲはともかくとして、月額固定などの定額制を導入しているオンラインゲームの場合、一度何らかの事情で離れてしまったユーザーはわざわざ再度課金しないとならなければならない為、なかなか戻っては来ない。
その為、長期間ログインしていないユーザーに無料プレイ期間やサービスアイテムなどを提供して何とか戻って来てもらおうと、メール等で呼びかけるのである。

にしても、私がＭＬＯをプレイしていたのは既に１５年近く前の話だ。旧ＭＬＯならともかくとして、現在クローズドβ中のゲームにカムバック？？
今ひとつ意味がわからない。
というか、このキャンペーンに該当する事が出来てご丁寧に我が家にＶＲバイザーが届いたという事は、未だに当時のユーザー情報やアカウントデータが残っていたって事？
よくもまぁそんな古いデータが残っていたもんだ。…っていうかそんな無駄なデータ残してたから経営が傾いたんじゃないの？とも思わないでもない。

「ちょっと待って美亜！カムバックって言ったって、いくら私でもとっくの昔にＩＤもパスワードも忘れてるよ？っていうか登録してあったメールアドレスとか詳細情報も知らないだろうに、あんた一体どうやって私の名前でキャンペーンに応募したの？」

「あぁそれ？　なんかねー。さすがに古いゲームだから、みんなＩＤとかパスとか登録アドレスとか忘れてる可能性高いだろうからって、本名とか住所とか電話番号とか保険証の番号を入力したらいけたよー？」

……おぃ。そんなんでいいのか？

クソ運営様、ユーザー取り込み必死過ぎです。

3．日本の技術力恐るべし（後書き）

…ぶっちゃけ自分でもちょっと無理があると思う。

4．カムバックキャンペーンですか

運営会社の顧客情報管理体制に疑問を覚えつつも、既に美亜が情報を渡してしまったっていうのならもうどうしようもない。
いや、実際のとこ全くもって納得しちゃーいないけどね…。

とりあえずブラウザを立ち上げ、公式サイトのカムバックキャンペーンの内容を見てみる事にする。

◇◆◇

【第３次クローズドβテストにおけるカムバックキャンペーンについて】

■対象者：旧ＭＬＯユーザーと新規招待ユーザーとの２人１組。

■旧ＭＬＯユーザーとは、かつてミッシングリンク・ｏｎｌｉｎｅ（以下旧ＭＬＯと表記）のアカウントを所持していたユーザーの事とします。

■旧ＭＬＯユーザー、新規招待ユーザー双方共に、旧ＭＬＯアカウントとは別途に現在クローズドβテスト中の「ＭＬＯ～ＶＲ～」のアカウントを所持していない事とします。

■旧ＭＬＯユーザーのアカウント内の２キャラを分割し、それぞれ旧ＭＬＯユーザーアカウント、新規招待ユーザーアカウントとして２つの新しいアカウントとして別途運用するものとします。

■当カムバックキャーンペーン対象者は、βテスト終了後、本サービス稼動から３０日間無料でプレイしていただく事が可能となります。

■尚、ＶＲバイザー同梱バージョンへのご応募に限り、アカウント内の２キャラクター双方に「時空の砂時計」アイテムを適用している事を必須条件とします。

かつての人気オンラインゲーム「ミッシングリンク・ｏｎｌｉｎｅ」の大先輩ユーザーとして、新規参入プレイヤー達に適切なアドバイス、指導を行ってもらえる方のご参加を心よりお待ちしております。

…ｅｔｃ.

まだ他にも色々と細々とした注意事項や、カムバックの際の特典などについて書かれていたけれど、ざっくり読んだところではこんな感じ。

何なんだろう?これ?実際に旧ＭＬＯをプレイしていた私ですら今ひとつ意味がよくわからない。
要するに旧ＭＬＯユーザーが持っていたアカウントの２キャラのうちどちらか１キャラを新規招待ユーザーに与えて、一緒にプレイを開始しなさいって事?
…うーん?でもそれってどうなんだろう?

招待されるユーザーはおそらく旧ＭＬＯユーザーの身内になるんだろうけれど、せっかく新しく始めるゲームで他人が育てたキャラクターをいきなりポンと与えられたところで、それってゲームとして本当におもしろいの？って思う。

そりゃ「とにかく強けりゃいい。チート最高！うひゃひゃ俺ＴＵＥＥＥＥ！」って人もいるだろうとは思うけど、やっぱりキャラクターっていうのは自分の分身な訳だし、０から育てていく楽しみを奪ってしまうのはどうかと思う。

過去の２ＤＭＭＯならともかくとして、この「ＭＬＯ～ＶＲ～」はＶＲバイザーを採用した今までに無いリアリティ溢れる世界の筈である。そんなリアルな世界で、他人の（育てた）キャラクターにいきなりログインしたとして、果たして感情移入なんて出来るものなんだろうか？

そんな事を考えながら読み進んでいくと、こんな事が書いてあった。

■分割された新規招待ユーザーアカウントのキャラクターの能力値は０歳児と同じ状態にリセットされます。（外見上の設定、名前なども自由に変更可能）

…なるほど。

能力値は一度リセットされる訳ね。

けれど、見た目は自由に設定可能という事らしい。さすがに見た目年齢まで０歳児に設定されたら当分まともに行動出来そうにないだろうし、それはないか。

ちなみに旧ＭＬＯは当時２ＤＭＭＯの主流だったレベル制ではなく、スキル制を採用していたゲームだった。

そのスキルは多種多様で、何か特定の動作を繰り返す事でそれに呼応するスキルが上がっていく。
スキルには合計での上限値があり、いくら他のスキルを削って特定のスキルのみを伸ばそうとしてもその合計上限値だけは超える事が出来ないようになっているという仕組み。
その合計上限値を突破する事が出来る唯一の手段が転生なのである。

基本的にこのゲームでの転生は1人では出来ない事になっている。
何故なら転生は、今まで使用していたキャラとは違う全く新しいキャラに生まれ変わるという事。
つまり他のプレイヤーキャラと結婚をする事により、新しい命を育み出産するのだ。
（ご都合主義的に１００％双子が生まれる事になっている）

夫婦はそれぞれ1人づつ自分の後継者となる赤ん坊のキャラクターを手に入れ、その子がある程度育つまで時を待ち、やがて転生元のキャラの能力や特性を新しい世代へと引き継いで古い世代のキャラは消えていく。
1アカウントにつき、キャラクタースロットは2つ。
どのような順で転生するかは自由とされているけれど、同一アカウント内に存在するキャラクターは必ず親や子、孫などの直系の血縁関係という設定なのである。

赤ん坊が産まれ育っていく事からもわかるように、このゲームのキャラクターたちは時の流れと共に歳を経るようになっている。
赤ん坊から幼児期、少年期、青年期を経て最後にはヨボヨボの年寄りになってしまうのだ。
（でも転生を行わない限り、死亡・消滅する事はない）
妙なところでリアルなところに拘っていたゲームだと思う。

もちろん永遠の若さに拘る人だって多い。
一定時間見た目年齢を変化させる事が出来る「時のキャンディ」というアイテムや、キャラクターの肉体上の時を止めてしまうアイテムも存在していた。
「時空の砂時計」というのがそのキャラクターの肉体上の時を止めるアイテムに該当する。
２０００時間以上プレイしたユーザーにのみ与えられた特典アイテムで、それをアカウントの2キャラ双方に適用しているという時点で、ＶＲバイザー同梱版のカムバックキャンペーン対象者はかなり絞られて来る。
しかも既にサービスが終了してから１５年以上も経っている。実際のところどの程度の応募があったんだろうか？

…というか、その条件をクリアして我が家にばっちりＶＲバイザーが届いている時点で、かつての私の廃プレイヤーっぷりってのが判るってもんですね。…はい。

にしても最後の一文も引っかかる。
コレって、旧ＭＬＯユーザーを都合よくＧＭ代わりにこき使おうって魂胆なんじゃ？本当に大丈夫なのかこの運営？

とは言うものの、あまり深く考えたところで所詮はゲームだ。
カムバックキャンペーンって事でこっちは１円も使ってない訳だし、個人情報さえ流失しなければ、気軽に楽しんでみてもいいかも知れない。

「うーん、個人情報ねぇ。だってお母さんいつもグローバルオンラ

インでいろいろ買ってるじゃない。グローバルカードだって使ってるんでしょ?今更って気もしないでもないと思うけどなー。それにＶＲシステムを使用する時点で、健康とか安全面の関係で正確な個人情報登録が必須みたいだよ?」

ＶＲバイザーをいじくりながら美亜が暢気に安請け合いしてくる。いくら同じ会社とは言え、ネット通販部門やクレジットカード部門と、ネトゲ部門が同じ管理体制かどうかは怪しいもんだと思うけどね…元々吸収合併された別会社な訳だし。

軽く溜息を吐いて、とりあえずはマニュアル読破と各種設定は美亜に任せる事にし、さくっと入浴する事にした。

5．キャラメイキング

お風呂から上がってハイボールのグラスを片手にリビングへと戻ると、美亜がちょうどＶＲバイザーを外し起き上がったところだった。

「もう設定は終わったの？」

「うん、大体。あ、あたし勝手にキャラ選んじゃったけど大丈夫だった？お母さんどっちのキャラがやりたいとかあった？」

◇
◆
◇

ちなみに私のアカウントに残っていたキャラデータは、

【ユキノ・ウォールバンガー】
青年期・既婚♀・伴侶＝エイジ・ボートマン
父＝ジェイク・スプリガン
母＝サクラ・ウォールバンガー

必要最低限の攻撃系スキル１種と、魔法スキル、後は生産系に特化したキャラクターになっている。

【ホタル・ウォールバンガー】
少年期・未婚♀・伴侶なし
父＝エイジ・ボートマン
母＝ユキノ・ウォールバンガー

こっちのキャラも、攻撃系スキルが1種。残りは魔法に特化したキャラ。火力重視だ。

◇◆◇

「別に私はどっちでも良かったけど？美亜はどっち選んだの？」

聞くまでも無いような気がしたけど、何となく聞いて欲しそうな顔をしているので一応聞いてみる事にする。

「ん…ホタル。だってユキノはお母さんの名前だし、ホタルはユキノの娘だし…ね？」

いやいやいや、カムバック時に名前は変更可能だって書いてたし。母と娘キャラって言ったって、実際にプレイを開始すれば0歳児に能力リセットされるからどっちでもあんまり変わらない気もするけどね。

とは言っても、既に一度習得しているスキルは再度上げ直す際には補正があるのでサクサク上がるようにはなっている。キャラの方向性として大体決まっているようなもんだから、血の気が多い美亜が生産特化型キャラよりも戦闘特化型キャラを選んだのは自然な流れだと思った。

「わかった。アカウント分離とか外見上の設定も済んだ？」

「うん。ちょっと見てみて？」

美亜が再びＶＲバイザーを装着すると、しばらくしてテレビモニター上に美亜そっくりのキャラクターが映し出された。違うのはプラチナブロンドに輝く髪の色と腰までありそうなその長さぐらい。

名前も「ミーア・ウォールバンガーＪｒ」になっている。

「ちょっ　ウォールバンガーＪｒて。ファミリーネームなのにそこにＪｒって付ける？普通」

頬を膨らませて、ちょっとムッとしながら美亜が反論してくる。

「そりゃ、あたしだって変だって思うよ？　でもコレ公式なんだもん。アカウントを分離するからファミリーネームが重複しないようにする為の処置みたい」

なるほど。

ＭＬＯはキャラが別人へと生まれ変わっていくゲームなのである。なので当然キャラ名も転生毎にどんどん変わっていく。その為、ユーザー検索や指名による個別チャットの際にはキャラ名ではなくファミリーネームの方を使用する事になっているのだ。

「お母さんもユキノの外見設定してみて？その間にあたしもお風呂入って来ちゃうから、そしたら一緒にログインしてみよ？」

言われるままに、とりあえずＶＲバイザーを装着してみる。

旧ＭＬＯをプレイしていたと言っても、１５年近く前の話だ。はっきり言って、インターフェイスとか操作方法なんてさっぱり覚えち

ゃーいない。

けれど、そんな心配はどうやら杞憂に終わりそうだった。まだＭＬＯにログインしている訳じゃないのから実際のプレイフィールドでどうなるのかはわからないけれど、キャラクリエーションの設定フィールドでは、目線を動かしたり「ああしたいな」「こうしたいな」って意識的に念じるだけで、その通りになるようになっていた。一体こんな小さな装置にどうやってそんな高度な機能を詰め込んでるんだろう？

ちなみにデフォルトの自キャラは、等身大の自分自身そのものだった。

テレビモニターを通して美亜のキャラクターを見た時はただの３Ｄ画像ってほどにしか感じなかったのに、ＶＲモニターで見るそれは本当に目の前に存在しているかのようにリアルだ。

自分がもう１人目の前にいるみたいでちょっと気持ち悪い。まるで質感のある鏡のようだ。

一体コレはいつの間にどうやってスキャニングしたんだろう？本当に不思議だ。

しばらくただ呆然と眺めていたけど、正直、キャラクリエーションと言ったってここまでリアルだと何処をどういじっていいのかよくわからない。

こういうのってあんまりいじると却って不自然になってしまいそうな気がするし。

いかにも整形しました！みたいな感じになってしまったら目も当てられない気がするので、美亜と同じく私もほんの少しだけ髪の色をいじるだけに留めて置いた。

5．キャラメイキング（後書き）

ちなみにキャラ達の名前はどちらもオレンジとウォッカ系のカクテルの名前からとりました。

ウォールバンガーはハーベイ・ウォールバンガー
ボートマンはボルガ・ボートマン

6．お母さんは心配性（前書き）

美亜のターン。

6．お母さんは心配性

「おっまたせー！」

まだ濡れた髪をバスタオルでわしゃわしゃと適当に拭きながら、勢いよくリビングへと踊り込む。

母はそんなあたしの事を呆れたように眺めながら大きく溜息を吐いた。

「ったく…あんたって子は！　ほんっとダラシが無いんだから。ちゃんと髪ぐらい乾かしてから来なさいよ。

大体今からＭＬＯにログインする気なんでしょ？仮想世界に入っちゃったらリアルで何が起こってるかわからなくなるでしょ？冷えて風邪でも引いたらどうすんの。慌てなくてもいいからちゃんとブローしてから来なさい！」

「えー！大げさだよー。ＶＲバイザーには安全装置が付いてて、身体への何らかの影響があればすぐに感知してちゃんとアラートを送る仕組みになってるってマニュアルに書いてあったよ？」

そんなあたしの反論も虚しく、またジロリと睨み付けられてしまった。

「だからと言って、ＶＲシステムに接続している最中には何の問題も無かったとしても、後から熱が出たり体調を崩したりするようなケースまでシステム側が想定しているとは限らないんじゃない？や

っぱ自分で取れるべき自衛手段はきちんと取っておくべきだと思う」

…うっわーっ！自衛手段とか。　たかだかゲームをやるだけなのに、いくらなんでも考えすぎなんじゃないの？って思う。正直ちょっとウザイ。

うちの母はちょっと過保護なところがあるのだ。

せっかくスタイル抜群の美人さんなのに、言う事がいちいち小言っぽいと言うか…おばちゃん臭いと言うか。

変に苦労性なのか色々と心配し過ぎなんだよね。

大体３３歳って言えば、もうちょっと考え方とか若くてもいいんじゃないかって思う。

だって、うちの学校や塾の先生達だってもっと年上でも独身で親と同居してる人とかザラだもん。

我家の場合、ずっと母１人子１人だったから必要以上に「親らしくしなくちゃ」って気負って精神的に老け込んでしまってるのかも？

言い換えれば、それだけあたしの事を大事にしてくれてるって事だから、ちゃんと心配してくれて嬉しいって気持ちと、やっぱりちょっと煩わしいって気持ち、それからひょっとしてあたしのせいで自分自身の幸せ逃しちゃってるんじゃないの？って不安になる気持ちがごちゃ混ぜになって何だかちょっと複雑だ。

「あーーー！もうっ　わーかったよ。うるっさいなー

ちゃんと乾かしてくればいいんでしょ？ちゃちゃっと行って来るから、ログインしたら何やるか決めといてよねっ」

そんな憎まれ口を叩きながら、あたしは洗面所へと踵を返した。

◇◆◇

その後しばらくして自分の部屋に戻り、ベッドに横になってしっかりと布団を被ってからＶＲバイザーを装着した。
一足先に自室に戻った母の方も今頃同じように横になりログインしている筈だ。

簡易型のＶＲバイザーには、カプセル型筐体のように全身を包み込んで体温管理・保護する機能はない為、横になり体が睡眠状態になった時に脳に働きかけ、身体に出来るだけ余計な負担を掛けない状態で仮想現実空間を再現するようになっているらしい。詳しい事はよくわからないけれど、脳に擬似的に夢を見せているようなものなのかも知れない。

――― ヴォン！

美亜は突然軽い浮遊感に包まれ少し混乱した。　身体の自由が全く利かない。
現状を把握する為周りを見ようして、瞼すら開く事が出来ないのに気が付く。

どうする事も出来ずにフワフワと宙に漂っていると、やがて何処からか身体の芯まで響くような低い声が聞こえて来た。

――遥か遠き昔、この地に神が降り立った。

神は孤独であった。

神は大地に根ざした一種族に知恵と力を与え、その無聊を慰め共に生きるようにと諭した。

神は豊かなる海と大地を育み……

・　・　・

やがてその声も止み、辺りは元の静寂へと包まれる。

しばらくしてゆっくりと身体が下降していき、カクンと地に足が付いた。

瞼を閉じていても頬に感じる温かさで辺りが光に包まれているのが分かる。

ゆっくりと瞼を開くと、そこは様々な色の光で溢れ返る世界だった。
眩しさのあまり顔の前に思わず手を翳し、その甲に目を留めてふっと笑ってしまう。

「おっかしー、ホクロまでそのまま再現されてるんだ？　どんだけ無駄にリアルなの？」

目が慣れるのを待って周囲の様子を覗ってみると、どうやら教会のような施設のようだ。
カラフルな光の正体は巨大な天窓に施された緻密なステンドグラスから漏れたものだったらしい。

身体を捻って全身をチェックしてみる。
キャラクリエーションの時に見たシンプルな下着姿とは違い、柔らかい素材のチュニックシャツに黒のレザーのベスト、レギンスのようなぴったりしたパンツにブーツを履いている。
現実世界にも普通にありそうなファッションであまりファンタジーっぽくない。
強いて言うなら、滑らかで肌触りが良い素材のあちこちに刺繍などの細かい意匠が施されており、何だかやたら高級そうな気がしなくもない。という程度？

手首や腕にはいくつかのブレスレットが嵌められ、胸にも複数のネックレスを掛けている。
サラリと零れて来たプラチナブロンドの髪を掻き上げた拍子に、耳にも大きな石のついたピアスを付けているのがわかった。

これだけジャラジャラとアクセサリーを付けている割には、意外にも指輪は一つも身に付けていない。

意識を集中させると、それぞれの装備の詳細が脳裏に浮かんで来る。どうやら今着ている普通の洋服っぽい衣装は、母である生産特化キャラ、ユキノの作品のようだ。

アクセサリー類にも何やらいろいろ強力な補正が付いているらしい。同じようにステータスやインベントリウィンドウが意識するだけで簡単に開閉出来る事をさっくりと確認だけして、逸る気持ちを抑えながら外へと出る為の巨大な両開きの扉の前へと一歩を踏み出す。

――――さぁ、行こう。　ミッシングリンクの世界へ。

7．パルノイエにて

扉の向こうには抜けるような青い空と、石造りの白い壁にオレンジ色の屋根の可愛い建物が並ぶ綺麗な街が広がっていた。
どうやらこの教会（？）は小高い丘の上に建っていたらしい。
街をぐるりと囲む高い城壁の外側には青々とした緑の大地が広がっているのが見える。

雄大な景色に思わず伸びをして深く息を吸い込むと、何処からともなく漂よって来た肉の焼けるような香ばしい香りと、スパイスや甘さの入り混じったいい匂いが鼻腔をくすぐった。

――フォン！

『あ、美亜？　聞こえる？　今、パルノイエ教会から出て来たんだね。じゃあ、そこの長い階段降りてしばらく真っ直ぐ行ったら突き当たりを左の方に来てくれるかな？』

どうやら母の雪乃がこっちの位置情報を確認して個別チャットを送って来たらしい。

『ほーい！了解っ　今から向かいまーす』

声に出さなくても頭の中で念じるだけで会話が出来るなんてなかなか便利だ。

うっかり使い方を間違って考えてる事が他の人達に駄々漏れ。なんて事になったらかなり恥ずかしいけど。

勢い良く駆け降りた長い階段の先は大通りへと繋がっていて、そこには大小様々な屋台が所狭しと立ち並んでいた。

『うわっ！すごい。何コレ！お母さん、今日って何かのお祭りなの？』

『…うーん？どうなんだろ？　その辺りは昔プレイヤー達の露店ストリートになってたところなんだけどねぇ…』

けれど、現在のＭＬＯは未だクローズドβ中なのだ。　…いくらなんでもこんなに大勢のプレイヤーがいる筈もない。

『えっ？　って事は、ここに並んでるたくさんのお店も、前が見えないくらい溢れ返っているお客さんも、そのほとんどがＮＰＣって事？　うっわー凄いっ！』

個別チャットで会話を続けながらキョロキョロと屋台を冷やかしつつ街を歩く。

確かに少し注意して見てみれば、テントで串焼きやドリンクなどを売っているような普通の店に混ざって、地面の敷物の上にドロップアイテムらしき物を並べているガチガチの重装備の人や、スキル上げに作ったらしき似たような品を大量に並べている生産者の姿など

もちらほらと見受けられる。

人の波に押し流されそうになりながらも、泳ぐようにして何とか通りの突き当たりまで行き着いた。
路地を左へと曲がると屋台も人の数も徐々に疎らになり、ようやく普通に歩く事が出来るようになる。

静かになった通りをしばらく歩いていると、何処からか調子っぱずれな歌と賑やかな笑い声が聞こえて来た。
ちょっとした好奇心で声がしてくる脇道を覗き込むと、細い路地の先に赤いテントとテーブルがいくつか並べられた屋台があり、思い思いに飲んで騒ぐ酔っ払い達の姿が見えた。

…何となーく嫌な予感がする。…まさかね？

けれど、案の定その酔っ払い達の中に特大サイズのマグを豪快に飲み干し、ドカンッ！とテーブルに置く我が母の姿を見つけてしまった。

「ちょ！お母さんっ　何やってんのっ？」

「あ、来た来た。ミーアこっちいらっしゃーい」

左手でマグを持ち上げ店員におかわりを催促しつつ、ヒラヒラと右手を振って呼びつけて来る。

「うわっ　ちょっと！やめてよ。もー！恥ずかしい。」

見ると、ユキノと同じテーブルに掛けていた男達がニヤニヤとおもしろそうに笑っている。

「可愛い娘さんだね」

「あ…そのっえっと。…こんにちぁ…」

思わず真っ赤になって尻すぼみになってしまう。

『お母さん、この人達昔の知り合いか何か？』

『ううん。ついさっき知り合ったとこ。ＭＬＯ自体久々だし、ＶＲになって何がどう変わってるんだかサッパリわかんないからとりあえず情報収集しとこうと思って』

『情報収集はいいけど、何そんなガブガブ飲んじゃってんのよ。せっかく当たったクローズドβなんだよ？その記念すべき第１回目のログイン直後にやる事が飲んだくれオンラインて…そんなネトゲ聞いたことないよ！』

ユキノに隣に座るように促されて腰掛けながら、２人の男達の様子を窺う。

巨大なバスタードソードを背負った赤毛の男は彫りの深い西洋人風の顔立ちをしている。もう1人の方は職人だろうか?皮のエプロンを身に付け、長い黒髪を後ろで無造作に束ねていた。
どちらも見た目は20代前半と言ったところである。

「娘のミーアよ。今日デビューなの」

「…へぇ?ユキノさんが出戻りで、娘さんが一緒にデビューって事は…あんた達、ひょっとして例の2人1組のカムバックキャンペーンの対象者か?」

職人風の男が面白そうに笑う。

「あぁ悪い。俺は長船(おさふね)。…で、こっちの赤毛がヴォイド。」

「…ん?どういう事だ?」

ヴォイドだと紹介された赤毛の男が腕組みをして、頭上にクエスチョンマークを飛ばし首を傾げている。

「ほら、この間説明してやっただろ?このゲームは転生すんのに、わざわざ子供を作る必要があんだよ。
だから1アカウント内に存在する別キャラは自動的に元キャラの子供とか孫になる。」

「……？」

ヴォイドさんは今ひとつよくわからない。というように両手の平を空に向け、お手上げポーズをとる。

「本来なら、同じ姓を持つ母親と娘は同一アカウントの中にしか存在しない。つまり中の人は1人って事だ。だから、端っからこんな風に母娘で同時にログインする事なんか有り得ねーんだよ。だけど、今回のカムバックキャンペーンってのは、その一つのアカウント内に存在する2キャラをそれぞれ分割して新アカウントとして別人がプレイする。って事になるらしいぜ？」

なるほどっ！とでも言うように、ヴォイドさんがポンっと手を打った。

…何だか、さっきから妙にオーバーなリアクションの多い人だ。

8．電子の海に消ゆ

「ちなみに俺もあんた達と同じで、ちょっと前にキャンペーンでカムバックしたクチ。」

「へぇ！って事はベテランさんなんだ！…じゃあ長船さんにも親子のキャラとかがいるんですか？あ、ひょっとしてヴォイドさんがそうなのかな？」

「いやいやいや。さっきも説明してたろ？こいつ、まだ全然わかってない初心者だから」

話しながらも金属製のゴブレットで美味そうに次々とワインを空けていく長船さんとは対照的に、エールの入ったタンブラーを握ったままボソリとヴォイドさんが呟く。

「…俺は、第1次クローズドβからの新規です。」

「前回のカムバックキャンペーンの募集ん時はさ。2人1組じゃなかったんだよ。アカウント内のどちらか片方のキャラを選ぶしかなかった。」

「へぇ…」

「で、俺は生産やりたかったから、このキャラを選んで、泣く泣くもう片方のキャラは電子の海に消えて行った。という訳」

「うわっ！選ばなかった方はデリートされたの？もったいないー」

もごもごとテーブルの上の料理を胃袋に納めながら聞いていた母が横槍を入れてくる。

「あぁ。でも、本来なら１２年も前にサービス終了してたゲームだしな。

そもそもデータ自体残ってるとも思ってなかったし、別に片方消えたとしても、こっちで遊べるだけでも十分かと思ってたんだ。まさか後から２人１組で両方のキャラを残せるキャンペーンを出してくると思わなかったからなぁ。しまったー！って感じだ。」

「…しまったしまった…島倉千ｙ…（ボソリ」

ちょっｗｗｗ　今この人、絶対　島倉千代子って言ったっ！島倉千代子って言ったよ？　…間違いない。ヴォイドさんの中の人って絶対関西人だ。

「現段階では新規参加ユーザーもカムバックユーザーも条件は同じ。プレイ出来るのは１アカウント１キャラオンリーで、片方のキャラスロットは空きになってる状態。」

「ふーん。なるほどねぇ。　あ？…という事は過去に結婚してるキャラも一度リセットされて、サブキャラ作ろうと思ったらもう１回結婚するか養子もらうしかないわけ？」

「いや。今んとこ結婚だけは可能らしいが、出産や養子縁組によるサブキャラ作成や転生はβテスト期間中に実装する予定は無いらしいぜ。」

母と長船さんの会話を聞いていると、結婚とか出産だとか…何か、ゲームなのに妙に生々しい。

今までやったＭＭＯにも結婚システムを導入しているゲームはあったけど、別にプレイする上で絶対に必要って訳じゃなかったし、自分には関係ないと思ってた。

２Ｄや３Ｄのちょっとデフォルメされたキャラならまだしも、現実との区別が付かないくらいリアルなこのゲームでの事となると…ちょっとそれなんてエロゲ？って感じだ。

「ところで、ミーアちゃんはいくつ？」

「…へっ？」

いきなり話をこっちに振られてびっくりする。

「えっと…１４歳、中学３年です。」

「いやいやいや！リアルの年齢聞いてるんじゃなくって！」

慌てて否定する長船さんをギロリッと睨みつけている母の手の中で、金属製のマグがメキョッとおかしな音を立てている。

「ちょっとステータス画面見てみてよ。何歳になってる？」

あぁ！　キャラの年齢の事だったんだ？

「ちょっと待って下さいね。…えっと。キャラの年齢も１４歳みたいです。」

「へぇ。偶然だね。　って、やっぱ本物の１４歳かっ！」

？…本物の１４歳ってどういう意味だろう。
訳が分からないでいると、ヴォイドさんも同じように首をひねって頭の上にクエスチョンマークを飛ばしている。

「ほら、このゲームってキャラが子供から大人へと成長していって転生出来るようなシステムになってるだろ？つまり時間の概念があるんだよ。旧ＭＬＯの世界では、現実世界の２時間がゲーム内世界の１日に相当するようになってた。×１２倍って事。」

確かに、時間が進まなくては赤ん坊のキャラなどは永遠に赤ん坊のままって事だ。さすがにそれでは冒険どころの話では無くなってしまう。

「旧ＭＬＯは１２年前にサービスが終了した。　…つまりこの「Ｍ

ＬＯ～ＶＲ～」の世界では、その１２倍…あれから１４４年の時が経った世界。って事になってんだよ。」

9．時のキャンディ

「１４４年後の世界…」

…と言われても、元の世界を知ってる訳でも無いので、あたしには別に何の感情も湧いて来ない。

「ふーん。そう言われても旧ＭＬＯ時代のエピソード関連、内容まったく覚えてないしなぁ。なんか色々クエもあったって記憶はあるけど、あの頃はみんな基本的に好き勝手にダンジョンに篭ってたり、もくもくと生産やってたり仲間内でダベってたりして、さほど世界観とか気にしてなかった気がする。」

どうやら母の方もさほど気にしていないらしい。

「あ、でもこれだけリアルで自由度が高いと細かい設定とかシナリオが色々隠されてそうだよね。クエストをこなして行けば１４０年でどう変わったのか分かっておもしろいかも。その辺はおいおい見ていけばいっかな？」

「それもあるけど、さっき俺が驚いてたのはミーアちゃんが正真正銘の未成年だったからだよ。言っただろ？この世界はあれから１４０年以上経ってるんだって。　…当然キャラ達も歳をとってる。」

「あー、なるほど！そういう事ね。」

うぅ…　母と長船さんだけが分かってて、ヴォイドさんとあたしはすっかり置き去り状態ですよ！ちゃんと説明してくださーい。
ヴォイドさんの周りなんて、頭の上から落ちたクエスチョンマークが既にゴロゴロと地面に転がっちゃってるし。

――――すると突然「ボワン！」と大きな音がして、長船さんの姿が白い煙に包まれた。

◇◆◇

突然の出来事に呆気に取られていると、しばらくして煙はゆっくりと消えて行き、中から白髪頭のヨボヨボしたお爺さんが現れた。
長い髪を後ろで束ね、皮のエプロンを身に着けている。

「えっ！…ひょっとして、長…船…さん？　えええっ！？」

えっえっ？何コレ？浦島太郎っ？？

「あぁクソっ！時間切れだ。　つまりこういう事なんだよ。旧ＭＬＯからデータを引き継いでいるキャラは、みんな最低でも１４０歳以上だって事だ。　…わりぃ。ユキノさん、時のキャンディ持ってたらくれねーか？」

「…私が持ってる必要あると思う？」

「それもそうか。ちっ！しょうがねぇな。自分のヤツ使うか」

と長船さんは、まるで手品のように中空から取り出した小瓶の蓋を開け、手の平にころんっと一粒赤いキャンディを載せた。

「っておい！自分でちゃんと持ってんじゃないかーーー！！」

いつの間にやら手にしていたハリセンでスパコーン！と勢いよく母が長船さんの後ろ頭をどつく。

いいツッコミだ！とでも言うように、ヴォイドさんが親指を突き出しグッジョブポーズを取っている。

「ひでぇっ！お年寄りは労わろうぜ。」

そう言いながら、キャンディを口に放り込み長船さんは舐め始めた。

「あの…何ですか？それ」

「これか？これは「時のキャンディ」だ。この瓶の中に入っている赤いキャンディを舐めると、体がどんどん若返っていく。青いキャンディを舐めると逆にどんどん歳をとって行くんだ」

そう話している間にもどんどん長船さんの姿は若返って行く。

「自分が望む姿まで若返ったら、こうやって（ゴクリと飴を飲み込んだのが分かった）飲み込むんだ。効果は現実時間で1日。ログインしていようがいまいが時間がくれば元の姿に戻るようになってる。」

「へぇ。そんなん食ってたんか。ちょっと1個くれ！」

物珍しそうにヴォイドさんが伸ばした手をペシっと叩くと、長船さんは言い切った。

「やらねーよ！いや。でも自分の孫にならやってもいいかな。今では、私がおじいちゃん。なぜなら、彼もまた、特別な存在だからです。」

…何故にヴェ◯ルターズオリジナル…というか、ネタが古いです。長船さんの中の人の年齢が忍ばれます！

「これは時空魔法と調剤師のスキルがかなり高いヤツしか作れねぇんだ。新規ユーザーでこれが作れるヤツが育つのにはもうちょい時間が掛かる。カムバックユーザーに該当するスキル持ちがいるかどうかわかんねぇし、貴重品なんだよ。」

「ヤクが切れたらジジィ街道まっしぐらだもんねー」

おもしろそうに茶化す母を見て、ヴォイドさんが呟いた。

「…なんでユキノさんとミーアちゃんは歳をとってへんのや？」

9．時のキャンディ（後書き）

あ～かいキャンディ♪
あ～おいキャンディ♪　しってるっかい？

10．ロリコンは病気です

「あぁ、それは「時空の砂時計」のせいよ。」

VRバイザー付きのカムバックキャンペーンの応募条件には、該当する2キャラの両方に「時空の砂時計」というアイテムを適用していること。とあった。

実はそれがどういうアイテムなのか自分達のキャラに実際に適用されてるのかどうかも知らないままにキャンペーンに応募してしまったのだけれど、当選したという事はつまりそういう事なのだろう。

「時空の砂時計っていうのは、見た目を変化させるキャンディと違ってキャラの時そのものを止めてしまうアイテムなの」

母の説明にヴォイドさんがボソリと呟く。

「…それなんてチート…」

「ま、滅多に持ってるヤツはいないようなレアアイテムって事だけは確かだろうな」

「にしても、よくミーアが本物の未成年だってわかったわね？」

「あぁ。…野生の勘ってやつ？　ところで、ミーアちゃん」

「えっ？はっはい！」

「βテスト終わって、正式オープンしたら俺と結婚しようぜ　ぉぅ

っぐふっ」

言い終わるか終わらないうちに、母のボディアッパーが長船さんの鳩尾に綺麗に入った。

「「……」」

…にしても、なんでいきなり結婚っ！？　話の展開が突然すぎてサッパリついていけないよ！
長船さんってやっぱり変な人だ。

「はいっ！センセイー」

「……なんですか？ユキノくん」

ヴォイドさんが高々と手を挙げた母を指す。

「ロリコンは死刑にすべきだと思いますっ！」

◇◆◇

「あ。でも、よく考えてみたら時空の砂時計を適用してるって事はこのままだとミーアは永遠に未成年で成人出来ないって事になるわね。」

「……成人出来ないと何か問題があるんですか？」

ボソボソとヴォイドさんが聞く。何だろう？はっきり口を開けて話してるのに、ヴォイドさんの声って時々妙に聞き取りにくいんだよね。

「まず一番の問題はお酒が飲めない！」

「……あぁ。酒にはいろんな補正効果ありますしね。そういや、さっきからユキノさんも長船もガブガブ飲んでましたけど、そんな美味いんすか？」

「うん。ここのお酒はすっごく美味しいよー！　てか、ヴォイドくん殆ど飲んで無かったね。下戸なの？」

リアルで下戸かどうかなんてのも、ゲーム内に影響してくるもんなんだろうか？

「…いや。そういう訳じゃないんすけど、俺、ＶＲバイザー持ってないんで、味とかわかんないんですよ。」

あぁっ！ヴォイドさんって、ＧＳＰとイヤホンマイクを使って３Ｄモードで接続してる人だったんだ！
道理でなんかちょっと違和感あるなって思った。
あのオーバーなリアクションもエモーション機能を多用してたからなのね。

「なるほど。そういう事かー。本当のとこはお酒は好みの問題かも。別にお酒の補正が無くても大抵なんとかなると思うし。後は、未成年のままだと子供を得る事が出来ないから転生が出来ないわね。未成年だと当然結婚も出来ない訳だし。」

と言いながらも母は、まだ地面に這いつくばったままの長船さんを踵でグリグリと踏みつけている。

「どっちにしろβ期間中は転生出来ないみたいなんで、それはあんまり気にしなくていいんじゃないすかね？」

「そうね。後は未成年だと、オスタードやハウスなんかの高額商品の購入が出来ないわ。」

「…あぁ。それは確かに困りますね。」

？？　よくわからない。

「オスタードって？」

「騎乗用の生物のことよ。この世界には馬がいないから、足の速い小型恐竜みたいなやつを使ってるの。この世界、旧ＭＬＯの頃から縮尺の設定とかきっちりしてるから、街と街との間とかかなり距離があるのよ。時空魔法無しに外国なんか行こうと思ったら、それこそ何ヶ月も旅をしなくちゃならなくなるわ。だから目的地への移動にはオスタードが必須なの。」

「へぇ？じゃあハウスって言うのは？」

「その名の通り、自宅の事よ。住宅地に自分用の家を持つ事が出来るんだけど、アイテムを仕舞っておく為のチェストを置いたり、内装をカスタマイズして生産用の工房を組み込んだり、庭に花や農作物を植えたり、敷地内に池や川が含まれていれば釣りをしたりも出来るわよ？」

…それはちょっと魅力的かも。

「そう言えば我が家はどうなってんのかなー？後でちょっと様子を見に行ってみよっか。」

「あ…俺も行ってもいいですか？まだ全然金足りないんすけど、やっぱマイホームは憧れなんで。」

地面に突っ伏していた長船さんも、ムクリっと起き上がって乗って来る。

「はいはいはいっ！俺も俺もー！」

「「……」」

◇◆◇

そんな話をしていると、目の前にいきなりドカン！と大きなマグが４つ置かれた。

「俺の奢りだ。飲んでくれ！　あ、嬢ちゃんの分はオレンジジュースな。」

振り返ると、さっきから何度もおかわりを持って来てくれていたオバさんではなく、某赤い服の配管工みたいな髭を生やした恰幅のいい親爺さんが相好を崩している。

「悪いがちょっくら話を聞かせてもらったよ。あんた達、熟練の冒険者さんなんだろう?ちぃとばっかし頼みがあるんだけど聞いてもらえないかねぇ?」

…おっ？　ひょっとしてこれは何かクエストのフラグが立ちましたか？

11. 設楽恭平の場合（前書き）

ヴォイドくんのターン。

11．設楽恭平の場合

「…うーん」

俺は思わずＧＳＰを握り締めたまま唸った。

ＧＳＰの画面上には、俺の操るキャラクターのヴォイドの横に、狩友でもあり、且つその生産品のお世話になってる鍛冶職人の長船、そしてついさっき知り合ったばかり2人の女性プレイヤーが映し出されている。

◇◆◇

俺こと設楽恭平（したらきょうへい）２７歳会社員（年齢イコール彼女いない暦絶賛更新中）が「ＭＬＯ～ＶＲ～」の存在を知ったのは、1月中旬の事だった。

某大手ゲーム総合情報サイトに掲載された、その今までにはない突き抜けたグラフィックのスクリーンショット、まるで映画のようにハイクオリティなプレイ動画は、廃ゲーマーである俺のハートをガッチリ鷲掴みにしたのだ。

開発者インタビューを見てさらに止めを刺され、後はもうとにかく早くやってみたくて居ても立ってもいられない状態だった。

旧ＭＬＯの存在自体は話に聞いた事もあったが、何しろサービスが終了したのが今から１２年も前の話だ。今でこそすっかり廃の俺だが、当時はまだＰＣもＧＳも持っていない厨房だったので、しおら

しくポ〇モンとかやっていたガキんちょだった。
なので昔の事はよくわからない。　というか、別に興味もないしな。
でもこんだけハイクオリティな作品見せられて期待するなって方が無理ってもんやろ？

だから第1回クローズドβの募集が掛かった時はそりゃもう即応募した。
募集数３０００人という狭き門を突破出来たと知った時には感激のあまり咽び泣き、祝いの晩餐に思わずカップラーメンに卵を入れるという贅沢までしてしまった。

クローズドβ開始は2月初旬。オープン当日、俺は風呂に入り禊をした。
もちろん漢らしく全裸で待機する為に。

ＶＲバイザーを持っていない俺の場合、キャラクリエーションで自分の体格データを取り込むなどという事は出来なかったので、適当にデフォルトのサンプルデータの中からパーツを選んで赤毛マッチョの西洋人風にしておいた。

デカい大剣を振り回してガンガンＭＯＢを薙ぎ払いたかったんで、最初に降り立つスタート地点の選択では、軍事力が高く武を重んじる国という設定の《オプヴァルデン公国》というのを迷わず選んだ。

ちなみに他には、

この世界の中心的存在の大国で魔術や学問、宝飾などに秀でているという《パルノイエ王国》。
海に面した商業国家で貿易や農業、紡績業などが盛んという設定の《フェルデンティア公国》。

という2箇所がスタート地点として選択出来るようになっている。

オプヴァルデンへと降り立った俺は、取り敢えず安い両手剣と皮鎧を手に入れ、首都にある宿屋に泊まりこみクエスト斡旋所で依頼されるクエストを受けまくった。

最初のうちはどこのゲームでもやるのと同じような「雑魚ＭＯＢをチマチマと狩る簡単なお仕事です」というようなものが多かった。

けれど、そこそこスキルが上がってちょっとした遠出が出来るようになって来ると、街の連中から声を掛けられるようになった。

このゲームの場合、リアリティを追求する為か基本的に相手のキャラ名やステータスが表示されない。

なので、いきなり知らないヤツに声を掛けられても、リアルすぎて相手がプレイヤーなのかＮＰＣなのかわからない時がある。

「ちょっとあんた、聞いたぜ？こないだガリートの地下水道に巣食ってたでっかいポイズントード倒したんだってな？すげぇな！一杯奢るから、詳しい話を聞かせてくれないか？」

そんな感じで誘われ、飲み屋で話し込んだら気が付いた時には「あんただったらきっとセフトの亡霊の正体も見破れるんじゃないのか？」とか言われて、次のクエストが派生している…というような感じだった。

瞬く間に1週間のβテスト期間が終わり、第2回のクローズドβが始まったのが3月中旬だった。

前回参加したユーザーは特に手続きをしなくても、継続プレイが可

能だったのがありがたい。
この時、前回と大きく違っていたのは、カムバックユーザーたちの存在だった。
彼らは非常に高いスキルを持ち、高位エリアを踏破していた。
彼らが座標を記録していた時空魔法のおかげで、今まではとても到達出来なかったような遠い異国のマップなどにも転送してもらえるようになり、狩場の幅や受けられるクエストが格段に増えた。
店売りのしょぼい装備や、効き目の薄い薬草類に頼らなくても質のいい生産品が手に入るようになった。

その頃だ。武器を売っていた長船と知り合い、一緒に狩りに出かけるようになったのは。

長船はベテランではあるものの、生産特化キャラだった為、初心者の俺とつるんでも狩レベル的にちょうどいい感じだった。
そんなこんなで、あちこち一緒に出掛けているうちに、あっという間に第2回のクローズドβ期間も終了した。

◇
◆
◇

4月中旬になり、第3回クローズドβがオープンしてすぐに長船からこう持ちかけられた。

「俺、しばらく拠点をパルノイエに変えようかと思ってんだ」

ある日長船がオプヴァルデンの街でいつものように武器を売っていると、とある客に

「お前さん、随分いい物を作るじゃねぇか。そういや遠い異国の地に《カタナ》って言うやたら美しくて軽い恐ろしく切れる両手剣があるって話を聞いた事あるか？
…何でも噂によると、その伝説のカタナを作る鍛冶師ってのが、５年ほど前にパルノイエ王国に亡命して来て、首都パルノのどっかに匿われているらしいって話だぜ？」

…などと　言う話を持ち出されたらしい。

長船の名前のモデルは言わずと知れた伝説の刀鍛冶師《備前長船兼光》だ。
世界観の縛りからか、今まで西洋剣と中東あたりがモデルの剣しか作れなかったのが、ここに来て日本刀が作れそうなクエストが発生したのだ。
これは手掛かりを探さない訳には行くまい。

そうは言っても、俺も長船も時空魔法を使う事が出来ない。
ここオプヴァルデン公国の首都ノルテリエと、パルノイエ王国の首都パルノは地球で言うと日本とオーストラリアぐらいの距離があるのだ。（地続きではあるが）
旧ＭＬＯ時代には、それぞれの国の首都同士は街の入り口にある転送サービスから飛ばしてもらえるようになっていたらしいが、クローズドβの現在、使用不能となっている。

その為、逆に旧ユーザー達に各国の首都周辺部のマップの座標をメモしている人間がほとんどいないのだ。
うまくパルノ周辺の座標をメモしている人を捕まえて転送してもらったとしても、拠点（ホーム）設定を変更してしまえば、帰還機能を使ってこ

の街には戻って来れなくなる。あっちで簡単に目的の人物が見付かるかもわからないし、次はいつ帰って来れる事になるかわからない。１週間というこの短いクローズドβの期間中に戻って来るのはまず無理だと思って間違いない。

長船はおそらく鍛冶師としてはこのＭＬＯ内では最高レベルだ。その長船が作る《カタナ》を俺自身この目で見てみたい。…というか、是非俺の為に作ってもらいたい。

そんな訳で、２つ返事でパルノイエに付いて行く事にしたのである。

◇
◆
◇

それがどういう訳だか、さっき知り合ったばっかの女２人と酒盛り状態…。

しかも、長船は１４歳のガキにプロポーズまでしてやがるし。

…一体なんやねんこれは？

12．オッサンの言う事には

ＧＳＰの画面の中では、某マ○オ似のヒゲオヤジが満面の笑顔でちゃっかり自分の分の椅子を持って来て、俺たちと同じテーブルについている。

「実はな。ここ最近、市場で牛肉や乳製品がどんどん品薄になって来てるんだよ。
飲食店組合の連中と「これは一体どういうこったろう？」って首を傾げていたんだが、どうもフェルデンティアから全くものが入って来なくなってきてるらしい。
かと言って、フェルデンティアからの他の荷は入って来ているから、パルノイエまでの街道の行き来には問題ないって事になる。」

「えーっと。フェルデンティアって、なんか聞き覚えがある…あ！初期のスタート地点の１箇所か！
確か農業とか紡績とか生産業が盛んなところ…ですよね？」

ミーアちゃんがコケティッシュに小首を傾げつつヒゲオヤジに確認する。
…可愛らしい。実に可愛らしい。…とは思う。　だが断っておくが、俺はロリには興味が無い。
べっ別に、彼女がいない負け惜しみなんかじゃないんだからねっ！

「スタート地点がどうとかってのは俺にはよくわからんが、そのフ

エルディンティアで合っとるよ。
あそこは、酪農も盛んなのさ。世界中に穀類や乳製品とかいろいろな食糧を売っとる商業国家だな。」

「…へぇ」

「ここパルノイエの牛肉や乳製品も8割がフェルディンティアから入って来とるもんだ。それがパッタリ入って来ないってんじゃあ、俺たち商売人は上がったりだ。
だから、飲食店組合の方からあっちの酪農ギルドに問い合わせの手紙を出したんだが…」

オヤジの話によると、あっちの酪農ギルドでもさっぱり原因がわからないのだと言う。
フェルディンティアの一地方都市、フォンヴェイユに酪農ギルドはあり、酪農家たちは今の季節、フォンヴェイユ郊外にあるそれぞれの牧場で放牧を行っているのだそうだ。
しかし、ギルドからそれらの酪農家に連絡を取る事が出来ず、仕方なしに直接ギルド関係者が何人か現地へ足を運んだのだが、結局誰1人としてそのまま戻って来なかったのだそうだ。
…おそらく何かが起こっているのは間違いない。
事態を重く見た酪農ギルドは、斡旋所を通してフェルディンティアの冒険者たちに調査の依頼を出した。
しかし、その者たちですら誰も帰って来なかったのだと言う。
そこで困った酪農ギルドは、事情を知るパルノイエの関係者達にも、見どころのありそうな熟練冒険者を見掛けたら是非声を掛けてもらいたい。と言って来たのだと。

「しかしなー。俺もこうやって店でそこそこ腕っ節の強そうな冒険者を見掛けちゃー声を掛けるようにはしてるんだが、未だにパルノイエには牛肉も乳製品も入って来る気配が無い。
ひょっとして、あいつらもフォンヴァイユの牧場で姿を消してしまったんだろうか？」

長船が神妙な顔で首を傾げる。

「…それは妙な話だな。酪農ギルドの関係者はともかくとして、フェルディンティアやパルノイエで依頼を受けた冒険者ってのは、プレイヤーの事だろう？
これが何らかのクエだとしても、全員が消えたままっていうのはおかしい。
失敗したんなら失敗したで報告が上がってくる筈だしな。…一体どういう事だ？」

「そこでだ。お前さんらをベテランの冒険者と見込んでここはひとつ頼みたい！
フェルディンティアへ行って、原因を調べて来ちゃーくれないか？」

…っておい。オッサン！
今さんざん冒険者が行方不明になってるって言った後で、満面の笑顔でそんな事言うなや！

「そう言われてもねぇ。パルノイエからフェルディンティアって結構遠いしねぇ。

多分日本とモンゴルくらいの距離はあるよね…時空魔法で飛べればいいんだけど、私フェルディンティアの座標はメモしてないからなー。そのお隣のライヒェンベルク公国の座標ならあるんだけど…。」

どうやらユキノさんは時空魔法持ちだったらしい。…座標持ってないなら意味ねえけど。

「へぇ。ライヒェンベルクってどんな国なの？」

「うーん。今はどう変わってるのかわからないけど、わたしがプレイしてた頃のライヒェンベルクはリゾート国だったわよ。綺麗な海があって泳げて、スパがあって…オスタードの名産地だから、レースとかもやってたね。」

「おもしろそう！ちょっと行ってみたいかも！」

目を輝かせるミーアちゃんを見て、うんうんと頷きながら長船が答えた。

「なら、ライヒェンベルク経由でフェルディンティアを目指すっていうのもありだな。
この依頼受ける事にしよう。」

っておい！　おまっ　何勝手に決めとんねん。
《カタナ》を作れる伝説の刀鍛冶の話は一体どうなったんや？

ていうか、お前　…本当はミーアちゃんの水着姿が見たいだけやろ！と。

13．童貞ですが何か？

何だか、なしくずし的にフェルデンティア行き（ライヒェンベルク経由）が決定してしまった。
熟練者熟練者ってオッサン連呼してたけど、ホントに大丈夫かよ？
ひょっとしてコレ、かなり上級者向けのクエなんじゃ？…大規模な討伐隊が必要なボスとか出てくんじゃね？？
ユキノさんの実力は未知数とは言え、初心者2人に生産特化…。どう考えても死亡フラグです。ありがとうございました。

「……なぁ？本気で行くんか？」

エモで失意体前屈を繰り出しつつ、確認してみる。

「あぁ。実はな。昨日ヴォイドが落ちた後、例の鍛冶師の情報を収集してたら、その鍛冶師の住んでたっていう家を教えてもらってさ。」

「おっ！すげえ！マジで？」

「で、早速行ってみたんだ。…でも、もぬけの殻だった。近所の人に聞いて飲み友達だったっていう親爺を紹介してもらったんだがその人の話によると、一足違いで鍛冶師のジジィはまた旅に出たんだと。『フェルデンティアに行く』と言っていたそうだ。」

「…えっ？」

「そんな訳で、俺の目的地もフェルデンティアに変更って訳だ。」

「なんやそれっ！ト○ヌラ王子かっ！」

俺達の会話をじっと見ていたミーアちゃんがくすくす笑いながら聞いてくる。

「ヴォイドさんって、さっきお母さんと喋ってた時と、長船さんと話してる時と全然態度が違うんだね。そっちが地なのかな？」

「あぁ。」

チロッと俺を横目で見て、長船が言い放つ。

「…ま、それは童貞だからだな。」

「へぇー！」

ちょっ！長船　おまっ　余計な事言うなっ　！

そして、ミーアちゃん！

そんな哀れな者を見るような目で見るのはまじ勘弁して下さい。

…お兄さんちょっぴり心が折れそうです。

◇◆◇

フェルデンティアに向かうにしても、そこまで慌てて出発する必要も無い。
取り敢えずは４人でこの街のクエスト斡旋所に行き、　これから向かう方面の簡単なクエをいくつか受けてから、ユキノさんの自宅にお邪魔しようという事になった。

「我が家はこのパルノイエの首都、パルノの郊外にあるコベントリーっていう住宅街にあるの。
まだ日も高い事だし、せっかくだからミーアのトレーニングも兼ねて歩いて行ってみましょうか。この辺りがどんな風に変わったのかもちょっと見てみたいし。
ミーア、ついでだからこの街周辺の初級クエストも受けときなさいよ。」

「そういや、ミーアちゃんは今日デビューしたばっかなんですよね？大した戦闘経験もせずに、いきなり遠く離れた外国とか行って大丈夫なんですか？」

心配する俺をよそに長船が突っ込む。

「大丈夫なんじゃねーか？ミーアちゃんって転生キャラだろ？リセットされてるとは言え、通常のキャラに比べてステータスもスキルの成長も早いから、ヴォイドなんかあっという間に抜かされっぞ。」

…ううっ、やっぱカムバックユーザーってずりぃ。まじチートやし。

◇◆◇

パルノの城門を出てのどかな郊外をプラプラと歩く。
この辺りは街が近いだけあって、弱いノンアクティブモンスターしかいない。

「あ！依頼にあったジャンピングラビットの群れだぁ！　ちょっと倒したいんで、待ってて下さいね。」

そう言いながら、トテトテとＭＯＢの方に走って行こうとするミーアちゃんをユキノさんが止める。

「ちょーーーと待ったぁぁぁ！その格好で戦闘するつもり？　それはあくまで街着よ。ファッションなの。戦闘するなら戦闘するでちゃんとそれなりの装備に着替えないとね。」

「えっ？でもコレそこそこ防御力高いよ？アクセもなんかいろいろ補正付いてるし。」

「いいからほらっ！これに着替えなさい。」

言われるままにミーアちゃんは俺達の目の前で生着替えをし、（…と言っても、インベントリから装備変更しただけなので、一瞬で切

り替わっていただが）戦闘装備になった。

「ねぇ？お母さん…ちょっと聞いていい？……ナニコレ？」

着替え終わった彼女は、何故か半袖の白いポロシャツにタータンチェックのプリーツのミニスカート、黒いニーソックスというイデタチであった。

13．童貞ですが何か？（後書き）

ヴォイドくんは内弁慶。

１４．蝶のように舞い、蜂のように刺す

「それは戦ってみればわかるわ。」

ユキノさんはそう言い放ち、ミーアちゃんの背中を送り出した。

「ほらっ！ミーア　そこっ！！
弱パンチ＋強パンチ＋ハイキックに回し蹴りっ！　最後はムーンサルトで華麗にフィニッシュよー！！」

ミーアちゃんの華奢な身体から、見事なコンボ技が次々と繰り出されて行く。
彼女が足を振り上げるたびにミニスカートがひらひらと風に舞い…
…むっちりした太ももと白いパンｔ　「…うっ！」ゴフッ（鼻血）

いかん。これはちょっと刺激が強すぎる。
二次ならともかくとして、ＶＲだとナマそのものって感じがまた何とも生々しすぎ。

しかし…何の武器も持ってないなとは思ってたら、まさかの格闘娘だったとは。
いや、よく見たらナックルグローブを付けてるみたいだから、全くの素手って言う訳でもないか。

長船の方は「いやぁ。格闘って、本当にいいものですね～」とか呟いてるし。

「…っていうか、ユキノさん！「ロリコンは死刑にすべきだと思います！」とか言ってたじゃないすか？なのに、コレはありなんですか？」

「それとこれとは別っ！これは可愛いからいいの。可愛ければ許されるの。可愛いは正義っ！」

…やっぱ、何んかよくわからん人だ。

そんな感じでちょこちょこと戦闘を繰り返しつつ、３時間程歩いてようやくコベントリー住宅街に辿り着いた時には、辺りはすっかり暗くなってしまっていた。

「狩りしながらだとは言え、思ったより時間掛かっちゃったわね。本来ならオスタードで１０分も掛からないで来れるんだけど。パルノの城門からここまで転送してもらう事も出来るし。ちなみにこの橋を渡ってすぐの所にあるのが管理事務所。家を売買したり、バトラーやメイドを雇いたい時はここを利用するの。本当は、ここから自宅まで転送してもらう事も出来るけど、せっかくだから今日は歩いて行きましょうか。他の家の様子も見れるし。」

ユキノさんの案内に従って、小川に掛かる橋を渡り閑静な住宅地へと入っていく。

電気があるわけでもないのに、ふんわりとライトアップされたかのように佇む家々はノスタルジックで、どれも魅力的だ。
デザインも中世ヨーロッパ風の石造りの物から、東南アジア風、ファンタジー映画で見たホビットの家のような物、遊牧民のゲルのような物、伝統的日本家屋のような物…大きさもデザインも実に様々である。

ただ、例えどんなコンパクトな建物の家にでもしっかりと広い庭が付属している。日本の住宅事情からすれば羨ましい限りだ。

「さすがに、かなり空き家になっちゃってるわね。サービス終了から１２年かー。この世界では１４０年以上も経ってるんだもん。当然と言っちゃ当然かな？」

「そう言えば、家を購入したままログインしなくなっちゃった人達の持ち家ってどうなるの？家主不在の家ばかり残ってたら、新規に参入した人は買いたくても場所が空いてないって事になったりしない？」

「一応、毎年きっちり管理費を払わなきゃいけないって事になってるのよ。銀行に預けてるお金から自動的に引き落とされるようになってるんだけど、引き落とすお金が無くなった時点で家は没収される事になってるわ。　…だから、ほら。今はほとんどの家に「売家」の看板が上がってるでしょ？この家の持ち主達は長い年月の間に、きっと銀行の預金が尽きちゃったんだと思う。　…我が家はちゃ

んと残ってるのかなー。うー、何だかだんだん心配になって来た。」

しばらく歩き、小高い丘になった所に建つ1軒の家を指してユキノさんはニッコリ微笑んだ。

「良かった！あった。　あれが我がウォールバンガー家のマイホームよ」

◇
◆
◇

「そのままだと部外者は立ち入れないようになってるの。今、ゲストの招待設定するから、ちょっと待ってね。」

言われるままに木の柵に囲まれた入り口付近に立ち尽くし、ぼんやりと丘の家を見上げる。

…デカイ。やたらデカイ！
何やねんこれ！
庭も滅茶苦茶広いし、ヨーロッパあたりのレトロな邸宅って感じだ。

「お待たせ。我が家へようこそ！」

そう言ってユキノさんが俺たちの方を振り返ると同時に玄関の扉が静かに開き、中からロマンスグレーの壮年の紳士が颯爽と降りて来て、深々と頭を下げながら迎え入れてくれた。

「お帰りなさいませ。ご主人様、お嬢様。心よりお帰りになる日をお待ち申し上げておりました。
長船様、ヴォイド様もようこそ当家へお越し下さいました。」

よく見ると、黒い執事服に白い手袋でキッチリと身を包んだその人物の頭には、蜂蜜色の三角の耳がピクピクと動き、お尻ではふさふさとした尻尾がパタパタと忙しなく揺れている。

「うわーーーー！うっそー　エドワードがすっかりおじさんになっちゃってるっ！」

「…申し訳ございません。あれから既に１８０年の時が経っておりますので。」

「そっかぁ！それもそうよね。私が引退したのってもう１５年前だし、こっちではさらにそれだけの時間が経ってるって事かぁ。…でも、昔はあーんなに小っちゃくてほんと可愛かったのになぁ」

「こちらにご奉仕に上がった当時、わたくしはまだほんの１５歳の少年でございましたから。」

懐かしそうに語り合いながらも、天井の高いリビングへと通された。

…やっぱ思った通り、家の中も半端なくデカイ。暖炉とかあるし！ていうか、こんなデカイ家、買う時も相当なもんだったろうに、１８０年も管理費払い続けて維持出来たって…ユキノさんって一体どんだけ金持ちなんだ？

「でも、エドワードさんって１９５歳（？）にしてはお若いですよね。長船さんなんて元の姿に戻った時、すんごいヨボヨボのお爺さんだったのにっ」

「ぶはっ！　ゲホッゲホッ」

ミーアちゃんの質問に、部屋の中の家具を勝手に開けて物色して回っていた長船が盛大にむせる。

「それがでございますね。…ご主人様方がおいでにならないようになられてから、最初の何十年かはわたくしも普通に歳をとっていたのございます。…ですが、ある日を境に変化が訪れたのです。…あれは確か今から１４４年前の事でした。これまでたくさんおいでになられた冒険者の方々が突然姿を消されたのと同時に、わたくしの時も止まったのでございます。」

１４．蝶のように舞い、蜂のように刺す（後書き）

エドワードの見た目年齢は５１歳。

「執事」ではなくあえて「バトラー」にしてみました。

ちなみにウォールバンガー家は、英国のマナーハウス（貴族が荘園（マナー）に建てた邸宅）の小振りなヤツをイメージ。

15．何のプレイですか

その話でいくと、旧ＭＬＯのサービス終了時からＮＰＣ達の老化も止まったという事なのだろうか？

同じ疑問を感じたらしい長船が呟く。

「サービス終了時から時が止まった…か。でも、街や城などで話を聞いた感じ、他のＮＰＣ達の時間は普通に動いているみたいだな。精錬所やショップの店員なんかは、「我が家は代々続いていて、あなたがご存じだった主人は六代前の先祖に当たります。」とか話し掛けて来た事あるし、国を治めている王なんかもかなり代替わりしてるみたいだ。」

「…うーん？よくわかんないけど、銀行の貸金庫や家のキャビネットなんかに入れてた食料品や薬なんかは劣化してないみたいだから、それと同じような扱いなのかもね？
ユーザーの所有する家の中にいる訳だから、バトラーやメイドも影響を受けるって事なのかも？
あ！そうだ。ミーア、手持ちのインベントリにある食べ物とか薬は全部腐ってると思うからちゃんと捨てて置きなさいよ。」

「ええっ？　うわっホントだ。もうっ！早く言ってよーー」

慌ててミーアちゃんがポイポイと放り出した腐ったアイテム類が、次々と中空で消えていく。
…うちのアパートの生ゴミもこんな風に簡単に捨てられりゃ楽なん

やけどな。

「にしても、せっかくの美少年だったのに惜しいわねぇ。今の姿も如何にも”バトラー”って感じで、これはこれで素敵だけど。」

「恐れ入ります。」

照れくさそうに、エドワード氏の尻尾がゆっくりと揺れる。

「…いいこと考えたっ」

ニヤッと怪しげな微笑みを湛えつつユキノさんがエドワード氏にじりじりと近づいていった。

◇◆◇

「エドワード　ほらっ、もっとちゃんと舐めて…ん、そうそう。いい感じ」

「…ご主人様、もうお許し下さい。」

「まだダメよ。私がいいって言うまで舐めるのを止めちゃダメ。」

…何だこのエロい会話。一体何のプレイやねんっ！

現在エドワード氏は、ユキノさんがキャビネットの中から取り出した赤いキャンディを舐めさせられている。
ロマンスグレーだった髪は徐々に艶を取り戻し、輝くような蜂蜜色へと変化していった。
皺の刻まれた優しそうな壮年の顔はキリッとした理知的な顔へと若返って行く。
心持ち身長も伸びて、少しがっちりとしたように見える。

「へぇ。エドワードってこんなイケメンくんだったんだね。うわぁ成長の過程が見れなくてほんと残念っ！」

その顎をつつっと指先で撫でながら、ユキノさんが呟いた。

「…もう飲んでいいわよ。」

ごくりっと音を立ててエドワード氏がキャンディを飲み込んだのがわかった。
…いや、だからコレは一体何のプレイなのかと。

しかし、いかにも仕事が出来そうで凛々しい雰囲気の大の男が（現時点での見た目は３０代前半ってとこか？）頭の上の三角の耳をペ

タンと寝かせ、ふさふさの尻尾を丸め込んで服従する姿は、何とも微妙なものがある。
ユキノさんって女王様気質なんかも。…あんま深く関わらんようにしとこう。

「…あれ？でもよく考えてみたら、この世界って確か亜人の類っていなかったっすよね？
エドワードさんの耳とか尻尾って何なんですか？」

そう。このＭＬＯはファンタジー系ＲＰＧとしては珍しく、エルフやドワーフ、獣人などの亜人の類は一切存在しないのだ。現実世界にも普通に存在しそうな生物達と、あとは魔物の類だけである。

「ん？ただのアクセサリーよ。単なる私の趣味。」

あー…デスヨネー。

◇◆◇

ひとしきりエドワード氏を弄んだ後で、ようやくユキノさんが屋敷

の中を案内してくれる事になった。

「今いたのがリビングで、こっちがホール。昔はここがキンシップのメンバー達の溜まり場になってたから、よくここで駄弁ったり、イベントをやったりしてたわ。」

キンシップっていうのは、他のＭＭＯで言う所の仲間内のギルドの事だ。

「そう言えば、ユキノさん達のキンシップってどうなったんですか？ひょっとして、まだ誰かメンバーが残ってたりします？」

「んー…元々、所属メンバーは社会人ばっかりだったし、リアルの事情で引退する人が増えちゃって…。私も来れなくなったから人の事言えないんだけど、最後はキンシップマスターもアカウントを削除してきっぱり引退しちゃった。だから、キンシップは残ってないの。フレンドも誰か1人ぐらいはクローズドβに参加してたらいいなって思ってたんだけど、オンラインの人はいないみたいね。フレンドリストに登録されてる人数自体が大分減ってるから、アカウント自体残ってない人が多いんじゃないかな。」

淋しそうに言うユキノさんを見ていてようやく思い出した。

「あっ！そういや、まだフレンド登録してもらってなかったですね。よろしくお願いします。」

16．住人十色

４人でそそくさとフレンド登録を済ませた後、ユキノさんはこう言ってくれた。

「これからはいつでもこの家を使ってくれていいからね。さっきの管理事務所に行けばキャビネットが購入出来るから、ここに置いて自分専用の倉庫として使ってくれてＯＫだし、銀行を使いたい時もエドワードに言えば銀行員を呼び出してくれるわ。

あ、パルノの街に行きたい時もエドワードに言えば転送してくれるからね。拠点登録とは別にマイホーム登録をして置けば、ここに直接帰還して来る事も可能だから他の都市に拠点を移しても、パルノと行き来出来て便利よ。２階に寝室もいっぱいあるからちょっと休んで回復していってもいいし。私がいない時でもエドワードが簡単な食事や飲み物くらいなら用意してくれると思うから安心して。」

ユキノさんの言葉を受けて、後ろに控えていたエドワード氏が胸に手を当てておじきをする。

「それから、生産をやるならこっちに工房があるから使ってね。」

そう言われて連れて行かれた先には、広々としていて設備の整ったキッチンと魔術関連の本がたくさん納められた図書室、小振りなミシンの置かれた裁縫工房、ハーブがたくさん吊るされた調剤室などがあった。

「後、鍛治工房と醸造の為の蔵は離れになってるから。」

サラッと言うユキノさんに長船が慌ててツッコミを入れる。

「いやいやいや。これだけデカい屋敷だってだけでもとんでもないのに、この工房の数は異常だろーが！こんなの聞いた事もねえぞ？一体いくら掛かってんだよ。」

…確かに。

「あー…この家自体は、私と旦那が共同で買ったんだけどね。と言っても知り合いから中古で安く譲り受けたものだからそんなに値段も高くなかったし。工房とかは実際に使いたいメンバー達がお金を出しあって内装変更したの。だからここは、今でこそ私の個人所有になってるけれど、元々はキンシップハウスって言った方が正しいかも？」

その言葉にミーアちゃんがピクリと反応する。

「…旦那…？　お母さんの旦那さんって事は、あたしのお父さん？」

「ミーアちゃんが今プレイしているそのキャラの父親って事じゃないか？」

長船がそう補足すると、

「あっそっか！そういう意味か。…そっか、そうだよね。なんか変な感じ。」

「ん。まぁ、そういう認識であってるわ。さっき話したアカウント削除して引退しちゃったマスターってのが、そのキャラの父親よ。だから、ミーアと感動の再会！…とかってのはさすがに無理なんだけどね。ちょっと期待した？」

茶化すようにユキノさんが言うとミーアちゃんは、

「別っにー！そこまで会ってみたいとか特に思ってないしー」

と、ちょっとむくれてプイっと横を向いた。

…あれ？　実は結構気になってたりする？

◇◆◇

屋敷の中をぐるっと一回りした後、リビングへ戻って来てソファで寛いでいると、エドワード氏がさりげなくコーヒーを淹れてくれた。

「こんな如何にも英国風な屋敷にいて、バトラーが手ずから淹れてくれるって言うんだから、本来ならコーヒーよりも紅茶の方がイメージに相応しいんだろうとは思うんだけどね。…実は私、昔っから夜は紅茶よりもコーヒーの方が欲しくなっちゃうのよ。……ありがとうエド。私の好みを覚えていてくれて。」

エドワード氏は黙ってニッコリと微笑み、軽く会釈をして部屋の片隅へと下がる。

すげえ！さすがプロだ。
…惜しむらくは名前がセバスチャンではないってとこか？

早速俺以外の３人は、エドワード氏が淹れてくれたコーヒーをやたら美味そうに飲んでいる。

あぁっクソっ！俺もコーヒー飲みてえわっ！
もちろんエモーションを使って飲んでる振りをしたり、アイテムとして使用する事で実際に飲む事も可能だ。
だけどやっぱり、あの味を自分の味覚でちゃんと味わってみたい。
身体がカフェインを欲している。

手元のＧＳＰから目を離し、部屋の時計を見上げると時刻はＡＭ１時を指していた。
普段ならまだ全然寝るような時間でも無いのに、今夜はひたすら眠い。
今日は特に狩りに出かけてバリバリ戦闘をしたって訳でもなく、ロ

グイン時間のほとんどを徒歩での移動か、まったりと会話で過ごしたので緊張感があまり無くて気が弛んだんだろう。

あー悔しいな、貴重なクローズドβの短い期間をもっと遊び尽したいのに！

ＶＲバイザーさえあれば、眠りながら朝までプレイ出来んのに！

…やばい。やっぱめっちゃ眠い。今月の給料が出たら絶対にＶＲバイザーを買って、今度こそこいつらと一緒に思う存分美味いもんを飲み食いしてやろう。

そんな事を考えつつ…俺は睡魔に抗い切れずにＧＳＰを握り締めたまま突っ伏して眠り込んでしまった。

◇
◆
◇

ソファに凭れかかったまま、こっくりこっくりと船を漕ぎ出したヴォイドさんを見て、

「あらら、寝落ちしちゃったのね。ふふふっ可愛い。」

と母は笑った。

ＶＲバイザーを使って眠りながらプレイしているあたし達と違って、ヴォイドさんはＧＳＰでの簡易接続ユーザーだ。おそらくプレイしている間の体感時間もかなり違うんじゃないだろうか？
彼が今日何時間くらいプレイしていたのかは知らないけど、現実時間ではもうＡＭ１時だしそろそろ疲れて眠くなってもおかしくない。

「エドワード、彼を寝室に運んであげてくれる？」

「承知致しました。ご主人様のベッドでよろしかったでしょうか？」

「ブハッ！」

長船さんが思わず飲んでいたコーヒーを噴き出す。

ってか、えっえええっ？　エ…エドワードさーーん！？

「……大人のジョークでございます。」

真顔でそう言いながら、エドワードさんは鎧や大剣を身に付けたままのガタイの大きいヴォイドさんを軽々と抱え上げ、軽く会釈をして部屋を出て行く。

…１９５歳の大人のジョーク恐るべし！

「あら、私は別に一緒のベッドでも良かったのに。」

などと、母はしれっと言っている。

「まったく、お母さんってば…。」

溜息を付いたら、一緒にあくびが出て来た。
さすがにあたしも今日はちょっと疲れたかも？

「ヴォイドさんの寝顔見たら、何だかあたしも眠くなって来ちゃった。そろそろ寝るね。」

現実世界でのあたしは、ＶＲバイザーを付けて眠っている筈なのに、こっちの世界でもちゃんと眠くなるなんて不思議な感じだ。

「それじゃぁお言葉に甘えて、俺も早速今晩から泊めてもらうとするか。」

長船さんがそう言って立ち上がったところにちょうどエドワードさんが戻って来たので、あたし達はそれぞれの寝室に案内してもらい、

お日様の匂いのするふかふかのベッドで眠りに付いた。

16．住人十色（後書き）

簡易接続モードだと、ある一定の時間何の入力もしないで放置するとキャラがこっくりこっくり居眠りのエモーションを出す仕様。

17．寝る子は育つ？（前書き）

ミーアのターン。

17．寝る子は育つ？

「おはよう！」

心地の良い眠りから爽やかに目覚め、軽やかな足取りで階下へと降りて行くと、既に起きていたらしき母と長船さんがダイニングで朝食を取っていた。

「おはようございます。お嬢様」

さりげない動作でエドワードさんが椅子を引いてくれたので腰を下ろしながら挨拶を交わす。

「おはようさん」
「おはよう。よく眠れた？」

「うん！びっくりするぐらい。何かこんなにたっぷり寝たのって久しぶりかも。」

長船さんが頷きながら言う。

「あぁ、それなぁ。俺もＶＲ始めたばっかの頃びっくりしたんだが、どうもゲーム内時間の２１時くらいになると何をやってても絶対眠くなって来て、翌朝の７時くらいまで爆睡しちまうんだよな。プレイしている状況や個人差で多少のズレはあるみたいだが、確実

に１０時間は眠るような仕様になってるらしい。
現実世界での１２０分がゲーム内での２４時間だから、その内の１０時間って事は１２０分中５０分は現実でも実際にぐっすりと眠っているって事になる。」

「言われてみれば、私もあんまり眠りが深い方じゃないんだけどいつになくぐっすり眠れたような気がするわ。」

母もそう頷いている。

「おそらく、やろうと思えば技術的にはＶＲシステムによって眠っている間中ずっと脳に信号を送り続けてゲーム内での活動を続けさせる。…という事も可能なのかも知れない。
けど、現実問題として人間には休息が必要だ。
日中は普段通りに生活をして、さらに夜は夜で不眠不休で仮想空間での活動を行う…そんな二重生活を続けたとしたら、脳や身体を休める時間が無くなって、その人間はあっと言う間に精神や肉体が崩壊してしまうだろうな。
あくまでもこれは俺の想像に過ぎないんだが、このＶＲシステムを使ったＭＬＯの世界では、強制的に一定の周期で深い眠りに誘導して脳や身体を休ませ保護するような仕組をとってるんじゃないか？
って思う。」

うーーん？…難しくて何だかよくわからないけれど、前にデパートのオーダーメイド枕の売り場のおねえさんが言っていた「レム睡眠」と「ノンレム睡眠」のようなもの…なのかな？
ゲーム内で起きて活動している時間帯が眠りが浅くて夢を見たりする状態の「レム睡眠」、ゲーム内でも眠っている時間帯が脳が深い眠りについてる「ノンレム睡眠」…みたいな？

考えてみたところでやっぱりよくわからないので、取りあえずは目の前の朝食に専念する事にする。

今朝のメニューは、バターたっぷりの厚焼きトーストに、フワフワの卵のプレーンオムレツとカリカリに焼いたベーコン。
物語の中の執事のイメージそのままの優雅な動作で、エドワードさんが牛乳たっぷりのロイヤルミルクティーを注いでくれる。
どれもすごくおいしい！

でも…あれっ？

「あの？エドワードさん、昨日パルノの街で牛乳などの乳製品がほとんど手に入らなくなっているって聞いたんですけど…このミルクティーとかバターは？」

エドワードさんは蜂蜜色のわんこ耳を一瞬ピンと立ててこう言った。

「素晴らしい！ミーアお嬢様は市場の動向にもお詳しくていらっしゃるのですね！
そうですね。確かに現在パルノ周辺ではフェルデンティアからの乳製品の入荷が途絶え、物価が高騰しております。
ですが当家で使用しておりますものは、このコベントリー近郊にあります農家と専売契約を交わし、新鮮なものを必要なだけ直接届けるようにさせておりますので大丈夫でございますよ。ご心配いただきありがとうございます。」

尻尾をパサパサと振りながら、あたしの方を微笑ましいものを見るような目で見ているのがこそばゆい。
うっ…っていうか、その尻尾反則っ！モフモフしたいよーー

「なるほどな。あるところにはあるってか。
でもまぁ、フェルデンティアからの流通が途絶えてるって事だけは確かみたいだから、やっぱ調べてみる必要はありそうだな。」

そう長船さんが言うと、

「そうね。ヴォイドくんと合流出来たら、ライヒェンベルクに向けて出発しましょうか。…って言っても、まだ当分先になりそうだけど。」

と、紅茶を飲みながら母も頷く。

「あれ?そう言えば、ヴォイドさんは?」

「あー、あいつはまだぐっすりお休み中。まだ当分起きてこねぇよ。っていうか今日はあいつリアルで仕事あるだろうから、目が醒めたら一旦落ちると思うぜ。」

…そっか。
ぐっすり眠って爽やかに目が覚めたからすっかり忘れていたけれど、現実の世界ではまだ1時間弱しか経っていない筈だ。
ヴォイドさんの中の人はまだ夢の中にいる事だろう。
もし仮に彼が翌朝の8時まで寝落ちしたままだとしたら、その6時間程の間にこちらの世界では三日三晩の時間が経過する事になってしまう。
そういうあたし達だって、現実世界での朝が来れば起きてそれぞれの生活に戻るだろうから、次に合流出来るのは現実時間での明日の

夜って事になるのかな？

という事はゲーム内の暦では、えーっと……×１２だから……えーっと、少なくとも１０日以上先って事になっちゃうのか。

…うぅ、頭が混乱して来た。

「とりあえずまだ時間はたっぷりあるわ。せっかくだから、ミーアはパルノの魔術師ギルドに行って魔法を覚えて来たら？」

「うん。そうしようかな？お母さんと長船さんはどうするの？」

「俺は折角だから、ここの工房の使い勝手を試させて貰おうかと思ってる。荷物なんかも移したいから、セバス…違っ…えー、エドワードさん、協力頼むよ？」

「承知致しました」

長船さんがセバスチャンと言いかけた時、一瞬ピクリとわんこ耳を動かしたものの、何事も無かったのような笑顔でエドワードさんは応えた。

「あ！ごめん。悪いんだけど、今日はエドワードは私が連れて出るつもりなの。でも、代わりの子を置いて行くからその子を使って？」

母がそう言うと、エドワードさんは何気ない表情を装ってはいるものの、その尻尾が千切れんばかりにブンブン揺れている。
…うっ、可愛い！
ご主人様と出掛けるのが嬉しくてしょうがないんだね。

「では、長船様のお世話をする者をお呼び致しましょう」

そう言ってエドワードさんが何処からか取り出したベルをちりりんと鳴らすと、ダイニングのドアがカチャリと開き、メイド服姿の少女が現れた。

17．寝る子は育つ？（後書き）

説明ばっかですみません。
実際の人間の睡眠は、レム睡眠よりノンレム睡眠の時間の方が長いです。
でも、実際に現代のネトゲで廃プレイしている人達って睡眠時間短めでしかも眠りの浅い人が多いんじゃないか？って気がする。
それを思えば、睡眠導入を使用して強制的に周期的な深い眠りを取らせるシステムは現状よりもずっと健康的かも？と妄想してみた。
ちょっと不気味ではありますが…

18．彼と彼女の思惑（前書き）

長船のターン。

18．彼と彼女の思惑

「エミリーと申します。よろしくお願い致します」

ペコリと勢いよく頭を下げた少女の年齢は、17~18歳といったところだろうか？

焦げ茶色の髪をすっきりと纏め、長めのスカートとぴったりとした襟で露出を抑えたスタイルは、いかにもクラシカルなヴィクトリアンメイドといった雰囲気だ。

…というか、

「おいっ！やっぱメイドも猫耳なのかよっ！」

その頭の上でピクピクと動いている白い猫耳とお尻で揺れている長い尻尾に、長船は思わず突っ込まずにはいられかった。

「うん。そっちは引退した元旦那の趣味。」

「「……」」

「……あれっ？そう言えば、エミリーさんってエドワードさんみたいに歳をとって無いですね？」

ミーアちゃん…見事なスルースキルだ。
…おそらく普段ユキノに相当鍛えられているに違いない。

確かに言われて見れば、猫耳メイド・エミリーは、ユキノの旦那が引退する前から勤めていたにしては随分と若いように見える。
とは言え、ヨボヨボの婆ちゃんメイドが猫耳姿で現れたりしたらそれはそれでトラウマになりそうな気もするが。

「あー！何かね、メイドは最初っから歳をとらない仕様になってるらしいよ。
男のロマンなんだってさ。」

…ほう。これは開発者の拘りだったのか。
とりあえず一言言っておこう。　開発者グッジョブ！と。

◇
◆
◇

エミリーがダイニングの食器類を片付けている間に、それぞれ身支度を済ませ再度リビングへと集合する。

「さて。そろそろ各自活動開始する事にしましょうか。二人ともマイホーム登録は済んだ？
登録さえして置けば世界中何処にいても一瞬でここに帰って来れるからちゃんと設定して置いてね。後、何かあった時にはいつでも個

別チャットを飛ばして？　それじゃ、エドワード。ミーアをパルノまでお願い。」

「畏まりました。ミーアお嬢様、どうぞこちらへ。」

「はーい！じゃあ、行ってくるね。また夜にー！」

そう言ってブンブンと元気よく手を振りながら、ミーアちゃんは足元に現れた転送用の魔方陣の眩い白緑の光に包まれ消えて行った。

「…それで？　ユキノさんとエドワード氏は何処に行くんだ？」

「あーそれね。言って無かったと思うけど、私、生産特化キャラなのよ。調理に裁縫、調薬、醸造とかね。で、どれも原材料に農作物を使うでしょ？このコベントリー近郊に農地を持ってたりすんのよね。随分と長い間エドワードに任せっきりになっちゃってたから、どうなってるのかちょっと様子を見て来ようと思って。」

「あんた、ファーマーもやってんのか！？　噂には聞いた事あったけど、実際にやってるやつなんて初めて見たぞ？」

生産に使われる原材料はＮＰＣのショップでも購入可能だ。が、街やショップによって品揃えには差がある。日によって入荷される量にもバラつきがあった。

特に上位アイテム用の素材や複数のアイテムの原材料となる素材は競争が激しく、入荷予定時刻間近になるとショップの前には生産職のプレイヤー達がこぞって待ち構え、入荷すると同時に一瞬にして売り切れ…残念ながら買い損ねてしまったプレイヤーは別の街での

入手を目指し、慌てて転送で飛んでいく…というのが旧ＭＬＯでの日常的な光景だった。

その為、原材料を自家調達する事は生産職にとっては悲願とも言える。

長船自身、攻撃系スキルや魔法のスキルを削って鍛冶に使う鉱物類を掘る為の採掘スキルや、グリップなどに使う木材を調達する為の伐採スキル等をとってはいるのだが、それがファーマーとなってくると話はまた別だ。

そもそも武具や防具などと違って、料理や服飾、酒などの類は販売単価も低く、プレイヤーたちにとってはさほど需要が高いというような物でもない。

しかもその原材料を調達する為に農作業をやろうと思ったら、それぞれの作物毎に農地を購入維持する為の資金が必要となってくるし、実際に農作業を行う為に取られる時間が洒落にならない。

狩りやクエストなどにも行かず、ひたすら地味に農作業オンライン…などというプレイは当然流行らなかった。

ある程度ファーマースキルが高くなれば、ＮＰＣキャラを雇って農作業に従事させる事も可能らしいのだが、長船が旧ＭＬＯで現役プレイヤーとして活動していた頃には少なくともそんな物好きな事をやっている人間は見たことが無い。

「うん。まぁ道楽だよねぇ。でも、ＭＭＯって人それぞれいろんなプレイスタイルがあるでしょ？

だから、私みたいなこんなゆる～いプレイスタイルの人間がいてもいいんじゃないかな？って思ってるの。」

「…なるほどな」

その気持ちは長船にもわからないでもない。
ダンジョンに出掛け、難攻不落の強敵を倒し、レアなドロップを手に入れる。…そして、また装備を強化し、ただひたすら更なる強さを求める。
…そんなプレイスタイルは１０年もいろんなゲームを渡り歩いている間にやがて飽きてしまった。

けれど、「強さ」そのものを諦めた訳じゃない。

今の長船の最大の目的は、この世界で伝説となるような「最強の武器」を自らの手で作り出したい。という事に切り替わっていた。
…そして、その武器を持つに相応しいと心から認める事が出来るようなプレイヤーと出会い、自らに代わって振ってもらいたい。

ある意味、少し枯れた考え方なのかも知れない。
けれど、己自身でその武器を振うよりも、若い連中に光を当ててやりたい。そんな気持ちだった。

「さて、それじゃ私達もそろそろ行くわね。２人きりだからって、エミリーに悪戯しちゃダメよ？」

「するかっ！」

くすくす笑いながらそんな事を言い放ったユキノのせいで、もじも

じと赤くなったエミリーを見て、長船は思わず溜息を吐いた。

18．彼と彼女の思惑（後書き）

オサーンオバハーン世代のＭＭＯ観の話でした。

19．お戯れはお止めください

ユキノ達が楽しげに出ていく後姿を見送った後、長船も大きくひとつ伸びしてのっそりと動き出す事にする。

「さーて。それじゃ早速で悪いんだが、鍛冶用の工房を案内してくれるか？」

「はいっ。どどっ…どうぞっ！こちらですっ」

エミリーが猫耳をピン！と立て、弾かれたように庭の方へと飛び出していく。

白い尻尾を揺らしながら勢いよく庭を突っ切って行く後姿を追うと、昨夜来た時には気が付かなかった茶色い三角屋根の建物へと入って行くのが見えた。

長船も慌てて後を追い建物内へと飛び込む。

「おい！ちょ…ちょい待て！別に何もそこまで慌てなくていいから」

「もももっ申し訳ございませんっ」

真っ赤になってペコペコと必死に謝られてしまう。

…やれやれ。

ユキノが余計な事を言ったせいで、どうやら必要以上に警戒されてしまったようだ。
単に工房を借りて作業をしようと思っているだけなのに、ここまでガチガチに緊張されてしまうとやり難くてしょうがない。

ポリポリと頭を掻きながら、

「…参ったな。ユキノさんが言った事は冗談だから。別に取って食おうとか思ってないから、とりあえずもうちょっとだけ落ち着いてもらえないか？」

そう言いながらエミリーから目線を外し、そのまま室内の様子を見て回る事にする。

熱を逃がす為に高く取られた天井と白い煉瓦の壁のせいか、鍛冶工房としては随分明るい雰囲気だ。
入ってすぐ右手には壁の色と同化した白い大きなキャビネットが鎮座している。
突き当りには使い勝手の良さそうな魔力式ふいごのコークス炉があり、その回りには鍛造用のアンビルやハンマー、万力などが見えた。
あまり他では見たことが無いような冶具類は、この工房の前主（ぜんあるじ）の自作の品だろうか？
その隣にも埋め込み式の鋳造用のコークス炉があり、棚には指輪やバングルなどの鋳型が置かれている。
さらに奥へ進むと装飾作業を行っていたらしきテーブルがあり、そこには彫金用の工具類などが整然と並べられていた。
テーブルのある部屋にはクラシカルなカウチソファも置かれており、どうやらこの工房の前主が、ここで仮眠を取りつつ工房に篭って作業をしていたらしき様子が伺える。

ちなみに、金属加工には大きく分けて鍛造と鋳造の2種類がある。
鍛造は熱した金属をハンマーで叩いて加工する方法だ。不純物が入り難く密度の高い硬い刀剣などを作るのに向いている。
鋳造は溶かした金属を鋳型に流し込み冷やし固める方法だ。多少脆くはあるが複雑な形状が容易に作れ大量生産や盾や鎧などの防具類を作るのなどに向いている。

「へぇ？この工房の前主（ぜんあるじ）は装備品だけじゃなく、生活用品みたいな物も手掛けてたんだな。」

何気なしに棚に置かれていた鋳型の一つを取り上げて見てみると、凝ったデザインをしたカトラリーの鋳型だった。
このＭＬＯの世界では、防具や宝飾用に鋳造スキルを取っているプレイヤーはいるものの、いわゆる高レベル防具というのはモンスターの甲殻素材をリベットで繋ぎ合せた物が主流なので、鋳造はそこまで必要とされていない。
一応様々なレシピ自体は存在しているものの、生活用品を作れるような領域にまで手を出している物好きは珍しい。

「はい。この工房の前主様は『いずれこの世界にも鋳造が必要になる武器が現れる日が来るかも知れない。』とおっしゃって日夜修行に励んでおられました。」

ようやく少し落ち着きを取り戻したらしきエミリーが長船の隣に並んでそう語る。

「…なるほど。鋳造スキルが必要になる武器か…」

鋳造が必要になる武器。…それはおそらく大量の弾が必要とされる銃器類や大砲の事だろう。

本当にそんな物が現れる日が来るんだろうか？

もしそんな物が現れたとしたら、ゲームバランスが崩れたりはしないだろうか？

…いや。考えてみれば既に大規模範囲魔法のような強力な殲滅手段が現状でも存在しているんだから、特に問題は無いとも言えるか？？

世界観の縛りがあるのでは？…とも思ったが、つい先日、≪カタナ≫が作れる可能性のあるクエストが発生したのを自分自身の目で確認したばかりだ。

ひょっとすると火器が出現する可能性もゼロでは無いかも知れない。

「ふーん？…俺も、もうちょい鋳造スキル上げてみるかな？」

よし！そうと決まれば善は急げだ。

「銀行からここにアイテムを移そうと思う。キャビネットを購入するのは、住宅街入口の管理事務所でいいんだったよな？」

「はい。ご案内致します。」

エミリーは他の主人に仕えているハウスメイドなので、屋敷の敷地内からは出ないんじゃないか？と思い込んでいたので、内心この申し出には驚いたが、正直助かった。
実のところ昨夜住宅街に入ってからは、どこをどう歩いてこの屋敷まで辿り着いたのかよく覚えていなかったのだ。

◇◆◇

「どうぞ。こちらです。」

緑の多い閑静な住宅街をのんびりと歩く。
空は青く、鳥の声などが聞こえて来て実にのどかである。
長船の少し前をテクテクと進むエミリーのお尻には白い可愛らしい尻尾が不規則に揺れていた。
大きくゆらゆらと動いたと思ったらピタッと止まったり、かと思えば先の方だけがまたゆったりと動いたり…。

「あ！見えて来ましたよ。あの青い屋根の建物です」

立ち止まってエミリーがそう言ったのと同時に、長船はぴょこんと視界を大きく横切った白い物を咄嗟にパシッと掴んでしまっていた。

「ひゃぅ！……お、長船様？　あ、あの一体何を？」

真っ赤な顔で涙目になりながら、エミリーが訊ねて来る。

「いや。目の前を横切ったもんだからつい…なんつーか条件反射？しっかし、この尻尾。アクセサリーだっつってたけど、ほんとよく出来てんなー。一体どういう仕組みになってんだ？」

毛触りを確かめるようにその白い尻尾を撫でると、エミリーはそのままへニャへニャと地面に座り込んでしまった。

「ふにゃぁ…ぉ…長船さまぁ…お戯れはお止めくださぃ…ぁん」

えええええっ！？なんだこれっ　ヤベっ！なんか変なスイッチ押しちまったか？

っていうか、開発者っ！　これはいくらなんでも趣味に走りすぎだろうと。

ヴォイドあたりだったら鼻血吹いて倒れてんじゃねーの？

１９．お戯れはお止めください（後書き）

猫耳メイドのお約束。

金属加工等技術的な事については、工業系では無いので詳しい事まではよく解りません。テキトーなので、おかしな点ありましたらご指摘下さい。

※読んでくれた方から「カトラリーって何？」って聞かれてしまった。
あれ？「カトラリー」ってあんま一般的に使わない言葉ですかね？
洋食器に使うフォークとかナイフとかスプーンとかの金物類全般の事です。

20．BBB

長船は慌てて尻尾から手を離すと、エミリーの手を引いて立たせてやり、スカートに付いていた汚れを軽くはたいた。

「悪かった。まさかそこまで反応するとは思わなかったよ。いきなり掴んでしまったのは本当に単なる条件反射だ。他意は全く無いから許してくれ。」

エミリーはまだ疑うような眼差しでこっちを見ている。
…おいおい。不可抗力だっての。
しかし、ようやく少し打ち解けて来てくれたかと思ったのにさっきより更に状況が悪くなったじゃないか。どうすんだこれ？

仕方無しに溜息を吐いて、再び管理事務所へと歩き出す。
しばらく呆然と立ち尽くしていたエミリーもハッとして尻尾を押さえつつ、慌ててパタパタと後ろから付いて来る。

◇◆◇

到着した管理事務所の建物内部はガランとしていた。
クリーム色を基調にした内装は至ってシンプルで、室内には受付カ

ウンターはおろかテーブルなどの家具類も一切置かれていない。

「これはまた…思ったより随分と殺風景な所なんだな。」

きょろきょろと辺りを見回しつつ長船がそう呟いた途端、何処からともなく受付嬢らしき人物がスッと姿を現した。

「いらっしゃいませ。コベントリー住宅管理事務所へようこそ。本日はどういったご用件でしょうか?」

「あ…あぁ。キャビネットを購入したいんだが。」

内心ギョッとしながらも用件を告げると、長船の背中からひょこっと顔を出したエミリーが慌てて補足する。

「こちらの長船様はウォールバンガー家のゲストの方でございます。本日は鍛冶工房へ設置する為のキャビネットをお求めになりたいそうです。」

「畏まりました。ウォールバンガー様の鍛冶工房ですね。少々お待ち下さい」

受付嬢がそう言うと同時に、殺風景だった室内がパッと一瞬にしてウォールバンガー家の鍛冶工房と同じ明るい白の煉瓦造りの内装へ

と変化を遂げる。

先ほどまで何の家具も置かれていなかったはずの床には、何時の間にやら3種類のキャビネットが鎮座していた。

「お客様がイメージしていただきやすいように、鍛冶工房の内装を再現致しました。
キャビネットにはこちらの大・中・小の3つのサイズがございます。
それぞれサイズにより格納出来るアイテム数が異なっております。
また、キャビネットには鍵を掛ける事が可能ですが、こちらは個人認証で複数の方が解錠可能な設定も可能でございます。
お色やデザインにつきましてもお客様のお好みでご自由にカスタマイズ可能ですので、どうぞご自由にお試しになってお選び下さい。」

「へぇ？便利なもんだな。ＶＲショールームって訳か。」

特にデザイン等にはこだわりも無く、貸金庫のアイテムを移動さえ出来れば何でも良かったので、無難に工房の入口に置いてあったのと同じデザインのキャビネットの一回り小さいサイズのものを取りあえず購入する事にする。

「お買い上げありがとうございます。商品の方はただいまご自宅の方へと転送させていただきました。よろしければ、お客様ご自身もご自宅の方へお送りさせていただく事が出来ますが、いかが致しましょうか？」

「あぁ。頼むよ。」

「畏まりました。それではお送りさせていただきます。またのお越しをお待ち申し上げております。ご利用ありがとうございました。」

足元にパーッと転送用の白緑色の魔方陣の光が出現し、その眩さに思わず目を閉じる。

…ゆっくりと瞼を開いた時にはもう元の鍛冶工房へと戻って来ていた。

◇◆◇

早速エミリーに銀行員を呼び出してもらい銀行内の貸金庫に預けていた素材や愛用の工具などをキャビネットへと移していく事にする。旧ＭＬＯ時代にプレイを開始し、ファーストキャラから一流の刀鍛冶になる事を目標と定めて活動を開始していた長船にはそこそこの量の財産がある。

何せ採掘や買い取りなどで溜め込んでいた素材類が三世代分あるのだ。

じっくりと腰を落ち着けて分別整理しながら仕舞い込んでいると、突然個別チャットの呼び出し音が響いた。

――フォン！

『やっほー！おさぴょん、聞こえるー？』

『ユキノか？聞こえてるよ…つーか、何だよ！そのおさぴょんって妙な呼び方は？俺はウサギかっ！』

『まぁまぁ堅い事言わないの。どう、エミリーに悪戯したりしてない？』

『……してねーよ！』

エミリーがピクリと反応した。どうやらユキノのメイドであるエミリーにはこの会話の内容が聞こえているようだ。

『…えっ？何？今の間。おさぴょんホントにエミリーに何か悪戯しちゃったんだ？　うっわー！やっらしぃー！大人って不潔ぅ！』

『ちがっ！してねーし。アレは不可抗力だ。ていうかお前もいい年こいた大人だろうがっ！！』

『わ…ちょっと奥さん聞きました？不可抗力ですってよ？男ってそうやっていつも言い訳するのよね。』

『つーか誰だよ奥さんて！ったく、違うって言ってるだろが！』

下手すると当分はこのネタでいじられそうな気がする。

『はぁ……　もう何でもいい。で、結局一体何の用なんだよ？』

『あ、そうそう。言うの忘れてたんだけど、鍛冶工房の入口にキャビネットあったでしょ？』

『あぁあのデカイのな』

『前の持ち主から好きにしていいって言われてたんだけど、私には必要無いからおさぴょん好きに使っていいよ。エミリー、後で鍵開けてあげてね』

『畏まりました。』

『あ、後それから私おさぴょんに作ってもらいたい物があるんだけど…』

◇◆◇

ユキノに頼まれたのは１５ｃｍ程の小さいナイフだった。
刃幅１．５ｃｍほどの細身のダガータイプで、鍔がなくグリップもストレートのペーパーナイフのような物を１００本程作れと言う。
強度はさほど必要としないとの事なので、鋳造のスキル上げにちょうど良さそうだ。

炉に火を入れ温度が上がるのを待っている間に、例のこの工房の前主（あるじ）のキャビネットの中を見てみる事にした。

「…解錠致しました。長船様どうぞお開けになってみて下さい」

エミリーに言われ、恐る恐る中を覗き込む。
中にはミスリルやアダマンタイト、ヒヒイロカネ、オリハルコンなどの高級素材がとんでもない量詰まっていた。

「…おい。なんだこりゃ！この工房の前主って一体何者なんだよ？
俺、刀鍛冶としてはそこそこのレベルだと自負してるし、素材もこの世界では古参のプレイヤーとしてそれなりの量握ってる方だと思ってる。…でも、これはいくら何でもちょっと有り得ねーだろ！」

「それにつきましては…長船様ならば、こちらをご覧になればお解りになっていただけるかと…」

そう言ってエミリーがスッと差し出して来たのは、一振りの鍛え上げられたカットラスだった。
反りを帯びたスラリとした細身の刀身のソレは、鍔が付いておらず、グリップには鮫皮が巻かれていた。
…明らかに日本刀を意識したデザインである。

そして、その刀身の根元には「ＢＢＢ・１５９６」と銘が刻まれていた。

20．BBB（後書き）

ホントは銘なんて握りをバラして見ないと見えないと思うんですが、
まぁその辺はゲームって事で…

21．鍛冶工房の前主

「なっ！？　ＢＢＢ？」

長船はカットラスの刀身に刻まれた銘に刮目した。

猫耳メイドエミリーが白い耳をピクピクさせながらニッコリ笑って答える。

「…やはり長船様はご存じでしたか。そうです。この工房の前主（ぜんあるじ）、伝説の刀工ＢＢＢの１４４年前の作品でございます。」

ご存じも何も…ＭＬＯの世界で鍛冶師を志す者で「ＢＢＢ」を知らない者などいないだろう。

他の鍛冶師には到底作る事が叶わない伝説級の武器を何本も残している人物だ。

その作品にはレシピの存在さえ確認されていないような物が多い為、おそらく「ＢＢＢ」なる人物は、かなりの古参プレイヤーで、何度も転生を重ねスキル上限の限界突破を行った事であの領域まで到達したのではないか？と噂されていた。

長船が旧ＭＬＯをプレイしていたのは、サービス開始６年目からサービスが終了した年までの約２年間だ。

その頃には既に「ＢＢＢ」は、その名前だけが完全に一人歩きしている状態で、オークション等にその作品が極々稀に出る事はあっても、実際に本人を知っているとか、見かけた事があるという人間は存在せず、おそらくかなり前に引退してしまった人物なのだろうと言われていた。

「１４４年前？　…ＢＢＢは引退してなかったのか？」

銘に刻まれた１５９６はＭＬＯ世界での暦の年号だ。そして、旧ＭＬＯのサービスが終了した年でもある。

「はい。ご主人様をはじめキンシップの皆様方がおいでになられなくなった後、数年間はこのお屋敷にはどなた様もおいでになられない日々が続きました。
…けれど、ある日突然ふらりとベベ様がまたこちらへとお戻りになり、それから１４４年前までこの屋敷でお過ごしになっておられました。」

「…ベベ様？」

「あ。失礼致しました。ＢＢＢ様の事でございます」

…一体これはどういう事なんだ？
長船はすっかり混乱してしまっていた。

「ユキノはこの事知ってるのか？」

「いいえ。…まだご存じないかと。」

それ以上の事は語ろうとしないエミリーに痺れを切らし、個別チャットで直接ユキノに訊ねてみることにする。

――フォン！

『ユキノちょっと教えて欲しいんだが…』

『ん？おさぴょん？どしたのー？』

『ＢＢＢってのは一体何者なんだ？』

『…えっ？　おさぴょん何でべべちゃんの事知ってんの？』

◇◆◇

ユキノ曰く、ＢＢＢ（＝べべちゃん）は、やはりサービス開始当初からプレイしていた古参プレイヤーの１人だったそうだ。
ユキノ達がキンシップを結成し、このコベントリーの家を拠点に活動していたのは、サービス開始２～５年後までの約３年間。
その間、ＢＢＢもずっと一緒だったという。

しかしその後、リアル事情からログインしなくなるメンバーが増え、キンシップが解散。ユキノを含む殆どのメンバーが引退してしまった。
ＢＢＢも一度は引退し、他のゲームを渡り歩いていたようだ。（元キンシップメンバーと他のゲームで出会った事があったらしい）

が、いつの間にやらひっそりと旧ＭＬＯの世界に戻っていたのでは？という事だった。

『まさかべべちゃんが出戻りしてたなんてね。言われて見れば確かにフレンド情報の最終ログイン日が１２年前のサービス終了日になってるわ。』

『サービス終了ぎりぎりまでプレイしてたって事か。ひょっとしたら、俺ともニアミスしてたかも知れないんだな。』

…しかし、周りにキンシップメンバーが誰もいなくなってもサービス終了のその日までずっとソロで活動してたって事か。
それって、かなりこの世界に執着があったって事なんじゃないだろうか？
だとすると、このβテストが終わって正式にサービスが開始されるようになれば、ＶＲに移植されたＭＬＯの世界にまた戻って来る可能性も大いにありうる。
ならば、下手にＢＢＢの資産には手を付けないで置いた方が良さそうだ。

――ガチャリ。

エミリーには悪いが、キャビネットには再度鍵を掛けてもらった。
あれだけの物を見た後に無かった事にしてしまうのは少しばかり虚しい物があるが、所詮は他人様の物だ。心の奥底に封印してしまう事にしよう。

◇
◆
◇

その後は夜までひたすら鋳造スキルを上げる事に専念する。
鋳型に鋼を流し込み、黙々とユキノに依頼されたミニナイフを作り続けた。
休憩を挟んだ後、冷めたナイフを一纏めにしてトレイに移し、刃を付ける作業をしようと奥の部屋の作業テーブルへと移動する。
トレイを置いて腰かけようと椅子を引いた時、足元で何かがキラッと光っているのが見えた。

…ん？何だ？

しゃがみ込んで拾い上げて見ると、それは1本の金の指輪だった。
ルビーが1つだけ入ったシンプルなデザインだが、よく見ると消費魔力減の補正が付けられている。
何気無しにリングの裏側を見ると何やら小さな文字でメッセージが刻印されていた。

「…ええと、Ｗｉ……ｔ…ｈ…ＬＯ…Ｖ…Ｅ……　ＷｉｔｈＬＯＶＥぅ？？　Ｂ．Ｂ．Ｂａｒｄｏｔ　ｔｏ　Ｙｕｋｉｎｏ　ってユキノ宛のラブリングかよっ！！！何だこりゃ」

問題はこのリングがあった場所と送り主の名前である。
この工房の前主はＢＢＢだ。となると、当然Ｂ．Ｂ．Ｂａｒｄｏｔはｂｂｂの事だろう。

…Ｂａｒｄｏｔか。

その名前はつい最近パルノの街で聞いたばかりのものだ。
長船が追いかけている≪カタナ≫の製法を知っているという異国から亡命して来た伝説の刀鍛冶の名前がバルドーだった。

…一体どういう事だ？　バルドーとＢＢＢは同一人物なのか？

長船はカットラスの刀身を光にかざしながら考えた。
１４４年も前にコレだけの物を創っていた人間だ。今は≪カタナ≫を創り出す事が出来るようになっていたとしてもおかしくはないだろう。
…噂の男は、プレイヤーだったのか？

しかし、それだと辻褄が合わなくなる。
≪カタナ≫の製法を知るという男バルドーは、５年前にこのパルノイエに亡命して来たのだと言う。
ゲーム内の暦では現在は１７４０年だ。その５年前ということは、１７３５年。

ちなみに、ＭＬＯがＶＲに移植されて第１回のクローズドβテストが開始されたのは、今年の２月初旬だ。
…ゲーム内の暦で換算すると１７３８年の事だ。

クローズドβでプレイヤー達がようやくログインするようになった３ヶ月前（ゲーム内時間では３年前）に、既にバルドーはこの世界に存在していたという事になる。

…ありえない。一体どういう事なんだ？

22. 迷路の街（前書き）

ミーアのターンです。

22．迷路の街

「畏まりました。ミーアお嬢様、どうぞこちらへ。」

「はーい！じゃあ、行ってくるね。また夜にー！」

◇◆◇

万能わんこエドワードさんに転送してもらい、そんなこんなでやって来ましたよ！首都パルノ。
今日は魔法を覚える為に魔術師ギルドに向かうつもり。
昨日はお母さん達と一緒だったけど、今日は朝から完全にソロだよソロっ！
なんかＭＬＯの世界ってすごくリアルだから、あんまりゲームって感じがしなくて、外国とかを1人旅してるような気分になっちゃってやたらテンションがあがる。

あたしはドキドキしながら城壁でぐるりと囲まれたパルノの街を間近から見上げると、
「よしっ！」と気合を入れてその城門をくぐった。

パルノは王国の首都だけあってさすがに広い。
区画ごとにそれぞれ雰囲気もかなり違う。
衣類や雑貨などを商っている店が立ち並んでいる区画や、いい匂いが漂って来る飲食店が寄り集まっている区画、妖しげな薬屋が立ち

並ぶ小路に、宝石や飾り物を商なっている職人さん達の町…。

そんな様々な雰囲気の街並も表通りからちょっと外れてしまうと何処も同じような白い四角い家が並ぶ住宅地になっていて、油断すると自分が何処を歩いているのかあっと言う間にわからなくなってしまう。

「…あれー？おっかしいなぁ。大きい通りをただ真っ直ぐ歩いてるだけで辿り着くハズなんだけど。」

どうもさっきから魔術用の小物や魔力を上げる装備品等が売っている通りをぐるぐる回っている気がする。

必死になって、あーでもないこーでもないとマップを確認していると、後ろから突然、軽くポン！と肩を叩かれた。

「ねぇ？何してんの？　ひょっとしてあなた魔術師ギルドに行く人？」

振り返ると高校生くらいの女の子がにんまりと笑っている。

軽く遊ばせたショートカットの髪はアッシュグリーンで、何だか活発そうな雰囲気だ。

「え？うん。じゃなくて！…えっと、はい。そうなんです。

だけど迷ってしまったみたいで、さっきから同じ所をぐるぐる回ってるような気がします。」

「あぁ、別にそんなに気遣って敬語とか使わなくていいから。私もね、昨日初めて魔術師ギルドに行ったんだ。したら、やっぱこの辺りでめちゃくちゃ迷っちゃってさー。」

そう言うが早いか、その子はあたしの手をぐいっと手を引いて「ほらっ！こっちこっちー」と走り出す。

魔術アイテムがびっしりと並べられて少し狭くなった小路を抜けると、途端に視界が開けて背の高い塔が見えた。

「ほら、ここが魔術師ギルド。ちょっと解りにくいでしょ？何か、一般人には見つけにくいようにわざと結界が張ってあるんだってさ。
わたしの名前はリディア。昨日からプレイ開始したばっかなの。よろしくね！」

そう言って、リディアはまた二マッと笑った。

◇◆◇

魔術師ギルドの建物内に入ると、リディアが「ほら、初めてならあそこで受付をするのよ」と教えてくれる。
どうやら彼女とはここでお別れのようだ。
「すぐにまた顔合わす事になるわ。じゃ、後でね。」と手をひらひらと振って、彼女はさっさと行ってしまった。

さて、いよいよ魔術師ギルドに潜入かー。　うぅっ…やばい！緊張して来たかも。

受付で名前や年齢、転生の有無、過去（前世）に習得している魔法、習得を希望する魔法などを申告し、廊下に並んだ椅子に座ってしばらく待たされた。
廊下はシンとしていて誰一人として通らない。…何だか空気が重いような気がする。

どれくらい待っただろうか？
ようやく小柄な女の人が呼びに来て、長い廊下を歩かされると一番奥にある部屋へと通される。

「失礼します。」

扉の向こうの狭い部屋は、本がたくさん山積みにされていてインクと古い紙の匂いがした。
デスクの奥に座っていたお爺さんが立ち上がってゆっくりとこっちに向かって歩いてくる。
まるでファンタジー小説の世界に出てくるイメージそのものの長い白い髭にトンガリ帽子のお爺さんだ。

「ようこそ我が魔術師ギルドへ。ミーアくんは転生者じゃの？」

「はい」

「よろしい。…だが、ひとつだけ問題があるのじゃ。本来ならこの世界の転生者はみな前世の記憶を保持しておる。だがお主は特別じゃ。母なる魂と別たれた新たなる魂が全く違う存在として生まれ変わっておる。」

どうやらカムバックユーザーとしてアカウントを分離した事を言っているらしい。
確かに通常の転生ならば、生まれ変わったとしてもプレイしている中の人は同じなのだから以前のキャラクターの記憶があって当然だろう。
だけど、美亜の場合は母から分離したアカウントを譲り受けた新規参入ユーザーなのだ。当然まだわからない事だらけなのである。

「本来ならば転生者は魔術師ギルドに来ずとも、己の記憶を呼び覚ます事が出来る。自らの力で魔力を練り魔術書に過去に記録した呪文を浮かび上がらせる事で再び魔術を使う事が可能じゃ。
だが、お主は転生者でありながら何も知らぬ赤子と同じ。
新たにこの世界に降り立ち、初めて魔法を学ぼうとする他の者たちと同じように1から魔法を学ばなくてはならぬ。」

そう言うと、お爺さんはあたしの手をぎゅっと握った。

「精神を落ち着け気を高め、己の体内にある魔力の流れを感じ取りなさい。

それが感じ取れるようになったなら、ゆっくりと指先に集めるようにしてみるのじゃ。」

言われるままに目を閉じて感覚を研ぎ澄ませてみる。
お爺さんの手から、体温と共に何かじんわりと温かい物が流れ込んで来るような不思議な感覚が立ち上って来るのがわかった。

…ゆっくりと目を開くと、お爺さんが小さく頷いて軽く人差し指を立てる。

「そう。指先に集中してごらん」

体の中を廻る温かい物をたぐり寄せ、ゆっくりと指先へと集めて行く。
爪先がぽーっと熱くなっていくような気がした。

「…そうじゃ。　記憶を亡くしているとは言え、やはり転生者じゃの。魔力のコントロールが抜群にうまいわ。
そうやって自由に魔力をコントロール出来るようになれば、後は詠唱を組み合わせる事によって魔術は使えるようになる。」

「魔術は己の助けとなるものではあるが、驕り高ぶれば己の身を滅ぼすものともなる。
その事を忘れずに、学んでいくといい。」

お爺さんがそう言ってあたしの背中をトンと軽く叩いたかと思うと……気が付けば、いつの間にかあたしはさっきの廊下にまた1人ぽつんと佇んでいた。

23．炎のレッスン

「…ミーア！ミーア・ウォールバンガー.ｊｒ！　聞こえていますか？」

ハッと我に返ると、さっき呼びに来てくれた小柄な女の人が耳元で大声を張り上げていた。
どうやら夢見心地でしばらく廊下にぼんやりと立ち尽くしていたようだ。

「す、すみません！ぼけっとしてました。」

慌てて姿勢を正すと、呆れた様な顔で「…まったく」と小声でぼやかれる。
や、だってさ。日常には無い不思議体験だよ！
ちょっとくらい浸らせてくれてもいいんじゃない？…えっ？ダメ？

「では、これよりそれぞれの属性魔術の基礎鍛錬へと入ってもらいます。まず最初は炎属性の魔法からです。」

「…え？時空魔法からじゃないんですか？」

さっき受付では時空魔法を第一志望に申請して置いたはずなんだけど。

「時間と空間の2つの概念が関わって来る時空魔法は魔術の中でも少し特殊なのですよ。魔術の概念を理解する上で、やはり最初は三大属性魔法のいずれかを学んだ方が良いだろうという事で、こちらで調整させていただきました。」

なるほど。そういうものなのか。

「こちらにいらっしゃい。」

そう言って連れて行かれたのは、回廊に囲まれた広い中庭だった。地面に敷き詰められた芝の青さが夏の日差しに眩しい。
よく見るとそこには既に何人かのプレイヤーが散らばっていて、思い思いに魔術のトレーニングをしているようだ。

ゆっくりと中庭を横切ってこげ茶色の長いローブ姿の男の人が近づいて来た。腰には長い飾り紐をベルト代わりにゆるく結んでいる。
ローブのフードは後ろに跳ね除けられていて、短く刈り上げられた銀髪と痩せぎすの顔に鋭い光を放つ灰色の印象的な瞳が顕になっていた。

「ミーア・ウォールバンガーjrだな？　私は、こちらのギルドで初級魔術の指導に当たっている一級魔導師ジェナイ・バルドゥだ。」

そう言って右手を伸ばして来る。

…えっ？何？握手？

恥ずかしながら、こちとら生粋の日本人の女子中学生だ。初対面の男の人と握手なんかした経験なんてない。

ど、どうしよう?と内心焦っている間に、さっさと手を握られてしまっていた。

軽くシェイクした後、振り解こうとしてもギュッと握り込まれて離してくれない。

それどころか、握った手の上にさらにもう片方の手を添えられ、そのままじっと顔を見つめられている。

…えっえっ?　何?

ドキドキして軽くパニックに陥ってしまう。

「…ふむ。なかなか強い魔力を持っているようだな。さすがは転生者と言ったところか。」

あ。なんだ!魔力を見てたのか。

そう言えばさっきも同じようにお爺さん（ギルドの偉い人?）に手を握られたけれど、お年寄りだからか、あんまり意識してなかった。

「他国の魔術師ギルドではここ一月ほどの間に魔術の指導を受けに来た転生者が何人か現れたとは聞いているが、ここパルノに教えを請いに来た転生者はこのギルドの歴史が始まって以来お前が初めてだ。

お前がどの程度の潜在能力を持っているかは解らぬが、例え転生者と言えど此処で学ぶ他の者達と扱いを変えるつもりは私には無い。

そのつもりでいるように。」

ジェナイ先生はそう言うと、くるりと手の平を回し中空から魔術書を取り出した。

「…魔術書は持って来ているか？」
「はいっ」

慌ててインベントリから使い古された魔術書を取り出す。
このキャラ「ミーア」の転生元であるキャラ「サクラ」から譲り受けた品だ。
ちなみにサクラはミーアのお婆ちゃんに当たる。

「よろしい。かなり古い魔術書のようだな。
今この魔術書を開いても、見た目は何も記されていないように真っ白に見えている筈だ。
だが、お前が魔術を学ぶ事で少しづつここに過去に刻まれた魔法や、新たに生み出された魔法が浮かび上がって来るようになっている。
よし、それでは一番簡単な炎の魔法から始めようか」

そう言ってジェナイ先生が短い呪文を詠唱すると、手の平にボッ！と炎の塊が浮かび上がった。

「炎の基礎呪文、ファイヤーボールだ。
属性魔法は天候や季節によって威力が変化する。
炎の場合は夏や晴れた日には特に威力が増し、冬や雨や雪の日には威力が減少する。
氷の場合は正反対という訳だ。
魔法によって与えるダメージや受けるダメージが大きく変わって来るから、モンスターと対峙する際には十分注意が必要だ。」

へぇ。この辺りの設定は今までプレイした他のＭＭＯではあまり見たこと無いかも。やっぱ季節や天候のあるＭＭＯならではって感じ

かな？

「ちなみに今は7月。そして今日は見ての通り、抜けるような晴天だ。
当然、炎属性の魔法は最大限の威力を発揮する状態になっている。
…よし、やってみろ。」

そう言ってジェナイ先生はさっきのファイヤーボールの呪文をもう一度唱える。
あたしも後に付いて同じように唱えてみた。

――ぼふんっ！

先生の手の平の上にはさっきよりも大きい一回り炎の塊が出ているのに、あたしの手の平の上に出たのは、ほんの少しの白い煙だけだ。
あれっ？

「…不発…だな。」

ジェナイ先生はフッと笑うと、

「まぁ最初は誰でもそんなもんだ。何度も繰り返し唱える事で、呪文がしっかりと術者と魔術書に刻まれ、自由に使いこなせるようになる。諦めず根気良く練習する事だな。」

と言って他の生徒達の様子を見に行ってしまった。

…そっかぁ。いくら転生者だからと言っても、最初っから簡単に魔法が成功するって訳でも無いのね。

よしっ！　もう1回。

――　ぼふんっ！

…おりゃ！　もういっちょ！

――　ぼふんっ！

くわっ！まだまだーーー！！！

――　ぼふんっ！

思わず詠唱に熱くなっていたら、後ろから肩をトントンと叩かれた。

「やっほー！ミーア。思った通りまたすぐに逢えたねっ！」

振り返ると、さっき魔術師ギルドに連れて来てくれた少女リディア

がアッシュグリーンのショートカットをふわふわと揺らしながら笑っていた。

23．炎のレッスン（後書き）

この時点での現実時間は４／１８ですが、ゲーム内では７／２５です。

ちなみにジェナイ先生は２９歳独身。
痩せぎすでひょろりと背が高く目付きが悪い。
別にイケメンでもなんでもないので、無駄にドキドキしてしまった方いたらすみません。（いるのか？そんな人）

２４．魔術師の卵達

「ファイヤーボールかー。私もね。昨日ここに来た時、なっかなか成功しなかったんだよねー。ちょっとしたコツがあるみたい。」

ニマニマと笑いながらリディアが言う。

「そうなの？」

「うん。ミーア見てたらさ。魔力を手の平の上に集めて球にするところまでは出来てるみたいじゃない？けど、それをうまく炎に変える事が出来ないでいるでしょ？多分、『着火する』ってイメージがうまく出来てないんじゃないかな？…そうだなー。手の平にガスの塊があって、そこにライターで火を点ける。って感じでイメージしてみたら案外うまくいくかもよ？」

「わかった！ちょっとやってみる」

あたしは小さく詠唱しながら、手の平の上で魔力の球を作りイメージする。

…ライターね。よしっ！

――― ぼふんっ！

「あ、あーれーー？」

うはっ、やっぱまた不発だった。
少し離れたところからあたし達の様子を見ていたらしきジェナイ先生がまたフッと馬鹿にしたように笑う。

…ムッ！何なのよー！　転生者だからって他の人達とは扱いを変えないんじゃなかったの？
明らかにあたしの事馬鹿にしてんじゃんよ！だぁーー！マジむかつく。
見てなさいよー！！！

でも、今ので何となくわかって来たかも。
多分今までは着火のタイミングが遅かったんだ。

あたしは少し深く息を吸い込んで、意識を集中する。
身体の中を流れる魔力をゆっくりと右手の平の上に集め、気合を入れて丸く凝縮していく。

…後は、魔力の塊に『着火する』イメージで…

――――　ボンッ！

いきなり大きな音がして、あたしの手の平の上に2mくらいある巨大な炎の塊が出現していた。

「ちょっ！ミーア！！　やり過ぎっ！！」

リディアの声にハッと我に返って慌てて辺りを見渡すと、広い中庭に散らばって魔術の特訓をしていた他の人達も呆気に取られたような顔でみんなこっちを見ている。

ジェナイ先生があたし達のところへ足早にやって来たかと思うと、いきなり大声で怒鳴りつけられた。

「お前は馬鹿かっ！たかが初級のファイヤーボールの練習程度にそんなに大量の魔力を篭めるヤツがあるかっ！この中庭には結界が張ってあるからまだいいようなものの、これがもっと上位の魔法でここが普通の民家だったとしたら建物ごと消し飛んでいるところだぞ？」

うひゃー！マジですか！？けど、家が消し飛ぶて…この世界の魔法って一体どんだけ？

「…とにかく。お前はもう少し魔力をコントロールする事を覚えた方がいいようだ。加減が出来るようになるまでしばらくは炎魔法は止めて、今、属性が弱まっている氷と雷の魔法の練習から始めた方が良さそうだな。」

…あっれー？おかしいな。
さっきお爺さん（ギルドのお偉いさん？）には「魔力のコントロールが抜群にうまい」って言われたんだけどなー？？

ジェナイ先生は厳しい顔をしたまま、今度は「アイスボルト」と「ライトニングアロー」という魔法を教えてくれた。

◇
◆
◇

一通り説明を終えた先生がまたゆっくりと離れて行き、あたしが１人おとなしく「アイスボルト」の練習を始めると、それを待ち構えていたかのように周りをわっと囲まれてしまう。

「ねぇねぇ！さっきのファイヤーボール凄かったね！一体どうやったの？」
「ほんとスゲーな！」
「あれは魔力の量が半端ないってこと？」

さっきまで中庭に散らばって魔法の練習をしていた他のプレイヤーさん達だ。

「あ、私セシル。よろしくね！」
「俺は汐音（しおん）だ。セシルと一緒にプレイしてる。」

「私は月猫姫(つきねこひめ)よ。ゆえみゃおって呼んで。」

「…あ、あたしはミーアです。よろしくお願いします。」

口々に自己紹介されて軽くパニックに陥りながらも、3人の事を観察してみる。
セシルさんは淡い紫色の髪をツインテールにした可愛らしい感じの女の子だった。そのセシルさんとお揃いの紫の髪をした汐音さんは、彼女の腰にちゃっかり手なんか回しちゃってる。
…なんだコレ、バカップルか？
年齢は2人ともあたしよりちょっと上って感じだ。
月猫姫さんは、その名の通り「姫」ってイメージがぴったりの美人さんだった。整った顔立ちはまるでお人形さんみたい。
長いストレートの黒髪のてっぺんには小さい可愛らしいティアラが乗っかっていて、ファッションも何処となくゴスロリ系入ってる感じ。

「ちょっとちょっと！あんた達、ミーアがびっくりしてんじゃない。ほらっ、ジェナイ先生も睨んでるわよ。」

リディアに言われて、チラッと先生の方を見るとバチッと目が合ってしまった。
…うっ、そんなに睨まなくてもいいじゃない。
他のプレイヤーさん達も遠巻きにこっちを胡乱な目で見ている。

「ま！お互い初心者同士って事で！みんな仲良くやりましょっ！」

セシルさんが大きな声でそう言って汐音さんの手を引いて離れて行

くと、他の人達も大人しくまた魔法の練習を開始する事にしたようだ。

離れ際にリディアがくるっとこっちを向いて、「ミーア！今日終わったら後で一緒にご飯食べに行こうね。」とまたニカッと笑った。

◇◆◇

「アイスボルト」はファンタジー系のＲＰＧにはよくある魔力で氷の刃を作り出して対象物にぶつけるという魔法だ。
何故か氷の刃を作り出すのは案外簡単だった。さっき炎の塊を作り出す時にあんなに苦労したのは一体何だったの？と言いたくなるくらい。
最初の魔法で何かコツのような物を掴む事が出来た…ってことなのかな？

練習用のカカシみたいな標的に氷の刃を立て続けにザクザクと叩き込んでいたら、いつの間にやら背後にジェナイ先生が立っていた。
ちょっ先生っ！気配消すの止めて下さい。マジ怖いです。

「…ふむ。さっき教えたばかりのアイスボルトをもう１０連発で打ち込む事が出来るようになったか。あの馬鹿でかいファイヤーボールと言い…やはり転生者は規格外って事なんだろうか？」

まるで独り言のように呟いている。

「ミーア、ちょっと魔術書を開いてみろ。」

あたしは言われるままに魔術書を開いた。

「そこにはさっき学んだファイヤーボールとアイスボルト、そしてライトニングアローの呪文が記されている筈だ。そして、お前がそれらの呪文を完全に習得出来た時、自ずと次なる呪文が浮かび上がっている。」

確かにさっきまでは真っ白だった筈の魔術書のページには、まるでたった今書かれたかのように黒々としたインクではっきりとファイヤーボールとアイスボルト、ライトニングアローの呪文が記されている。

そしてその次のページにうっすらと浮き出ているように見えるのは、ファイヤーランスとアイスジャベリン、サンダ―スピアの呪文。

まだ完全に見えているって訳じゃないのに、それらの呪文が既にあたしの頭の中にははっきりと浮かんでいて、もういつでも唱える事が出来る。

…何故かそうあたしには確信出来た。

２４．魔術師の卵達（後書き）

頭の中で物語はもう大分先まで出来上がっているのに、連載の方がなかなか進んでくれなーい！
少し書き溜めて1日2更新に変更した方がいいのかなぁ？
いやいや初心者がそんな無茶をしたら破綻してしまいそうだ。

ちなみに雪乃と美亜が初ログインしてからゲーム内時間では現在2日目。リアル時間に至ってはまだたったの5時間程度しか経過してない計算です。全くどうなってんだ。
Ｘ－ＤＡＹ（ＭＬＯ正規サービス稼働日）まで、まだまだ時間が掛かりそう。
早くトリップしてしまいたいっ！

25．新婚さんいらっしゃ〜い

「えええええーーーっ！！　うそっ！　汐音とセシルって結婚してるのー！？」

スジ肉の煮込みが入った壷をしっかりと抱えたまま、リディアが店中に響く大声を上げた。

「…ちょっとリディア、うるさいわよ」

チラッと横目で睨みつつ、月猫姫が咎める。

その日の夕刻、あたしはギルドで知り合ったメンバー達とパルノの繁華街の中心部から少し東に入ったところにある酒場宿『雄鶏と火口箱亭』で早めの夕食を取っていた。

まだ出会って間もない仲間なんだけど、ジェナイ先生の授業が終わるなり「とにかく料理が凄く美味しいんだから！」とリディアが強引にみんなの事を引っ張って連れて来られたせいもあって、あたし達はここに来るまでの間にすっかり打ち解ける事が出来ていた。（ある意味、被害者同士の連帯感とも言う？）

一応、あたしも最初は一番年下で新参者だからっていう気持ちがあって遠慮してたんだけど、セシルに「そんなに堅っ苦しく敬語を使ったり、さん付けで呼んだりなんかしないでよ。調子狂うじゃない。同じギルドで学ぶ者同士、同級生みたいなもんでしょ？。気楽に行こっ！」と言われてしまったので、今はみんなの事を気安く呼ばせてもらう事にしている。

リディアが「何がなんでもみんなに食べさせたかった！」と絶賛するだけあって『雄鶏と火口箱亭』のスジ肉の壷煮は、トロトロに柔らかく煮込まれていて本当においしかった。

って、そうじゃなくて！
何かあたし…たった今とんでもない事を耳にしたような気がするんですが？

「そうよ？って言っても、もちろんリアルの話じゃないわよ。私達、昨日ＭＬＯ内で結婚したばっかの新婚ほやほやなんだよねー。」

語尾にハートマークでも付いていそうな口調でセシルが言い放つ。

「えっえっ？魔術師ギルドに魔術を習いに来てたって事は、セシルも汐音も最近プレイを開始したばかりの初心者さんだよね？それなのにもう結婚しちゃったの？」

…てっきり自分と同じ初心者だとばかり思い込んでいたけれど、こう見えて実はこの人達、旧ＭＬＯ時代からプレイしているベテランプレイヤーさんだったりするのかも？

「うん。第3次クローズドβから始めたばっかりの初心者だよ？」

ってそんな訳ないか。
目の前のキノコとほうれん草のキッシュをつっつきながら、リディアも訝しげに突っ込む。

「プレイ開始早々いきなり結婚しちゃったって事？ふーん？…物好きというか何と言うか…」

チロッと胡散臭そうな目で睨まれた汐音が慌てて否定する。

「ちょ！そんな下半身直結野郎を見るような目で人を見んな！
俺とセシルは元々リアルでも付き合ってんだよ。このＭＬＯをやる前に他のネトゲを一緒にプレイしてた時も結婚してたし、別にいいだろ。」

「そうそう。私達2人共都内住みなんだけど、ちょっと離れた高校に通ってるのよね。だから普段はなかなか逢う時間が取れなくって。と言う訳で、こうやってネトゲでデートしているのでしたー！」

…ふーん。この人達、東京の高校生なんだ？
うちの母が聞いたら「そんな個人情報を知り合ったばかりの人にベラベラ喋っちゃダメ！」って怒りそうだなぁ。
って、よく考えたらあたしも長船さん達に中学生だって言っちゃったから人の事言えないか。

「へぇ。ネトゲ内で知り合って擬似恋愛みたいな感じになった。なーんて話は割と聞くけど、逆に最初からそういうプレイスタイルの人もいるのね。」

ゆえみゃおこと月猫姫も物珍しそうにセシルと汐音を見ている。

「でも、この世界で一緒にプレイするのなら別にわざわざ結婚までしなくたってデートは出来るんじゃないの？」

確か長船さんが言ってた。β期間中は結婚は出来ても転生する事は出来ないって。
なら、そこまで結婚にこだわる必要も無いような気もする。

ちっちっちっ！と大げさに顔の前で指を振る動作をしながら、汐音が言う。

「あー。ミーアはちょっとお勉強不足だな。あんまりＷＩＫＩとか攻略サイト見てないだろ？
結婚すると、プレイする上でいろいろとお得な特典があるんだよ。」

「うっ」

確かにあたしは、このＭＬＯに関してはＷＩＫＩも攻略サイトもほとんど見てなかったりする。
カムバックユーザーキャンペーンに応募してみたものの、まさか本当に当選するとは思って無かったし、当たったら当たったでベテランプレイヤーである母と一緒にプレイする事になるだろうと思ってたから、あまりチェックして無かったのだ。
と言うか、わからない事があればプレイしながらでもその場でググればいっかー！と安直に考えていたのである。
…けど、実際にプレイして見てようやく気が付いた。ＶＲモードでプレイしているとＷＥＢが一切見れないという事実に。

「結婚してるとね。いろいろ便利なスキルがあるのよ。
例えば、『今すぐ逢いたい』は結婚してる相手のところに転送されるスキル。
『あなたを護りたい』は相手のＨＰとＭＰを回復させるスキル。
『１人で逝かないで』は相手が戦闘不能になった時に蘇生させるスキル。
『君に背中は預けた』はお互いの物理・魔法攻撃力を上昇させるスキル。
…ねっ？なかなか便利でしょ？」

コクコクと大げさに頷きながらそう得意気に語るセシル。

汐音と言いセシルと言い…あのオーバーなアクションには見覚えがある。

多分ヴォイドさんと同じ３Ｄモードの簡易接続ユーザーなんだろうな。

ってそんな事はいいとして！

何なんですか？その恥ずかしすぎるスキル名は！砂吐くわっ！！

結婚スキルが便利そうなのは何となくわかったけど…痛い！痛すぎるよ！

無理だ。あたしにはそんな小っ恥ずかしいスキルとてもじゃないけど、使いこなせそうもないよ！

チラッと横目で見ると、リディアも「…へ…へぇ」とちょっと遠い目をしちゃってる。

うんうん。やっぱ普通そういう反応になるよね？

けれど、月猫姫はそうは思わなかったようだ。

「…ふーん。今ちょっとＷＩＫＩ見てたんだけど、結婚ってスキル以外にも特典があるんだね。

夫婦でパーティーを組んだ状態だと取得経験値が１．３倍になるとか、銀行に共有口座が開けるとか。ちょっとおもしろいかも？」

あれ？プレイしながらＷＩＫＩを見れたって事は、月猫姫も３Ｄモードユーザーなのね。

リディアは、と。…あれだけ美味しそうにガツガツ料理を食べてるんだから、やっぱＶＲモードユーザーだろうなぁ。

現状あたしが出会ったプレイヤー達はＶＲモードの人と３Ｄモードの人が半々って感じだけど、βテストが終わって正式サービスが始まれば、やっぱり３Ｄモードプレイヤーの比率の方のが高いんじゃないかって気がする。
ＶＲバイザーの普及率はまだそんなに高いとは言えないしね。

「取得経験値１．３倍かぁ。なるほどね。
セシルと汐音って私と月猫と同期入門だったのに、妙に魔術の成長が早いと思ってたのよね。どおりでね。なーんか納得したわ。」

デザートの桃のシロップ煮にパクつきながら、リディアも頷いている。

「転生者の取得経験値２倍も反則だと思うけど、結婚するってだけで初心者でもいきなりそれだけのブーストを受けられるっていうメリットは大きいわよねぇ。
…わたしも結婚しちゃおっかな？」

そう言って月猫姫もフッと妖しげに微笑んだ。

…結婚かぁ…　ふと長船さんに言われた事を思い出してしまう。

『βテスト終わって、正式オープンしたら俺と結婚しよう…』

あの時、長船さんは何を思っていきなりそんな事を言い出したんだろう？
長船さんはベテランプレイヤーだ。
高ランクプレイヤーになってくると、必要になってくる経験値量も

半端じゃないのだろう。
やっぱりスキル上げの為にブーストしたかったって事なのかな？

シチュエーション的に見てもあれは半分冗談みたいなものだったんだろうとわかってはいるんだけど。
…何かモヤモヤと釈然としないものがあるのは一体何故なんだろう？

25．新婚さんいらっしゃ～い（後書き）

ミーアと友人達の名前の呼び方などについてご指摘をいただいたので、ちょっと改稿してみました。

26．はじめてのお泊り

あたしがぐるぐると考え込んでいると、一足先に食事を終えたらしきセシルが汐音の腕を抱いて勢いよく立ち上がった。

「さーてと、さすがに眠くなって来たから私達はそろそろ落ちるね。じゃ、また明日～」

「おつかれー！」

セシルと汐音は手をブンブンと振りながら、キラキラと光って頭の先からゆっくりと消えていった。

「えっ？あれ？……あ、そっか。ログアウトしたのか」

2人があまりに呆気なく消えてしまったから一瞬何が起こったのかよく解ってなかった。

こっちの世界ではまだ夕飯時だから「眠くなった」って言われてもピンと来なかったけど、現実世界ではもうＡＭ３時前なんだよね。

「月猫（ゆえにゃお）はどうするの？　そろそろ寝ないで平気？」

あたしが聞くと、彼女もカタンと椅子から立ち上がって微笑んだ。

「そうね。まだあまり眠くは無いんだけどちょうど区切りもいい事だし、今日はこの辺で落ちておこうかな。明日ログインしたらＷＩＳ（個別チャット）送るわね。それじゃ、おやすみなさい」

「うん、おやすみ～」
「おつー！良い夢を」

月猫姫の姿もキラキラと光りながらスーッと消えていく。
その様子を見届けたかと思うと、リディアが首を傾げて訊ねて来る。

「ねぇ？」
「ん？」
「どうしてさっき月猫にだけ『そろそろ寝ないで平気？』って聞いたの？」

何か不満気に葡萄パンをブチブチとちぎってるし。ってあれだけ食べたのに、まだ食べてるし！

「えー？どうしてって言われても…　だって、まだ眠くないでしょ？リディアってＶＲモードプレイヤーだよね？」

「えっ！　スゴイっ！！なんでわかったの！？」

いやいやいや…　それだけ片っぱしからバクバク食べてりゃ誰でもわかりますって。

◇◆◇

その後、家に帰るにはまだ早いかな？って事で、リディアが泊ってる部屋に少しお邪魔する事にする。

「こっちよ。入って！」

そう言って案内されたのは、食事をした『雄鶏と火口箱亭』の2階の1室だった。
天井にランタンの明かりがひとつ吊るされたあまり広くない個室は、小振りなベッドと荷物を入れる為のチェストがひとつポツンと置かれただけの殺風景なところだった。
室内をチラリと一瞥した後、あたしがなんて言っていいか解らないでいると

「ここはご飯もおいしくてベッドも清潔だし、女の子が1人でも泊っても安全だって評判の宿屋なんだけどね。」

そう言いながら、リディアはベッドにぼふん！と飛び込む。

「…けどさ。私、リアルでは今まで1人で外泊とかってした事なかったんだ。あ！別に心細いとかホームシックとかそんなんじゃないよ？　だってコレはゲームだもんね。けど、こんな風に同じ宿屋に1人で何日も泊りこんで冒険するなんて、何だかすごく不思議な感じよねー。」

嘘だ。リディアは無理してる。世間知らずの女の子がたった1人でこんなところに寝泊まりだなんて、心細く無い筈なんてない。
それに比べてあたしはどうだろう？

プレイ初日からあんな豪邸でエドワードさんやエミリーさんに傅かれ、自分の為だけに整えられた温かいベッドでぬくぬくと眠る事が出来た。
もしあの豪邸が無かったとしても、母と一緒ならこの世界の何処にいたとしてもきっと何の不安も感じないで眠る事が出来たんじゃないかって気がする。
それに長船さんやヴォイドさんだっていてくれた。あたしは1人じゃなかった。

ゲームとして割り切るには、この世界は時々必要以上にリアルすぎるような気がする。
もしこの世界にたった1人ぼっちで生きていけって放り出されていたとしたら、耐えられないかも知れない。知らず知らずのうちに母や周りの人達に守られていたんだなって事に気付く。

「ねぇ？ミーアも1人なんだよね？ミーアはどこに泊ってるの？西街の『歌う大鍋亭』？それとも『火竜の吐息亭』？」
「えっ？…えっと」

リディアはいい事を思いついた！とばかりに、またニンマリと笑った。

「ねぇ！良かったら、ルームシェアしない？」

◇◆◇

…何でこんな事になってんだろう？

あたしは狭いベッドの上で寝ぼけた頭でぼんやりと考え込む。
昨日はギルドで知り合った友達と一緒に夕飯を食べた。そして、そのままリディアの部屋に遊びに行ったのだ。
家具らしい家具は何も置かれていないリディアの泊る部屋で、２人並んでベッドに座りいろんな話をした。

自分より少し年上だとばかり思っていたリディアが実はあたしと同じ年だという事、ＭＬＯが初めてのオンラインゲームだという事、ＶＲバイザーがたまたま家にあったのでプレイしてみたけれど、この世界で出会った友達はみんな３Ｄモードのプレイヤーばかりで、プレイ時間がなかなか噛み合わなくて寂しかったという事…。

そんな話をしている内にいつの間にか睡魔に襲われ、狭いベッドで２人して眠りこけてしまったらしい。

…そっか。ＶＲモードだと２１時くらいになったら無条件に眠くなってしまうんだったっけ。
ふいに長船さんが言っていた事を思い出す。
『このＶＲシステムを使ったＭＬＯの世界では、強制的に一定の周期で深い眠りに誘導して脳や身体を休ませ保護するような仕組をとってるんじゃないか？って思う。』
強制スリープモードみたいなものだろうか？
こんな窮屈な状態で寝ちゃったのに、身体の方はすっきり快調ってのが却って不気味だけど。

大きくひとつ伸びをしてベッドから降りると、個別チャットの呼び

出し音が鳴った。

――――　フォン！

『おはよう。不良娘っ！』

『げっお母さんっ？』

『あんた一体どこで何してんの？』

しまった！昨日はうっかりしてて、何の連絡も入れないまま此処に泊ってしまってた。

『あっえーと…ごめんなさい。帰れなくて』

『まったくっ！ゲームだから別に外泊するなとは言わないけど、連絡ぐらいはちゃんと入れなさいよ。心配するでしょ？ヘルハウンドの餌食にでもなってるんじゃないかと思ったわよ？』

『あ、うん。ごめん。昨日は魔術師ギルドで知り合った子達と一緒にご飯食べて、部屋に遊びに行っておしゃべりしてたらそのまま眠くなっちゃって…』

『……』

母が何かにピクリと反応を見せる。

『…へぇ？ご飯を食べてそのまま部屋に遊びに行って一緒に寝たと？ほぅ。』

あの…お母様？　何やら誤解してやしませんか？

『そっかぁ！ミーアにもようやく春が来たのねっ！やだっもうっ早速お赤飯炊かなくっちゃ』

『ちがっ！お母さん落ち着いてっ！そんなんじゃないからっ　大体泊めてもらったの女の子のとこだし。』

『あら、そうなの？』

『そうだよ。リディアって言うあたしと同じ年の女の子。』

『心配しなくて大丈夫よ。お母さん、そういうの気にしないから。』

……？？？？　意味がわからない

『そういうのって？』

『愛があれば性別なんて気にしないわ』

ちょっ！　おかあさーーーんっ！！！　あぁもう…我が母ながら理解不能です。

頭を抱えていたら、リディアもベッドからのっそりと起きて来た。

「あれ？ミーア　おはよ　…なんでここに？」

「あ、うん。昨日おしゃべりしてたらそのまま寝ちゃってたみたい。狭いのにベッド占領しちゃったね。ごめん。身体痛くしてない？」

「うん、大丈夫。ありがと。…あ！昨日約束した事、ホントにいいの？」

…そうだった。

昨日「ルームシェアしよう」って言って来たリディアに、あたしは宿屋ではなくマイホームを拠点にプレイしている事を告げた。

そして、「明日の魔術の授業が終わったら、我が家においでよ。宿屋は引き払ってうちを拠点にすればいいじゃない。」と約束したのだった。

大喜びするリディアの姿を見て、昨夜はあたしもすごく嬉しかったんだけど…。

うぅ。一夜明けた今朝は、うちの母にリディアを逢わせるのがとてつもなく恐ろしいです。

27．夕焼け色の男

『雄鶏と火口箱亭』で支払いを済ませたあたし達は、街中の屋台で腹ごしらえを済ませてから魔術師ギルドに向かう事にする。
まだ朝の7時を過ぎたばかりだというのに既に街は人でごった返していて、あちこちの屋台で朝食を買い求めるお客さんの列が出来ていた。

あたしとリディアはチェックアウトの時に宿屋のおじさんに教えてもらったこの界隈では評判だという屋台の列へと並ぶ事にする。
手際良くお客さんを捌いていく愛想のいいおばちゃんの手から中華料理のパオに似たパンに角煮のようなお肉と野菜をたっぷり挟んだサンドイッチと柑橘系のジュースを買うと、通路脇の大きな木の根元のベンチに陣取った。
夏の朝の日差しを遮る木陰とひんやり冷えた石のベンチが心地良い。
のんびりと食べながら目の前の通りを眺めていると、屋台で買った食べ物の袋をぶら下げ勤め先に向かうらしき人の波がゆったりと通り過ぎていく。
屋台で買った熱々のパオは、口いっぱいに頬張ると甘辛いタレがジューシーなお肉と柔らかいパンに絡みあってまさに絶品だった。

「あれ？そう言えば、角煮があるって事はこの世界には醤油があるって事？」

リディアにそう言われるまで気がつかなかったけど、確かにこの手のファンタジー系ＲＰＧの世界観としては料理に醤油が使われているのは珍しい。これはＮＰＣの屋台だからだろうか？生産系の事は良くわからないけれど、プレイヤーの生産品にも醤油を使ったアイテムとかあるのかな？

「ホントだ。珍しいよね？国産ＭＭＯだからなのかな？確かうちの母が醸造スキルを取っていた筈だから後でちょっと聞いてみよう」

そんな会話をしつつモゴモゴと４個目のパオ（朝から食べ過ぎ！）の最後の一口を放り込むと、リディアは手早く膝の上のパンくずを払って立ち上がった。

「さて！それでは本日も気合を入れてジェナイ先生の特訓を受けるとしますかー！」

◇◆◇

魔術師ギルドに着くなり、リディアはスタスタと中庭へと歩いて行ってしまった。

え？受付とかはしなくていいのかな？

そう思っていたらリディアは中庭へと降りる階段の手前でピタリと足を止めて、何やら緑色の案内板のような物の前で前屈みになっている。

昨日来た時には気が付かなかったけど、どうやらこれでその日受けたい授業の内容を登録するようになっているらしい。

案内板のウィンドウを開いてあたしも光魔法と時空魔法の初級講座の受講登録を済ませると、リディアと並んで中庭へと降りて行った。

見渡した限り、広い中庭にはまだ誰の姿も無かった。

キョロキョロしながら奥へと進んで行くと、植え込みの陰でジェナイ先生が何やら背の高い男の人と話し込んでいるのが見える。
こげ茶色のローブに腰に巻いた飾り紐。おそらくジェナイ先生と同じく魔術師ギルドの関係者なのだろう。
あたし達が近づいて行くと気が付いたジェナイ先生がふと黙り込み、背の高い男の人もゆっくりとこっちを振り向いた。

「おはよう。申し訳無いが本日の授業は俺が面倒を見てやる事が出来なくなった。
代わりにこのロドニィが指導してくれるから、しっかり励むように。」

ジェナイ先生がそう言って顎をしゃくると、（いちいち態度が鼻につく人だ）

「ロドニィ・アーチボルト。一級魔導師です。本日はお2人の指導を任されました。よろしくお願いします。」

柔らかそうな夕焼け色の髪と瞳をしたその人が満面の笑顔で挨拶をして来る。

「えっ？今日はあたし達2人だけなんですか？」

昨日はもっとたくさんの人がいた。一緒に夕飯を取ったセシルや汐音、月猫以外にもまだ5～6人はいた筈だ。

「そうですね。でも普段なら2人でも多いぐらいなんですよ。この魔術師ギルドに魔術の指導を受けに来られる方々は冒険者の方たちばかりです。そして、冒険者の方たちがこの世界に現れるのは何か周期のような物があるようですね。たまたまここ一ヶ月ほどはたく

さんの冒険者が訪れていますが、基本的には魔術を学びに来る者というのはほとんどいないのですよ。」

ロドニィ先生がそう言うと、ジェナイ先生も頷く。

「まぁそういう事だ。冒険者たちが訪れた時、こうやって魔術の指導を行ってはいるが、当然の事ながら俺達は皆、本来別の仕事を持っている。今まで先送りにしていたんだが、そろそろそうも言ってられなくなって来た。
俺がいなくてもロドニィがきちんと指導してくれる筈だから安心してくれ。」

そう言ってポンとロドニィ先生の肩を叩いたかと思うと、ジェナイ先生は小さく呪文を唱え、足元から現れた魔方陣に包み込まれて消えて行った。

ふーん。本来のお仕事か。先生って普段どんな事やってるんだろう？やっぱ一級魔導師っていうくらいだから、魔術を使ったお仕事なんだろうな。
って言われても、魔術を使ってどんな仕事が出来るのかさっぱり想像出来ないけど。

「魔術を使った仕事に興味がありますか？」

まるであたしが考えてた事を見透かしていたかのように、垂れ目がちな夕焼け色の瞳で覗き込みながらロドニィ先生が訊ねて来る。
優しい笑顔なんだけど、なーんかこの人…独特のヤバい雰囲気があるんだよね。

「魔導師は遠く離れた者と魔術によって会話を交わす事が出来、ま

た転移によって様々な場所へと姿を現す事が可能です。姿を隠したまま宮殿の奥深くなどに入り込む事なども容易いので諜報活動や、暗殺などを受け持つ事が多いですね。」

暗殺…ですか？　わー確かにロドニィ先生ってニッコリ笑いながら人殺してそうでなんか怖いよ。

「とは言うものの、今回のジェナイ先生のお仕事はそういった内容とは縁遠い物のようですが。…気になりますか？」

ふふっと笑うロドニィ先生の邪気の無い笑顔がまた逆に恐ろしいです。

植え込みでのヒソヒソ話の内容は気になるような気もするけれど、あまりあたし達には関係無い事のような気がする。と言うか、関わったら碌でもない事になりそうな予感がひしひしとするんですが。

胡散臭いほど爽やかに「では無駄話はこれくらいにして始めましょうか」とロドニィ先生は微笑んだ。

27．夕焼け色の男（後書き）

リアル時間ではＡＭ４時前なので、３Ｄモードプレイヤーでこの時期（既に第３次クローズドβ開始から３日が経過している）に魔術ギルドで初級講習を受けているようなライトユーザーはほとんど寝てしまっていてログインしてないのです。

28．光の魔法

「お2人共、本日は光属性魔法からでしたね。
光属性魔法が三大属性魔法と大きく違う点は、攻撃面だけではなく回復や防御面を司っているところです。
もちろん、三大属性魔法にもシールドの魔法は存在していますが、それらのシールドで防ぐ事が可能なのは相反する属性攻撃のみです。
例えば、炎の矢を受けたとしたら氷の盾で防御可能と言った感じですね。
しかし、光属性でシールドを展開した場合、全属性の魔法・物理攻撃に対して防御が可能です。
特に闇の属性に対して強い耐性を誇っていると言われています。モンスターには闇の属性を持つものが多いので、光属性のシールドを使いこなす事は非常に重要な戦略の一つとなって来るでしょう。」

さらに光属性での攻撃もアンデットや闇属性を持つモンスターに非常に有効なのだと言う。
…この辺はＲＰＧにはありがちな設定なので、あたしは軽く聞き流していた。

「さて、次に光属性による回復魔法についてですが、これについては人によって回復量が大きく変わって来ると言われています。魔力の強さやスキルの習熟度によってある程度はカバー出来るのですが、人体の構造をいかに理解し、回復する様子を明確にイメージ出来るかが大きく関わって来るのです。」

…え？スキルレベルを上げるだけじゃダメなの？

「冒険者の場合、回復が必要となるケースはその戦闘で受けた外傷

という事になるでしょう。
刃物やモンスターの牙などによって切り裂かれた裂傷や打撲、炎や雷によって受けた火傷、氷による凍傷、毒による汚染などがほとんどです。
これらの外からダメージによる傷は見た目にも解りやすく、その回復していく様を想像しやすい為、スキルの習熟度を上げていく事でおおよそカバーする事が可能です。」

どういう事？この世界では戦闘による負傷以外でも回復魔法を使う事があるって事なんだろうか？

「しかし、物事には例外があります。我々人間の身体には血液が流れていますね。
リディアくん、人間の身体にはどのくらいの血液が流れているか知っていますか？」

いきなり保健体育の授業のような話題を振られて、リディアが目を白黒させている。

「へっ！？えっ？　えーっと、人体の７０％が水分だって聞いた事があるから…うーん？
３０％くらい…ですか？」

にっこりとロドニィ先生が微笑みながら言う。

「なるほど。ちなみに僕の体重は７０ｋｇ程度なんですが、その内の３０％となると約２０リットルが血液と言う事になりますね。…残念ながら、血液の量はそんなに多くありません。
実際には、人間の体内には体重の約８％の血液が流れていると言われています。

僕は大柄な方ですので大体5．6リットルと言う事になりますが、あなた方の場合ですと、4リットルあるかないかと言ったところでしょう。」

…何コレ？

妙に医学知識が現代的すぎる。キログラムとかパーセントとかリットルなんかの単位もそうだし、世界観にそぐわないこの違和感は一体何なんだろう？

「人間は血液量の1／3を失うと非常に危険な状態になり、2／3を失うとほぼ完全に死に至るだろうと言われています。回復魔法により傷口を塞ぐ事が出来たとしても、失われた血液が戻って来る事は決してありません。戦闘により負傷し、流血を招いた場合、速やかに止血をし傷口を塞ぐ事を第一に考えて下さい。」

さすがに輸血は行われていないって事なんだろうか？

そう考えていると、またもやあたしが考えていた事を見透かしたかのようにニッコリと微笑んでロドニィ先生は続けた。

「先ほども言いましたように回復魔法の真価は人体の構造をいかに理解し、回復する様子を明確にイメージ出来るかに関わって来ます。この地で回復魔法の役割を大きく成長させたのは、はるか昔の冒険者の方々だったと伝えられています。

その頃、失われた血液を他者から補うといった事も実験的に行われたようですが、適合する血液の型の判別や、感染症などのリスクの方がはるかに高いという事がわかった為、現在ではほとんど行われておりません。

回復魔法は、目に見えるものはイメージしやすいですが、形の無いものや目に見えないものを相手にするのは苦手な魔法なのですよ。」

「…冒険者が回復魔法を変えた？」

それまで黙って聞いていたリディアがぽつりと呟く。
どういう事なんだろう？プレイヤー達が干渉して仮想現実の世界に影響を与えたと言う事？
そんな事ありうるんだろうか？…このＭＬＯはそれだけリアルなシステムだって事なの？

「おっと。ついつい自分の専門分野だからと言って喋り過ぎてしまったようですね。
あなた方のような『若き冒険者』達に余計な事を教えたとなると、ジェナイ先生に叱られてしまいます。今僕から聞いた事は秘密にしておいて下さいね。」

ロドニィ先生はそう言うと、飛び切りの笑顔でウィンクなんぞして見せた。

◇
◆
◇

「さて、お話してばかりというのもつまらないでしょうから、そろそろ実践に移りましょうか。」

言うが早いか、ロドニィ先生は両手を合わせ親指と４本の指で菱形を作った。
手の間に眩い光の球が浮かび上がったかと思うと、そこからすごい勢いで光で出来た針を次々と飛ばして来る。

「うわっちょっ！　先生いきなり何するんですかっ！」

ピシッ！ピシッ！ピシッ！

咄嗟の事に容赦無く襲い掛って来た光の針を避け切れず頬が切り裂かれた。

「いたっ！」

鋭い痛みに思わず頬に手をやると、じんわりと血が滲んでいる。

「ほら、どうしました？ぼんやりしている場合じゃありませんよ？もう先ほど言った事を忘れてしまいましたか？人間にとって血液を失うという事は大変危険な事なんですよ？

今のはただのホーリーニードルですから、その程度の掠り傷じゃ命がどうこうなる事はありませんが、例えばこれが毒物のついた刃物で切り裂かれた傷だったらどうしますか？戦闘では波状攻撃による追加ダメージが付き物です。

あなた方は冒険者なのでしょう？速やかに戦況を把握し、殲滅を優先させ後程ゆっくり回復に当たるか、前衛に戦闘を任せ後衛が回復役として徹底するか臨機応変に考えなくてなりません。」

そう言いながらもロドニィ先生はあたしに向けて矢継ぎ早に光の針を放って来る。

あっと言う間にあちこちが切り刻まれ、気が付けばあたしは血だらけになってしまっていた。

そんな事言ったって…敵を殲滅って…え？コレってロドニィ先生を攻撃して倒せって事なの？

どうしよう？こんな時どうしたらいい？

頭が真っ白になってパニックに陥っていってしまう。

その時、眩い光に全身が包まれてカーッと血流が熱く漲るような感覚が広がった。
スーッと痛みが引いて傷口が塞がっていくのがわかる。
ハッとして振り返ると、リディアがあたしに向けて手を翳し、続けて素早く新しい呪文を唱えているのが見えた。
詠唱が完了すると同時に、あたしの目の前に輝く光の盾が現れる。

「リディア！　…うん。わかった。行くよっ」

あたしはリディアに向かって大きく頷くと、地面を蹴ってロドニィ先生の頭上に舞い上がり、その脳天へと思い切り踵落しを叩き込んでやった。

28. 光の魔法（後書き）

ミーアの格闘技炸裂。

29．あるオタクの形

「いや、確かに僕は『速やかに状況を把握し、殲滅するなり何なりしなさい。』とは言いましたよ？
けど、ミーアくん。いくら何でもコレは無いんじゃないかな？
今は何の授業をしていたか解っていますよね？…反撃するならせめて光魔法攻撃を使ってもらいたかったですね。」

…えぇ。お怒りもごもっともです。ホントすみません。
あたしの踵落としが綺麗に決まった後、ロドニィ先生はしばらく意識を失って倒れてしまっていた。
今こうやってお説教をしながらも、先生はまだ痛そうに頭を押さえてしゃがみ込んだままだ。

「あのっ　すみません。咄嗟に足が出てしまって…魔法を使うっていう発想が完全に頭から飛んでしまっていました。」

謝っても、どうやら許してもらえそうな雰囲気じゃない。
笑顔の仮面をかなぐり捨てたロドニィ先生が仏頂面のまま言い放った。

「記録によると、あなたの前世は全属性魔法を極めた優秀な魔導師だったようですね。ですが、今のあなたはとてもじゃないが魔導師に向いている人間とは思えません。まるで野蛮人だ。いっその事、肉弾戦を極めて魔術の道はすっぱりと諦めたらいかがですか？」

「…なっ！」

何もそこまで言わなくたっていいじゃない！何なの？やっぱ魔導師ってこんな性格の悪い連中ばっかな訳？
思わずカッとなって言い返そうとすると、先にリディアが口を開く。

「ロドニィ先生…それはちょっと言い過ぎだと思います。ミーアは確かに転生者かも知れませんが、まだ魔術を学び始めてからたったの1日しか経っていないんですよ？
咄嗟に身を護る必要のあったあの状況下で、まだ慣れない魔法に頼るよりも身体に馴染んだ戦闘方法を選ぶのは自然な流れだと思います。
それにあの場合、魔法を打つのは後方から冷静に状況を見る事が出来た私だけでも十分だったんじゃないでしょうか？」

芝草の上にしゃがみ込んだまま、ロドニィ先生はしばらくじっとリディアの言葉を考えているようだった。
押し黙ってしまった3人の間を緩やかな風が吹き抜けている。
真夏の太陽の光が燦々と降り注いでいるにも関わらず、魔術師ギルドの中庭はひんやりと涼しかった。
これも結界のせいなんだろうか？…などとぼんやり考える。

「…そうですね。僕も少し言い過ぎました。申し訳ありません。
確かに先程のリディアくんの咄嗟の判断は素晴らしかった。まだまだ魔力量や呪文の鍛錬は足りないところがありますが、このまま研鑽を続ければ、将来有能な光魔術師となる可能性を十分に秘めていると思います。」

ロドニィ先生はそう言うと、またニッコリと微笑んであたしの方へと向き直った。

「けれど、先程の訓練ではミーアくんは結局1度も光属性魔法を使

う機会がありませんでしたね。
せっかくの光属性魔法の鍛錬なのにこれは由々しき事です。
ちょうど怪我をしている事ですし、僕のこの頭を治療してもらう事にしましょうか。
誰かさんが思いっ切り蹴りを叩きこんでくれたおかげで、頭蓋骨が陥没したんじゃないかと思いましたよ。」

うあぁぁ　やっぱり根に持ってますね。笑顔が突き刺さるようですよ。先生。
えぇもちろん謹んで治療させていただきますとも。ハイ！

◇
◆
◇

その日は結局、丸1日光属性魔法の使い方だけを徹底的に叩きこまれる羽目になってしまった。
ちゃんと時空魔法のカリキュラムも申し込んで置いた筈なんだけど、どうやらロドニィ先生は綺麗さっぱり無視する事にしてくれたらしい。
…お陰様で光属性魔法に関してだけは、かなり上位の魔法まで使いこなせるようにはなったんだけどね。

夕日が落ちて辺りが暗くなってくると、中庭のあちこちにぽうっと照明が灯り始める。
少し青味を帯びた白くて柔らかいその光は幻想的でとても美しい。
ロドニィ先生が得意気に「これも光属性の魔力を篭めた魔晶石を利用した魔術の一つなのですよ。」などと教えてくれた。

いや、あたしとしては何故そこでロドニィ先生が得意気になる必要があるんだかイマイチよくわからないんですけどね。

魔術の灯りでぼんやりと照らされた中庭に、サクサクと芝草を踏んで魔導師のローブをまとった男の人が下りて来た。

「おい！時空魔法はどうしたっ！ロドニィお前また、光属性魔法ばっか教えただろ！
いくら専門だからっていい加減にしろよ！　ったく、一級魔導師にもなって初級講座の代理講師の一つも出来ないのかお前は。ほんと勘弁してくれ。」

暗くて顔はよくわからなかったけど、その怒鳴り声は紛れも無くジェナイ先生だ。
どうやら「お仕事」から戻って様子を見に来てくれたらしい。

「あ、ジェナイ導師。お帰りなさい。」

にっこり微笑んで応えるロドニィ先生に、ジェナイ先生は頭を抱えてしまっている。
どうやら彼の口ぶりからすると、ロドニィ先生のアレは常習犯って事？
…まさかの光属性魔法オタクだったのか！！　なんと傍迷惑なオタクだ。

ジェナイ先生の姿を見て、リディアも嬉しそうに駆け寄って行く。

「ジェナイ先生！お疲れ様です。お仕事もういいんですか？」

…嬉しそう？　あれっ？　リディア？？　あれっ？

「あぁ　ありがとう。仕事はまだ片付いたって訳じゃないんだが。あ…いや、でも待てよ？」

リディアの顔を見て一体何を思ったのか、先生は何やらブツブツと呟いている。
ロドニィ先生が不審そうに「ジェナイ導師？」と声を掛けてもどうやら先生の耳には届いていないようだ。
ぼんやりと浮かぶ薄明かりの中では先生の表情はよく見えない。
そのまま思案へと沈みこんでしまったジェナイ先生を前に、どうしていいか解らずリディアとあたしはただ顔を見合わせた。

…しばらくすると、ジェナイ先生は勢いよくパンッ！と大きくひとつ手を打ってこう言った。

「よしっ！決めたっ！　お前ら2人、明日は戦闘用装備で出て来い。時空魔法については実戦で学んでもらう事にしよう。
ロドニィなんぞに任せて置くよりは、俺の仕事に連れて行った方がまだよっぽど安心ってもんだ。」

えっ！？　って事は明日はジェナイ先生のお仕事現場に潜入って事？
あたし達みたいな初心者を連れて行くって言うんだから、それほど危険な仕事では無いんだろうけど、どこで一体何をやるつもりなん

だろうか？

「そんなぁ。ジェナイ導師ー　つれない事言わないで下さいよぅ。僕はほんのちょっとばっかし熱心に光属性魔法の素晴らしさをこの子達に指導しただけじゃないですか。十分なお時間さえ頂ければ時空魔法だってきっちりと指導して見せますよ？これでも僕も一級魔導師の端くれです。僕も連れて行って下さいよぅ」

「いや、いい。　お前来たら鬱陶しい。」

情けない声で抗議するロドニィ先生をジェナイ先生は容赦なくバッサリ切って捨てたのだった。

30．ガールズトーク

魔術師ギルドを後にしたあたし達はコベントリーの我が家に帰るべく、パルノの城門に向かってぶらぶらと歩いていた。

「あ！あそこの屋台の揚げドーナツおいしそう！ちょっと買って来る」

「ちょっ！待ってリディア」

駆け出した背中に伸ばした手は虚しく空を切ってしまった。

さっきからリディアはずっとこの調子なのだ。通り沿いの屋台の甘い香りに見事に次々と引っ掛っている。

どうにも彼女は誘惑に弱いタチらしい。

得意満面な顔で揚げドーナツの袋を手に戻って来たリディアにあたしは思わず溜息を吐いてしまった。

「ん？ごめんごめん。ミーアも食べたかった？ほらっ！ちゃんと半分あげるからね。」

そう言いながら嬉しそうに熱々の揚げドーナツを差し出して来る。

「うん？あたしはさっきもらったベビーカステラがまだあるからいい…って、違っ！

そうじゃなくってっ！　はぁ…ねぇ、リディア？

いくら何でも食べ過ぎなんじゃない？これから家に帰ったら夕飯もあるんだし、程々にしとかないと後で泣きを見るよ？」

「えー大丈夫だよ。ゲームだしいくら食べても太らないもん。ＶＲは別腹よっ！」

出た―！ＶＲは別腹て…。

全く。何、新しい日本語開発しちゃってるんですか。リディアさん。

でもゲーム内だと本当に食べ過ぎて気持ち悪くなったりしないものなのかな？

さすがにわざわざ試してみようって気にはなれないけど、実際の所どうなのかちょっと気になる。

そんなあたしの心配をよそにリディアはもごもごとドーナツを頬張りながら楽しげに聞いて来た。

「ねぇねぇ？ジェナイ先生ってさー。なんかいい感じだと思わない？」

「…えっ！？」

そう言えばさっき中庭にジェナイ先生が帰って来た時、リディアが妙に嬉しそうだったのを思い出す。

ひょっとしてリディアってジェナイ先生の事が好きなの…？

「でも、ジェナイ先生ってなんか目付き悪いし性格きつくない？別にイケメンって訳でもないし、おじさんじゃん」

リディアには申し訳ないんだけど、あたし的にはどうもジェナイ先生には転生者って事で敵対視されてるような気がして、あまりいい印象がないんだよね。

「えー？そこがいいんじゃない」

他の人の視点からだとそういうもんなんだろうか？…やっぱりあたしにはよくわからないな。

「それでさ。ロドニィ先生はさ。ちょっとS入ってるけど、なんかジェナイ先生の前では大型犬っぽかったよね？」

最後に情けない声でジェナイ先生に抗議をしていたロドニィ先生の姿を思い出す。

大型犬ねぇ。…まぁ確かに。

「出来る上司攻×ヘタレ部下受かな？　いやでも、年下ワンコ攻×年上誘い受ってのも萌えるよねっ！？　ねぇ！ミーアはどう思うっ！？」

って、そっちか！そっちだったのかーーー！

……リディアさんはまさかの腐がつく方の女子でした。

◇◆◇

パルノの城門から住宅街入口経由で転送を繰り返しコベントリーの我が家へと帰り着くと、みんなが温かく出迎えてくれた。

母に、長船さんに、エドワードさん、エミリーさん。
母はともかくとして他の人達とはまだ出会って間も無いのに、今ではみんながあたしの家族なんだなって心から思える。
温かい気持ちに包まれながらゆったりと夕食のテーブルにつくと、あたし達はお互いにこの2日間にあった事を報告しあった。

「そう。なるほど…そんな事があったのね。リディアちゃんの気持ちはよーくわかったわ。
でもね。私的にはちょいSヘタレ部下攻×出来るツンデレ上司受ってのも捨てがたいと思うの。
けど、出来る上司にはやっぱりスーツと眼鏡属性が欲しいところなのよねぇ。」

って！　おかあさーーーーーん!!
よりによってこの2日間の報告でまず食いつく所がそこっ!?
あぁ、もうホント何なのこの人。

「あ!でも、ジェナイ先生初日は眼鏡掛けてましたよ!?…さすがにスーツはこの世界じゃ無理かも知れませんが」

…へぇ　ジェナイ先生眼鏡掛けてたのかぁ、知らなかった。
　って、そうじゃなくって!

「ちょっともう!2人共いい加減にしてよっ　長船さんもドン引きしてるじゃない。」

ワインをちびちびと飲みながら、長船さんが「いやぁ…ははははは」と乾いた笑いで受け流している。

「冗談はさておき、リディアちゃん。」
「はいっ」
急に真顔になった母のまっすぐな視線を受け、リディアもぴんと姿勢を正す。
「今日からあなたもうちの家族だからね。いつでもここに帰っていらっしゃい。」
そう母がにっこり笑うと、リディアはくしゃっと顔を歪めて微笑んだ。
「はいっ！ありがとうございます」
長船さんも、エドワードさんも、エミリーさんもにこにこと優しい笑顔でその様子を見つめている。
…ほら。やっぱりみんな温かい。
しばらくして、ワイングラスの縁を指でくるくるとなぞりつつ長船さんが呟いた。
「そう言えば明日、リディアちゃんとミーアちゃんは例のジェナイとかいう魔導師の仕事に付き合って時空魔法の課外授業を受けるんだろう？」
「はい。その予定です」

「それも妙なんだよな。旧ＭＬＯでは魔術の初級講座なんてチュートリアルみたいなもんだったから当然サクッと終わったし、途中で何らかのクエストが発生したなんて話聞いた事もない。ＮＰＣにリアルさを持たせる為なのかも知れないが、講義中にロドニィとかいう魔導師が語った内容といい、何か引っ掛る。…俺達が知っていた旧ＭＬＯの世界の認識とこの世界は何かが微妙に食い違ってるような気がするんだ。まるでプレイヤー達がこの世界に影響を与えて、変わってしまったかのような…。おそらくそれもリアルさを出す為の演出の一環なんだろうとは思うが。」

「そうね。…私も少し気になっている事が無いでも無いわ。クエストをクリアしていけばその辺はっきりしてくるのかしらね？」

エドワードさんが運んで来たウィスキーのショットグラスを片手に、母も何やら考え込んでいるようだった。

30．ガールズトーク（後書き）

長船はワイン党。
ユキノはウィスキー＆日本酒党です。

31．ピューターのスキットル

エドワードさんがキッチンの前で何やら困った顔でウロウロしていたので一体何事かと思って覗いてみると、リディアが戸棚を開けてつまみ食いしているところに出食わしてしまった。

「ちょっ！リディアっ！何やってんのよ」

なんと彼女は夕飯（＋デザート＋あたしが食べきれなかった分）をきっちり食べた後、更にまだ何か食べる物は無いかと漁っていたのだ。

あたしは問答無用で彼女の襟首をとっ捕まえてずるずるリビングまで引き摺ると、ソファへと座らせた。

「もうっ！ホントいい加減にしないと、食べ過ぎで気分悪くなっちゃうよ？」

「だーいじょうぶだってば。さすがにリアルでこんなに食べる訳にはいかないけど、ＶＲなら思う存分食べたって平気平気。」

そう言って全然取り合ってくれない。

…うーん。放って置けばいいんだろうけど、さすがに目の前であれだけ食べられると見ているこっちの方がなんか胸焼けして来ちゃうんだってば。

そんな不毛な会話をしていたら、長船さんがやって来て「お？２人ともここにいたか。」とソファにどっかり腰掛ける。
…あれ？長船さんあたし達になんか用があったのかな？

「ほら、明日２人は戦闘装備で出て来いって言われたんだろ？　せっかくだから整備しておいてやろうかと思ってな。　ちょっと装備出してみな？」

そっか。長船さんって武器を作るだけじゃなくて、整備とかも出来るんだ？
…って職人さんなんだから当たり前なのかな？
でも、以前にやってた他のネトゲでは装備の生産はあったけど、メンテナンスとかはＮＰＣでしか出来なかったから何だか新鮮な感じだ。

せっかくなので、あたし達はお言葉に甘えて装備を取り出して見てもらう事にした。
と言っても、あたしの装備は母の自家製だからあんまり調整すべきところも無いみたいだったけどね。

「へぇ。リディアちゃんは弓使いだったのか。けど、リディアちゃんは小柄だからこういうロングボウを使うよりももう少し短い弓の方が扱いやすいんじゃないか？」

「そうなんですけど、ショートボウだとちょっと射程が短くて。後

方から魔法援護しながら戦闘するにはこっちの方がいいかなって思ったんですよ。」

リディアがソファから身を乗り出しながらちょっと不満気に言うと、長船さんも頷いている。

「そうだな。確かに射程距離だけならロングボウの方が上だ。けど、ロングボウが扱えるのなら、コンポジットボウに切り替えてみてもいいかも知れない。」

「コンポジットボウって？」

あたしには弓の事はよくわからないので、聞いてみる。

「複数の素材を張り合わせて作った複合弓の事だよ。単弓に比べると射程と破壊力がかなり上がる。」

「わたしもそう思って探してみたんですけど、バザーとか商館を見て回っても、かなり筋力がいりそうな堅い弓ばっかりで、わたしが扱えそうなちょうどいいのがなかなか無くって…。」

へぇ…やっぱ弓使うのって結構筋力いるんだ？

確かにリディアは華奢だし、こないだパルノのバザーで見かけたような強弓なんかは引けそうに無いかも。

「そうだな。筋力は結構ネックになってくるだろうな。魔術メインで戦闘を考える以上、ＩＮＴが必須だしＳＴＲまではなかなか上げ

られないだろう。
もっと魔力が上がってくれれば、筋力じゃなく魔力を使う弓も無い事も無いんだけどな。」

「魔力で引く弓かぁ」

リディアはまだ見ぬ武器を想像してうっとりしている。

「ま、とりあえずコンポジットボウについては俺が何とかして置いてやるから、お前らは明日に備えてもうそろそろ寝たらどうだ?」

長船さんの言葉にハッとしてリビングに置かれた柱時計を見ると、もうすぐ21時になろうという時間帯だった。

「えっ?でも、もうすぐ21時じゃないですか。長船さんも眠くなっちゃうんじゃ?」

「確かに眠くはなるだろうな。けど、言ったろ?プレイする状況によって多少変動があるって。
さすがに戦闘中や生産中に突然眠りこけたりする訳にもいかないから、ある程度連続でスキルを使っている状況の時はすぐには眠ってしまったりはしない仕様になってるっぽいんだよ。」

「へぇ…それはいい事を聞いたわ。」

エミリ―さんと一緒にふらりと何処かに行っていた母がいつの間にか戻って来て、長船さんの背後に立ってニヤリと怪しい笑いを浮か

べている。

「ねぇ、おさぴょん？　ちょーっと私も作っても貰いたい物があるんだけど、お願い出来るかなぁ？」

お願いって言ってる割には、どう考えても有無を言わせない雰囲気なんですけど。

するとまるで母が戻って来るタイミングを見計らっていたかのように、エドワードさんがさり気無い動作で入って来て、みんなにコーヒーを淹れてくれた。

…いや、おそらくエドワードさんの事だから多分完璧に母の行動パターンを読んでサーブしてるような気がする。

忠犬エドワード恐るべし。

「…一応聞くだけ聞いてみるが、一体何を作らせる気なんだ？」

コーヒーを受け取った長船さんが眉根に皺を寄せながら訊ねると、母は嬉しそうに答えた。

「さーっすがおさぴょん！頼りになるぅ。うん。ちょっとね。ピューターの小振りなスキットルをほんの１万個程作ってもらえないかなーっと。」

「ぶっはっ！　ちょっ！コーヒー吹いたじゃねぇか。言うに事欠いて１万個って…お前、俺の事寝かせる気ねぇだろ？」

「やだもう。おさぴょんてばっ！　寝かせないとか、子供の前で何

て事言うの！」

「何て事言うの！って言いたいのは俺の方だ。…ったく。で？ピューターのスキットルなんか、そんな大量にどうするんだよ？」

リディアとあたしは会話の内容が見えずに顔を見合わせて首を傾げる。

「ピューター？スキットル？それって何？」

「あぁ。ピューターって言うのは錫（スズ）をメインとした合金の一種だ。スキットルって言うのは、酒なんかを入れる小さい水筒みたいなボトルの事。ほら、西部劇とか昔の映画なんかで見た事ないか？飲んだくれがズボンのポケットから小さいボトルを出してちびちび飲んでるようなシーン。別に酒飲みじゃなくても、登山とかアウトドアやる人間は身体を暖める為に持ってたりするけど、一般人にはあんま馴染みが無いかも知れないな。」

「…へぇ」

言われてみれば、確かに見た事あるんだけど（って言うか、うちの母がたまに寝酒用に使ってるんですが…）そんな物一体何に使うんだろう？

「いやぁ、実はね。昨日今日とエドワードと一緒にこの世界から離

れていた間の農地の状況とか、収穫した農作物だとか採取した薬草の在庫状況なんかを見て回ってたのよね。
…そしたら、倉庫がちょっととんでもない事になっててさー。」

「…あぁ。何となく言わんとする事がわかった。」

そう長船さんも頷いているんだけど、やっぱりあたしとリディアだけさっぱり意味がわからない。

「どういう事？」

あたしが質問すると、長船さんが答えてくれた。

「プレイヤーが雇っているバトラーやメイドには、調達系の一次生産スキルを手伝わせる事が出来るんだよ。例えば、農作業の栽培・収穫とか、薬草の採取、鉱物の採掘や、木工用の伐採とかな。
って言っても、所詮はＮＰＣだからプレイヤーキャラが採取出来る量に比べるとかなり少ないが。」

「そうそう。でも、このバトラーやメイドの調達スキルはルーチンワークとして設定して置く事が出来るのよ。プレイヤーがログインしていない間でも、ターゲットとなる薬草や鉱物が採れるシーズンになったら勝手に出向いて調達して来るっていう…」

あぁ…ようやく母と長船さんが言わんとしていた事がわかった。
母がこのＭＬＯの世界を引退したのは、この世界の暦で１８０年近く前の事だ。
その後も延々とエドワードさんとエミリーさんが調達作業をしていたのだとしたら…

…そりゃ倉庫もとんでもない事になるよね。…うん。

「俺もカムバックで戻って来て最初にログインした時に倉庫を開けて見てかなりビビったからな。」

「えっ!?って事は、長船さんにもバトラーかメイドがいるんですか?」

リディアが興味津々で訊ねる。
正直もうかなり眠気が来てるんだけど、長船さんのバトラーかメイドさんがいるのなら、あたしもちょっと見てみたい。

「あぁいるよ。呼ぼうか?」
「是非是非っ!!」

リディアとあたしがコクコクと頷くと、長船さんはインベントリから取り出した小さなベルをちりりんと鳴らした。

32．与作は木を切る

――ちりりん！

ベルの音と共に現れたのは、スラリと背が高い褐色の肌のエキゾチックなイケメンさんだった。
ゆるくウェーブの掛った黒髪は耳の上で切り揃えられている。
全身きっちりとした隙の無い着こなしで固めたエドワードさんとは対照的に、少し胸元の開いた白いコットンシャツに黒いパンツ、足元はいかついワークブーツという随分ラフなスタイルだ。

へぇ？一口にバトラーって言っても、人によって随分違うんだなぁ。

イケメンバトラーさんはつかつかと長船さんの元に歩み寄ると、軽く会釈をした。

「お久しぶりです。親方。」

ぶはっ！と母が思わず吹いた。

「ちょっ！おさぴょん。あんたバトラーに自分の事、『親方』なんて呼ばせてんの？」

「いいだろ別に。ご主人様とか呼ばれんの、柄じゃねーんだよ。」

あぁなるほど。照れくさいのはあるかも知れない。
可愛いメイドさんにならともかくとして、長船さんみたいな男の人がこんなイケメンさんに「ご主人様！」って傅かれていたとしたら、確かにちょっと微妙な気分になるかも？

「親方、こちらの方々は？」

そうイケメンさんに訊ねられて、長船さんが軽くあたし達のことを紹介する。

「なるほど。はじめまして。いつも親方がお世話になっております。わたくしはこの方のバトラーを務めております『与作』と申します。皆様、よろしくお願い致します。」

そう言って、深々と頭を下げたイケメンさんの姿を見て、母とあたしとリディアは一斉に「…うわぁぁ」と、長船さんを凝視した。

長船さん…よりよって『与作』って…いくら何でもネーミングセンス酷すぎますよ？

「いや…まぁ。お前らが言いたい事は大体わかる。俺も自分で名付けといて何なんだが、やっちまったなーって思ったからな。普段はヨザックって呼んでやってくれ。」

長船さんが頭をポリポリと掻きながらそう言うと、ヨザックさんは

「わたくしは別に親方が付けて下さった名前なら何でも構わないんですがね。」と特に気にしていないようだ。

「名前で大体想像付くと思うけど、こいつは木工用の伐採と鉱物の採掘要員なんだよ。俺の場合、ユキノみたいに持ち家がある訳じゃなかったし、世話係みたいなのも特に必要なかったから、ひたすら木こりと炭鉱夫をやってもらってたって訳。」

「あれ？そう言えば、ヨザックさんってエドワードさんみたいにあまり歳を経ってないんですね？」

時のキャンディは貴重品だ！と言っていた長船さんの事だ。うちの母みたいにわざわざＮＰＣに与えるような真似はしないような気がする。

「あぁ、こいつを雇ったのって、旧ＭＬＯのサービスが終了するちょっと前だったからな。
でも今よりはもうちょいガキだったぞ？多分エドワード氏と同じで、サービス終了と共に歳を経らなくなったんじゃないか？」

長船さんがそう言うとイケメンさんは軽く頷いていた。

「で、ユキノ。さっきの話の続きなんだが、その大量のピューターのスキットルって言うのは、やっぱりポーション用か？」

「正解！エミリーが頑張って採取してくれてたおかげで溜まりに溜

まってた薬草を使って、ポーションを作って出荷しようかなって思って。
今、市場に出回ってるポーションのボトルってガラス瓶が主流だけど、ガラスだとどうしても割れやすいでしょ？プレイヤーがインベントリに入れてる間はいいけれど、一旦取り出しちゃうと運搬も大変だし、戦闘中に取り出して使う場合も結構危険だしね。
ピューターなら軽いし、扱いやすくていいんじゃないかと思って。
おさぴょんの鋳造スキル上げにもなるし、一石二鳥でしょ？ねっ？」

「なるほど。確かにポーションボトルにはちょうどいいかもな。ピューターは酸やアルカリにも強いしな。でも、あんまりキツイ薬品は入れるなよ？」

「うん。基本的に回復系のポーションは中性～弱酸性だから大丈夫だと思う。ボトル自体に『停止』の魔法を掛けるつもりだから、成分の変質とか劣化も無いと思うし。ホントはアルミとかもちょっと考えてみたんだけど、多分技術的に無理でしょ？」

「だな。大量にアルミを精製しようと思ったら電気分解が必須だしな。ＭＬＯの世界じゃちょっと無理だろうな。…けど、ピューターか。錫（スズ）なら山程在庫あるけど、アンチモンかビスマスが無いとなぁ。いくらゲームとは言え、飲む物を入れるのが解ってて、鉛は使いたくないしな。」

鉛って確か毒性があるんだったっけ？

「ビスマスならとりあえず少しは在庫あるんだけど、特に急いでないからのんびり素材が集まり次第作ってくれたらいいわ。」

2人の会話を聞いていたヨザックさんが、「親方、ビスマスならわたくしが掘って来ますよ」と言って微笑んだ。

うっ、エキゾチックイケメンの笑顔の破壊力はすごいわ。なんかキラキラしてるよ！

…けど、本名は与作なんだよね。残念過ぎる。

「あぁ頼む。」

そう言って長船さんは何やらメニューを開いて操作しているようだった。

さっき話してたバトラーのルーチンワークの設定を変更したのかな？

長船さんが設定を終了して向き直ると、ヨザックさんは一つ大きく頷き、「では行って参ります。」と言ってスッと部屋を出て行った。

その後ろ姿を見ながら、残念そうにリディアが呟く。

「あぁワイルド系イケメン執事が行ってしまった！うぅ、もうちょっと喋ってる所とか見たかったなぁ。

…特にエドワードさんとの絡みが…　ワイルドイケメン執事攻×ワンコ執事受…」

リディアが小声でボソボソと放った最後の一言をしっかり聞きとっ

てしまったらしきエドワードさんが、一瞬ビクリと震えて尻尾をお尻の方にくるりと丸め込みながら言った。

「お戯れはそのくらいになさって、皆様そろそろお休みになられませんと。」

そうだった。言われてみればもう眠気はＭＡＸを超えてたんだった。油断したら、このままソファの上で眠っちゃいそう。

あたし達は長船さんに整備をお任せしてそれぞれの部屋に戻ると、明日の為にふかふかのベッドでたっぷりと眠る事にしたのだった。

32. 与作は木を切る（後書き）

ヨザックのルックスのモデルは某紅茶王子。

ピューターには不純物を吸収する作用があるので、これで作った器でビールとかウィスキーを飲むとまろやかになってウマーなのです。

33．すれ違う時間

「おはよう！」

うーん。やっぱりウォールバンガー家のふかふかのベッドは最高！ぐっすり眠って幸せな気分でダイニングへと下りていくと、朝食のテーブルには母と赤い髪を持つ大柄な剣士、ヴォイドさんの姿があった。

うわっ！ヴォイドさん！？　なんか、逢うのは随分久々のような気がする。

「…おはよーさん。」

低く掠れたヴォイドさんの声は何だかまだかなり眠そうだ。

何気なくメニューからチラッとリアル時間を確認したあたしは思わず声をあげてしまった。

――――　２０２１／０４／１８（ｔｕｅ）　５：３４ＡＭ　――――

「えっ！？まだ朝の５時半じゃん！　ヴォイドさんって早起きなんだね。」

「いや、普段はもっとギリギリまで寝てるんやけどな。昨日の晩はＭＬＯやりながら寝落ちしたし、なんか妙な時間に目ぇ覚めたわ。お陰で顔に変な痕が付いてるわ、体中あちこち痛てぇわでまじ最悪。」

やれやれ。といった感じで両手の平を肩の上にあげて首を振ると、大きく溜息なんか付いている。

…顔に変な痕って…ヴォイドさんの中の人、一体どんな格好して寝てたんだろ？

あたしが席に着くと同時にエミリーさんが目の前に朝食を並べてくれる。

もちろんヴォイドさんの前にも同じメニューが並んでいたんだけれど、どうやら手は付けていないみたいだ。やっぱり３Ｄモード接続だと食事を楽しむって感じじゃないよね。

しばらく黙々と熱々のレーズン入りイングリッシュマフィンを食べていたら、残り少なくなった母のカップに気付いたエドワードさんが背後からスッと近づいて、みんなのカップにもコーヒーを注ぎ足してくれた。

何を思ったか、突然ヴォイドさんがガタンと椅子を引いて立ち上がると、カップを持つと腰に手を当てて「ぐびっぐびっぐびっ」と大きな音を立てて一気にコーヒーを飲み干し、大げさに「プハーッ」と息を吐き出した。

…うーん。やっぱこれもエモーションなんだろうな。

けど、たかがコーヒーを飲むだけにコレはちょっと微妙過ぎるんじゃ？

でも当人は何やら満足気に頷いて、どっかりとまた座り直している。

「ところで、長船のヤツはまだ寝てんの？」

「あぁ、おさぴょんなら昨日来た可愛い子の為についつい頑張っちゃったみたいだから、まだもうちょい起きて来れないかもね。」

ニヤニヤと思い出し笑いをしながら母が答えると、

「…可愛い子？何それ羨ましい」

ヴォイドさんはぶすっと吐き捨てた。

んー、長船さんは年相応って雰囲気があるけど、ヴォイドさんってなんか女の人に縁が無さそうな気がするんだよね。…何となくだけど。

あ、そう言えば長船さんに童貞だとか暴露されてたっけ。

そんな話をしていた所に、ちょうどリディアが伸びをしながらのんびりと下りて来た。

「おっはよーん！」

ヴォイドさんとリディアの目がバチッと合う。

寝起きのリディアは何だかちょっと気怠げで、妙な艶っぽさがあった。

リディアのアバターは髪色以外は中の人のデータをスキャニングした姿そのものらしいんだけど、悔しい事にあたしと同じ歳にはとても見えない。
華奢なのに出るところはちゃーんと出てて、17~8歳くらいの活発そうな美人さんって感じだ。

「はじめまして。わたしリディアです。昨日からこちらにお世話になってます。」

艶やかな笑顔でそう挨拶をすると、何やら考え込むように彼の顔を見つめている。

しばらくポカンと彼女の事を眺めていたヴォイドさんが、ようやく彼女の視線に気付くと、ボッと顔を赤らめてしどろもどろで返事をした。

「あ…あぁ。俺はヴォイドだ。よろしく」

おっ？なんかちょっといい雰囲気？
ひょっとしてこれってフラグが立ったんじゃない？

…と思ったのも束の間

「あ！誰かと思ったら、ヴォイドさんってアレかー！人ん家で寝落ちしたあげく、三日三晩眠りこけてた人だよねっ！
うっわーすっごーい。有り得ない！　なんか眠り姫みたーい！
あ、ひょっとすると長船さんにキスの一つでもしてもらったら目覚

めたりしてたかもよっ！
職人気質親父攻×眠り姫剣士受とか新しくない？　どうっ？萌えない！？」

…リディア……　あんたって子は…

「……」

ヴォイドさんすっかり真っ白になって固まっちゃったじゃないのよ。
母は面白がっておなかを抱えて笑ってるし。
あぁぁぁぁ　もうっ誰かこの空気なんとかして下さーい！

「…あれ？」

あれ？じゃないよ全く。…どうやらリディアには空気を読むってスキルが皆無らしい。
せっかく可愛い顔してるのに、なんかいろいろ残念過ぎる。

「まっいっか。朝ご飯たーべよっと。」

…いや、もう何も言うまい。

微妙な空気が流れる中、今日も元気にむしゃむしゃと朝食を食べるリディアの姿に、あたしは思わず「友達選び間違ったかな？」と考

えてしまった。

◇◆◇

長船さんが起きて来たのは、あたし達がちょうど朝食を食べ終わった頃だった。

「おはよう。おっ？ヴォイドも起きて来てたのか。」

「…あ…あぁ、おはようさん」

「お前、今日平日だし仕事だろ？こんな時間にログインしてて平気なのか？」

長船さんの質問に、ヴォイドさんもようやくダメージから立ち直ってくれたようだ。

「せっかく早めに目ぇ覚めた事やし、今後の事打ち合わせしとこうと思って。
みんなはＶＲ接続やけど、俺は３Ｄ接続やろ？どうしても今後プレイ時間にズレが生じて来ると思うねん。今月給料が出たらＶＲバイザーを買って来ようと思ってるけど、まだ給料日まではちょっと日があるし、どっちにしろこのクローズドβ期間中は無理や。」

…って言うか、ヴォイドさん関西弁ばりばりだな。

寝起きだから地が出てんのかな？

「そうね。でもフェルデンティアまで旅をしようと思ったら結構な長旅になるだろうから、出来るだけ早めに出発した方がいいとも思うわ。けど、そうなると一緒に旅をするメンバーが同時にログイン出来ている時間帯はいいとしても、誰かが欠けている時間帯に目的地に向けて移動してしまったら、そのメンバーが旅の途中でどこかに置き去りになっちゃうわね。…かといって、みんなが揃ってない時はじっと１ヶ所に留まっているっていうのも効率が悪いし…。」

眠っている間中プレイしていられるあたし達と違って、３Ｄモードでプレイしているヴォイドさんが同じ行程に付き合おうと思ったらかなり厳しいんだろうなっていうのは容易に想像出来る。
ヴォイドさんは社会人プレイヤーらしいから、やっぱり夜はきちんと睡眠を取らない訳にいかないだろうし。

「俺がログイン出来るのは早くても２０時くらいからやな。そこからプレイ出来るんが大体２時くらいってとこかな？　疲れてたら早く眠くなるやろし、その辺は何とも言えんなぁ。」

うーん。ＶＲモードでプレイしているメンバーは、さすがにそこまで早い時間帯にはログイン出来ないだろう。いくらなんでも２０時って言うのは、大人がベッドに入る時間としては早すぎる。

するとまた母が言った。

「そうそう、『眠くなる』で思いだしたわ。このゲームの場合、ゲーム内時間軸の問題もあるわよね。ＶＲモードユーザーは夜になれば強制的に眠ってしまう。その間３Ｄモードユーザーは待ちぼうけ状態になってしまうんじゃない？」

「あぁそっか。そういう問題もあるんだね。」

「いや、その辺は別に気にせんくていい。俺はそういう時間にリアルで適当に飯食ったり、風呂入ったりしてるし。釣りスキルも取ってるから、夜釣りやったりも出来るしな。それに、今までプレイしてみた感じやと、夜にだけ起きるクエストも結構用意されてるみたいやで？３Ｄユーザー専用のお楽しみってとこやろな。」

へぇ、そんなのもあるんだ？
夜にだけ起きるクエストかー。ちょっと興味があるな。
そういうクエお目当てにたまには３Ｄモードで接続してみるのもアリかも知れない。

「となると、やっぱり問題は移動距離のロスって事になるのかぁ。
…いっその事ヴォイドさんの事は綺麗さっぱり忘れる事にして、わたし達だけで行っちゃいましょうか？」

「「……」」

…リディア…少しはヴォイドさんの事も考えてあげてー！！

３３．すれ違う時間（後書き）

ちなみに、２０２１／０４／１８（ｔｕｅ）　５：３４ＡＭ現在のゲーム内時間は１７４０／０７／２７　の朝の７時台です。
第３次クローズドβテストの期間は、２０２１／４／１５～４／２２（ＭＬＯ内暦１７４０／６／２８～９／１９）
ヴォイドくんのお給料日は２５日。

３４．口は災いの元

すると、しばらく黙って考え込んでいた長船さんがゆっくりと口を開いた。

「…なぁ？　今この状況だと俺はネットが見れないから簡易ヘルプ機能でしか確認出来ないんだが、新生ＭＬＯになってから実装された新機能の中に『自動追尾機能』っていうのがあるらしいな。悪いけどヴォイド、ちょっとＷＩＫＩかなんかでざっくり内容をチェックしてくれるか？」

「わかった。ちょいまち」

ヴォイドさんはそう言うと、情報サイトをチェックする為にＡＦＫ状態になったようだった。
このゲームの場合、３Ｄモードで接続してるユーザーが一定時間何の操作もしないでいるとゲーム内のキャラクターがこっくりこっくりと居眠りするんだよね。
ソファに座ったまま船を漕ぎ始めたヴォイドさんの姿を見て母が呟く。

「…『自動追尾』機能かぁ。そういや、昔やったネトゲにも自動追尾機能があるゲームがいくつかあったわ。経験値吸い取りの為に金魚の糞みたいに後ろをチョロチョロくっついて回ってるって感じ。でも、このゲームの場合だとディティールがリアルなだけに、中の人が入ってない状態のプレイヤーキャラがどこに行っても背後にぴったりくっついて来る…なんて想像したらかなり怖いわね。」

何それゾンビみたい。
あたしは思わず、魂が抜けて虚ろな目をしたヴォイドさんが背後からヒタヒタとどこまでも付いてくる姿を想像してしまってゾッとした。

「いや、さすがにソレは無いんじゃねーか？いくらなんでもそれは不気味過ぎるだろ。夜道だと通報されかねないレベルだぞ。ほら、例えばプレイヤーがログインしてない時はＡＩが入ってＮＰＣに近い状態になるとかさ。」

「うーん。でもそんな事してたら、かなりサーバーに負荷掛っちゃうんじゃないの？ただでさえこれだけリアルな世界を構築する為にかなりの負担が掛ってそうなのに、インしてない人間の分のデータまでずっと動かしてたら大変だと思う。」

言われてみれば、あたしも過去にプレイしたネトゲの中に、ログアウトしないで延々と活動し続けるＢＯＴが蔓延ったせいでサーバーが重くなり過ぎてまともにプレイ出来なくなったタイトルがあったなぁ。

そんな事を考えていたら、こっくりこっくり居眠りしていたヴォイドさんがいきなりムクっと起き上がった。

「お、あったあった。『自動追尾』な。読むぞ。」

ヴォイドさんの言葉にみんなが耳を傾ける。

「…えーっと。『あらかじめパーティーを組んで置くと、ログアウ

ト後にパーティメンバーが移動してしまった場合でも、再度ログインした際にはパーティーリーダーの近くに自動的に転送されます。』だとさ。『自動追尾』って言っても、別に追尾対象キャラのケツを追いかけまわす機能って訳では無いみたいやな。」

「なーんだ。自動追尾っていうより、どっちかっていうと自動召喚って感じ？」

「パーティーリーダーのところにしか転送されないのか。パーティー内でバラバラに行動してる時はちょっと注意が必要だな。」

「でも、ＶＲモードでプレイしてたらリーダーだって夜になったら寝ちゃうよね？
そういう時ってどうなるのかなぁ？気持ちよく寝てたら、夜中に突然ぬぼっと枕元にヴォイドさんが現れたりなんかしたらかなり嫌過ぎるんだけど。まじキモいよ！？」

「「……」」

…リディア…相変わらず酷い。
そりゃあたしもそれはちょっと怖いって思うけど、何も本人の前で言わなくってもいいのに。
さすがに見兼ねたあたしは、個別チャットで注意することにした。

『リディア！いい加減にしなよ。ちょっとは周りの人の気持ちも考えて。自分が似たような事言われたらいい気持ちはしないでしょ？』

『えっ？あっ？ミーア？ごめん、あたしなんかマズイ事言った？』

…どうやら本当にわかっていないらしい。
見た目だけは大人っぽいのに、実は彼女の中身は想像以上にお子ちゃまなのかも知れない。
これは今度じっくり話し合ってみないとダメかぁ。

「…あー…えーと。その辺については詳しく書かれてないな。まぁ実際にやってみりゃわかるんちゃうか？」

キモいと言われてしまった当の本人は何とかスルーする事にしてくれたようだ。
うぅヴォイドさんどんまい！　ごめんね。心の中でこっそりあたしから謝っておくよ。

その後の話し合いの結果、フェルデンティアへ向けて出発するのはリアル時間で明日の夜、全員が揃ったらにしようという事になった。
おそらくあたし達がログインするのは２３時くらいになるだろう。
その時にはゲーム内の暦だと…えーっと、８月５日って事になるのかな？

「うぃ！んじゃま、そういう事で。したら俺はそろそろ落ちるわ。またなー」

ヴォイドさんはそう言うと、大きく手を振りながらキラキラと頭から消えていく。

しばらくぼんやりとヴォイドさんが消えた後を眺めていたら、それまで部屋の片隅におとなしく控えていたエドワードさんがコホンと一つ咳払いをして声を掛けて来た。

「お嬢様方、そろそろお出掛けになるお時間なのでは？」

はっ！そうだった。今日はジェナイ先生の課外授業の日だ。授業って言っても、先生のお仕事現場に付いて行くんだから、さすがに遅刻したらまずいだろう。

慌てて立ち上がったあたし達を見て長船さんがゴソゴソとインベントリから装備を取り出すと、テーブルの上へと並べてくれる。

「ほら、調整しといたから。リディアちゃんのは新しい弓な。慣れるまでちょい癖があるかも知れんが、今までの弓より絶対リディアちゃんに馴染む筈だ。」

「「ありがとうございます！」」

受け取った装備を確かめながら、ゆっくりと身に付けてみる。昨日の晩は「ユキノの作った装備だったら、大して調整出来るところは無いだろうな」なんて言ってたけど、明らかに前より軽くなっている。メニューから確認するとステータス補正もアップしていた。

あたしの方ですらそんな調子だったので、リディアが受け取った装備の変化はなおさら劇的だったようだ。

「うわっ！何これスゴーイ！！」

受け取った装備を興奮のあまりブンブン振り回しちゃっている。

「店売りの皮鎧でもここまで変わるもんなんですね。それにこの弓っ！！うわーーーー！

まさに探してた理想の弓です。こういうのが欲しかったんです！

わたし、今まで長船さんの事ただの胡散臭いおっさんだとばかり思ってたけど、見直しましたっ！」

「…胡散臭いおっさんて、おい！」

母が長船さんの腰を突っつきながらくすくすと笑っている。

「良かったね！おっさん！見直してもらえて。」

「ってお前が言うなっ！」

長船さんはあたし達の方に向き直るとこう続けた。

「…リディアちゃん。ちょっと一言だけ言わせてもらおうかな？世の中にはいろんな奴がいる。

自分の存在だけが全てで、他人の事は自分にとって都合がいい一面だけを見たい人間だって少なくない。

けど、人間って言うのは自分勝手なもんで、自分が相手の存在を慮って理解する事も出来ていないくせに、他人にはちゃんと自分の事をわかって欲しい。認めてもらいたい。という欲求を持っちまう生き物なんだよな。

時々忘れそうになっちまうけれど、こうやってゲームの中で出会っているプレイヤー達だって、ただのプログラムでも無ければ漫画やアニメなんかの二次元のキャラクターなんかじゃない。あくまで自分自身と同じ血の通った人間だ。些細な事で傷つきもすれば、怒り

もする。
こんな事言っちまったら偏見だと言われるかも知れんが、ネトゲにどっぷり深くハマり込んで社会生活を放棄して引き籠ってるような奴らには、特に他人とのコミュニケーション能力が低い奴が多かったりするからな。
少しでも気に入らない、自分の利益にならないと判断すれば、相手の気持ちなんぞまるで無視で平気で心をえぐる様な行為をしてくるような輩も大勢いる。
だから、不用意な行動や言動には十分気を付けた方がいい。
俺らは大人だからある程度受け流してるけど、何を言われてその時どう感じたか…なんて、ホントのところは言われた当人にしかわからないからな。あまり無防備に思った事をぽんぽん言ってると、いつか自分を傷つける刃になって帰って来るぞ？」

リディアは長船さんの長い話を一応は黙って聞いていた。
…ホントにわかってんのかな？

「…ま、こんな事偉そうに言ってる俺も、今までさんざんネトゲにハマって道を踏み外してきてるんだから人の事言えた義理じゃないし、あんまり煩い事は言いたかないんだがな。胡散臭いおっさんの説教だと思って聞き流してくれればいい。」

そう言って笑いながら頭をポリポリと掻くと、

「よし。それじゃ、俺も今日はこの辺でそろそろ落ちる事にする。また明日な。

お前ら、妙な事に巻き込まれたりしないように気を付けて行って来いよ？」

…などと不吉な事を言い残して、長船さんもキラキラと消えていったのだった。

３４．口は災いの元（後書き）

長船さんの説教炸裂会でした。
ＭＬＯがカムバックユーザーキャンペーンで古いユーザーを呼び戻そうとしたのも、ネトゲプレイヤーの低年齢化によるモラル低下を、年齢層の高いベテランプレイヤーと混在させる事で改善したいという思惑があったのでは？と思ってたり。

35．サン・ラモンの森

あたし達はエドワードさんにパルノの城門前まで送ってもらうと、急ぎ足で魔術師ギルドへと向かった。
案の定と言うか何と言うか…おいしそうな食べ物の屋台を見かける度に寄り道しようとするリディアの首根っこを捕まえてずるずる引き摺ってギルドに向かう羽目になっちゃったんだけどね。

魔術師ギルドに着くと、入口のすぐ脇にある初心者受付カウンターの横に刈上げ銀髪頭が腕組みして立っているのが見えた。
いつもの目立つこげ茶色の魔導師のローブではなく、落ち着いた色合いのシャツにダークグレーのパンツという地味なスタイルだけど、痩せぎすの顔に不機嫌そうに眇められた灰色の瞳はまさしくジェナイ先生である。

「…遅い」
「すみません。いつも通りの時間に来たつもりだったんですけど。」

ブスリとした声で呟かれた先生の一言に、思わずイラっと反論してしまう。
普段の授業の始まる時間には遅刻していない筈だ。前もって時間指定をされていた訳でもないので、これは言いがかりに近い。
あたしの言葉にフンっと鼻を鳴らすと、「まぁいい。行くぞ！」と、目的地も告げずにスタスタと大股で建物の外へ出て行ってしまう。
焦って小走りで後を追いかけたのに、ギルドから出てほんの数メートルも歩かないうちに先生がピタリと足を止めたお陰で、その背中に勢いよくぶつかりそうになってしまった。

もう！一体何なの？

「ここに目的地へ向かう転送の魔方陣を出す。魔方陣が浮かびあがったら速やかに乗れ。ボケーっと突っ立ってたら魔方陣が消えて置き去りにされる事になる。」

先生はそう言うと、素早く呪文を詠唱しはじめる。
あ、さっき移動したのはギルドの入口に魔方陣を出しちゃったら出入りする人達の邪魔になるからだったのかな？

そう考えている間に、あたし達の目の前に直径２ｍくらいの白緑色に輝きながらぐるぐる回る魔方陣が出現した。
ジェナイ先生は黙ってさっさと魔方陣の上に乗ると、頭の先からゆっくりと消えて行ってしまう。
それを見ていたリディアも後を追って魔方陣の上へと移動する。

「ごめん。先に行くね！」

そう言いながらリディアの姿がだんだんと消えて行くのと同時に、徐々に足元の魔方陣のサイズが小さくなって来ているのが解った。
…やばい！ボケっとしてたらホントに魔方陣が消えちゃう。
リディアの姿が完全に消えたのを見届けると、あたしも慌てて魔方陣の上に飛び乗った。

◇◆◇

魔方陣によって転送された先は、鬱蒼とした深い森の中だった。

「先生。ここ一体どこですか？」

リディアがそう訊くと、「お前たちはそんな事は知らなくていい。」とにべもないお答え。

あぁ、そうですか！

全く…一体何が気に入らないんだか知らないけど、この人いちいち言動にトゲがあるんだよね。

ムカついたので、先生をあてにするのは止めてメニューから位置情報をチェックしてみると『パルノイエ王国東部～サン・ラモンの森国境付近』となっていた。

と言われても、そこがどこだかサッパリわからないので、個別チャットで母に聞いてみることにする。

『お母さん、ちょっといい？』

『ミーア？どしたの？』

『今ね、先生にどこかの森に連れられて来たんだけど、詳しい話教えてくれなくって。

位置情報見たら「パルノイエ王国東部～サン・ラモンの森国境付近」ってなってるんだけど、これってどういうところ？』

『あぁ。また随分と辺鄙なところに連れて行かれたもんねぇ。そこは、ライヒェンベルク公国とパルノイエ王国の国境あたりよ。街道からも外れていて、普段は滅多に人も通らないような僻地だったと

思うんだけど。』

『ライヒェンベルク公国って、確か海があって観光業が盛んって言ってたとこ？』

『そうそう。と言っても、そこからじゃ海はまだまだ遠いけどね。ライヒェンベルクはパルノイエの東に位置している南北に長い国なのよ。その辺はパルノイエとの国境の中でも北西端って感じね。明日からの旅では同じライヒェンベルクでも、海側に面した南西部のフェルデンティアの国境付近まで転移で飛ぶ事になるわ』

『へぇ…』

そんな話をしていたら、またジェナイ先生にギロリと睨まれてしまった。

「おい。何をボケっと突っ立ってるんだ？　本当に時空魔法を学ぶ気があるのか？」

『うわ、お母さんごめん。もう切るね。』

『あぁ先生に注意されたのね。　まぁ精々がんばんなさい。私はそろそろ朝の支度しないといけないからログアウトするわよ。あんたも学校遅刻しないようにちゃんと適当なところで落ちなさいね。』

『うん。６：４５になったらログアウトするようにアラームセットしてあるから大丈夫。』

『そう。じゃあね』

慌てて会話を済ませると、ジェナイ先生の方に向き直る。

「すみません。さっきの魔方陣の転送魔法ってどうやってやるんだろう？ってちょっと考えてました。」

うっ、ちょっと苦しい言い訳だったかな？

でも先生はフムっと呟いて首を捻りながら、こんな話をしてくれた。

「あの魔法は時空魔法の中でもかなり難易度が高い。この世界に暮らす一般人で扱える者はほとんど存在しないと言っていいだろう。魔術師ギルドに所属する職業魔術師たちの中でも、一級魔導師と呼ばれる極一部の者たちだけが扱えるのみだ。

…だが、お前たちは『冒険者』だ。

『冒険者』というものは我々とは根本的に違った特殊な存在で、非常に高い魔力も持つ者も多い。お前たちもそうだ。おそらく基礎さえ理解すれば、瞬く間に扱えるようになるだろう。」

そう話すジェナイ先生の表情はどこか複雑そうで苦々しく歪められている。

…でもあれっ？

この世界に住むほとんどの人間がまず扱う事が出来ないという転送魔法を使う事が出来る一級魔導師のジェナイ先生って…ひょっとしてひょっとすると、凄い人って事？

もしかして、この領域に到達するまでには子供の頃から血の滲むような努力をして来た…とかなのかな？

だとしたらあたし達みたいなポッと出の冒険者たちが2～3日研修受けたくらいでホイホイそんな難しい魔法を使いこなしてしまうと

ころなんて見ちゃったら、確かにいたたまれない気分になるだろうなぁ。

そんな事を考えていたら、いきなりずっしりと重たいきんちゃく袋を手渡された。

「この袋にはそれぞれ魔晶石が入っている。1人1袋づつ持って置くように。」

36．手を汚さない地味なお仕事です

ジェナイ先生に手渡された袋の中には、ラムネ瓶のビー玉によく似た無色透明の珠がたくさん入っていた。
その中の1つを取り出し、手の平の上で転がしながら先生は言う。

「この珠が魔晶石と呼ばれている物だ。時空魔術を扱っていると、特定の箇所に継続的に魔法を存続させて置きたいケースが出て来る。例えば一番馴染みの深いものだと、食糧などの保存や輸送に使われる『遅滞』や『停止』の魔法などが有名だな。この場合だと、実際に食品を入れて置く容器や保存庫などに直接『遅滞』か『停止』の魔法を掛けてやればいい。」

昨夜の母と長船さんの会話を思い出す。
確かポーションボトルに使う為にピューターのスキットルに『停止』の魔法を掛けるとか言ってたっけ。

「しかし、魔法を掛けたい場所が広範囲に渡る場合、その領域全体に魔法を掛けるのは困難になって来る。
短時間なら瞬間的に術者が魔力を高めて広範囲をカバーする事も出来ない訳でもないが、いつまでも術者が同じ量の魔力を維持し続けた状態でその場に留まっているという訳にはいかないだろう。
そう言った場合に使われるのがこの『魔晶石』だ。
この珠の1粒1粒には純度の高い魔力が籠められていて、魔法を発動する為の触媒として使用する事が出来る。」

そう言いながら先生はしゃがみ込むと、地面にコトンとひとつ魔晶石を置いた。
…へぇ。魔晶石ねぇ。確かロドニィ先生が照明にも使われていると

か言ってたアレかぁ。

「具体的には、魔法を掛けたい範囲を取り囲むようにしてこの魔晶石を等間隔で設置する。
当然掛ける魔法の強さや、範囲の広さ、魔法を継続させたい期間の長さなどによって必要になる魔力量も変わって来るから、魔晶石の数も変わって来る。また術者の能力差によってもその数は増減する。これは実際に農地などでよく行われているケースだが、例えば、１０メートル四方の土地に時空魔法である『促進』を掛けるとしよう。この場合、同じ一級魔導師でも、時空魔法を専攻としている俺ならば、四隅に１粒づつ魔晶石を設置すれば３ヶ月ほど魔法を継続させる事が可能だ。
しかし、専攻が光属性魔法のロドニィが同じ期間だけ魔法を継続させようとすると、魔晶石をその２～３倍は設置する必要がある。
また逆に、光属性魔法である『範囲回復』などの魔法の場合だと、俺とロドニィで必要になる魔晶石の数は逆転する。これは術者の魔力の量と言うより、適性によるものだ。」

…うーん。よくわかんないけど、おそらくはジェナイ先生とロドニィ先生が取得しているそれぞれの属性魔法のスキルレベルの差って事になのかな？

「時空魔法は、時間と空間を司っている魔法だ。
具体的には、対象の時間を進める『促進』やその逆の『遅延』、『停止』、空間を切り裂く『風の刃』などの攻撃魔法、『空中浮遊』、『結界』、『転送』などがある。」

そう話しながらジェナイ先生は、先程地面の上に置いた魔晶石をいきなり足で踏み付けると地面にめり込ませ、靴の先で上から軽く土をかぶせた。

「今日お前達にここに来てもらったのは他でも無い。時空魔法の実践を兼ねて俺の仕事を手伝ってもらう為だ。俺は今日、この広い森の全域に『結界』を張る為にやって来た。
先程も言ったように『結界』は時空魔法だ。そして広い範囲を長期間カバーする為には大量の魔晶石が必要となる。お前達にはまず『促進』の一種である『クイック』を使って行動スピードを上げてもらい、『転送』の初期魔法『小ワープ』を繰り返し使用する事で、この森の境界線に5メートル間隔でこの魔晶石を1粒1粒埋めて回ってもらう。」

なっ…なんですとぉぉぉぉ!!　な、何て地味な作業なんだ。
でも、ジェナイ先生の性格からして本来なら冒険者であるあたし達に（一部とは言え）自分の仕事内容を明かしたりはしたくなかっただろう。
それをわざわざ見せて、手伝わせようとまでした理由がようやく解った気がする。
…そりゃそうだよね。こんな地味でかったるい仕事、一級魔導師たるジェナイ大先生様が1人でちんたらやってらんないわ。

そう思ってリディアの方をチラッと見てみると、彼女もあまりに予想外な地味な作業内容にショックを隠しきれない様子だった。
口をパクパク開けて何か言い返そうとしては、先生の顔色を見て押し留まっている。

「じゃあ始めるぞ。」

先生はそう言うと、手短に「クイック」と「小ワープ」の呪文を教えてくれた。

…最低限のレベルの基礎魔法さえ押さえれば、後は使いこんで行くうちにいろんな呪文は勝手に覚えて行くから問題ない。と、相変わらずの放任主義だ。

「よし、マップ上でお互いの位置情報を確認しながらここからそれぞれ反対方向に向かって飛んで行け。森をぐるっと1周回ってお互いに出会う事が出来たらそれで今日の授業は終了だ。」

…ひぃ！　この広い森を丸々1周ですかっ！？　しかも、3人で一緒に行動するもんだとばかり思っていたのに、まさか単独行動する羽目になろうとは。うぅっ、ジェナイ先生の鬼っ！悪魔っ！！

あたしとリディアは顔を見合わせて、しばらく途方に暮れてしまった。

「ほらっ！何してる。さっさとしないと夕方までに終わらないぞ？」

そう言うが早いか、足元に白緑色の魔方陣が浮かびあがる。

ジェナイ先生の転送魔法によって問答無用で飛ばされてしまい、気が付けばあたし1人森の外れにぽつんと佇んでいた。

しばらく呆気に取られていたけれど、こうなったらもうどうしよう

もない。
諦めてここから順番にコツコツと魔晶石を埋めてさっさと終わらせてしまおう。
そう考えてのろのろと重い腰を上げると、ずっしりと重いきんちゃく袋から魔晶石を1粒取り出す。
ったく、一体コレ何個入ってんのよ!?

『あ、言い忘れてたが、ここは辺境の森だ。当然それなりに魔物が出現する。
大した強さのものはいない筈だが、万が一遭遇してしまった場合は、各自の裁量で随時撃破するように。以上!　健闘を祈る。』

ジェナイ先生がそう一方的に捲し立てて遠話魔法を終了させたとの同時に、何やら背後から不穏な気配を感じて、あたしはハッと振り返った。
…どこからか何かに見られてる。

鬱蒼とした暗い森の奥の気配に耳をそばだてると、何かが枯葉の上をカサカサと小さく音を立てながらゆっくりと近づいて来るのが解る。

…ぐはっ!　あんの腐れ陰険魔導師っ　なーにが「健闘を祈る。」よ!

思わずあたしは脳内で口汚く先生の事を罵ると、低く腰を落として魔物を迎え撃つべく、息を殺して静かに身構えたのだった。

36．手を汚さない地味なお仕事です（後書き）

ジェナイ先生を相手にやさぐれるミーアでした。

37．指差し確認ヨォーシ！

あたしは息を殺し、じっと気配を探った。
まだ午前中だと言うのに鬱蒼とした森の中は暗くて視界が悪い。
目を凝らすと、灌木の陰に浮かびあがる赤い眼光が１，２，３…８つ！？
…ヘルハウンドの群れだろうか？

逸る気持ちを抑え一つ深呼吸をしてから、素早く正面に「光の盾」を展開して防御体制を整えると、じっくりと魔力を練り上げながら「ホーリーパニッシャー」の呪文を唱え始める。
眩い光の球が手の平の上で直径２０ｃｍくらいまでゆっくりと膨れ上がったところで、あたしは両手を添えありったけの気合を籠めて、レーザー砲のように勢いよく撃ち出した。

「はぁぁぁっ！！」

ドゴーーーーンッ！！！

あ、なんかちょっと今のこの感覚、某かめ○め波に似てたかも！？
時空魔法って「空中浮遊」とかあるらしいし、これ組み合わせたらひょっとして「舞空術」とか出来ちゃったりするんじゃない？
どうやら光属性魔法に関してはさすがにロドニィ先生がみっちり教えてくれただけあって、かなり強力な魔法まで使いこなせるようになっているみたいだ。
わはっ！あたしって実はかなり強くなってたりするんじゃ！？
…などと調子に乗って思わずくだらない事を考えている場合じゃな

かった。
慌ててさっき赤い眼光の群れが見えた辺りへと視線を戻す。
しまった。ついうっかり気合を入れ過ぎてしまった…かも？
そこに先程まであった筈の灌木の茂みが、今は綺麗サッパリ跡形もなく消え去っていた。

『ミーア・ウォールバンガーｊｒ！　一体何があった!?　大丈夫か？』

ジェナイ先生が慌てて遠話魔法を飛ばして来る。

『あ、えっと背後から魔物が急に…』

『襲い掛かられたのか!?　すごい音がしたぞ？　あんな強力な魔法を使用するなんてよほどの強敵かっ!?　大丈夫か!?　怪我はないか？　援護は必要か？』

勢いよく捲し立てる先生の声はひどく焦っていて、どうやら本気で心配してくれているらしいのが解った。
…あれっ？ちょっと意外かも。

『いえ、未遂に終わったので大丈夫です。』

『…そうか。なら良かった。一体何に襲われそうになったんだ?』

あ?そう言われてみれば、あたしってば何に襲われそうになってたんだっけ?
よく考えたら敵の姿すら見ていない。

『…え、えっとー』

『もしかして見たことの無い敵で名前がわからなかったのか?どんな姿をしていた?』

『あ、あのー…すみませんっ!ぶっちゃけ何も見てませんっ!　姿を確認する前に魔法で吹っ飛ばしちゃいました。』

『……はぁっ!?』

うわっ!　ジェナイ先生のおでこにビキビキ青筋が立ってるところがありありと目に浮かぶよー。

『前にも言ったが、お前は馬鹿か!?お前は馬鹿か!?お前は馬鹿か!?』

うっ、何も3回も言わなくたって…

『姿も確認せずに攻撃を仕掛けるなど愚の骨頂だっ！一体何を考えてるんだ!?』

『えっと…先手必勝！って』

『……はぁ。…それで?万が一敵じゃなかった場合は、どうするつもりだったんだ?』

『えっ!?』

そんな事、全く考えもしなかった。
ジェナイ先生にここには魔物が出るって言われた直後だったし、大抵のＭＭＯＲＰＧではこういう何も無いフィールド上で向こうからわざわざ近づいて来るような生物はアクティブモンスターだと相場が決まっている。

『もしかしたらお前の背後にいたのは魔物なんぞではなく、ちょっとした出来心のつもりでお前達に着いて来たロドニィが、驚かしてやろうとこっそりと隠れていただけだったとしたらどうする?』

ええええっ!?　無いっ！それは無いわー
…いや、でもあのロドニィ先生のことだ。ひょっとしたら有り得ないとも言い切れない…かも?
って言うか、ジェナイ先生っていつもロドニィ先生にそんな事されてるんだろうか?
あの大柄な魔導師先生がニコニコと笑いながら嬉しそうにジェナイ先生に見つからないように隠れているところを想像すると、ちょっ

とおかしかった。

『…まぁさすがにそれは冗談だが、この森には魔物だけでは無く、普通に暮らしている無害な獣達もたくさんいる。むしろ魔物よりもそちらの数の方が圧倒的に多いだろう。保護すべき貴重な生物もいるから、確認もせずに無闇やたらと攻撃を仕掛けるような真似はするなよ?』

『はい。すみませんでした』

どうやらこの世界では今までのネトゲの常識は通用しないらしい。ここは素直に反省して今後気を付ける事にしよう。

『あ、それから!ここでは炎属性魔法だけは絶対打たないように。…お前が打つと確実に山火事になる。』

…デスヨネー。

ジェナイ先生との遠話が切れた後、あたしはさっきホーリーパニッシャーで吹き飛ばしてしまった灌木の跡まで行って様子を確認してみる事にする。

地面の上には、びっしりと毛の生えた巨大な蟲の足とキラキラと光る糸のような物が落ちていた。

モンスターがいたであろう場所から森の奥に向かって、まるで蠢く黒いロープのように細く長くたくさんの蜘蛛達の群れがワラワラと列を成して逃げ去って行くのが見える。
どうやらあの８つの赤い光の正体は、ヘルハウンドの群れなんかでは無く、ジャイアントスパイダーだったようだ。

…確かにジェナイ先生の言うとおりだ。
犬と蜘蛛の区別すらつかないで攻撃してたなんて、いくらなんでも我ながら酷すぎると思う。
自分が十分な殲滅力を持っている事は理解していた筈なのに、この世界があまりにリアル過ぎるからか、恐怖心の方が先に立って過剰に反応してしまった。
あくまでこれはゲーム。これはゲーム。…ちょっと落ち着かなくちゃ。

そう思いながらキラキラ光る蜘蛛の糸を拾い上げると、インベントリに仕舞い込んだ。
この糸は確か裁縫の素材になった筈だ。きっと母なら使う事もあるだろう。
巨大な蟲の足の方も本当ならばＮＰＣのショップに売ればいいお小遣いになる筈だけど、こうグロテスクだとやっぱりあまり触りたくない。…これはゲームで、この足だってあくまでただのドロップアイテムに過ぎないって解ってはいるんだけどね。

あたしは敢えて毛だらけの蜘蛛の足は無視する事に決めて、再び魔晶石の設置作業へと戻った。

38．しりとりの「り」

その後の作業は実に淡々としたものだった。
ゴソゴソときんちゃく袋から取り出した魔晶石をポトンと落しては、地面にぐりぐりと踏み付けてめり込ませ、靴の先で軽く土を掛けたら「小ワープ」を使って次の地点へ「はい！移動～」で1セット。
…これをただひたすら延々と繰り返す訳ですよ。
やってる事があまりに単純なだけに、何だかだんだん頭がおかしくなって来そう。

ジェナイ先生が「辺境の森だからそれなりに出る」なんて言ってた魔物にしても、初っ端に遭遇したジャイアントスパイダー1匹っきりで、その後は何の音沙汰も無かった。
実は内心結構びびってたりしただけに、ちょっと拍子抜けだ。
おそらくだけど、あたし達は「クイック」が掛った状態でサクサク作業を進めているから、実質1箇所の地点に留まっている時間はほんの数秒程度だ。さすがにこれだと万が一周りに魔物がいたとしても、こちらに気付いて向かって来る頃には、既に次の地点に向けてワープして消え去った後…っていう事なんだろうと思う。
せめて周りの景色に変化でもあればいいんだけれど、どこまで行っても似たような木、木、木、木ばかりの薄暗い森の風景でつまらない事この上無い。

何だか心細くなって泣きたくなって来てしまった。
この世界にたった1人、ぽつんと置き去りにされてしまったかのような錯覚を覚えてしまう。

『リーディーアー！　そっちの調子どう?』

『どうって言われても…「いーっ」ってなってるよ』
『だよねぇ?単調過ぎてつまんないよー!　うぅ、ちょっと寂しい』
『…うーん?　そだねぇ。それじゃ、しりとりでもしながらやる?』
『え!?』
『じゃあわたしから。しりとりの「り」!』

相変わらずリディアはマイペースだ。有無を言わさず勝手にしりとりを始めてしまった。

『え!?「り」?りんご』

…と言っても心細かったのは事実なので、あたしもあっさり応じちゃうんだけどね。

『ご…傲慢社長』
『「う」、うさぎ』
『議員秘書』
『「よ」、吉野家』
『ヤクザ』
『ザ!?…えーと、ざる蕎麦』
『薔薇』
『ラジオ』
『オヤジ受』
『……ケーキ』
『鬼畜攻』
『……はぁ。やっぱムリ。しりとりやめたい。いえ、是非やめさせて下さい。』

もうっ、リディアの腐女子ボギャブラリーが火を噴くのを聞いてたら、余計にテンションが下がっちゃったじゃないのーー！ううっ！リディアの馬鹿ー！

…まったく、何やってんだろね？あたし達。って感じだ。

『ねぇねぇ、ところでさ。わたし達にこんな事やらせて置いて、当のジェナイ先生は一体何をやってるんだろうね？』

言われてみれば確かにそうだ。

マップ上で点滅しているジェナイ先生を示すマーカーをチェックしてみると、広い森の中をあちこちランダムに移動しているようだった。

魔晶石を埋めて一瞬で移動しているあたし達とは違って、ワープしてもしばらくはその場に留まって少し歩きまわっているみたい。…一体何をしてるんだろう？

何をやっているのか直接聞いてみたい気もするけど、ジェナイ先生の性格からして聞いたところで何も答えてくれるとは思えない。

『大体、こんな辺境の森に一体何があるって言うんだろうね？　滅多に人が来そうな感じしないし、結界を張らなきゃいけない程、危険な何かがいるって訳でも無さそうだよねぇ？』

確かにリディアの言う通り「結界」を使って何か危険な物を封じ込

めようとしている雰囲気じゃない。
そもそも、あたし達みたいなペーペーを連れて来るくらいだ。先生は大してこの仕事に危機感や重要性を感じていないんだろうと思う。

『何だろうね？さっきからあちこちワープして回ってるみたいだし。…何かを探してるのかな？』

『…うーん、ダメ。想像しようにも情報が少なすぎて、全っ然まったく何のイメージも浮かんで来ないー！　ねぇ？それよりさ。そろそろお腹すかない？　お昼どうするのかな？』

もうっ、リディアってば！　らしくって、あたしはちょっと笑ってしまった。

『でもそうだね。考えてみたらもうお昼過ぎてるわ。ちょっと聞いてみようか？』

あたしがそう言い終わるか終わらないうちに、リディアがパーティーチャットで先生に呼びかける。（ちなみに今までの会話は１：１の個別チャットだ。さすがに先生にオヤジ受とか聞かせられないよ！）

『ジェナイ先生ー！お腹すきましたー！そろそろお昼にしませんかー？』

『あ…あぁ？すまん。もうそんな時間か。だったら一旦2人で合流して一緒に食事を取るように。それだけ「小ワープ」を繰り返して使ったのだから、そろそろ2人とも「メモリー」の魔法を扱えるようになっているな？』

先生に言われて、慌てて魔術書を取り出して確認してみる。えっと、メモリー…メモリー…あった！

『はい。魔術書にありました。』

『よし。リディア・ハーゲンダッツはどうだ？』

『わたしもおっけーです！』

って、ちょっとマテ！　リディアのファミリーネームってハーゲンダッツって言うのか！
フレンドリストを確認してみると、確かに「リディア・ハーゲンダッツ」となっている。
『雄鶏と火口箱亭』でフレ登録をした時には他の子達も一緒だったから、慌ただしくてそこまでちゃんと見てなかった。
…まったくもう、リディアってばほんとに色気より食い気なんだなぁ。

『その「メモリー」と言う魔法は、現在地の座標を魔術書に記録する為の物だ。最初は1ヶ所しか記録する事は出来ないが、習熟すれば徐々に記録する事が出来る座標の数も増えて行く。よし、それじ

ゃ早速2人共今いる現在地を「メモリー」を使って記録してみろ。』

言われるままに呪文を詠唱してみる。転送の魔法と同じ白緑色の魔方陣が足元に現れたかと思うと、くるりと1回転して消えて行った。

『「メモリー」が成功すれば、魔術書にその場所の名前が記されている筈だ。
記録自体が失敗する事や、結界などの為にそもそも記録する事が出来ないようになっている場所などもあるから、「メモリー」を唱えた後はきちんと魔術書を開いて魔法の成否を確認するように。』

魔術書を確認してみると、ちゃんと『パルノイエ王国東部～サン・ラモンの森国境付近～北西部』と記されている。

『あー！ホントだ。失敗したみたい。もう1回やってみます。』

どうやらリディアの方はうまく行かなかったみたいだ。

『「メモリー」は結構難易度が高い魔法だからな。冒険者と言えど失敗する事もあるから気を付けた方がいい。』

『うしっ！今度は記録出来ましたー！』

『よし。それでは「中ワープ」を使って、ミーアがリディアの方に合流するように。休憩時間は今から30分だ。』

『はいっ』

言われるままに、あたしはマップ上に点滅しているリディアのマーカー付近をイメージすると「中ワープ」を唱えて飛ぶ。
さんざん「小ワープ」をやったせいか、大して意識する事も無く簡単に使いこなす事が出来るみたいだ。

「お！ミーア来た来たー♪　ささっご飯たーべよ？」

転送が完了した途端、あたしはリディアにガバッと腕を取られ引き寄せられたのだった。

38．しりとりの「り」（後書き）

明日は戦闘回になります。
難産でしたので是非読んでやって下さいまし…ｏｒｚ

39．森の中に潜むモノ

あたし達はインベントリからお弁当を取り出すと、倒れた木をベンチ代りに腰かけた。
ちなみに本日のメニューはカツサンドにポテトサラダ、デザートはりんご。（当然うさぎ型）
分厚くってジューシーなヒレ肉とサクッサクの衣に、甘辛い特製ソースが絡んですごく美味しい。
パンの方も適度な甘さと酸味があってもちもちしてる。

「はわーー、このカツサンドめちゃくちゃ美味しいね。あのハニーブロンドのワンコ執事さん作？」

リディアが見事な食べっぷりで次々と平らげながら聞いてくる。…用心の為に多めに持って来て置いてホント良かったよ。

「ううん。今日のこれはうちの母が作ったって言ってた。」

「へぇ。あ、そういやユキノさんって確か調理スキルとってるって言ってたね。」

確かにうちの母はＭＬＯ内でも調理スキルを取っていてそれもかなり高レベルの部類らしいんだけど、実は元々リアルでも結構料理が得意な人だったりするのだ。
このカツサンドも母のお得意メニューのひとつで、昔からお弁当の日にはよく持たせてくれていた。
隣にはリディアがいて懐かしい思い出の味をこうやって食べている

と、こんな薄暗い森の中ではあるものの、何だかまるでピクニックにでも来たような気分になる。
しばらくはのんびりと2人してもぐもぐとカツサンドを堪能する事に集中していた。

「そう言えばさ。ジェナイ先生ってお昼どうしてるのかな？どうせなら一緒に食べたらいいのにね。」

リディアの言葉にマップ上を確認してみると、先生を示すマーカーは相変わらず森の中をあちこち転々としている。

「ずっと動き回ってるみたい。ひょっとしてご飯食べないつもりなのかも？」

変なの。今までプレイしたネトゲで、ＮＰＣがちゃんとお昼ご飯を食べてるかどうか？なんて心配をした事は1度も無かった。
改めてこのＭＬＯは、今までやったどのゲームとも違うんだなって思う。

そんな事を考えていると、デザートのうさぎりんごをシャクシャクと齧っていたリディアがピタリと動きを止めた。

「…ねぇ？　何か聞こえない？」
「えっ！？」

言われて慌てて周囲の様子を探ってみる。

気配を押し殺してはいるものの、荒い息遣いに時折聞こえてくる落ち葉を踏むサクサクという音、低い獣の唸り声　…どうやらいつの間にか囲まれてしまっていたらしい。

「うわっ、囲まれたみたい。」

あたし達はスッと背中合わせに立ち上がると、それぞれ呪文を唱え「光の盾」を展開した。
リディアの手には、既に長船さん作のコンポジットボウがしっかりと握られている。

森の中からゆっくりと姿を現したのは、ワーグ（狼）の群れだった。
2、4、6、8…全部で１４頭　うわっ！コレはさすがにちょっとヤバいかも知れない。
血に飢えた獣の群れは、低い唸り声を上げながらじりじりと距離を詰めて来る。

群れの少し後方にいた首の周りの毛が白い一際大きな1頭が、「アォーーーン！」と一声吠えると、ワーグの群れが一斉に牙を剥いて襲い掛かって来た。

…あたしがタゲを取らなきゃ！
リディアは弓使いだ。こんな至近距離でワーグ達に襲い掛られていたら攻撃もサポートもままならないだろう。自分に攻撃を引き付ける必要がある。
あたしは無我夢中で「アイスボルト」を詠唱して、リディアに襲い掛かろうとしていたワーグ達に氷の矢を3連発で叩き付けた。
突き刺さった氷の矢の根元から血をダラダラと流したワーグ達が怒

りに眼を血走らせてギロリと物凄い形相であたしを睨むと、勢いよくこちらに向かって押し寄せて来る。
たくさんのワーグに一斉に圧し掛かられているあたしの姿はまさに団子状態だった。
それでも何とか必死でそのワーグ達を殴ったり蹴り飛ばしたりしながら、少しづつその数を減らしていく。1頭1頭は大した強さでも無いのに、こう一度にまとめてかかって来られるとかなり厄介だ。
本当なら強力な魔法を1発ブチ込んでふっ飛ばしてしまいたいところだけど、この状況だとさすがに詠唱している余裕もない。
リディアの方もあたしを巻き込む事を恐れてか、攻撃魔法の使用は控えているみたい。
何とか肉弾戦で少しづつ倒していくしか無い。…4、5、6匹。
うぅ。それでもまだ後8匹もいる。
いくらなんでもコレはちょっと数が多すぎるよ。

腕や足に噛み付いたワーグ達がガクガクと顎を振り回して喰らい下がっているせいで、ドクドクとひっきりなしに血が滲んで来る。
こまめにリディアが回復呪文を掛けてくれているお陰で痛みはあまり感じ無かったけれど、これが現実だったら痛みでとっくに失神しているところだ。

…あたしの体力が切れるのと、リディアの魔力が切れるのとどっちが先だろうか？

「お前達っ！大丈夫かっ！？」

眩い光と共に、突然目の前にジェナイ先生が現れた。
先生はあたしに飛び掛ろうと後方から虎視眈眈と様子を窺っていた

ワーグ達に向かって素早く呪文を唱える。
その足元に白緑の少し大き目の魔方陣がくるくると出現したかと思うと、そこにいた筈の3匹のワーグ達が次の瞬間には忽然と姿を消していた。
…あれは「転送」の呪文？　敵にも掛ける事が出来るんだ！？

続けてジェナイ先生は、少し離れたところから悠然と群れの行動を眺めていたボスらしきワーグに呪文を唱え始める。
先程、他のワーグ達が転送で消された様子を見ていたのだろう。
詠唱が始まると同時にボスワーグは魔方陣から逃れようと、先生の方に向かって駆け出していた。

「甘いっ！」

先生が唱えていた呪文は「転送」じゃなかった。
足元に魔方陣は出現せず、走っていた姿そのままにボスワーグはピタリとその動きを止めていた。
…今度は「停止」の呪文を使ったのか。時空魔術師のジェナイ先生らしい戦い方だ。

その間にもあたしは肘打ちを食らわし回し蹴りを叩きこんで、ワーグ達を個別撃破していく。
…1匹、2匹。　残りは後2匹。

動きを止めたボスワーグの身体を、先生の放った「風の刃」がビシュビシュっと音を立てて切り裂いていく。
それと同時にキリキリと引き絞ったリディアのコンポジットボウから放たれた矢がその心臓にドスっと鈍い音を立てて突き刺さった。

リディアの一撃が止めになったのだろう。力尽きたボスワーグの姿

が、ゆっくりと光の粒子に変わりキラキラと空へと立ち昇って行った。
群れのボスの存在が失われた事に気がついた残りの2匹のワーグ達も「クゥゥン」と小さく鳴くと、尻尾を丸めて森の奥へと逃げて去って行く。

…はぁはぁ…お、終わった!?

「先生、ありがとうございました。助かりました。あたし達だけだったらちょっとコレは無理だったと思います。」

おそらく2人だけだったら、戦闘不能に陥って決壊していたと思う。

「いや。何とか間に合って良かった。ワーグの遠吠えがこちらの方から聞こえて来たから慌てて様子を見に来たんだが…まさかここまでの数の群れに襲われていたとは。2人とも大丈夫か?…本当にすまなかった。俺の判断ミスだ。」

…?　どういう事だろう?

「本来ならこの森には、ワーグはいない筈なんだ。魔物がいると言っても、ジャイアントスパイダーやヘルハウンドがチラホラいる程度で、お前達にとってはさほど脅威にはならないだろうと思っていた。」

「それなのに、どうしてこんなにワーグが？」

「…わかった。こうなってしまったのは俺のせいだ。巻き込んでしまったお前達には知る権利がある。事情を話そう。」

ジェナイ先生はそう言うと真摯な面持ちであたし達の顔をじっと見つめ、ゆっくりと頷いた。

39．森の中に潜むモノ（後書き）

…うーん。戦闘シーンって難しいですね。
文才の無さが際立ちます。

あ、それと気分転換に違う話を書いてみました。
ちょいエロ風味の恋愛物です。
少し暗い話なので好みが別れるかと思いますが、良かったら見てみてください。

「消せない絆」
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ５７９０ｙ／

40．存在してはいけないモノ

「巻き込んでしまったお前達には知る権利がある。事情を話そう。」

そうは言ったものの、ジェナイ先生は顎に手を当ててしばらく何をどう話そうか考え込んでいるようだった。

以前、ロドニィ先生が一級魔導師の職務内容は宮殿奥深くに入り込んでの諜報活動や暗殺が多いと話してくれたのを思い出す。
と言う事は、ジェナイ先生の関わっている仕事にもあまりおおっぴらには言えないような国家機密的な物が含まれているのかも？

…今なら多少は答えてもらえそうだし、少し探りを入れても平気かな？
実は結構こういう推理ものっぽいシチュエーションって好物だったりするんだよねー。

「先生はここに来るまで、この仕事にあまり危険は無いと思ってたんですよね？」
「そうだ」
「けど、実際にはあたし達、ワーグの群れに襲われました。…でもあれは本当ならここにいるはずが無い魔物だったって事なんですか？」
「あぁ。あれは本来ならオプヴァルデンの北部の山岳地帯に近い針葉樹林に生息している魔物だ。そもそもこのサン・ラモンの森どころか、パルノイエにいる事すら有り得ない。」

…オプヴァルデン？
確かヴォイドさんが初期のスタート地点として選んだ公国がそんな名前だった。
軍事力が高くて武を重んじる国とか言ってたっけ？

「あれ？でも確かオプヴァルデンとパルノイエってかなりの距離があるって聞いたんですけど。」
「間にはニュクス海とライヒェンベルク、フェルデンティアが挟まっているからな」
「…なんでそんな魔物がこんなところに？」

リディアも訝しそうに首を傾げている。

「おそらく時空魔術を扱う何者かによって、この森に『転送』されて来たのだろう。一体何者が何の為にそんな事をしたのかまでは俺にもわからない。だが、この森の中には何者かが争ったような形跡が残されていた。」

リディアとあたしが森の外周に魔晶石を埋めて回っている間、先生が森の中で何かを探し回るかのように動き回っていた事を思い出す。

「ところで、先生は元々この森に『結界』を張る為に来たんですよね？…何の為にこんな広範囲に渡って結界を張る必要があったんですか？」

ジェナイ先生はまたしばらく迷うような顔をしていたけれど、やが

て重い口を開いた。

「やはりそこを話さないと埒が明かないようだな。」

◇◆◇

ジェナイ先生が話してくれた事をざっくりまとめると、こんな感じだった。

先生達は、ここ最近この国のとある要人の動向を見守っていたのだという。

その要人と言うのがまたかなり気まぐれな人物らしく、2週間程前にとある事情で王都パルノを出奔してしまったらしい。

と言っても、その人物の出奔先は最初から一級魔導師たちによって把握されていた為、秘かにパルノから使者が送られ、穏便に「戻るように」と何度も説得が行われていたのだそうだ。

（この辺り、どうやらおおっぴらに連れ帰る訳にはいかない事情があるらしい。）

しかし、つい3日前、油断していた魔導師たちの監視の目を擦り抜け、またもやその人物が消えてしまったのだという。

魔導師たちは慌てたものの、調査の結果、その人物が乗っていると思われる馬車がこのサン・ラモン領から続く国境の検問所を抜け、ライヒェンベルクに向かったのが目撃されていた事があっさり判明した。

件の要人が匿われていた出奔先からは、当の要人本人とその人物を匿っていた人物（＝恋人）が一緒に姿を消していた為、おそらくライヒェンベルクのリゾート地に向けて愛の逃避行に向かったのだろうと思われていたのだと言う。
ちなみに、馬車もその恋人の持ち物だったそうだ。

「それって、パルノから駆け落ちして恋人の所に隠れてたけど、あっさり見つかっちゃったからまた海外逃亡したって事？」

リディアがそう言うと、「まぁ…有体に言うとそういう事になる。」と先生は苦々しげに呟いている。

「えー？でも、それと『結界』に一体何の関係があるんですか？」

「その要人は、このパルノイエ、ライヒェンベルクのどちらの国にとっても重要な人物でな。出奔したと言う事実をライヒェンベルク側に漏らす訳には行かなかった。だから、密偵がライヒェンベルクに駆け込まないよう、全ての国境検問を強化し、街道を外れた場所でも少しでも国境を越えられる可能性のある場所には全て結界を張るようにと上から指示が出た。」

「うぅん？けどそれってあまり意味無い気がするんですけど。」

「そうだ。俺自身やお前たち冒険者がそうであるように、検問や結界なんてものは時空魔法を操る事が出来る者にとって何の意味も無い代物になる。ライヒェンベルクには魔術師ギルドや冒険者ギルドが存在しないから、時空魔法を操る事が出来るような高位な魔術師も実質存在しないと言われている。…しかし、そんな事は余所から

金で雇ってしまえば、あっさり解決出来る事だ。
…だから俺は最初からこの仕事に疑問を持っていた。
いくら国境に網を張ったところで何の意味も無い。ザルから漏る水を防ぐ術など無いとな。」

なるほどねぇ。
だから先生はしばらくこの仕事を放置していたあげく、あたし達みたいなペーペーにやっつけでやらせてしまおうと思った訳かぁ。なんか納得。

「…だが、この森に来て俺はたまたまある物を見つけてしまった。」

先生の声のトーンが急に低くなり、ひどく真剣な表情になったので、あたし達は息を飲んで次の言葉を待った。

「ある物とは…3日前に件の要人と共にこの国を出国し、馬車でライヒェンベルクへ向かったはずの人物の亡骸の一部だ。」

「えええっ!?」

駆け落ちしたんじゃなかったの!?
もしかして無理心中!?
あ、ひょっとして痴情のモツレで、その要人さんが相手を殺しちゃったとか?

「…俺は最悪の事態を考え、この森のあちこちに件の要人の痕跡を探したが、結局大した物は何も見つける事が出来なかった。…残されていたのはその亡骸と、この森に本来生息するはずも無いワーグ達の群れだけだ。」

…だとしたら、3日前に馬車に乗っていたのは一体何者だったんだろう？
恋人だけが殺されて、要人さんはその馬車で連れ去られてしまった…とかかな？
まさにミステリーだ。

「すまんが、俺から話してやれるのはここまでだ。だがこれでも十分喋り過ぎている。これ以上の詮索や他言は無用に頼む。」

確かに、あたし達みたいな小娘相手に国家機密をべらべらと喋り過ぎてると思う。
…一級魔導師たる人がこんなんで大丈夫なんだろうか？

「はい！先生っ　質問です」

「…なんだ？」

詮索するなと言われたばかりなのに、リディアに勢いよく手を挙げ

られて先生は怪訝そうな顔をしている。

「って事は、わたし達が今日延々とやった魔晶石埋め作業は全部無駄になっちゃったって事ですか？」

…うっ。それはさすがに虚しいものがある。

「いや、この森で何かが起きたのは事実だ。しばらく関係者以外は立ち入れないよう、ちゃんと結界は張って置く。」

あ、良かった。一応、無駄にはならずに済むみたいだ。

「と、言う訳でだ。　午後からも引き続き、魔晶石を埋める作業の続行を頼む。」

ぎゃーーーーー！！　やっぱまだアレを延々やるんですね！？

ひぃっ！

◇◆◇

結局、森の外周全てに魔晶石を埋め終わって先生が「結界」の魔法を発動させたのはそれから2時間後だった。
一応、午後からはあたし達2人だけじゃなくちゃんと先生も作業に参加してくれたから、思ったよりは早く終われたんだけどね。
作業が全て終了しても、きんちゃく袋の中にはまだ結構たくさんの魔晶石が残っていた。おそらくかなり多めに見積もって準備されていたんだろう。

「お疲れさん。その残った魔晶石は、お前らが好きにしていいぞ。」

えっ？いいのかな？　なんかこれって結構高そうな気がするんだけど。

「今日1日面倒な作業に付き合わせた駄賃がわりだ。いいから、取って置け。…って言っても、国からの支給品だから別に俺の懐が痛む訳でも何でもないんだがな。」

そう言って、ジェナイ先生はフッとおかしそうに笑ったのだった。

＞ｉ３５７４３―４４８７＜
※ちなみにパルノイエは海側が高い山脈に囲まれている為、海運関連があまり発達していません。

４０．存在してはいけないモノ（後書き）

便宜上、馬車って書いてしまいましたが、この世界には馬は存在しないという設定です。
その為、車はオスタード（走竜）が引っ張っています。

41．4月18日（火曜日）（前書き）

閑話なので、本日は2話まとめて更新しております。
これは1話目です。

41．4月18日（火曜日）

ピピピピ…ピピピピ…ピピピピ…

アラームの音と共にあたしは目覚めた。ＶＲバイザーを外すと思い切り伸びをする。ん～！今日もいい天気。

一晩中ゲームをしていたというのに、たっぷり睡眠を取った時と同じように頭はスッキリしていた。

気分が良くて、思わず鼻歌なんか口ずさみながらベッドを出る。

歌で思い出したけど、そういやＭＬＯって音楽が流れて無かったなぁ。

大抵のＭＭＯにはＢＧＭが付き物で、マップ毎に違ってたり戦闘になると音楽が変わったりするものなのに、ＭＬＯの世界にはそれが全く無かった。

あの世界観だとフィルード上やダンジョンを歩いていて勝手に音楽が聞こえて来るなんて普通は有り得ないだろうから、リアリティを求めるならば当然と言えば当然なのかも知れないけれど、今までプレイして来たゲームの常識からするとやっぱり不思議な感じかも？

なんてな事を考えながらパジャマ姿のままキッチンに向かうと、母は既にばっちりスーツ姿で出勤準備を済ませていた。

「おはようお母さん！」

「あっ！美亜おはよう。ごめん、悪いんだけどさ。お母さん今日朝から会議があるから、もう出ないとマズいのよ。朝ご飯食べたらお

皿洗っといて。あ、それから家出る時はちゃんと戸締りするのよ！
わかった！？」

そう言い残すと、バタバタと慌ただしく出て行ってしまった。

…なんだ。つまんない。
ちょっとくらいＭＬＯの話をしたかったのに。

そう思いながら、冷蔵庫から牛乳を取り出しバタンとお尻でドアを閉める。
コポコポとカップに牛乳を注ぎながら、昨夜の事を思い出していた。

…にしても、お母さんまるで別人みたいだったなぁ。
エドワードさんの事おちょくったり、長船さんの事を「おさぴょん」とかいきなり呼んだりしちゃってたし、なんかびっくりしちゃった。

以前、モンスターテイマーを一緒にプレイしてた時にも感じていた事だけど、ゲームをプレイしている時の母のテンションはかなり高い。
リアルではあくまで母と子の関係なんだけど（当たり前か）ネトゲをプレイしている時は、あまり歳の差を感じないし、まるで友達みたいな感覚なのである。

あれもある意味、童心に帰ってるって事なんだろうか？
１５年ぶりに懐かしいゲームに復帰してテンション上がってるのかな？

でも多分それだけじゃないと思う。
母は母なりに、あたしや周りの人達が楽しめるようにワザとはじけて見せているようなところもあるような気もする。

…っとヤバい！
呑気にひたってる場合じゃなかった。さっさと食べて学校行かないと遅刻しちゃうっ！

あたしは母が用意して置いてくれたトーストと目玉焼きを掻き込むと、バタバタと身支度をして慌ただしく家を飛び出した。
（もちろんお皿を洗うのは忘れました。）

◇◆◇

「美亜ー！美亜ってば、ちょっと聞いてるのー？」
「えっ！？ごめん。なになに？ボーッとしてた。」
「もうっ！美亜ってば、今日は朝からずっとそんな調子だよ？なんかあったの？」

クラスメイトの舞香が顔を覗き込んでそんな事を聞いて来る。
あーー！やばいわ。あたし。
今日は朝から1日中、授業を受けてる間も、友達とおしゃべりしてる時も、気が付けばいつもＭＬＯの世界の事ばかり考えてしまってた。…おかげで、気が付いたらあっと言う間に放課後になっちゃっ

てるし。うーん。これがゲーム脳ってやつなのかな？

「うん。何でも無い。ちょっと昨日から始めたゲームが面白すぎて、脳内リプレイしちゃってたよ。」

「うわ！何それヤバくない？」

「やっぱし？自分でもちょっとそう思う。だが、それがいい！」

そう言って、わざとグヘヘヘと笑ってみせる。

舞香は呆れたような顔で、あたしのオデコをこつんと小突いた。

「もう！美亜のゲーオタっぷりは別に今に始まった事じゃないもんねー。

ね？　そんな事はいいとしてさ、今日部活終わったら、ちょっとソ○プラ付き合ってよ。付き合ってくれたら、マｏク奢るからさー。」

「ん。今日は塾無い日だし、別にいいよ。」

「よし！決まり。それじゃ、部活がんばろ。３年生がそんなぼんやりしてたら、新入生に示しがつかないよ？しっかりして下さいよー！先輩っ。」

ちなみにあたしは吹奏楽部に所属している。担当楽器はトロンボーンだ。

「はぁい。それなりにがんばりまーす！」

そうふざけ合いながら部室までやって来ると、つい最近入部したばかりの１年生の女子が入口の前に佇んでいた。…どうやら泣いているみたいだ。

「あ、あの子トロンボーンの子じゃない？先輩、ちゃんと面倒見てあげてよ？」

そう舞香に背中を押し出される。舞香だって先輩じゃん！と抗議したら、「あたしはクラリネットだから関係ないもん」と逃げられてしまった。

しょうがないなぁ。もう。

「…菊池さんだったっけ？こんなところでどうしたの？部室入らないの？」

彼女は、はっとしたような顔で一瞬だけあたしの事を見上げると、涙をぽろぽろ流しながら俯いて話し出した。

「先輩…わたし、わたしトロンボーンなんか嫌です。本当はフルートがやりたくてこの部活に入ったのに。トロンボーンなんかどこがいいのか全然わかりません。…どうしてもやらなくちゃダメなら、こんな部活もう辞めたいです。」

…あぁ。この気持ちには覚えがある。

あたしも本当はトランペットに憧れていたんだけど、入部してすぐに楽器のパート分けをした際、トランペットは希望者が多くてじゃんけんをする事になってしまい、あっさりと負けてしまったのだ。

最初の頃はトロンボーンって何だか無骨でオッサンっぽいような気がしてどうしても好きになれなかったんだけど、プロのアンサンブル演奏を生で聞いた事をきっかけに、今ではその音色とアンサンブルをやった時のハーモニーの素晴らしさにすっかり虜になっていた。

「そっか。あたしもね。最初トロンボーンなんか大嫌いだったんだ。」

えっ！？と泣き顔を上げて、菊池さんはあたしの方を見つめた。

「けど、よく考えてみたら、トロンボーンの何がそんなに嫌いで、憧れていた楽器のどこがそんなに好きなのかそれすらよくわからなかった。…って言うか、そんな事偉そうに語れる程どの楽器の事も全然詳しい事知らなかったんだよね。

別に嫌いなら嫌いで、それはそれでもいいじゃない。トロンボーン吹きたくなかったら別に無理して吹けとは言わないよ？　でも、もっとトロンボーンやその他の楽器の事も良く知ってから、自分が一体ほんとのところどういう部分がそんなに嫌いなのか、ちゃんと解って嫌いになってあげてくれたら嬉しいかな。」

「…よくわかりません。」

「あはっ、だよねー？ごめーん。実はあたしも自分で何が言いたいのかよくわかんない。

とりあえず、実際にいろいろ聞いてみるところから始めてみたらいいんじゃない？」

そして、あたしはオススメのＣＤを何点か貸す約束をすると、彼女と一緒に練習へと戻った。

◇◆◇

部活帰りに舞香とソニプ○に寄った後、マ○クでお茶をした。
あたしはお腹がすいてたから、普通にハンバーガーとか食べちゃったけど、舞香は「ダイエット中だし。」とか言って、野菜ジュースなんか飲んでる。

…どこかの誰かさんとはえらい違いだ。

「菊池さん、どうだった？」
「うーん。まだどうなるかわかんない。こういうのってやっぱ本人の気持ち次第だと思うし。」
「楽器の好き嫌いかー。難しいね。吹奏楽って大体の編成人数決まってるしさ。みんながみんな好きな楽器やれるとは限らないもんね。」
「だね。やっぱり誰かが我慢しなくちゃいけないってのはしょうがない事なのかなぁ？割り振られた楽器の良さをわかって、第一希望の楽器よりももっと好きになれたらいいんだけどなー。」
「それぞれの個性を受け入れるって難しいよね。あ、そんな風に考えたら、楽器って何かちょっと人間に似てるかもね？」

確かにそうかも。
楽器には個性がある。それぞれみんないい音色を持っていてどれも素敵なんだけど、苦手とするような弱点や、クセがあって扱いにくい部分っていうのはやっぱりどの楽器にもあるんじゃないかな？
菊池さんやあたしがトロンボーンの個性の一面だけを見て「好きになれない」って思い込んでしまってたように、人間に対しても同じ事が言える気がする。
全てを受け入れて、その上でその個性を尊重してあげるのってすご

く大変な事だと思う。
あたしにはまだまだ難しくて、そんな事うまく出来ないし、どうやればいいのかもよくわかんない。
もう少し大人になって、いろんな人達とたくさん出会って人生経験をいっぱい積んだら何となく理解出来るようになるのかな？

何となく、長船さんがリディアに語っていた言葉も思い出したりなんかして、あたしは「人間ってむずかしー」と呟いていた。

41．4月18日（火曜日）（後書き）

…あれ？

なんか中学生日記みたいな事にｗ

42．街の噂（前書き）

閑話なので、本日は2話まとめて更新しております。
※これは2話目です。

42．街の噂

家に帰ってみると、部屋の中は真っ暗でまだ母は帰宅していないようだった。
パチンと電気をつけてキッチンの壁に掛った時計を見上げる。
…19時半か。最近お母さん帰って来るの遅いなぁ。仕事忙しいのかな？
携帯をチェックしてみても母からのメールは入っていなかった。
いつも職場を出る前にはメールを入れてくれるので、もしこの直後に連絡があったとしても通勤時間を逆算すると最低でも後1時間以上は帰って来ないだろう。
…ま、しょうがないか。
冷蔵庫を開けてミネラルウォーターを取り出す。
飲み終えたペットボトルをシンクに置こうとして気が付いた。
あ！やばっ　朝のお皿洗うの忘れてたっ！
母の帰りが遅くて助かったかも知れない。見つかってたら絶対またしつこく怒られていたはずだ。
「あんたって子はホントにだらしがないんだからっ！言われた事くらい出来ないの？女の子なんだからもっとちゃんとしなさい！」
そんな風に目くじらを立てている母の姿が目に浮かぶようだ。

えーと…とりあえず見つかる前にちゃっちゃと証拠隠滅しておこう。

キッチンに立ち、お皿を洗いながらぼんやり考えてみる。

この分だと今から母が帰って来てすぐに夕飯の支度をしたとしても、結構いい時間になってしまいそうだ。

…たまにはカレーでも作って置いてあげようかな？

カレーだったら、別に今夜食べなかったとしても明日に回せるもんね。

しっかりポイントも稼げるし、家事が早く片付けば母と一緒にＭＬＯにログイン出来る時間だって早くなる。

あ、ついでに洗濯物だって取り込んで、お風呂も沸かして置いてあげよう！

あたしだってやる時はちゃんとやるのだ！　（…打算だらけだけどね。）

◇◆◇

結局、母からメールが来たのは２０時を回っていた。

『ごめん！遅くなって。今から帰る。ご飯、コンビニ弁当でいい？』

『カレー作ったよ！早く帰って来て（絵文字）』

あたしがメールを返してから、母からの返信が来るまでかなりの間が空いた。

『……ナニガアッタ』

ちょっ！　どういう意味っ！？　失礼しちゃうわ、全くもうっ
思わず携帯にツッコミを入れてしまう。

にしても、今から母が帰って来るまでにまだ1時間は掛るだろう。
さすがに先にベッドに入ってＭＬＯにログインするっていうのも気が引けるし、いくらなんでもまだ寝るにはちょっと早すぎる。
…そう思ってソファでゴロゴロテレビを見ながら時間を潰していた。
って！よく考えたら、別にＶＲバイザーでログインしなくても３Ｄモードで接続すればいいんじゃない！

ようやくその事に気が付いたのは、それから３０分以上後の事だった。

◇◆◇

ログインが完了するやいなや、早速フレンドリストをチェックしてみる。
あ、ヴォイドさん発見！

『こんばんわー！』
『お？あれっ？ミーアちゃん？こんな時間帯にログインしてくるなんてえらい早いな。』
『えへへー。待ち切れなくて３Ｄモードでフライングしちゃいました。』
『なんやそういう事か。』
『ヴォイドさんは今何してるんですか？』
『俺？今酒場。』
『え？でもまだこの世界夕方ですよね？』
『確かに飲んだり飯食ったりするにはまだ早い時間なんやけどな。でも、ちょっとしたお楽しみもあるんやで？』

ヴォイドさん曰く、夕方あたりから酒場や人の集まる場所などをうろついていると、３Ｄモードユーザー向けの夜専用クエストが発生しやすくなるのだそうだ。
おもしろそうなので、あたしも早速合流してみる事にした。

「で、なんかおもしろそうな話ありました？」

「いや、まだ特には。何や知らんけど、近いうちにこの国のお姫さんが結婚するらしくて、街の連中に話し聞いても今日はその話題ばっかりやな。」

へぇ。ロイヤルウェディングかぁ。ゲーム内で結婚式のパレードとか見れたりするのかな？

そんな話をしていると、こんな時間帯からお酒を飲んでいたらしい隣のテーブルのおじさんが声を掛けて来た。

「なんだ。あんたら冒険者さんかい？　だからこの国の事ろくすっぽ知らねぇんだな？
今、このパルノイエのソフィー姫とライフェンブルグの第2公子ゲオルク様の結婚っつたら、国中の話題の的だぞ？」

「そうなんですか？」

「おう。常識だぞ？本当に知らねぇのか？」

…ごめんなさい。ホントにこれっぽっちも知りません。

気まずくなって思わずヴォイドさんの方をちらりと見ると彼も両手をあげて「知らない」と首を振っていた。

「なんだなんだ。面白味の無い連中だなぁ。2週間前にあんなに華々しく御輿入れの大行列がライフェンブルグに向けて出発したってのに、あんたらそれも見てないのか？」

だって、まだその頃プレイしてなかったもん。

「その頃はまだ俺はオプヴァルデンにいたからな。だからこの国の事はよく知らない」

ヴォイドさんがそう答えると、おじさんも納得したらしい。

「なんだ。お前さんらオプヴァルデンから来たのかい。そりゃぁ何も知らなくてもしょうがねぇな。随分遠いところから来たもんだ。」

そう言うと、親しげにヴォイドさんの肩をバンバンと叩いていた。

「けどよぅ。噂じゃあのお姫さん、本当は恋人がいたらしいぜ？…スタンフォール男爵って知ってるかい？」

「いえ。知りません。」

「やっぱそれも知らねぇか。このパルノイエの貴族達の中じゃぁ、ピカイチの色男だって有名だぜ？若い女共はみんなキャーキャー言ってやがるのに。」

へぇ。イケメンさんなんだ？

「俺ぁ、てっきり姫さんがその男爵殿と手に手を取りあって駆け落ちでもするんじゃぁねぇかと踏んでたんだけどなぁ。２０Ｇも賭けてたってのに、すっかりスっちまった。」

んっ！？　ちょっと待って！駆け落ちっ！？　そのキーワードはつい最近聞いたばかりだ。

「おじさんっ！　その話詳しく聞かせて下さい。」

あたしは隣でびっくりしているヴォイドさんをよそに、おじさんに掴みかからんばかりの勢いで声を張り上げていた。

◇
◆
◇

…おじさんの話をまとめるとこうだった。

パルノイエのお姫様ソフィー・エリザベート・イマキュラータ・パルノイエと、ライフェンブルグの第2公子ゲオルク・ヴェンツェル・コンスタンティン・ライフェンブルグの婚姻が決まったのが約2年前。

しかし、街の噂によると当のお姫様ソフィーには恋人がいたらしい。

その恋人というのが、スタンフォール男爵。

パルノイエ宮廷きって美男子で、その浮名は数知れないと言われる人物なのだそうだ。

で、お姫様はこのイケメンさんにすっかり夢中で、婚姻を嫌って駆け落ちするのでは無いか？とまで噂されていた。

けれど、蓋を開けてみればお姫様はちゃーんと2週間前に煌びやかな御輿入れの大行列を伴って、ライフェンブルグに旅立って行ったのだという。

ちなみに、結婚式は4日後ライフェンベルグの首都ライフェンで行われるとかで、式に参列予定の王族や貴族達が、今日の昼間ライフェンベルグに向けて出発したのだそうだ。

で、その時に祝福の金貨がパルノの街中にバラ撒かれたらしい。

「ま、お貴族様が金貨をばら撒いてくれたおかげで、俺もこうやって賭けでスっちまった分をきっちり取り戻せて祝い酒が飲めている

って訳だ。スタンフォール男爵にゃ申し訳ないが、お姫様のご成婚万々歳！ってところだな。」

スタンフォール男爵かぁ…それってやっぱりあの森で見つかったあの人の事…だよねぇ。

「おじさん、ひょっとしてスタンフォール男爵ってサン・ラモンに何か縁のある人なんですか？」

「ん？あぁ　当たり前だろ？
サン・ラモン男爵領つったらスタンフォール家の領地に決まってるじゃねぇか。
って、冒険者のお前さんらにゃぁそんな事わかるはずもねぇか！ははっ」

43．点と線

おじさんにそんな妙な事を聞いているあたしの姿を見て、事情のわからないヴォイドさんは怪訝そうに首を傾げていた。

『あ、ごめんなさい。ちょっと気になる事があって』

『何や？ミーアちゃんはひょっとしてスタンフォール男爵とかいうイケメンに逢うた事でもあったんか？』

『いえ、そういう訳じゃないんですけど。』

あたしは個別チャットを使ってヴォイドさんに昨日サン・ラモンの森で起こった出来事を手短に説明しはじめる。

急に黙り込んでしまったあたし達に、しばらくは不満そうな顔をしながら隣でちびちびと飲んでいたおじさんも、やがてつまらなそうに去って行ってしまった。

『…なるほどなぁ。どうやらそのジェナイとかいう魔導師の話からすると、確かにそのサン・ラモンの森の亡骸ってのは、スタンフォール男爵って線が濃厚やろな。』

『ですよね。多分ソフィー姫はスタンフォール男爵と駆け落ちして、一時期サン・ラモン領の男爵の屋敷にでも匿われていたんじゃないかな？　おそらくそのあたりまでは先生達も姫の動向を把握してたんだと思います。』

『問題はその後やな。魔導師たちはまたその2人を見失ったんやろ？

けど、男爵家の馬車がサン・ラモンの国境検問を通過したって情報を入手したもんやから、魔導師たちはてっきりその2人がリゾート地であるライフェンベルクにもう1回駆け落ちしたもんやとばかり思い込んでしまった訳や。…でも実際にはイケメン男爵は森の中で死体で見つかった。これはどういう事なんやろな?』

『うーん。その辺がよくわかんないんですよね。あたしとしては、痴情のもつれでカッとなったお姫様がイケメン男爵を殺しちゃったか、実はイケメン男爵だけが殺されてお姫様の方は誘拐されちゃったんじゃないか?とか思ってたんですけど、でもそれもどっち共、辻褄が合わないと思うんです。』

『どういう事や?』

『さっき、おじさんが「お姫さんは2週間前に煌びやかな御輿入れの大行列を引き連れてライフェンブルグに旅立って行った」って言ってたじゃないですか?』

『あぁ、何やそないな事言うとったな。』

『ＭＬＯ内の暦だと今日は8月3日ですよね?　2週間前って事は7月２０日って事になります。』

リアルでの時間経過とＭＬＯ内の暦にはズレがあるので、何日前とか言われても咄嗟にぴんと来ない。
黙って目線で先を促されて、あたしは脳内で逆算しながらさらに続けた。

『で、あたし達がサン・ラモンの森に時空魔法の実地訓練に行ったのが7月２７日。そこでジェナイ先生に聞いた話だと、お姫様とイ

ケメン男爵が再び行方不明になってサン・ラモンの国境検問所で男爵家の馬車が目撃されたのがその3日前の事らしいので、7月24日。さらにお姫様が王都パルノを出奔したのはその2週間前だって言ってたから、7月13日の事だと思います。』

あぁ、もう。ややこしい！

『…って事は魔導師たちは、7月13日から23日までの間は確かにお姫さんとイケメン男爵の動向を把握してたって事になるんやな？　となると、7月20日の花嫁行列って言うのは一体なんなんや？まさか花嫁不在のままライフェンベルクに行列だけ送り出したのか？』

…もう一度頭の中を整理してみる。

7月13日≫ソフィー姫が王都パルノを出奔（実はイケメン男爵と駆け落ちしていた）

7月20日≫婚礼の大行列がパルノイエからライフェンベルクに向けて出発（この時、姫は男爵の持つどこかの屋敷に隠れていたハズ）

7月24日≫ソフィー姫とイケメン男爵が再び失踪。サン・ラモンの国境検問所で男爵家の馬車が目撃される。

7月27日≫サン・ラモンの森での訓練中に、ジェナイ先生がイケメン男爵の亡骸を発見。イケメン男爵を襲ったのは、ワーグを召喚した時空魔術師??

8月3日≫今日現在。パルノイエの王族と貴族達が結婚式に向けてライフェンベルクに出発。

8月7日≫4日後ライフェンベルクにてロイヤルウェディングが行われる。

『…そうなんですよね。そんな事したって実際にお姫様がいなければ、ライフェンベルク側にはすぐにバレちゃうと思うんですけど。ひょっとしてイケメン男爵は、お姫様を取り戻してライフェンベルクに御輿入れさせようとしたパルノイエ王室によって邪魔者だと判断されて、こっそり始末されちゃったとかなのかなぁ？』

だとすると、お姫様の動向を把握していたはずのジェナイ先生達が何も事情を知らないって言うのはおかしい気がする。サン・ラモンの森で先生が見せた動揺の表情は、とても演技には見えなかった。

…一体どうなってるんだろうか？

ヴォイドさんは考え込むように黙り込んでしまった。

夕刻のパルノの酒場は、だいぶお客さんも増えて賑やかになって来ている。

そんな中で個別チャットを使って話をしているあたし達の姿は、傍目からではお互い向かいあってむっつり黙って座っているように見えて、相当おかしな感じなんじゃないだろうか？

どうやらこの『火竜の吐息亭』は、以前リディアに連れて行かれた『雄鶏と火口箱亭』に比べると圧倒的に男性客の比率が高いようだ。時折、酒に酔った荒くれ男達の下卑た笑い声があがり、ちょっとした喧嘩みたいなものも起きてるみたいだったから、あまり女性客向けじゃないかも知れない。

「なんだなんだぁ？お前さんら、さっきからずっと仏頂面して睨み合っちまって、別れ話のモツレかなんかかぁ？ソフィー姫さんの結婚にあやかって、もうちっと仲良くやったらどうなんだい？」

背後からそんな声が聞こえて来たかと思うと、いきなりあたしは後ろから酔っ払いオヤジに抱きつかれていた。
なんなの？このオッサン！

「嬢ちゃん、いっその事そんな野暮な兄ちゃんなんかやめて俺に乗り換えてみるか？色男男爵ですら女に見限られるってんだ。その兄ちゃんじゃ役不足ってもんじゃねぇか？
どうだい嬢ちゃん、俺ぁいい仕事するぜ？試してみねぇか？」

そんな事を言いながらこのオヤジ、どさくさに紛れてあろう事かあたしのおっぱいを揉んでるっ！！

うわーーーーーーー！！　何すんのこの変態スケベオヤジっ！！

「やめてくださいっ！！」

あたしは咄嗟にオヤジに思いっきり金的蹴りを噛ますと、そのしゃがみ込んだ背中に立て続けにエルボーを叩き込んでしまっていた。

痛みのあまりスケベオヤジはおかしな叫び声をあげながらピョンピョンと店中を跳ね回っている。
その悲痛な姿に、ヴォイドさんを始め周囲の男の人達はすっかり青褪めていた。

…あ…あはは。　身体に染みついてしまった格闘スキルが憎いわ。
まだこれが３Ｄモードで良かったよ。ＶＲモードで胸なんか揉まれ

ちゃった日には気持ち悪さのあまり、半殺しにしちゃってたかも知れない。

あたしはヴォイドさんの腕を捕まえると、まだ青い顔をしている彼の事を引っ張って慌てて店を後にした。

◇◆◇

――フォン！

店を出てしばらく歩いたところで、突然個別チャットの呼び出し音が鳴る。

『ミーア？こんばんわ』

話しかけて来たのは、魔術師ギルドで知り合った友達の月猫（ゆえにゃお）だった。

『こんばんわー』

『今何してるの？』

『…えっと、さっきまで酒場にいて話をしてたんだけどちょっとしたトラブルがあって飛び出して来たとこ。』

『え？何それ？一体どうしたの？…あ、まぁいいわ。そっち行ってから聞くから。今からそっちに合流するわね。』

彼女はそれだけ言うと、さっさと移動を開始したみたいだった。

「ヴォイドさん、今からあたしの友達が合流してくるって。魔術師ギルドで知り合った友達なんだけど、いいかな？」

と、あたしが言いかけたところに背後から声が掛った。

「やっほー！ミーア。ってあれ？デート中だった？ごめんね。」

月猫だ。ってか早っ！　すぐ近くにいたのかな？
彼女は相変わらずゴスロリ系ファッションに身を包み、お姫様さながらにキラキラとしたオーラを放っている。

「ちがうよ。別にデートとかじゃないから心配しないで。
ヴォイドさん、これが今話してた魔術師ギルドで知り合った友達の月猫姫です。
月猫姫、こちらヴォイドさん。第1次クローズドβからプレイ開始した人なんだって。」

ヴォイドさんはしばらく呆けたような顔をしていたものの、ハッと気付いて慌てて月猫に挨拶をした。

「…あ、はじめまして。ヴォイドです。よろしく」

さっきまで青褪めていたその顔は、何となく紅潮しているように見える。
確かこの人、リディアと初めて逢った時も赤くなってたよね？
ひょっとして惚れっぽいのかな？

「はじめましてヴォイドさん。私は月猫姫って言います。どうか気軽に”ゆえにゃお”って呼んで下さいね。」

そんなヴォイドさんの様子を見て、月猫はにっこりと妖し気にすら見える微笑みを浮かべたのだった。

４４．姫と騎士（前書き）

ひさびさのヴォイドくんのターンです。

４４．姫と騎士

「はじめましてヴォイドさん。私は月猫姫って言います。どうか気軽に”ゆえにゃお”って呼んで下さいね。」

そう言ってにっこりと微笑んだ彼女の姿に、たちまち俺のハートは打ち抜かれた。

女神だっ！女神がここにいる！！

ゴシック系のファッションに身を包み、美しいストレートの黒髪の上に小さなティアラをちょこんと乗せた彼女の姿は、厨房の頃の俺がまさに女神として崇めていた栗山千明様の若い頃の姿にそっくりだった。（注：現在は２０２１年です）

う…美しすぎる！

しばらく言葉を無くして、ただただ女神の姿を瞼に焼き付けんばかりに見つめ続ける。

「…あのっ　恥ずかしいからそんなに見つめないで下さい。」

顔を赤らめ、ふいっと目線を反らされてしまう。

おおぅふ！　この恥じらい具合がまた　た・ま・り・ま・せ・ん・！
そんな俺の姿に、ミーアちゃんが少し呆れたような顔でため息を吐く。

「…ヴォイドさんってなんて言うか…　や、まあいいや。
あたし、お母さんが帰って来たみたいだから一旦落ちるね。また２３時過ぎに今度はＶＲモードでログインするからよろしくー。
あ、ヴォイドさん、申し訳ないんだけど月猫にフェルデンティア行きの件、説明しておいてもらえますか？」

「え？あ…あぁ、わかった。」

彼女も一緒にフェルデンティアまで旅をするという事なんだろうか？
って事は、ひょっとしてひょっとすると、ライフェンブルクでは女神様の水着姿を拝めちゃったりなんかするっ！？

美しき女神の水着姿を妄想している内に、いつの間にやらミーアちゃんの姿は消え去っていた。

「…あ、あの？ヴォイドさん？」

「ひゃい！」

いかんいかん。思わず声が裏返ってしまった。平常心平常心。
…って無理や！
こんな至近距離で美女と２人っきりでお話なんて、童貞の俺には難易度が高すぎる！

ＥＡＳＹモードすらまともにクリアした事が無いのに、素手でＰＲＯＦＥＳＳＩＯＮＡＬモードに挑むようなもんだ。
しかも相手は女神やぞ？女神！

「こんなところで立ち話もなんですから、どこかで座ってお話しませんか？いろいろ聞きたい事もあるし。」

クスっと笑って俺の腕にその白い腕を絡ませてくると、雑踏を抜け、そのまま彼女にパルノの街中を縦横に走る運河沿いの一角まで引っ張って行かれる。
綺麗に整備された運河の両岸には等間隔に石造りのシンプルなベンチが並べられ、街燈の明かりでほんのりとオレンジ色にライトアップされていた。

「はい。ヴォイドさん、ここ座ってください」

そう勧められて大人しく座ると、彼女もちょこんと俺の真横に腰掛けて来る。
ちょっ！近いっ！近いよ！！　どうすんだ？これ！

ドギマギしてきょろきょろと目線を泳がせてみると、少し離れた周囲のベンチに腰掛けているのもみんなカップルばかりだった。
辺りが薄暗くて視界があまりよく無いのをいい事に、人目をはばからずにチュッチュしたり相手の身体に触りまくっている輩も多い。

「やだなぁ。ヴォイドさん。そんなに緊張しないで下さいよ。
そんなに構えられちゃうと、私、自分がまるでいじめっ子になったみたいな気分になっちゃいます。」

クスクス笑いながら彼女は言う。

「…で？ミーアが言ってた、フェルデンティア行きの話と、酒場でのトラブルって一体何の事ですか？」

「あ、あぁ」

若干ドモりつつもその度にうまく誘導されて、俺は長い時間を掛けてこれまでの事情を洗いざらい彼女に話す事になったのだった。

◇◆◇

「…へぇ。そんな事があったんですね。ライフェンベルクかぁ。私も行ってみたいな。

ロイヤルウェディングにも興味あるんですけど、その魔導師先生たちの絡んでいる失踪事件の謎も気になりますよね。ライフェンベルクに行けば何か手がかりが掴めるかも知れませんよ？

多分このクエストってあちこちで情報を集める必要がありそうな気がします。…それに」

「それに？」

彼女は面白そうな顔で俺の瞳を覗き込んで来る。…いやだから、近いですって！

「個人的にヴォイドさんの事に興味があります。ヴォイドさんって、私と話す時ずっと標準語使ってたけど、本当は関西人でしょ？」

「えっ！？」

…やっぱバレてたか。って、今何気にさらっと俺の事に興味があるとか言わなかったか！？

「イントネーションで解りますよ？別にそんなの隠さなくてもいいのに。

私、関西弁の響きってなんか好きなんですよね。もう少しだけ聞いてたいなぁ。なーんて。」

そう言って、フフッとはにかむ様に微笑んで来る。

うっ！その笑顔、心臓に悪いです！

「い、いや、別に隠してた訳じゃないけど、なんて言うか…緊張すると思わず標準語になってしまうって言うか…。」

「えー？別に緊張しなくていいのに。あ、でも私相手に緊張してくれてるヴォイドさんってなんか可愛いかも？そう思ったらなんかちょっと嬉しいな。」

ぐはっ　誰かっ衛生兵をっ！衛生兵を呼んでくれっ！！

「それにヴォイドさんって、いざって言う時は何だか頼りがいがありそうな気がします。

しかも、その背中の剣ってただのバスタードソードじゃないですよね？

グリップには４つも魔晶石が嵌め込めるようになってる。なかなかそんな凄い武器を持ってる人っていないですよ？

私、ヴォイドさんがその剣を使って闘っている姿を見てみたいなぁ。

女だったら、きっと誰でもヴォイドさんみたいな素敵な騎士（ナイト）に守られるお姫様のような立場に憧れるんじゃないかな？」

女神様に瞳をじっと覗き込まれたままそんな事をうっとりと言われてしまったら、俺は一体どうすればいいんですか！？

誰か助けて！俺のライフはもうゼロよっ！

処理能力をはるかに超えてしまった出来事に俺が頭をくらくらさせていると、背後から突然、絹を引き裂くような悲鳴が聞こえて来た。

「キャーーーーーー！　嫌ぁぁぁぁーーーーーー！！！」

ぎょっとして声のした方を振り返ると、金髪の小柄な少女が必死の形相でこっちに向かって駆け寄って来るのが見える。

少女は俺達の目の前まで来るとピタリと足を止め、息を切らしながら女神と俺の顔を涙目で見つめた。

震えるその手は無残に肌けられた胸元を必死で押さえている。…おそらく乱暴されそうになったのだろう。

少女は女神の頭上に輝くティアラに気付くとハッとしたように顔色を変え、もう一度俺と女神の顔を交互に見比べると、息も絶え絶えにこう言った。

「あっ、あのっ！あなた方はお姫様と騎士様でいらっしゃいますよね？ご、ご無礼を承知でお願いします。助けてください！わたし追われているんですっ！」

◇◆◇

…いや、お姫様と騎士様て…。　俺ら、そんな大層なもんとちゃうんやけど。ってか、本物の姫さんやったらこんな街中で敢えてティアラなんか付けてへんやろ。

思わずそうツッコミたかったが、そんな間違いを正す暇も無く少女が現れた路地からいかにも柄の悪そうな連中が次々と姿を現す。ボロ切れを纏い、夏だというのに腰には薄汚れた毛皮のようなものを巻きつけたその姿は、美しく整備されたこの王都パルノの街に相応しいとは言い難かった。
…おそらく山賊か何かだろう。

咄嗟に彼女達を背後に庇いながら、ギロリとそいつらを睨みつける。

「ん？なんだぁお前？　そのお嬢ちゃんは俺達と楽しんでる最中なんだぜ。野暮な真似は無しにしてもらおうか。」

先頭に立つ髭面の男が口の端を引き上げてにやりと笑いながらそう言い放った。
…コイツがこの山賊どものボスか？

髭面の男はチラッと俺の背後に目をやったかと思うと、スッと目を細める。

「…ほぅ。えらく別嬪さんがいるじゃねぇか。何ならそっちの黒髪のお姉ちゃんも一緒にどうだ？たっぷり愉しませてやるぜ？　…野郎の方を片付けてから、じっくりとな。」

びくりと俺の背後で金髪の少女が身体を震わせた。チラリと女神の方に視線を向けると、彼女は気丈にも男達をキッと睨みつけている。にやにやと薄気味の悪い笑いを顔に浮かべながら、男たちはスラリと腰の剣を抜いてじりじりと距離を詰めて来る。

…7人か。

相手の強さは解らないが、これはちょっと穏やかじゃない。

俺は背中のバスタードソードに手を掛けると、勢いを付けて一気に抜き放った。

45．剣と死神の鎌

山賊どもはすぐには襲いかかって来なかった。
こちらの方が明らかにリーチが長いので警戒しているのだろう。
バスタードソードは長くて重い剣だ。俺に最初の一太刀を振るわせ、隙が出来る瞬間を待っているに違いない。
…背後には運河。　山賊たちは俺達を扇形に囲い込むようにゆっくりと間合いを詰めて来る。

俺は愛用のバスタードソードをしっかりと両手で握り直すと、徐々に気を高めて行った。

――――　ビシュッ！

山賊どもの間から、風を切って勢い良くダガーが飛んで来る。

カキンッ！

咄嗟に剣の腹で弾いたが、この隙をこいつらが見逃そうはずも無い。
間髪入れずに飛び込んで来て俺の脇腹にスティレットを突き立てようとしていた。

…悪ぃけど、そう簡単に触れさしたる訳にはいかんで？

手首を返すと、ありったけの力を籠めて真横へと薙ぎ払う。
俺を刺そうとしていた男は血飛沫を上げて崩れ落ち、立ち昇る光の粒子に変わって消えて行った。

「セイッ！」
すかさず大きく踏み込むと、１ヶ所に固まっていた山賊どもに向かってバスタードソードを振り抜く。
ぶん！っと空気を切り裂く重量感のある音と共に、あっと言う間に３人の男達の姿が消えていた。

「…すごい。」

金髪の少女が呆気にとられたような表情で呟く。

「くそっ！やりやがったな」
逆上した男がシミター―を振り上げて飛び掛って来る。
ガキンッ！
剣の柄で伸びてきた刃を受け止めると、男の腹に思いっ切り蹴りを叩き込む。
「ぐっ！！」
よろめいて倒れた男の胸に、俺は躊躇する事なく深々と刃を突き立てた。

◇◆◇

「キャァァ！！！」

背後から上がった甲高い悲鳴にハッとして振り向くと、髭面の男が少女の金髪に指を絡みつけて引っ張り上げ、そのアゴにダガーを押し当てていた。

「よくもやってくれたな。…それ以上近づいてみろ?この小娘がどうなってもいいのか?
多少傷がついたところで、男の相手をするのにゃ問題ねぇ。おかしな真似しやがったら、この小娘の肉を少しづつ削ぎ取っていってやるからな。…まずはこの耳からか?」

髭面の男はそう言うと、ぶるぶると震える少女の耳にダガーをあてがう。
ダガーの刃先が当たって少女のコメカミにピッと赤い線が走った。

「わかったんなら、その馬鹿デカイ剣を捨ててそのままゆっくり後ろに下がるんだな。」

くそっ!どうする?　手の中の剣を見つめながら考える。
いっそこのバスタードソードを捨てる振りをして、攻撃魔法を打つか!?
けど、俺が取得してる魔法スキルは回復の為に覚えた必要最低限の光属性魔法だけだ。
筋肉馬鹿で大して魔力を持っていない俺の事だ。たとえありったけの気合を籠めて撃ったところで、大したダメージを与える事は望めないだろう。
…万事休すか!?

「その薄汚い手を離しなさい。」

はっ!?

「その薄汚い手を離しなさいって言ってるのよ。わからないの?

虫っけらには人が話す言葉を理解するのも難しかったかしら。口で言ってもわからないなら、身体にわからせてあげるしかないようね。
…この汚らしいゴミ虫めが。」

俺は信じられない思いで、声の方へとゆっくりと首を回した。
…この声は紛れもなく俺の女神っ！？

彼女は神々しいまでの美しさを発しながら、漆黒の　死神（デスサイズ）の鎌を手にニッコリと微笑んでいる。
女神の　死神（デスサイズ）の鎌の刃先は髭面の男の首筋に掛かり、じんわりと赤い雫を滴らせていた。

「ひぃっ！　わ、わかったっわかったから！」

慌てて髭面の男が金髪の少女を解放する。
背中を突き飛ばされてよろめいた少女を咄嗟に左手で抱き止めたのと同時に、視界の片隅でもう1人の男の影が素早く動いたのが見えた。
頬に傷のある男が女神に向かって斬りかかろうと踏み込んでいる。

「させるかっ！！」

俺は大きく振りかぶると、槍投げの要領でバスタードソードを勢い良く投げ付けた。

どすっ！

鈍い音を立ててバスタードソードがその背中に突き刺さったかと思うと、男はやがてキラキラと輝きながら光の粒子となり消えていく。

ボスらしき髭面の男に視線を戻すと、さっきまでの勢いは一体どこへ行ったのか、カタカタと小刻みに震えていた。

「いっ…命だけはっ！お願いします。あっしらは、ただ…た、頼まれただけなんです。ほんの2日程前にこの小娘を攫えって。攫っちまった後は、煮るなり焼くなりお前らの好きにしていいって言われただけなんでさ。ホントに。」

「…へぇ？それはそれは。さぞかし大金をもらって頼まれたんでしょうね。
金をもらった上に娘を好きにしていいだなんて、なんて割のいいお仕事なのかしら？
虫けら風情がずうずうしいわね。」

女神はそう言うと、デスサイズの刃の腹でピタピタと髭面の男の頬を撫でる。

「ひぃっ！すみません。すみません。もらった金は全てお返しします。だからどうか許して下さい。」

男は慌てて懐から取り出した皮袋を女神に向かって差し出した。

「あら？私達に返してもらってもしょうがないんだけど？
…でもまぁ、そこまで言うのならもらっておいてあげてもいいわよ？
ところであなた達虫けらにそんな仕事を頼んで来たのは、一体どんなクズだったの？」

彼女は満面の笑顔で、さらに男を問い詰める。

さすが女神様！本当に容赦がないですな。

「どんなって言われても…薄暗い酒場ん中だったし、しっかりフードで隠してやがったんで顔は見ちゃぁいません。ずるずると長い黒っぽいローブのようなもんを着てたってくらいしか…」

…長い黒っぽいローブ？　魔術師か？

「とにかく、あっしにはそれくらいしか…　うぐっ？　ぐはっ！」

髭面の男は突然泡を吹いて苦しみ出したかと思うと、バッタリと倒れてそのまま輝く粒子となって消えていってしまった。

「…口止めの為に消されたか？」

「おそらくそうでしょうね。ずっと見張られていたのか、それとも最初から使い捨ての駒として、遅効性の毒でも盛られていたか…」

俺達が考え込んでいると、金髪の少女がぴょこんと勢いよく頭を下げた。

「あっ！あのっ　危ないところを助けていただいて本当にありがとうございました。
お2人に助けていただかなかったら今頃わたし…わたし…　ううっ」

今までずっと我慢していたのだろう。少女の目からは涙がまるで滝のように勢いよく溢れだしていた。

「あぁ泣かないで。そうだ！こめかみの傷、直してあげる。そこの

ベンチに座って？」

女神は少女をベンチに座らせ両手で肩をぽんぽんと叩くと、その隣に仲良く並んで腰掛ける。

俺は手早く山賊どもが遺したドロップアイテムを回収した後、ベンチの前に突っ立って彼女達の様子を何とはなしに眺めていた。

「何してるの？ほら、あなたも座って？」

そう言うと、女神が自分のすぐ隣をぽんぽんと示してくる。

ちょっ！？　またですか？

さっきはまだ２人きりだったから良かったようなものの（いや、良くないのか？あ？２人きりだったんだからやっぱ良かったと言うべきか？）今はすぐ傍に金髪少女がいて妙に照れ臭い。

気恥かしさから少しだけ距離を置いてベンチに座ると、不満気な表情で女神にぐいっと引き寄せられてしまった。

うぉうぃ！ゼロ距離ですよ？ゼロ距離っ！　太ももと太ももがぴったり触れ合っちゃってますぜ。奥さん（誰？）

金髪少女は面白そうな顔で俺達の顔を見比べている。

「お２人は仲がいいんですね。何者にも屈しない凛とした綺麗なお姫様と、お強くてカッコいい騎士様のカップル。素敵～！本当にお似合いです。」

えええええええっ！？

「うふふ。ほんとにそう思う？嬉しいわ。」

女神は金髪少女に回復魔法を掛けてやりながら、まんざらでも無さそうに微笑みながらそんな事を言う。

…ちょっ!?えっ!?　女神っ!?　否定しなくていいんすか?いろいろと。

45．剣と死神の鎌（後書き）

ファンタジー系がお好きな方には今更…って感じかも知れませんが、一応念の為補足。

【バスタードソード】両手、片手持ち両用の大剣。斬る、刺す事に優れていて攻撃力が高い。剣身、グリップともに長く、バランスを取るのが難しい為、扱いには熟練を要する。

【ダガー】広く両刃短剣全般を示す言葉として使われる。この話ではダガーを投擲していますが、実際にスローイングダガーを投げようとすると、回転しながら飛んでいくので的に突き刺す事はなかなか難しいようです。毒を塗ってかすり傷を負わせるのが目的かな？

【スティレット】細身で突き刺す事に特化した両刃短剣。メインウェポンではなくとどめ専用としてよく使われる。

【シミター】シャムシール。中東の三日月刀。

【デスサイズ】いわゆる死神の鎌。いかにも中二病な武器ですが、一応現実にもああいう大鎌が武器として使われた記録はあるようです。農民の暴動とかでｗ
確かに隙が多すぎて実戦向きじゃなさそう。

46．山奥の村

「お姫様を守る騎士様…　ほんと素敵ですよねぇ。」

金髪の少女は胸の前で手を組むとうっとりとした表情で語り出した。

「実は私にも憧れの騎士様がいるんです。この街まで私を護って来て下さった方なんですが、いざ魔物を前にすると本当にお強くて、まるで猛々しい戦神のようで…けれど私にはとてもお優しくして下さって…それに、笑顔がとっても素敵な方なんです。」

何を思い出したのか、1人で頬を赤らめてもじもじしている。

…にしても、騎士か。

改めて金髪の少女をまじまじと観察してみる。確かに整った顔立ちだとは思うが、何の変哲も無い素朴な雰囲気の娘だ。その質素な身なりはいかにも都会に出て来たばかりの田舎娘だと主張しているかのようだった。

由緒正しき騎士などが護るべき対象としては、いささか貧相な存在に思える。

「そう。えーっと名前なんだったっけ？　…あなたはその騎士様のこと好きになっちゃったのね。」

にっこり微笑みながら女神がそう言うと、慌てて少女は自己紹介をした。

「あっ！申し遅れました。私の名前はエポナ・スウィフトといいます。

実は私、今日パルノの都に出て来たばかりなんですが、こんなにたくさんの人やお店を見るのって生まれて初めてで、ついつい興奮してしまって…。
すっかり嬉しくなっちゃって、あちこちのお店を覗いて回っていたら気が付いた時には迷子になってしまっていました。ここまで連れて来て下さった方…あ！それがさっきお話した憧れの騎士様の事なんですが、その方ともはぐれてしまったせいで、どこに向かっていいのかすらも分からなくて途方に暮れていたんです。」

彼女の話によると、彼女はパルノイエ南東部の山岳地帯にある地図にも載っていないような小さな村の出身で、生まれてこのかた自分達が住む村と山の麓にあるささやかな町しか目にした事が無かったらしい。
その村の住民たちは概ねみんな似たようなもので、村から一歩も出る事無く一生を終える者も少なくないのだという。

「でも、エポナちゃんは遠路はるばるこの王都パルノまで出て来たのよね？　それは一体どうして？」

優しい瞳で女神が問い掛けると、少女は複雑そうな表情をしながらもこう答えた。

「…ほんとのところを言うと、私、売られて来たようなものなんです。
私の育った村は貧しいところでした。厳しい気候の土地なのであまり農作物も育ちません。
山あいの僅かな土地に牛や山羊などを放牧して、時折ふもとの町に乳製品や家畜を売りに行く事でみんな細々と暮らしていました。
ところが先月の半ば頃、わざわざパルノ近郊から家畜や乳製品を買い付けに来る商人さんが現れたんです。

なんでも、商人さんのお話では最近王都パルノでは牛肉や乳製品がすっかり品薄になって価格が高騰しているのだとか。」

俺と女神は顔を見合わせる。

…フェルデンティアの異変で物が入って来なくなったせいか。

「その為に私達のところのような小さな村々にまで商人さんが訪れ、買い付けをして回っているのだそうです。」

「へぇ？　でも、エポナちゃんの住んでいた村からこのパルノまでは相当距離があるわよね？」

「そうなんです！　私達の村から王都まで乳製品を運ぼうとしても、そのままだと途中で腐ってしまいます。だから最初に来られた時、商人さんは家畜だけを買って帰られました。

でも次に村に商人さんが現れた時には、魔術師様と騎士様がご一緒だったんです。」

「は？　魔術師と騎士？　そんな連中がなんでわざわざ山奥の村まで？」

話がよく見えない。

「魔術師様は乳製品の運搬や保存に使われている容器や村の保管庫などに時空魔術を掛けて下さる為においでになったのだという事でした。

…なんでも時空魔術の遣い手というのは絶対数が少なくて、魔術師ギルドに限らず国そのものにとっても非常に貴重な存在なのだそうで、騎士様はその護衛の為に一緒に来られていたんです。

何しろ魔術師様はまだ大変お若くて、少年と言っていいようなお歳

の方でしたから。」

「…ふーん？　時空魔術師ならわざわざ護衛なんか付けんでも『転送』でさっさと往復出来そうなもんやのになぁ。」

そう呟くと、女神が俺の顔を覗き込みながらくすくすと笑った。

「それはいくら何でも無理じゃない？　そんな辺境の村、何の用も無いのに『メモリー』している時空魔術師なんていないでしょ？帰りは一気に飛んで帰るって言うのもアリかも知れないけど。」

それを聞いていた少女も力強く肯定して来る。

「そうなんです！　魔術師様はお越しになられた時は商人さんと護衛の騎士様とご一緒だったのに、お帰りの時は1人でさっさと魔術を使ってお帰りになってました。」

「えー？　それってさりげにひどくないか？」

「騎士様のお話だと、その魔術師様はまだお若くて未熟でらっしゃるので、『転送』で他の人まで飛ばす事までは出来ないのだそうです。」

…なるほど。スキルレベルが足りないって事か。

「でも今ひとつよく解らないわねぇ。その話とエポナちゃんの身売りがどう結び付くの？」

「それなんですけど…」

少女はまた複雑そうな表情になると、長い金髪を落ちつかない様子で弄くりながら続けた。

「村に来られた騎士様は私の顔を見た途端、雷に打たれたような顔をなさいました。

…後から聞いたお話だと、私の顔は騎士様がお仕えになっておられるご主人様の亡くなられた奥方様に生き写しだったのだとか。

騎士様が早速魔術師様のお力を借りて王都におられるご主人様と連絡をお取りになると、ご主人様の方もたいそう乗り気になられて、私の事を『是非、後添えに。』とお望みになられたのだそうです。」

騎士が仕えてるくらいなんだから、おそらくそのご主人様とやらはそれなりに身分のある貴族なんだろう。

「…私の家には、まだ幼い2人の弟と3人の妹達がいます。牛を買えるようなお金は無くて、ずっと一頭の山羊だけを飼って細々と暮らしていました。

私がそのご主人様の後添えにさえ入れば、うちの家族達が一生生活に困る事の無いよう保証する。と騎士様は約束して下さったんです。

…それに、あのダークブラウンの瞳でじっと見つめられて『私と一緒に来て下さいますか?』なんて熱っぽく言われてしまったら、私…とてもお断りなんて出来なくて。」

「なるほど…そういう事ね。」

「で、その騎士様とやらと一緒にパルノまで出て来たものの、舞い上がっちまってはぐれたあげく、暴漢に襲われたって訳か?」

「うっ……はい」

「そういや、パルノまではその商人とやらは一緒じゃなかったのか？」

「はい。商人さんは近隣に足を伸ばしてもう少し家畜を買い付けてからパルノにお戻りになるとかで、村でお別れして来ました。」

でも、どうにも納得いかない事がある。

…あの髭面の男は、魔術師らしき人物に「この少女を攫え」と依頼されたと言っていた。

パルノに来たばかりの少女を襲うなど、内情に詳しい人物に違いない。

犯人は騎士と一緒に辺境の村まで出向いたという少年時空魔術師なのだろうか？

それとも村で別れたという商人が関与してるんだろうか？

ご主人様とやらが再婚すると都合が悪い人物の差し金か？…ひょっとして財産狙いとかか？

俺と女神は、しばらくそれぞれの考えに沈み込んでしまっていた。

◇◆◇

「はぁはぁ…やっと見つけた！」

突然、背後からひどく焦った声が掛る。振り返ると彫りの深い整った顔立ちの男が息を切らして立っていた。

平服姿ではあるものの、腰に下げられた意匠の凝った剣と姿勢のよい流れるような動きがその男の身分を物語っている。

「エポナさんっ！　一体今までどこに行っていたんですか？　随分探しましたよ。」

男はゆるく三つ編みにした長いブルネットの髪を背中へと跳ね上げながら少女に問い掛けた。
そんなさり気無い動作をしながらもこちらの気配を油断無く窺い、いつでも剣を取れる状態を保っているのが分かる。

「ガラハッド様っ！　ご迷惑をお掛けして本当にすみませんでした。このような都会に出て来たのは初めてで、私、すっかり舞い上がってしまって…。」

「いえ。目を離した私が悪いのですから、そのような事はお気になさらないで下さい。…ところでこの方達は？」

丁寧な言葉を遣ってはいるものの、こっちに向けられているのは明らかに胡散臭い物を見る目だ。

「私が困っていたところを、こちらのお姫様と騎士様が助けて下さったんです！」

って！まだ言うか！？
さすがに本職の騎士に向かって「騎士様です」などと紹介されてしまうと、恥ずかしくて憤死してしまいそうだ。

「エポナちゃん？　何だか素敵な誤解をしてくれているみたいだけど、私達はそんな大層なものじゃないわよ？　私のこのティアラは単なるファッションなの。そして、彼も私も単なる一介の冒険者に

過ぎないわ。彼が騎士様のように立派な剣士である事は事実だし、彼が私だけの騎士様になってくれたらいいなぁ。…なーんて思っていたりはするのだけどね。」

ふふっと笑って女神はそう言うと、少女に向かってパチッとウィンクなんぞをして見せた。

46. 山奥の村（後書き）

エポナの名前はケルト神話の馬や家畜を司る女神の名前からとりました。
騎士を守護し、治癒を与える女神でもあるそうです。

47．田舎娘と騎士

少女に「ガラハッド様」と呼ばれた男はこちらに向き直ると、深々と頭を下げた。

「この方を助けて下さった事、心から御礼を申し上げます。こちらの方は私にとって命にも代えがたい大切なお方なのです。そんな大切な方から私は目を離してしまった。騎士にあるまじき不注意で、誠になんと言ってお詫び申し上げていいものか。」

”命にも代えがたい大切なお方”というくだりで真っ赤に頬を染めていた少女だったが、あくまで自分を責めようとする騎士に対して慌てて口を挟んで来る。

「そんな！ガラハッド様は何も悪くなんかありません。私があんな店に入ったりしなければ良かったのです。」

…あんな店ってどんな店なんやろ？

「いえ、やはり私はあなたから離れるべきでは無かった。変に身構えたりせず、正々堂々と一緒に入店していれば問題無かったはず。」

「でも、あのような店にガラハッド様のようなご立派な騎士様が入られては、おかしな目で見られたり、あらぬ誤解を受けてしまわれます。」

…話が見えんけど、おそらく女性用の衣類でも扱ってる店にでも入ったとかか？
下着でも見てたんやろか？

「って言うか、あんたらさ。そんな話今はどうでもいいやろ。他にもっと話すべき事があるんちゃうか？　エポナちゃんは柄の悪い野郎共に輪姦されそうになっとったんやで？」

「なっ！？」

ガラハッドは一瞬ギョッとして目を剥くと、少女の肩を両手で力強く掴んで揺すぶった。

「今の話は本当ですか！？　ご無事でしたか？」

先ほどまで肌けていた胸元は一応整えられてはいたものの、ガラハッドは無理矢理引き千切られたボタンに気付くと、痛ましげな表情でぎゅっと少女を抱き寄せた。

「辺境ならいざ知らず、この治安の良い王都パルノでまさかそのような事が起きるとは…」

その言葉を聞いて、女神が首を傾げている。

「治安の良い王都パルノ…ねぇ？　女の立場から言わせてもらえば、夜のこの街は女性にとってはそれ程安全な街とも言い難いと思うんだけど。」

どうやら、この騎士と俺たちの認識には差があるようだ。

「そんな馬鹿な…いや、でも私は任務の為にここ数年はパルノの街にいない事の方が多かったから、街の変化に気付けないでいたのかも知れない。

あなた方が悪い訳ではないとわかってはいるのだが、昔から言われているのだ。
街に多くの冒険者達が現れる時、また同時に多くの魔物や荒くれ者たちも現れるようになると。」

…不名誉ではあるが、その伝承は事実だろうと思う。
今までに受けたクエストなどでこの世界の住人達と交わした会話を思い起こしてみると、この世界は魔物などの存在はあるものの、普段は適度な距離感で共存していて、それなりに平和を保っているようなのだ。
ゲームなのだから当然の事だが、人々の手に負えないような魔物や荒くれ者どもを討伐して欲しいなどというクエストは、冒険者の為にわざわざ用意されたものだ。
つまり、人々の手に負えないような事態が頻発している。という時点で、この世界で元々暮らしている住人達にとっては冒険者達がいなかった時代よりも現在の方が治安が低下しているのは事実なのだ。

「冒険者と治安の関係については私達には何とも言えないけれど、今回の件に関しては単なる偶然って訳では無さそうよ？　エポナちゃんを狙った連中は彼女を攫うようにわざわざ依頼されたって言っていたわ。」

「…まさか！？　何故この街に彼女がいる事が…」

ガラハッドはブツブツ呟きながらも、さらに強く少女を抱き締めていた。
っておーい！
エポナちゃんはお前の主君の後妻になるんとちゃうんか！？
っていうか、こいつら本当は相思相愛なんじゃねえの？
くそっ！リア充爆発しろ！（↑？）

「レディィ、その暴漢たちはどういった連中だったかお聞かせ願えませんか？　…依頼者はどんな奴だったかわかりますか？」

なーにがレディィだ。　このタラシが！

「それが…詳しい事を聞き出そうと思ったら、毒か何かを盛られていたみたいで、殺されちゃったのよね。

と言っても、消された男は元々大した事は知らないみたいだったけど。

わかったのは襲ってきた暴漢たちが山賊風の風貌だったって事と、依頼者はどうやら魔術師のようだって事ぐらいかしら。」

女神がそう告げると、ガラハッドは宥めるかのように優しく少女の髪を撫でながら首を傾げていた。

…その手は無意識なのか！？　天然スケコマシめ！

「山賊…この国には、あまり山賊はいないのだが…いや、サン・ラモン周辺にあまり柄の良くない連中がいるという噂は聞いた事があるな。」

ガラハッドの話によると、パルノイエ南部には高くそびえる山岳地帯が続いているが、メインの街道からは大きく外れてしまっている為、南部で遭遇する敵は魔物の類がほとんで人間の盗賊などは滅多にいないのだそうだ。

交易ルートじゃないから、襲ったとしても大して旨味が無いのだろう。

…にしてもだ。

またサン・ラモンか。　やけに最近よく聞く名前だ。

今回の暴漢騒ぎも、例の失踪事件とどこかで繋がっているんだろうか？

「とにかく、こういう事があった以上、私も至急主人の元に帰って報告せねばならない。
お二方には申し訳ないが、後日きちんとした謝礼をさせていただきたい。
お名前と滞在先などを教えていただけないだろうか？」

ガラハッドがしっかりと少女の肩を抱いたまま聞いて来た。
こいつ…イケメンなだけに余計腹立つわ。

どう返事したものかと迷っていると、女神が先に口を開いていた。

「いえ、私達は冒険者として当然の事をしたまでですから。
わざわざ日を改めてのお礼だなんて、気を遣っていただかなくて結構です。」

ガラハッドは納得いかない様子で、さらに食い下がって来る。

「それでは私共の気が済まないのです。そのまま帰したとあっては、主人も納得しないでしょう。
せめてお名前だけでもお聞かせ願いたい。」

口を開こうとすると、突然個別チャットの呼び出し音が響き渡った。

――――　フォン！

『言っちゃダメ！』

!?　この声は女神っ!?　まじまじと俺が女神の顔を見ると、彼女は目線を合わせないままこう言った。

『この騎士とそのご主人様とかいう人物は、一連の事件に大きく関わっているような気がするの。もしこれが国家的な陰謀だったりしたら、下手すると事情を知った私達は消されてしまうかも知れないわよ?』

さすがに殺されるという事は無いだろう。
これはあくまでゲームだから、戦闘不能に陥ったとしても復活すればいいだけの話だ。
でも投獄されたりして自由を奪われる可能性は無いとも言い切れない。

投獄か…そういや、昔やってたネトゲでジェイル(監獄)送りになった事があったな。

一部のネトゲにはジェイル(監獄)と呼ばれるマップが存在している。
GMが強制的に転送させた場合にだけ出入り可能な特殊な部屋で、「出入口が無く、暗く、狭く、一切のスキルが使用出来なくなり、オープンチャット以外のチャット機能が封印される」などの特徴がある。
いわゆる不正行為や迷惑行為によるペナルティや、GMからの事情聴取などに使われている部屋だ。
ちなみに俺がジェイル(監獄)送りにされた時の経緯は全くの濡れ衣だった。
高額なレアドロップを落とす敵が出るマップにしばらく篭って狩りをしていたら、同じターゲットを狙ってそのマップに張り付いていたBOTの飼い主に、敵認定を受け、粘着されてしまったのだ。
BOTの飼い主は俺のキャラの迷惑行為や不正行為を適当にでっち

上げ、ＧＭに通報したらしい。
１～２件の通報程度じゃＧＭはあまり動く事はないが、あろう事かＢＯＴ野郎は自分の持ちキャラを片っ端から使って次々に通報していったのである。
さすがに１００件を超える通報が寄せられたとあっては、ＧＭも動かない訳にはいかなかったようだ。
ある晩ログインしてみると、俺は問答無用でジェイルに送られていた。
釈明しようにも、ずっとソロでのプレイだった為に証明してくれるような人もいない。
何を言っても信じてもらえず、平行線のままだらだらとジェイルに拘束される日々が続いた。
…２年以上掛けてじっくり育てたキャラがある日突然、全く使用不能になってしまったのだ。
俺はすっかりアホらしくなってサブキャラを育てようという気にもなれず、あっさりとそのゲームを辞めてしまった。

『…わかった。事件の全容がわからない以上、危険は避けた方がいいかも知れへんな。』

俺はガラハッドたちの方に向き直ると、こう告げた。

「悪いが俺達は名乗るつもりは無い。通りすがりの冒険者とだけ言っておこう。
エポナちゃん、今回の事は災難だったがご主人様にたっぷり可愛がってもらって幸せになるんだぞ？」

最後の一言はむかつくイケメンに対する意趣返しだ。
さすがに主君の後妻に納まった後の彼女には手出しが出来ないだろ

う。

そう思っていたら、その場にいた3人全員から微妙な視線を送られてしまった。

『…ヴォイドさん。今のはちょっとあまりにも…女心をわかってないって言うか…男らしくないわよ？』

くっ！　女心がわかってたらとっくの昔に童貞なんか捨てとるわっ！！

「…承知した。そこまで言われるのなら、もう何も言うまい。今手持ちがあまり無いのだが、せめてもの礼にこれを。」

ガラハッドは中指に嵌めていた巨大なエメラルドの指輪を外し、懐から取り出した皮袋と共に手渡して来た。

「その指輪は光を当てると、我が主君の紋章が浮かび上がるようになっている。もし、この国で庇護が必要になった場合はその指輪の事を思い出すといい。」

それだけ言うと、ガラハッドと少女は軽く会釈をして去って行った。

47．田舎娘と騎士（後書き）

異世界ものでなぜかイケメン騎士は万年発情しているというテンプレ。

48．姫様と俺

騎士と少女の後姿を見送った後、一息ついて現在時刻をチェックしてみると22時半だった。
ちなみにゲーム内時間の方は8月4日の昼を過ぎたあたり。
VRモードユーザーである長船やユキノさん達がログインしてくるまでにはまだもうちょい時間がありそうだ。

…さて。どうすっかな？
せっかく女神ともお知り合いになれた事だ。ここはひとつ彼女を誘ってどこかの狩場にペア狩りに出かけるというのも悪くないかも知れない。
どこに行こうか？

そう考えた途端、「ぐーきゅるきゅる～」と腹が情けない音を立てた。
あー考えてみりゃまだ夕飯食ってなかったっけか。

「そういや女神、もう飯食った？」
「へっ！？」

何気なく訊いた俺の言葉に、女神はハトが豆鉄砲を食らったみたいな顔をしている。

「あ…あの？　ひょっとして、女神って私の事？」

あ〝！？　　あぁぁぁぁぁぁぁぁ！
思わず脳内で呼んでいた敬称で呼んでしまった！　…やっちまった。
うぅっ　穴があったら入れたい（違っ　入りたい。

しばらく失意体前屈（〇┬┴┬┴）で悶絶していると、女神が優しく声を掛けて来てくれた。

「ヴォイドさんって私の事女神だなんて思っててくれたんだ？　ちょっと恥ずかしいけど、でも嬉しいかも。」

手を引いて俺を立たせながら、にっこりと微笑みかけてくる。

うあぁぁぁぁ　死ぬっ　恥ずかしくて死ぬっ

「けど、さすがに女神は気恥かしいからやっぱり月猫（ゆえにゃお）って呼んでくれる？」

…でも彼女が俺の中で女神のような存在である事に変わりはない訳で。

「じ…じゃあ、妥協して『姫』って呼んでも？」

「妥協って…　一応キャラ名が『月猫姫』だから、別に『姫』でもおかしくは無いとは思うんだけど…でも、うーん。やっぱ照れくさいなぁ。」

「いやそこは譲れない！キリッ」

「キリッて！？　あはは、そこ口で言っちゃうんだ？　やっぱりヴォイドさんて、おもしろいね。」

そう言ってくすくす笑いながら、女神改め姫は俺の顔をまじまじと覗き込んで来た。

「で、何の話してたんだったっけ？　あっそっか。ご飯ね。うん、もう済んだよ。
ヴォイドさんは？　って、わざわざ私に聞くくらいだからまだ食べてないんでしょ？　一旦落ちる？　いいよ。適当に待ってるから気にしないで食べて来て？」

「えっ！？　いや、でも…このままここにキャラ放置して、適当にカップ麺でもサクっと食おうかなって思ってた。」

すると彼女は嬉しそうな笑顔を浮かべて、こう言った。

「そうなんだ？　じゃあ私もここで待ってるわ。」

◇◆◇

ＧＳＰを放置してキッチンに行き、手早く電気ケトルをセットする。
がさごそと棚を漁ってカップ麺を取り出し、袋を破ったりなんだりしてる内に湯が沸いた。
あー電気ケトルまじ便利。ネトゲ廃の強い味方だな。
カップ麺を手に部屋へ戻ると、テーブル上に置いたＧＳＰに再び目を落とす。

ちょっ！？　えっ？

ＧＳＰの画面上には、こっくりこっくり居眠りをしている俺のキャラのほっぺたをつんつん突いたり、むにむに引っ張ったりして遊んでいる姫の姿があった。
…おもちゃにされとるやん。

脇に置いたＧＳＰの画面を横目で見ながら、ズルズルとカップ麺をすする。
姫はベンチに座っている俺の正面に回り込んで前屈みになると、下から寝顔を覗き込んでいた。
…何やってんだ？　この人。
そう思った途端、不意に姫が俺の膝に両手を付いて体を伸ばし、眠っている俺の頬にチュッとキスをした。
えええええええええっ！？
ちょっとちょっとちょっと！　今のシーン、リプレイお願いします。
あ、今度はスーパースローで。
ってそうじゃなくて！　…何なんや？今のは！？　思わずカップ麺噴くとこやった。
…にしても…やべぇ。こんなもん見てしもたら、どんな顔して戻ればいいかわからんわ。
って言うか、見てたってバレるのもキツくないか？コレ。
俺が食べ終わったカップ麺を片手にどうしたものか頭を抱えていると、姫はまた下からじーっと俺の顔を覗き込み、チュッとまた反対側の頬にキスをしてくる。
うぉぉぉい！ちょーーーっとマテ！！
戻るに戻れへんくなるやろがー！！
俺は席を立ってカップ麺の空容器を片すと、ベランダに出て煙草に

火を付けた。
ぼんやりと煙を眺めながらゆっくりと1本吸い終えた後、洗面所で顔を洗って気合を入れ直すと、意を決しイヤホンマイクを装着してＭＬＯの世界へと戻る事にしたのだった。

◇◆◇

「ただいま」

俺が言葉を発すると、隣に腰掛けていた姫は嬉しそうにパッと笑顔になって「おかえりなさい！」と言ってくれる。
…うっ！やべぇ　可愛い。

「あ…あの…」

こういう場合は、なんて言えばいいんだ。
さっき俺にキスしてた？とか聞いていいもんなんか？　…いやここはやっぱり知らんふりしとくべきなんやろか？

「あ！　…ひょっとして見てた？」

はっきりしない俺の態度でどうやら姫の方が察したらしい。

「え！？　あ、全部見てたって訳でもないけど。…まぁ、うん。」

「そっか。ヴォイドさんの寝顔ってなんかクマさんみたいで可愛くって。見てたらついついイタズラしたくなっちゃった。ごめんね？」

クマさんですと!?
…むしろ熊は熊でもどっちかって言うと、淫乱な方のテディベアって感じなんですが。
まぁでも確かに熊っぽいと言えなくはないかも知れない。
大剣を扱う事を念頭に置いてキャラメイクしたから身長１９０ｃｍ以上はあるし、全身にがっちり筋肉が付いていてかなりガタイがいいタイプだ。顔は普通に西洋人風イケメンやけど。

なんて返事したものか迷っていると、姫は慌てて続けた。

「怒っちゃった？　勝手に変な事してごめんなさい。でも私、ヴォイドさんの事好きなの。」

すき…隙、鋤、漉き？　好きですとぉ!?
悲しいかな、生まれてこの方女性にそんな事を言われた事がない。
…今のはおそらく幻聴だろう。

「んー。ひょっとすると私、さっきのガラハッドさんとエポナちゃんに当てられちゃったのかも。
騎士様に大事に大事にされてる彼女の事が羨ましかったのかも知れない。
そんなエポナちゃんに『お姫様と騎士様のお似合いカップルですね』だなんて言われたもんだから、つい調子に乗り過ぎちゃったなぁ。
…現実には全然そんな関係じゃないのにね。」

彼女は寂しそうな表情で瞳を伏せている。

「でも、剣を手に私達を守って戦ってくれたヴォイドさんの姿は本当に格好よかった。
エポナちゃんのノロケじゃないけど、まるで闘神みたいだったよ？

実際の騎士を良く知ってる訳じゃないけど、エポナちゃんが騎士と間違えたのも無理ないなって思ったし。
だから『この人が私だけの騎士様だったらどんなにいいだろう。』だなんて、勝手な夢を見ちゃった。…ヴォイドさんの気持ちも考えずに1人で暴走してごめんね。」

謝るだけ謝ると、立ちあがって逃げ出そうとした彼女の腕を、俺は慌てて掴んで引き寄せた。

「や。別に勝手な暴走なんかとちゃうから。
俺は姫の事、大事に思ってるで？　そもそも騎士が何たる物かなんて俺にはようわからんし、姫の事をスマートにエスコートするなんて事は出来そうもないけど…それでもいいって姫が言ってくれるんやったら…」

俺は立ちあがると姫の前に両膝をついて跪いた。鞘ごと剣を外し、柄を彼女の方に向ける。

「俺の剣を姫に捧げる。俺を姫だけの騎士にして下さい。」

姫はしばらく呆然として、信じられないものを見るような目で俺の顔を見ていた。

「…うそ!?　ホントに?」
「ほんとほんと。重いし、照れくさいから、これさっさと受け取ってーや。」

茶化しながらそう言うと、ようやく彼女も笑って剣を受け取り、ファンタジー映画のワンシーンさながらに、剣の平で俺の肩を軽く叩いたのだった。

◇◆◇

「さて、それじゃ姫。早速やけど、この後どうしたい？どっかペア狩りでも行こか？」

「そのお誘いも魅力的なんだけど、さっきの山賊達のドロップとガラハッドさんから受け取った報酬をまだ分配してなかったよね？先に分配して一度銀行に預けてから出掛けない？」

そう言うと、姫は山賊のボスから手渡されたズシリと重い皮袋の財布を差し出して来た。

なるほど。確かにコレは重かっただろう。

ＭＬＯでは、個人のインベントリには結構な量のアイテムが入るようになっている。

でも、それぞれのアイテム（現金含む）には重量が設定されていて、欲張ってあまりたくさんの物を持っていると動きが鈍くなり、スタミナが切れやすくなってしまうのだ。

俺のような筋肉派タイプはともかくとして、姫のようにあまり力が無さそうなタイプだと、この重量制限はかなりネックになって来るらしい。

「…しかし、思ったより入ってんな。エポナちゃんを攫うように依頼した魔術師ってのは、よっぽど金回りがいい奴やったんやな。」

そんな話をしながら他の山賊たちが落としたドロップとガラハッドから手渡された報酬を取り出してベンチに並べていく。

「山賊どもの落した武器やアイテムの類にはあんまり大したもんないな。適当に店売りして現金にしてええか？」

「うん。それでいいよ。」

「このエメラルドの指輪はどうすっかなー。姫が嵌めるにはちょっとサイズがデカいだろうし、長船の奴に頼んでチェーンでもつけてもらうか？」

「…うーん。確かに綺麗だけど、いわく付きのアイテムだし、普段はあまり身につけて置かない方がいいと思う。インベントリに入れて携帯して置くのがベストじゃないかな。」

「わかった。それじゃ、姫持っといて。」

宝飾品の類だし、俺が持ってるよりは女の子が持っていた方がいいだろう。

「え？　でもそれどう見ても男物のデザインだよ？」

「そういうもんか？　んじゃ一応俺が持っとく。女物やったら姫にあげれたのにな。」

「……そだね。」

…なんや？　今の間は？？

まるで何事も無かったかのように、姫はベンチの上のアイテムを検分している。

「あれ？　これは何？」

「あぁ。これか？　これは山賊のボスが殺された後、残ってたアイ

テムやな。」

それは小さく筒状に丸められた紙だった。
山賊がいつも懐に入れていたのだろう。端の方がところどころ破れている。
広げてみると、そこには描かれていたのはエポナの姿だった。

「多分これ、例の魔術師が山賊どもに誘拐を依頼した時に渡した目印とちゃうか？」
「そうでしょうね。でもこれ、よく見て？…ねぇ、変じゃない？」

そう言われて、改めてエポナの肖像画をまじまじと観察してみる。

「あれ！？これって？」

絵の中でにっこりと微笑んでいるエポナの姿は、俺達が出会った時に着ていた田舎娘らしい素朴な服ではなく、煌びやかなドレスを纏っていたのだった。

48．姫様と俺（後書き）

うん。書いててちょっと痒くなった。

――――――――

ところで、実際の騎士が叙任式に臨む際には、禊の為に前日の晩は全裸待機するという習慣があったらしいですよ。
全裸のままベッドに入って眠ったり、一晩中祈り続けたりしてたそうです。もちろん全裸で。

49．彼女の秘密

「これってどういう事だと思う？」

山賊が落としたエポナ（？）の肖像画を覗き込んだまま、姫が呟く。絵の中で微笑む少女は、エポナと同じ顔をしていたものの、おそらく彼女が生まれてから一度も目にした事すら無いであろう立派なドレスを身に付けていた。

「カメラがある訳でもないのにこの精巧さ…俺は美術にはあんまり詳しくないからようわからんけど、これって本人を目の前に座らせて描いたとしか思えへん出来栄えやな。…けど、山奥の村で育ったエポナちゃんがこんな絵のモデルになっていたはずもないやろうし、着ている衣装も不自然過ぎる。…まるでよく似た顔の別人を描いたみたいやな…」

…ん？よく似た顔の人物？

「たしかエポナちゃんはガラハッドのご主人様とやらの亡くなった奥方に生き写しやったから、後妻に望まれてパルノまで連れて来られたって言ってたな？」

「と言う事はこれが亡くなった奥方様なのかしら？…貴族の奥方にしては随分若い人だと思わない？」

詳しい事は聞かなかったが、エポナの年齢はおおよそ１７～８歳ぐらいだろうと思う。

絵の中で笑う少女の姿もまた精々１５～６歳くらいにしか見えなかった。

「奥方様の若い頃の絵を見せて、『この娘によく似た娘がパルノに現れたら攫え』とか命令したって事か？」

「…本当にそうかしら？ここをよく見て？」

そう言って姫が指したのは、肖像画の右下に入れられた作者のサインだった。

達筆すぎて名前の部分は読めなかったが、その下にはこの絵が描かれた日付が入っていた。

「７．７．１７４０？　ってこれ！たったひと月前に描かれた絵って事か！？」

この絵が本人を前にして描かれた絵だとすれば、その奥方様とやらは１ヶ月前にはまだ生きていたと言う事になる。

「…こんな可愛い若い奥方、つーか幼妻をもらってて、しかもそれがつい最近亡くなったばかりやっていうのに、いくら顔が似てるからって、あっさり新しい嫁さんもらうもんなんやろか？」

「ちょっと私達の常識からすると考えにくいわよね。この世界のお貴族様っていうのは根本的に考え方が違うものなのかしら？　それとも身代わりでも何でもいいからそばに置いておきたいくらいすごく愛してたとか？」

「どやろなぁ？貴族の結婚なんて家同士の結びつきみたいなもんで、愛情とか無いかも知れんしな。」

「…家同士の結びつき…愛情がない…愛情がないのに身代わりが必

要って事？」

姫は肖像画を手にしたまま、しばらく考え込んでいた。

「あ！」

突然、姫が大きな声をあげる。

「なんや？いきなりびっくりするやん。謎が解けたとか？」

「あ、ううん。違うの。今友達からＷＩＳ（個別チャット）が入ったから。ちょっと待ってね」

「わかった。そしたらついでやし、今のうちに他のドロップアイテムさくっと店売りして来るわ。」

そう言って俺が立ちあがろうとすると、つん！と引っ張られる気配がする。

見ると、左手の小指を姫に掴まれていた。

彼女はまるで「しまった！」とでもいうような顔をして、慌てて手を離すと恥ずかしそうに俯いている。

それでも「…うん。わかった。いってらっしゃい」と小さな声で答えてくれた。

ぐはっ！

なに？この可愛い生き物。これは「行かないで」って事ですかっ！？

俺は思わず彼女をぎゅっと抱きしめると、背中をぽんぽんと叩いて「じゃ、ちゃちゃっと行って来るから！」と、近場の道具屋へと走った。

◇◆◇

『セシル？おまたせ』
『うん。全然平気。そっちこそ急にＷＩＳ入れちゃったけど平気だった？誰かと一緒だったとか？』
『大丈夫よ。今、パルノの街でのんびりしゃべってたとこ。』
『へぇ？暇さえあればスキルあげに勤しんでた月猫にしては珍しい～！てっきり月猫って効率最重要視だと思ってた。』
『あは。それは否定出来ないかな。』
『一体どういう風の吹きまわし？あ！ひょっとして、おしゃべり相手って男の人？』
『そうだけど？』
『やっぱり！　私達が「雄鶏と火口箱亭」で結婚の話してた時、月猫だけ興味津々だったもんね。いい人見つかったんだ？』
『…まあね。』
『うわっ！見てみたい！イケメン？月猫が選ぶ人ってどんな人だろ？今から合流していい？ダブルデートって事で４人でどこか一緒に狩りでも行こうよ！』
『わかった。パルノの城門前で集合しましょ。それじゃ後でね。』

そう言って会話を切ると、月猫姫はにっこりと妖艶な笑みを浮かべた。

…いい人？見つかったわよ？　とってもいい　人（カモ）　がね。

ヴォイドが出会いの瞬間から自分に気があった事はその態度の端々

で解っていた。
適当に気を惹くような演技をしていたら、たったの数時間であっさりと自分専属の騎士になるとまで言い出した単純な男だ。
セシルと汐音と共に出掛ければ、あのバカップルぷりに当てられて、今度は「結婚」について　自発的に　考えるようになるに違いない。
そうなれば後は思うままだ。
…精々搾り取らせてもらうわね。　私だけの騎士様。

◇◆◇

俺が道具屋から戻ると、姫が立ちあがってにっこり笑顔で迎えてくれた。

「おかえりなさい。」
「ただいま。ＷＩＳの方はもういいんか？」

今回の報酬をまとめて全部彼女に手渡しながら訊ねる。

「大丈夫。一応話は終わったから。って、これ全部いいの？」
「今回は大したアイテム無かったしな。指輪は俺がもらったから、姫が全部とっといたらええ。」

実際のところはあの指輪はいわく付きの為、資産価値としては微妙な気もするが、最近プレイ開始したばかりの姫に比べれば俺の方が若干懐具合には余裕がある。
多少色を付けておいてあげた方がいいだろう。

「ありがたくもらって置くね。…ちょっと考えてる事があるから、お金貯めないといけないんだ。助かるわ。」

なんやろ？　なんか欲しい装備でもあるんかな？　何やったら俺がプレゼントすんのに。

いきなり聞き出すってのも何だから、折を見てさり気無くリサーチしてみる事にしよう。

「あ、そうそう。さっきのＷＩＳなんだけど、魔術師ギルドの同期から『ダブルデートしないか？』って誘われたの。一緒に行かない？」

って、なにーーー！？　ダブルデートですとっ！

何そのカップルっぽい初々しい響きのイベント！

そんなシチュエーション、エロゲでしか経験した事ねーわ。

俺は内心の動揺を抑えつつ聞いた。

「別にいいけど、どこ行く予定なん？」

「まだ決めてないよ。とりあえずパルノの城門前で待ち合わせなの。行こっか！」

そう言うと姫はくすくす笑いながら、俺の手を取り城門へと駆け出したのだった。

◇◆◇

パルノの城門前に着くと、おそろいの薄紫の髪をしたカップルが既に待ち構えていた。

「こんばんわ。はじめまして」
「はじめまして、私セシルです。で、こっちが旦那の汐音。よろしくお願いします。」

セシルと名乗ったツインテールの女が姫の腕を引っ張ると、彼女の耳元で囁く。

「ねっねっ!?　これが月猫のダーリン!?　おっきい人だねぇ！　クマさんみたい。
月猫ってこういうタイプが好みだったんだぁ？　なんか温かそうな人だね。へぇ！良かったじゃない。」

…いや、全部聞こえてるんすけど。
ていうか、わざと聞かせる為にやってたりする!?

姫は俺の顔をチラッと見ると、照れくさそうに目を伏せて「もうっ！恥ずかしいじゃない。やめてよっ」などと言っている。

恥ずかしいのはこっちデスヨー。
何とかいたたまれない気分を誤魔化そうと、俺は聞いた。

「…で？どこに行く予定？」
「えっ？あっ、ここパルノから南の方にある『青の谷』って知ってますか？」

さり気無く俺の事を観察していたらしい旦那の方の汐音が慌てて答えた。

「『青の谷』か。名前だけは聞いた事あるな。たしか『コボルトの谷』って呼ばれてるとこだろ？」
「そうそう！そこ。　急激に沸きさえしなければペアでちょうどいい感じに狩れるし、結構起伏に飛んでて景色がいい所なんでおススメです。」

…いわゆる狩りデートスポットか。

「けど、そこって結構距離無かったっけ？　誰か時空魔法持ちがいるん？」

そう聞くと、セシルが嬉しそうにツインテールを揺らしながら答えてくる。

「大丈夫！　走竜（オスタード）に乗っていけば、２時間もあれば着くから余裕だよ？」

なるほど。なら特に問題無いか…
そう思った途端、姫が悲しげな声をあげた。

「あの…私、まだオスタード持ってないんだけど？」

49．彼女の秘密（後書き）

姫は姫でも腹黒姫だったという。

ヴォイドたん逃げてーw

50．課金と非課金

「あの…私、まだオスタード持ってないんだけど？」

姫の悲しそうな声に、思わず他の3人は顔を見合わせた。

「あー、まぁ無理もないわな。姫はまだプレイ開始してから日が浅いんやし。

っていうか姫と同期って事は、あんたら2人も第3次クローズドβ組なんやろ？　にしては、もうオスタード持ってるて早やないか？」

走竜（オスタード）は、このＭＬＯの世界では重要な移動手段だ。

旧ＭＬＯ時代には各街の入口に各所を繋ぐ転送サービスが存在していたらしいのだが、現時点では近隣の住宅地への転送のみに限られてしまっている。

その為、時空魔法が使えないプレイヤー達の一般的な移動手段となると、オスタードに頼るか徒歩でテクテク行くぐらいしか方法がないのだ。

一応、乗合馬車（馬車と言っても引っ張ってるのはオスタードだが）のようなものも無い事は無いのだが、大都市とその周辺にあるいくつかの町や村を繋いでいる程度で、出発も不定期、乗り継ぎが不便…など様々なデメリットがある為、利用するプレイヤーはほとんどいなかった。

大抵のプレイヤーにとって、用があるのは周辺のちっぽけな町や村ではなく、ＭＯＢの沸くフィールドやダンジョンだからだ。

とは言っても、オスタードはなかなかの高額商品の為、そう簡単に誰でもが買えるような代物でもない。

購入には年齢制限（未成年は購入不可）もあるし、購入時には騎乗訓練のクエストを受けて騎乗許可書の発行を受けなくてはならない

ようになっている。（車の免許みたいなもんだな）

「オスタードって、乗ってる間は雑魚敵には襲われなくなるから初心者でも割と安心して遠出出来るようになるでしょ？　汐音と2人であちこちデートするには、あった方が絶対便利だろうと思って、プレイ開始してすぐに買ったんだ。」

セシルがそう得意気に胸を張って答えて来る。

「…え？　プレイ開始してすぐ？　よくそんな大金持ってたなー」

「あぁ、違う違う！　俺達、まだ初心者だし、ゲーム内通貨はほとんど持ってないよ？
オスタードはゲーム内通貨だと最低でも７００，０００Ｇからだから、とてもじゃないけど無理無理。」

即座にそう汐音に否定された。

「って事は課金か！」

オスタードは、基本的には各都市の郊外にある専用の市場で競りで購入する事になっている。
市場に行って出品されているオスタード達の中から気に入ったものを競り落とすのだ。
一口にオスタードと言ってもその色や模様、性格などそれぞれに様々な特性があり、特に魔物に屈しない精神と、強い脚力を持っている個体は高値で取引されていた。
ちなみに、その競りのスタート値が７００，０００Ｇからなのだが、確かにこの金額はプレイを開始したばかりの初心者がポンと払える

ような金額ではない。

「まだβ期間中のゲームやし、さすがに課金まで考えた事無かったわ。随分思い切ったもんやなぁ。」

「うん。このゲームだと一応旧ＭＬＯっていう実績があるしさ、そうそう簡単な事ではポシャッたりしないだろうと思って。」

…いや、３ＤＭＭＯバージョンのＭＬＯ２って言うのがオープンβで大コケしたっていう実績もあるんやけどな。知らんのやろか？…これは黙っておいた方が良さそうな気がする。

すると、それまで黙っていた姫がおずおずと口を開いた。

「オスタードって、課金でも買えるの？」

「だよー。グローバルオンラインチケット３，０００円分で買えるの。

と言っても、市場で競りに出ている子達じゃなくて、騎乗訓練を教えてくれるおじさんに特別に分けてもらうって感じ。だから見た目とか能力は選べなくて、超平凡な子になっちゃうんだけどね。」

「３，０００円！？　うわ結構ボッタくりやな。」

「うーん。でも、ゲーム内で７００，０００Ｇ稼ぐ労力を思えば、それほどでも無いと思うよ？」

その辺りの感覚は個人による差が大きいだろう。一度ネトゲでガチャなどをやってしまえば、感覚が狂って後は平気で月に何万も課金してしまう人間だって少なくない。

「ごめん。さすがにちょっとそこまでは…」

姫が申し訳なさそうに目を伏せた。

…そりゃそうやろな。　普通の感覚してたら、まだ正式サービスも始まって無いようなゲームにそんなにホイホイ課金するはずがないと思う。

「まぁ、別に無理して今買う事も無いんとちゃうか？　どっちにしろ、オスタードを買おうと思ったら騎乗訓練クエとかも受けなあかんし、結構時間も掛るしな。とりあえず姫は俺が乗せてくから、心配せんでええよ。」

それだけ言うと呼子笛を取り出し勢い良く吹く。

ピュィーー！と甲高い音がパルノ郊外の青い空に響き渡った。

しばらくすると、どこからともなくドスドスと音を立ててひよこ色のオスタードが駆け寄って来て、ピタリと俺の前で止まった。

ひよこ色のオスタードは俺の顔を見て嬉しそうに「クエッ！」と一声啼くと、しっぽを振っている。

「これが俺のオスタードの『ガルバンゾー』。　さあ、姫様。お手をどうぞ。」

抱え上げるようにして彼女を半ば強引に乗せると、自分自身も素早くガルバンゾーの背へと跨がる。

姫は真っ赤になって小さな声で「もぅ！」と俺の腕を小突いて来た。

…あーやべぇ。まじ可愛いな。

「うわっ！なんかすっごいあまあまだ～。まんまファンタジー小説のお姫様と騎士のイメージそのものだし。月猫の事『姫！』だなんて呼んじゃってるしさ。キャーー！って感じ。月姫、ほんと大事にしてもらってるんだねぇ。良かったじゃん。」

にやにやしながら俺達の様子をしげしげと眺めた後、セシルはガルバンゾーへと視線を移した。

「にしても、この子もすごいねぇ。ヴォイドさん自身も大柄なのに、さらに前に月猫を乗っけても全然ビクともしないんだもん。ちょっとびっくりしちゃった。」

その鼻先を優しく撫でてもらって、ガルバンゾーは嬉しそうにクルクルと喉を鳴らしている。

「おっきいのに穏やかな性格の子なんだね。ふふっ可愛い～！　うちの子達は小柄だから、2人乗りなんて夢また夢だよ？」

そう言いながら、セシルと汐音も同じように呼子笛を取り出しオスタードを呼び出す。

現れたのはまるで双子のようにそっくりな赤茶色の2頭のオスタードだった。

「これがうちの子達。名前は『カストル』と『ポルックス』。」

確かにかなり小柄なタイプだ。この辺りで見掛ける平均的なオスタードと比べてもかなり小さ目の部類に入るんじゃないだろうか？

「パルノに拠点移してから気が付いたんやけど、どうもこの辺りの

オスタードは全体的に小振りみたいやな。その代わりに足が速いヤツをよく見掛けるわ。逆に俺がこいつを買ったオプヴァルデンのオスタードは、全体的に大柄でスタミナ型が多かったような気がする。」

俺のオスタードを羨ましそうな目で見ていた汐音がこう呟いた。

「へぇ。オスタードひとつとっても国によってそんな特色があるのか。俺も他の国に足を伸ばしてみたいな。このＭＬＯのマップの広さを考えると、さすがにβ期間中には無理っぽいけど。」

その言葉を聞いて、思い出したように姫がＷＩＳを送って来る。

『ねぇ？　さっき話してたフェルデンティア行きの旅の話、セシル達も誘っていいかな？』

『え？そやなぁ。別に利権が絡むような話でもないし、いいんとちゃうか？　ただ、結構な長旅になると思うし、目的地にどんなクエが待ってるのかもさっぱりわからんから、実際に行くかどうかは本人達次第やと思うけど。』

『ユキノさんの家にマイホーム登録させてもらったら、途中でリタイアしたくなったとしても、パルノ近郊まで戻って来るは出来るんだよね？』

『あぁ。それは大丈夫やと思う。拠点登録とマイホーム登録はまた別もんやしな。』

『わかった。じゃあ声掛けてみるね。』

◇◆◇

その後、「青の谷」に向けての道中で、オスタードの背に揺られながら姫はセシルと汐音の2人にも事情を説明していた。
3人の会話を聞きながら、俺はただぼんやりと汐音たちのオスタードに歩調を合わせて走っている。
2人の小柄なオスタードはパルノイエ産の平均的なオスタードに比べると、やはりさほど足は速くないらしい。
何しろ俺と姫の2人を乗せたガルバンゾーが引き離される事なく余裕で付いていく事が出来る程度のスピードなのだ。
…3，000円も払ってコレって…やっぱどう考えてもボッタクリやろ。

そんな事を考えていてふと気付くと、俺の目の前にいる姫が窮屈そうにもぞもぞと身じろぎしていた。

『ん？姫、どうかした？』

よく見ると顔が紅潮していて、なんだか息も少し荒い。
…うぉー　なんですか？この色気は！？

『ヴォイドさん、お願い。』

えっ？お願い？　一体何事！？

『…苦しい。そんなきつく抱きしめないで？』

えっ！？　あっ！　やべぇ！
知らず知らずのうちに姫の腰を抱く腕に力が入ってしまっていたらしい。
完全に無意識なのだが、改めて指摘されると恥ずかしいものがある。

『ごめん！　悪かった。痛かったか？』

『ううん。大丈夫。…でも優しくして？』

優しくして…優しくして…優しくして…

うわぁぁぁぁぁ！　あｓｄｆｇｈｊｋｌ

てか、今このシチュでそれ言いますかっ！！
俺、今ほど自分が３Ｄモードユーザーで良かったと思った事ないわ。
これがＶＲモードやったら確実に暴走してしまいそうな気がする。
…これはさすがに危険過ぎますよ！？奥さん（だから誰？）

５０．課金と非課金（後書き）

～ＭＬＯＷＩＫＩより～

ＭＬＯ世界の通貨単位はＧ、Ｓ、Ｃです。
１Ｇ＝１０００Ｓ　１Ｓ＝１００Ｃ。
銅貨、銀貨、小金貨、大金貨、白金貨などが流通していますが、旅行者などは宝石や魔晶石などを携帯する事もあります。
通貨の形状は丸いコインの形ではなく、長方形の粒ガムみたいな形をしています。
またＭＬＯ世界は銀行システムが発達しており、銀行に預金を預けておくと、毎年3月に預金額の０．５％が利息として口座にプラスされていきます。
なお預金上限額は１，０００，０００，０００Ｇ（１０億Ｇ）で、それを上回った場合、利息は支払われません。

51．今すぐ逢いたい

その後もしばらくオスタードに揺られた後、ようやく「青の谷」へと到着した。
途中、汐音達がフェルデンティア行きの件について何度か話し掛けて来ていたのだが、姫との一件ですっかり動揺してしまっていた為、生返事しかしていなかったような気がする。
後々冷静になってから気が付いたのだが、よく考えたら俺も姫も３Ｄモードプレイヤーだ。
当然、オスタード２人乗り時の腰を抱く動作も固定のモーションなので、きつく抱き締めて過ぎて苦しいなどという事は起こりうるはずが無いのだが…あれは一体どういう事だったんだろうか？
（作者注：→単に姫にからかわれてるだけです。）

◇◆◇

「ここが青の谷だよ！」

渓谷の入り口で得意気にセシルがオスタードを止めた。
彼女の隣に残り３人も同じように轡を並べて崖下に広がる雄大な景色を覗き込む。
おそらくこの深い谷は谷底を流れている翡翠色のあの小さな川の流れによって長い年月を掛けて少しづつ削られて行ったのだろう。
その川が流れ込む先には、まるで鏡のように周囲の風景を写し込んだ湖が美しい姿を見せていた。
思わず息をするのすら忘れてしまいそうになるような眺めだ。

４人で言葉も無くしばらくその美しい景色を堪能した後、ようやく姫が我に返って口火を切った。

「…へぇ。さすがセシルと汐音が絶賛するだけあってすごい眺めだね。」

「ね？　綺麗なところでしょ。
もう少し行くと吊り橋があって、お天気が良い日だったらそこから王都パルノも見えるんだよ？」

パルノからはここまで来るのにゲーム内時間で２時間ほど掛かった。高台とは言え、街が見えるというのはやはりそれだけこの世界の空気が澄んでいるという事なのかも知れない。

オスタードから降りた汐音が優しくねぎらうようにその鼻先を撫でながら俺達に告げる。

「ここから先は細い道が続くから歩きになる。ちょっと足場が悪いところもあるし、コボルトが出るから気を付けて。」

コボルトは犬の頭を持つ人間型の魔物だ。
あまり知能は高くなく、性格も臆病な為、たいして強い敵ではない。セシル達初心者が狩るにはちょうどいい敵だろう。
俺にとっては雑魚以外の何者でもないが、３人のサポートをしながらのんびり適当にやるにはちょうどいいかも知れない。

コボルトの話で思い出したのだが、このゲームで俺にはちょっと気になっている事があった。
このＭＬＯの世界には、ファンタジー系ＲＰＧの定番のモンスター、ゴブリンやオーク、コボルトなどの人型の魔物がちゃんと存在して

いるにも関わらず、エルフやドワーフ、獣人などの知能が高い亜人系の種族については何故か全く存在しない事になっているのだ。
オープニングデモで語られている「大地の種族が神に力を与えられて暴走し、その結果この地には何も残らなかった」とか言う話と何らかの関係があるのだろうか？

そんな事を考えながらもオスターから降りて野に放ってやった後、4人1列となって谷底へと続く細い1本道を進んで行く。
ちなみに並びはセシル、汐音、姫、俺の順だ。

「へぇ？セシルが前衛なのか？」

ちょっと意外だ。てっきり汐音の方が前衛でセシルはサポート系なのだとばかり思っていた。

「うん。今はね。私達2人1組が基本だから、やっぱりお互いに背中を預けられる関係になりたいなと思ってさ。最初は私の方が前衛で、汐音はサポート系スキル育てて、ある程度育ったら、今度は立場交替して、いずれはどっちも出来るようにしようと思ってるの。」

「なるほどなぁ」

特化型キャラに比べると、個としての強さは劣るかも知れないが、お互いを補い合うようなプレイスタイルならそういうのもアリだろう。

「それに、俺達結婚してるから、結婚スキルの恩恵でいろいろと補える面も大きいしね。」

汐音も振り返りながら得意気にウィンクして来る。

って、こいつら結婚もしてんのか!?
確か結婚するのにもかなりの高額の結婚支度金を支払う必要があったはずだ。…多分こいつらの事だからそれもグローバルオンラインチケットで払ったんだろう。
…にしても結婚スキルか…β期間中には転生が実装される予定は無いと聞いていたから、まともにチェックしていなかった。
どっちにしろ、結婚なんてもんに自分が縁がある訳も無いと高をくくっていたしな。

「しっ！　コボルトだ。　来るよ?」

微かな気配を感じてセシルがピタリと足を止めた。
おっと、早速現れたようだ。
この3人のお手並みを拝見させてもらう事にしよう。

「あ!そうそう。言うの忘れてたけど、3人の邪魔するのもなんやし、俺はどうしてもヤバそうな時だけ参戦するようにするから思う存分好きなようにやってや?」

何気なくそう言うと、3人は揃って「えっ!?」と振り返って俺の顔をまじまじと見ている。

「…いや、何もそない驚かんでも。俺が片っ端から全部片付けとったら、3人のスキル上げにならへんやろが。」

「あ!それもそうか。」

「そうそう。一応、経験値だけやったら俺が倒しても入るのは入るけど、スキルは自分が使ってナンボやからな。」

本当のところは俺が壁役に徹して後ろから3人に敵を殴らせるという形をとっても構わないのだが、しょせん相手はコボルトだ。
汐音とセシルはこれまでにも2人で来ていたようだし、わざわざそこまで過保護にする必要もないだろう。
正直言うと、そういう養殖みたいな初心者育成方法は嫌いだった。
野良パーティーなどで組んだ時、そういう育成で育ったヤツは一目でわかる。
馬鹿の1つ覚えみたいな攻撃しかしないし、何かイレギュラーが起こった時の咄嗟の判断力がまるで無いのだ。
スキルだけ育てても、それを使うプレイヤー自身に状況に合わせて使いこなす能力が無ければなんの意味も無い。

「…わかった」

多少不満そうな表情を浮かべながらも、いつの間に装備したロッドを握り締めて姫が素早く「光の盾」を唱える。

「お？　今回はデス（死神の鎌）サイズちゃうんやな。」

そう呟くと、チラリと彼女は俺を一瞥してフンと鼻を鳴らした。

「当たり前でしょ？こんな狭いところであんなもの振り回せるはずが無いじゃない。」

ありゃ？　姫様ご機嫌斜めですか？　でも、そういう気の強いところがまたええわぁ。

そんなくだらない事を考えていると、前方に青い毛並みが姿を現した。
コボルトだ。人間の腰くらいの大きさで、手にはそれぞれ短剣と斧を持っているのが見える。
…2匹か。
これくらいなら3人もいれば余裕だろう。

セシルが口元でぶつぶつと何事かを呟いたかと思うと、足元からブワッと鮮やかな薄紅色の光が溢れ出した。
光はあっと言う間に汐音とセシルの2人の姿を包み込んだかと思うと、上空からヒラヒラと淡いピンクの羽が舞い落ちて来る。

「なっ！」

なんじゃぁこりゃぁぁぁ！？

あまりにド派手なエフェクトに度肝を抜かれていると、汐音が首だけ捻って「結婚スキルだよ。これはお互いの物理・魔法攻撃力を上昇させるヤツね。」と教えてくれる。

へぇ。そんな便利なスキルがあるのか。

「結婚スキルって便利なのが多いんだけど、スキル名が微妙なんだよなぁ。ちなみにコレは『君に背中は預けた』っていうスキル。」

ブッ！ひでぇ
…なるほど。先程セシルが口元でごにょごにょ言ってた理由がわかった。
さすがにソレを人前で大声で叫ぶのは憚られるな。

そんな話をしている間にコボルト達が向かって来る。

どうやらセシルは槍使いだったようだ。

限られた狭い空間の中でも器用に長いパルチザンを振るっている。

その間合いに入る事すら無いまま、コボルト達はあっさりと2匹とも倒されていた。

「なんや！　めっちゃ余裕やん。これやったらセシル1人でも大丈夫なくらいとちゃうか？」

さっきのド派手エフェクトの結婚スキルも使う必要が無いような気がする。

チラリと姫の方に目をやってみると、彼女もあまりに呆気ない戦闘結果に拍子抜けしているようだった。

「…一見そう思うよね？　けどここのマップ、時々異常に沸くんだ。下手すると20とか30の大群に囲まれたりする事もあるから油断大敵だよ？」

汐音がそう言うとセシルがおどけた口調で反論してくる。

「まぁまぁまぁ！　そこまで深刻になるほどのものでも無いと思うよ？　もうちょっと先まで行ったらさ、道が2つに別れてるの。そこまで行ったら二手に別れてみよっか？」

彼女の言葉が終わるか終わらないかのうちに、上の方からヒュン！と音を立てて矢が飛んで来た。

…なるほど。確かに沸きは早いらしい。

見上げると、切り立った両側の崖の上からコボルト達が弓で狙って来ている様子が窺える。
木の影に隠れていてよくは見えないが、４~５匹はいるだろうか？
…ＭＯＢのクセに崖撃ちしてくるとは生意気な。

「魔法を使えば倒せない事も無いけど、倒したところであんな場所に居られたんじゃドロップも拾えないわね。放って置いてさっさと先行きましょ。」

コボルト達をチラリと一瞥してそう言うと、姫はスタスタと歩き出した。
…さすが姫。相変わらずクールやな。

「それもそっか。んじゃ先行くねー」

はしゃいだ調子でセシルも走り出す。

「おいこら！　足元悪いんだから、走ったら危ないって。」

そう汐音が言った瞬間、彼の警告も虚しく、セシルは忽然とその姿を消していた。

慌てて彼女の姿が消えた地点まで駆け寄って調べてみると、そこから先は地面が消え、絡み合った蔦で吊り橋状の通路が確保されている。

「ここから足を踏み外したのか。」

地面と吊り橋の間に２０ｃｍほどの隙間が空いていた。
普通に歩いていれば気が付きそうなもんだが、よっぽどはしゃいで

いたらしい。
穴の下を覗き込むと、かなりの高さがあった。
…うわ。コレ、リアルだったら確実に死んでるぞ。
『セシルー！　大丈夫かー？』
パーティーチャットでの呼び掛けに弱々しい声で彼女が応えて来る。
『うぅごめん。ドジっちゃった。…うーん。ちょっと動けそうにないかも。』
『戦闘での負傷ならともかくとして自損事故かよ。ったく、しょうがねぇなぁ。セシルは。』
そうゴチながらも、汐音は心配そうに崖下を覗き込んでいる。
合流して治癒魔法を掛けてやりたいところだが、これだけの高低差があるとさすがに飛び降りる訳にもいかない。
『きゃーっ！コボルト達が来た。うわっ！ちょっとコレは本気でダメかも。どうしようっ！』
汐音はさっと顔色を変えて俺達の方を振り返ると、手短にこう告げた。
「悪い。ちょっと俺、行って来るわ。この渓谷はどのルートを行っても最終的には湖に出るようになってる。そこで合流しよう。」
「おいっ！　行くってどうやって？」

止める間も無く、ボソリと一言「今すぐ逢いたい」と呟く声が聞こえたかと思うと、汐音の体は眩い薄紅色の光に包まれてゆっくりと消えて行ったのだった。

52．青の谷

しばらく呆気にとられていると、姫に顔を覗きこまれてしまった。

「大丈夫？」

「あぁ、ごめん。ちょっとびっくりしただけや。今のもアレか？結婚スキルの一種なんやろうか？」

「そうみたい。『今すぐ逢いたい』はどこにいてもどれだけ離れていてもすぐに相手の元に飛んで行けるスキルらしいわよ。」

「…へぇ？いろいろあるんやな。」

移動手段が限られているこのＭＬＯの世界では確かに重宝なスキルだろう。

「にしても、姫も随分詳しいな。」

何気なしに言うと、姫はパッと顔を赤らめてもじもじしながら「それはそのえっと…ほら！あの２人にいろいろノロケを聞かされたからよ！だから詳しくなったの！」と答えた。

…ん？　なんでそこで赤くなるんやろ？

「…ヴォイドさんは結婚スキルに興味ある？」

上目遣いにじっと見つめられながら、不意にそんな事を聞かれた。

「いや？　特に興味ないけど。」

確かにあったらあったで便利そうだとは思うが、そもそも結婚スキ

ルを使う為の前提条件には誰かと結婚しないといけない訳で…　その時点で俺には丸っきり縁が無い話だと言い切れる。

「ええっ！？」

心底驚いたような声を出されてしまった。いや、そこまで驚かんでええやん。

どうせ俺は童貞で女にはモテませんよ！？

結婚なんてリアルでもゲームでも縁が無いままに魔法使いになって一生を終えるんですよっ！

…ＩＮＴ１だけどな。

「ヴォイドさんって結婚したいとか思った事ないんだ…」

どういう意味やろ？　そりゃしたいに決まっとるけど、人には出来る事と出来ない事ってものがあんねん。これ以上俺のガラスのハートをえぐらんといて欲しいわ。

そんな事を考えていると、姫が大きく溜息を吐いた。

「はぁ…わかった。とりあえず先に進もっか。」

そう言って、さっさと１人で先に歩いて行く。

「姫、ほらそこ大穴開いとる！足元危ないから気を付けて。さっきの事もあるし、何やったら俺が抱えていってあげよか？」

俺の言葉に姫はくるっと振り返るとキッと睨んで呟いた。

「…ヴォイドさんって、鈍いんだか何なんだかさっぱりわかんない

わ。」

え？　何で怒ってんのやろ？？

◇◆◇

吊り橋状の通路を抜けると、また両側に切り立った崖の続く細い通路になっていた。
いつの間にか陽は傾き、あたりは夕暮れ色に染まり始めていた。
崖の岩肌のところどころ露出した水晶のようなピンクの石が、夕陽を受けてキラキラと輝いている。

「確かに綺麗なところよね。こんなにいいところなのに、どうして全然人がいないのかしら？」
「それはやっぱここまで来るのに、オスタードが無いと厳しいからとちゃうか？
オスタードを手に入れようと思ったら最低でも７００，０００Ｇは稼ぐ必要あるけど、プレイ開始からそれだけの金が貯まってる頃には初心者レベルを脱出してるやろし、ここの狩り場の適性レベルではなくなってるって事なんやろ。」
「そっか。課金してまでオスタードを買ってる人なんて、滅多にいないでしょうしね。」
「やろうな。…あいつらは例外や。」
「そう言えばあの２人、大丈夫だったのかしら？」
「聞いてみるか。」

パーティーチャットに切り替えて２人に声を掛けてみる。

『おーい！汐音！セシル！大丈夫やったか？そっちはどないや？』

しばらく間があいて、セシルの声で慌てたような応えがあった。

『はぅっ！？ヴォイドさん？だだだ…大丈夫ですっ！ありがとうございます。』

『…なんやそれ。何そんなに慌てとんの？』

間延びしたような声で汐音からも返事が返ってくる。

『大丈夫ですよー。ご心配ありがとうございます。こっちはこっちで楽しくやってますんで、お2人も安心して湖に向かって下さい。』

『はぁ？』

訳がわからずにいると、姫が横でくすくすと笑っていた。

「ほら、きっとアレじゃない？　ピンチに王子様が助けに来てくれたもんだから、すっかり気分が盛り上がって2人でイチャついてたところを、パーティーチャットで邪魔しちゃったんじゃないかしら。」

はぁっ！？なんじゃそりゃ！？　アホらし。心配して損した。

◇◆◇

ビシュッ！

不意に背後から矢が飛んで来た。

振り返ると弓を構えたコボルトアーチャーが3匹と、メイスを持ったコボルトが2匹迫って来ていた。
姫の方にさっと視線を移すと、前方からも6匹のコボルトが向かって来ているのが見える。
…挟み打ちか。
大した強さの敵ではないが、姫の方にターゲットが行くとちょっと面倒だ。

俺はスラリと背中のバスタードソードを抜くと顔の前に構えた。
グリップに嵌めこまれた黄色い魔晶石を撫でながら、強く念じる。

「ハァッ！」

剣の先端から雷撃がほとばしり、周囲のコボルト達に直撃した。
姫の方に向かっていたコボルト達も雷撃を打った俺の姿に気付くと、いきり立ってこっちに殺到して来る。

「すごいっ！　今のは何？」
「剣に嵌め込んでる雷撃の魔晶石を使っただけ。威力は大した事ないけど、誰でも魔法が使えるからなかなか便利やで。」
「へぇ！」

姫は感心しながらも素早く呪文を唱え、俺の周りを取り囲んで殴りかかって来ているコボルトどもに次々と氷の矢を叩き込んで行く。

「今は真夏やし、今日のこの天候やから、氷魔法よりも炎とか雷の方がよく効くんとちゃうか？」

余計なおせっかいかも知れないとは思いつつも、一応アドバイスをしてみる。

「…うん。わかってはいるんだけど、どうも私、氷魔法と一番相性がいいみたいなの。扱いやすいし、他の属性魔法よりダメージを与えやすいみたい。」

魔法の事はあまりよくわからないが、そういう事もあるのかも知れない。

確かに姫の魔法は着実にコボルト達の数を減らしていっていた。

…にしても、氷魔法か。

姫のイメージにぴったりやな。まさに氷の姫君、アイスビューティーと言ったとこや。

やがて全てのコボルト達が倒れ、キラキラと光の粒子に変わり上空へと立ち昇っていった。

「お疲れさん。」

ドロップを拾い集めながら声を掛ける。

「…ありがとう。あれだけ囲まれてたっていうのに、コボルト程度じゃ傷ひとつ負ってないのね。」

姫は俺の姿をチラッと横目でチェックした後、「重いのヤダからドロップはとりあえず全部持っておいて！」とだけ言って、ふいっと顔をそむけてしまった。

◇◆◇

その後も何度かコボルト達との戦闘を繰り返し先へと進んで行くと、やがて少し開けた広場のような所に出た。

「うわぁ！綺麗！」

そこは先程から岩肌にちらほらと付いていたピンク色の結晶で周囲の壁全てが覆われていて、キラキラと眩く輝いている場所だった。

「これだけピンクだと圧巻やな。…なんやさっきのあいつらの結婚スキルを思い出すわ。」

姫もくすくすと笑いながら同意して来る。

「確かに。にしても、これだけピンクで溢れているのに、どうしてこの谷は『青の谷』なんて呼ばれているのかしら？　どっちかって言うと『ピンクの谷』って感じなんだけど。」

「ピンクの谷なんて名前にしたら、卑猥やからちゃうか？」

「もう。何言ってんの！　そんな事考えるのヴォイドさんだけだと思うよ？」

そんなふざけた事を言いあっていると、上の方から突然誰かの笑い声が聞こえて来た。

「はっはっはっは。『ピンクの谷』か！　若い人は面白い事を考えるもんじゃの。」

声がした方を見上げると、岩肌の中腹にツルハシを手にした老人が立っていた。

「ここが『青の谷』と呼ばれているのはな。コバルトが採れる谷だ

からなんじゃよ。」

老人は近くまで降りてくると、どっかりと腰をおろしてそんな話を始める。

「コバルト？」

「あぁ。お前さんらもコバルトブルーとか聞いた事あるじゃろう？青い顔料などに使われる鉱物の事じゃ。」

「でも青い顔料の鉱物が採れる場所なのに、どうしてこんなにピンクで溢れてるんですか？」

「あぁ、あのピンクの結晶はコバルトカルサイトじゃよ。方解石（炭酸カルシウム）の結晶にコバルトが混入すると、ああいう色になるんじゃ。」

…なるほど。コボルトの谷と呼ばれているのはコボルトが出現するからってだけじゃなく、コバルトが採れる場所だからって事なのかも知れない。

「せっかくだから、持って帰ってお嬢ちゃんにアクセサリーの１つでも作ってやるといい。」

そう言うと、老人はいきなり皮袋を投げてよこした。
開けてみると中には薄紅色の美しく澄んだ結晶石とサファイアのような深い青色をした結晶石が入っている。

「ピンクの方がコバルトカルサイトで、青い方がコバルトスピネルじゃ。サファイアとよく間違われるんじゃが、サファイアよりも希少品じゃぞ？」

「ありがとうございます。」

取りあえず礼を言うと、老人はにんまりと人の良さそうな笑みを浮かべる。

「なぁに。わしも若い冒険者になんぞ逢うのは随分久々でな。機嫌がいいんじゃよ。長い間、鉱山に籠りっきりで人と会う事自体、めっきり少なくなっていたからのぅ。たまに町に戻った時に、住人達と飲みに行くのが唯一の楽しみでな。」

「そんなに長い間鉱山に籠っていたんですか？」

「うむ。主人の為に素材を集めるのもわしらバトラーの大切な役目だからの。」

「お爺さん、バトラーなんですか！」

…てっきり単なるＮＰＣかと思っていた。

「そうじゃ。わしは、Ｂ．Ｂ．バルドー様のバトラー、ホーリー・ススムンと言う。」

おい…なんだその名前！　ひょっとしてツッコミ待ちか？ツッコミ待ちなのかっ！？

「なんじゃ？おぬしら、反応が薄いのぅ。…ひょっとして、Ｂ．Ｂ．バルドー様の事を知らんのか？」

ってそっちかよ！

老人に問われて、姫が首を傾げながら答える。

「Ｂ．Ｂ．バルドー様？　すみません。存じ上げません。ひょっとして有名な方なのですか？…ヴォイドさん聞いた事ある？」

「残念ながら、俺も初耳だ。」
「そうか…バルドー様の全盛期からは既に１８０年の年月が経っておるしの。若い冒険者たちに忘れさられるのも無理はないだろうて。」
老人は明らかにがっかりした様子で肩を落としながらそう呟いたのだった。

52．青の谷（後書き）

コバルトは冶金が困難だった為、１６世紀頃のドイツでコボルトが坑夫を困らせる為に魔法をかけた鉱物だとされ、この名前で呼ばれるようになったんだそうです。

個人的に趣味で陶芸などをやってるんですが、陶芸に使われている「呉須」という顔料は酸化コバルトが主成分です。
有田焼などの陶磁器によく使われているあの青。日本人なら誰でも見た事があるんじゃないでしょうか？

コバルトは採れる所が限られている為、江戸時代に有田で使われていた呉須は、遠くアラビア海沿岸からシルクロードを越え中国から日本へと輸入されて来ていたんだとか。
現在はコンゴ産のものが主流なんですが、これがまた時価で結構いい値段するんですよ。
ちなみに、こないだ買った時で１００ｇで２０００円でした。
現在でこんな値段だったら、昔はさぞかし貴重品だったんだろうなぁ。などと思いを馳せてみたり。

53．長船の剣

B．B．バルドーなる人物のバトラーだと名乗った爺さんは、しょんぼりと肩を落としたままこう言った。

「…そうか。稀代の武器職人『ＢＢＢ』の名は、今の若い冒険者たちには伝わってすらおらんのか。淋しい話じゃの。」

ここまでガックリされてしまうと気の毒になってきてしまう。お年寄りは労わりなさいって言うしな。

「すみません。単に俺たちが無知なだけやと思います。俺の友人で武器職人やってるヤツがいるんですけど、そいつやったら当然バルドーさんの事も知っているはずです。」

俺のリップサービスに爺さんの顔色が目に見えて明るくなった。

「そうか。お前さんのご友人は武器職人じゃったか。さっきから気になっておったんじゃか、ひょっとしてその背中のモノもそのご友人とやらの作品かね？」

「はい。俺の友人の景光・長船の作です。」

愛用のバスタードソードを佩用ベルトごと肩から外すと、老バトラーに手渡す。

爺さんは黙って受け取ると、しばらくは重さとバランスを確かめるように鞘ごと両手で捧げ持っていたが、やがてグリップに手を掛けると、力を篭めて一気に抜き放った。

「…ほぉ！これはこれは」

目を細めると、刀身を光にかざして縦から横からとじっくりと眺めていた。

「景光・長船殿の作と言ったか？　…当世にもこれだけの業物を作れる職人がいようとは。
その名前、胸に刻んで置くとしよう。」

そう言ってカチン！と音を立てて剣を鞘に収めると、爺さんはグリップに付いた４つの魔晶石を指でなぞった。

「…グリップの細工も素晴らしいの。いや、良いものを見せてもらった。お前さんはいい友人を持ったものだ。大切にしなされよ。」

背後から覗き込んでいた姫が、興味津々で訊ねてくる。

「あのっ！私も一目見た時からそのバスタードソード凄いなって思ってたんですけど、やっぱりプロの目から見ても、それってそんなに凄いものなんですか？」

爺さんは大きく頷きながら、鞘の上から剣をゆっくりと愛おしそうに撫でていた。

「うむ。なかなかこれだけの物を作れる者はいないじゃろうて。
重さもバランスも申し分無い。グリップに４つもの魔晶石を嵌め込んでも、尚その魔力に応えるだけの力を刀身自体が持っている。…実に力強い良い剣だのう。」

へぇ…。いいものだろうとは薄々は思っていたが、身内が作ってくれたものだけに、まさかそこまで絶賛されるような逸品だとは思っ

てもいなかった。

「この剣を作った御仁なら、さらに修行を積めば、いつの日か《カタナ》を作る事も夢では無いかも知れんのう。」

えっ!?　今この爺さんなんつった!?

「《カタナ》!?　長船のヤツは、その製法を知ってる伝説の刀鍛冶を探してフェルデンティアへ向かうって言ってたぞ?」

爺さんはゆっくりした動作で俺に剣を返すと、「ほぅ」と目を細めておもしろそうに笑った。

「もうそこまで突き止めておいでだったか。やはりその御仁はなかなかの遣り手の人物のようじゃな。…では、その長船殿にお伝え下され。我が主はいつでもあなたのお越しをお待ち申し上げている、と。」

そう言って老人は立ち上がると、白緑色に輝く光と共に消えて行ったのだった。

◇◆◇

老バトラーが消え去った後、姫がゆっくりと口を開いた。

「なんだか不思議なお爺さんだったわね。」

「…あぁ」

気が付けば、辺りはすっかり真っ暗になっていた。
インベントリから取り出した魔晶石製のランタンに灯りを点して左手で掲げ持つと、姫の方を振り返る。

「姫はなんか灯り持ってるか？」
「え？ううん。いつも光魔法で済ませてるから。」

彼女は小さく呪文を唱え、ティアラの尖端にぽうっと丸い光を点した。

「…そうか。いつもそうやってたんか？」
「え？うん」
「その方法は街中とか安全な場所でやる分にはええけど、戦闘の可能性のある場所では止めて置いた方がいいな。…魔術の継続を意識出来ている間はいいとしても、戦闘の方に気を取られて魔力の供給が途絶えれば、その灯りは消えてしまうやろ？　戦っている最中に視界を奪われるのは致命傷に繋がる。出来るだけこういう触媒を使うタイプの照明を携帯するようにした方がいい。」

そう言って彼女の前で魔晶石製のランタンを揺すってみせる。

「それかいっその事、そのティアラに光魔法を仕込んだ魔晶石を埋め込んでしまうかやな。
便利かも知れんけどちょっと見た目が不細工になるかも知れへんなぁ。」

プッと吹き出した後、彼女はゆっくりと頷いた。

「わかった。不恰好なティアラは嫌だけど、街に帰ったら何か考えてみるわ。」

「よし。んじゃま、暗くなったから先を急ごう。足元には十分気ぃ付けるんやで？」

前を向いて先を急ごうとすると、ぐいっと右手を引き寄せられた。

「…ヴォイドさん、お願い。暗くて怖いから、手を繋いでて欲しいの。」

蚊の鳴くような細い声でそんなお願いをされてしまう。

うぉぉぉぉ！！！

こんなお願いされたの、俺の27年間の人生において初めてですよっ！？

繋ぎたい！　めっちゃ手ぇ繋ぎたい！

……でも。

「…悪い。今は左手にランタン持ってるから無理や。敵がいつ襲って来るかわからんし、いつでも剣を握れるように右手は空けておきたいねん。ごめんな。」

「えっ！？」

まさか俺に断られるとは思ってもみなかったのだろう。彼女は拍子抜けしたような小さな声を上げた。

…やはり機嫌を損ねてしまったらしい。

姫はムッとした表情で、ただ黙って俺の後ろを付いて歩いている。

何とか彼女に機嫌を直して欲しいとは思うものの、女性経験どころか対人経験スキルの低い俺にとって、こんな時には何をどう言えばいいのかなんて解るはずも無かった。

2人共押し黙ったままひたすら暗い渓谷の夜道を歩く。

不思議なくらい辺りは静まり返っていて、コボルト達が襲って来るような気配も無い。
狭い通路に響くのは、ただ乾いた土を踏みしめる俺達2人の足音だけだ。

「あぁ！もうっ！　この空気耐えらんないっ！」

姫がいきなり声をあげて、ランタンを持つ俺の左腕にしがみ付いて来た。

「右手は繋げなくても、これなら平気でしょ！？　ちょっとくらいは察しなさいよ！　この朴念仁がっ！！」

ちょっ！？えっ！　姫っ！？

「敵が現れたらすぐ離れてあげるから、それまで黙ってこのまま歩きなさい。馬鹿っ！」

いや…でも、そんな事言われても…落ち着かない事この上無いんやけど。
俄かにソワソワしはじめた俺の様子に気が付いたのか、腕を組んで歩きながらおもしろそうに姫は俺の顔を覗き込んでいる。

「ね？　ヴォイドさんのその剣さ。４つ魔晶石が嵌め込まれてるよね。
１つはさっき雷撃を打つところを見せてもらったけど、残りの３つはどんな効果があるの？」
「……」
「ちょっとっ！　なんで黙ってるのよ！」

ムッとした彼女にいきなり耳たぶをぐいっと引っ張られてしまった。

「…いや。だってさっき敵が出るまで黙って歩けって言ったから。」

チッ！と姫は舌打ちをすると「ほんっとに融通の利かない男ね！」と吐き捨てる。

「今嵌めてるのは、さっきの雷撃と自動回復・クイック・スタンやな。

自動回復とクイックはグリップを握っている間は効果が自動的に継続する。雷撃はさっきみたいに意識的に発動させる事も可能やけど、基本的にはスタンと一緒で攻撃時にランダムで発動するって感じやな。」

「『今嵌めてる』って言い方をしたって事は、付いている魔晶石を取り替えたりする事も出来るって事？」

「うん。大体、自動回復・クイック・スタンの3つは固定なんやけど、残りの1個は出かける狩場の敵の属性に合わせて選んでるよ。」

「…ふーん。便利ねぇ。私も長船さんって人にお願いしたらそういう武器作ってもらえるかしら？」

「デスサイズをか？…どうやろなぁ。長船のヤツがその手の色物武器を作ってるところ見た事ないから俺にはわからんわ。長船がログインして来たら合流するつもりやから、そん時に直接聞いてみたらいいんとちゃうか？　ってイテテテテ！」

「色物武器って言うなぁ！」とまた姫に思い切り耳たぶを引っ張ら

れてしまった。

◇◆◇

ずっと続いていた崖に挟まれた細い通路を抜け切ると、一気に広けた場所に出た。
遮る壁が無くなってみると、辺りは意外な程に明るかった。
月明かりに照らされて一面が青の世界に包まれている。
渓谷の入り口からも見えた湖には白い月と渓谷の景色が映り込み、キラキラと青白く煌いていた。

「綺麗。昼間は絶対ピンクの谷の方が合ってるって思ったけど、この景色を見ちゃうと、『青の谷』で正解だって気がするわね。」
「あぁ。そやな。」

湖の畔に並んで腰掛けると、黙って2人してしばらく月を見あげていた。
これがＶＲモードだったなら、心地よい夜風なんかも感じる事が出来たのかも知れない。

「…にしても、あの2人ちょっと遅いな。パーティーチャットで声掛けてみるか。」

俺が会話を切り替えようとしたちょうどその時、この湖へと繋がっている小道の中の一つから、たくさんの魔物の気配と激しい金属音が聞こえて来た。徐々にこちらに近づいて来ているようだ。

「あれは！？」
「きっとセシル達よ！行きましょう」
慌てて駆け出した俺と姫は、思わずその場に辿り着いてぎょっとしてしまった。
想像以上にたくさんの血を滾らせたコボルト達が集まっていたのだ。
…おそらく３０匹以上はいるんじゃないだろうか？
俺達がこの湖に着く少し前から全くコボルトに遭遇しなくなっていたのも、みんなここに集結していたせいだったのかも知れない。
『セシルっ！汐音！　大丈夫かっ！？』
あまりにコボルト達の数が多すぎて、その姿を目視する事すら出来ない。
「くそっ！」
俺は一気に踏み込むと、群がるコボルト達に向かってバスタードソードを一閃させた。
姫も今回はデスサイズを取り出して、片っ端からコボルト達を薙ぎ払っていっている。
徐々にコボルト達の数が減りはじめ、ようやくそこに見えて来たのは…
フラフラになりながらも何とか必死に応戦している汐音と、その隣で全身血塗れになってぐったりと横たわっているセシルの姿だった。

53．長船の剣（後書き）

３Ｄモードなので、耳たぶ引っ張ったところで実際には痛みを感じてる訳じゃないんですが、その辺は関西人のノリって事で。

５４．流血と復活

「セ…シル！？」

群がるコボルトの中心に、血塗れになって横たわるセシルの姿があった。

…くそっ！　間に合わんかったか。

無我夢中でコボルト達を薙ぎ払いながら叫ぶ。

「姫っ！　汐音を回復してやってくれ！」

灯りを点す為に光魔法を使っていた姫の事だ。多少の回復魔法ぐらいは使えるだろう。

「えっ！？でもっセシルが！」

このゲームのやっかいなところは、例えパーティーを組んでいようがなんだろうが自分以外の他人のステータスが全く見えないところだ。

旧ＭＬＯ時代にはパーティメンバーと敵のＨＰ／ＭＰバーなどが表示されていたらしいので、あえてこの新生ＭＬＯでステータスを表示させないというのは、おそらくリアリティを追求する為の演出の一環なのだろうとは思う。

だが、なまじ過去に他のゲームでの経験が多いプレイヤーほど、ＨＰやＭＰバーなどの数値による情報に頼るクセがついてしまっている為に、この仕様には苦戦させられていた。

実際問題この件に関してはかなりのユーザーからの苦情や変更の要望が寄せられているらしい。

…けれど、さすがに今のセシルの状況が何を意味するのかは、ＨＰバーの存在が無くても明らかだった。

「…セシルはもうダメだ。」
「うそっ！」

ゲーム内での出来事だ。戦闘不能に陥って動けなくなったとしても、しばらく時間が経てば活動拠点で復活するようにはなっている。
その際には一応デスペナルティもあるのだが、初心者のうちはさほど気にするほどの内容でも無い。
だから当然のように俺自身もプレイ開始当初から何度も何度も死にまくっては、いろいろと学習し、ここまで少しづつ成長して来たのだ。これはあくまでゲームだと割り切っているし、理解もしていたつもりだった。
でも、よくよく考えてみれば長船と出会うまでの俺はほとんどの活動がソロメインで、たまに野良パーティーで出掛けたとしても、高額レアを落とすような強敵は分配時に揉め事が起こりそうで面倒だったので極力避けて来た。
そのせいか、たまたまこれまでのところたった一度も目の前で自分以外のプレイヤーが戦闘不能に陥るところを見た事が無かったのだ。

初めて見る倒れた仲間の姿は、ひどく生々しくて思わず目を背けたくなるものだった。
…おいおい。
子供もプレイするようなゲームでこの表現って…いくらなんでもマズいんとちゃうか？
確かクローズドβ現在、公式サイトにはレーティングは「審査予定」とだけ表記されていたように思うが、おそらくこのままだとＤ指定（１７歳以上）は免れないんじゃないだろうか？

俺はこのどうしようもなく後味の悪い気分を吹っ切りたくて、あえて何も考えないように剣を振り回し、がむしゃらにコボルトを屠っていった。

◇◆◇

何とか群がるコボルト達を片付け終わった後、沈む気持ちを抑えてのろのろとセシルの元へと近づく。
汐音と姫も神妙な面持ちでセシルの横に立っていた。

「…どうするんや？」

わかりきった事だとは思いつつ、とりあえず訊いてみる。
おそらくセシルの活動拠点はパルノに設定されているだろう。
このまましばらく待てば、自動的に彼女はパルノの城門前に転送されて復活する事になる。
その際には彼女の持つアイテムがランダムでばら撒かれ、彼女が得ているスキル値の一部も失われる事になる。
復活させてやる事が出来ればデスペナルティを食らう事はないが、「蘇生」は光属性魔法の中でもかなりの高等魔法だし、「蘇生薬」も一応アイテムとして存在しているという情報はあるものの、現在のＭＬＯの世界ではまだそこまでの薬を作れる調剤師がいないのか、市場で見掛けた事も無い。
ここは諦めてセシルがパルノで復活するのを待ち、彼女のアイテムを回収して帰るしか無いだろう。
俺がそう思った時、汐音がゆっくりと口を開いた。

「大丈夫だ。セシルはここで復活させる。」

…えっ!?　嘘やろ!?　汐音ってそんな高等魔法使えるんか。
いや…まさかな。転生者のミーアちゃんならまだわからなくも無いが、さすがにプレイ開始から日の浅いこの2人にそこまで望むのは無理だろう。
なのに一体どうやって!?

不審に思う俺の目の前で、汐音はゆっくりと跪いてセシルの手を取ると、その指先に軽く口づけを落とす。
――そして、小さな声でポツリと一言「1人で逝くな。」と囁いた。

…なっ!?　なななっ!　どさくさに紛れて何やっとんねんこいつ!
天然のタラシか!?　タラシなんかっ!?
ったく、見てるこっちの方が恥ずかしいわっ!　マジで勘弁してくれ。

1人で動揺していると、突如、横たわったセシルの下の地面に鮮やかなピンク色の魔方陣が浮かび上がった。
くるくると回りながら魔方陣はゆっくりと広がり、眩い光がセシルの身体を包み込んでいく。
まるで桜の花びらのような淡い色合いの羽が空からふわふわと舞い落ちて来ていた。

――やがて魔方陣が回りながら小さくなり包んでいた光が弱まってくると、ゆっくりとセシルがその瞼を開く。

「おはよー」

そんな彼女に向かってのんびりとあいさつなんぞをしている汐音に思わず呆気に取られてしまう。

…嘘やろっ！？　結婚スキルって蘇生まで可能なんかっ！？

なんというか、ここまで優遇されているのを見てしまうとコツコツとソロプレイやってるのが馬鹿馬鹿しいような気すらしてくる。

呆然としている俺の目の前で、セシルはむくりと起き上がったかと思うと、キッと汐音の顔を睨みつけて「もうっ！いつも『ちゃんと普通に起して！』って言ってるでしょ！」とむくれた。

「…おいおい。いつもって事は、あんたらにとってはコレが日常茶飯事なんか？」

「いやえっと。いつもそんな簡単にホイホイ死んでるって訳じゃないのよ？　けど、たまたまかなりの数が沸いた時、うまく立ち回れなかったりスキルが不発だったりとかで…」

バツが悪そうにごにょごにょとセシルが言い訳をしようとする。

「うーん。彼はそういう事聞いてる訳じゃないと思うんだけど…ねっ？今、セシルは『ちゃんと普通に起して！』って言ってたでしょ？　って事は、あの起し方は普通じゃないって事？」

「そうなんだよ月猫～！ちょっと聞いてっ！？　汐音ってばひどいの。普通にスキル名を言えばいいだけなのに、いっつも私が動けないのをいい事に、調子に乗って恥ずかしい起こし方するんだよ？どう思う？」

どう思うも何も…　傍から聞いてたらどう考えてもただのノロケにしか聞こえんわっ！

「…アホらし。心配して損した。」

黙々とコボルト達の残したドロップを拾い集める事に専念する。

「あ…れ？　なんかヴォイドさん怒らせちゃったかな？　月猫、私なんかマズい事言っちゃった？」

「さ、さぁ？なんでだろうね。あははは」

回収し終えたドロップを「俺はいらないから適当に3人で分けといてくれ」とだけ言って、まとめて汐音に手渡す。

そんな俺達の姿を尻目に、女性陣はまだ楽しそうに話をしていた。

「にしても結婚スキルって、公式サイトの説明だけ読んでたら単に恥ずかしいだけだったけど、実際にこうやって目にして見ると、いろんな意味ですごいわね。セシルは本当に愛されてるんだなーって思ったわ。…ちょっと羨ましいな。」

「えー？月猫もさっさと結婚しちゃえばいいのに。」

「…うん。ずっと頑張ってはいるんだけど、なかなか相手にうまく伝わってないみたいで。」

姫のその言葉に、俺はスーッと血の気が引いたような気がした。

…なんや。姫には結婚を考えてるような男がいたって事か。

騎士様だとかダブルデートだとか言われて、すっかりその気になって舞い上がっていた自分を嘲笑ってやりたい気分だった。おそらく今日ここに俺が呼ばれたのは、その誰かさんのピンチヒッターってところが関の山だったのだろう。

相手の男がどんなヤツかは全く知らないが、まるで女神のような姫

のことだ。今はうまくいっていないのだとしても、そいつが彼女に落ちるのは時間の問題だろう。

「…そろそろパルノに戻ろうか。」

やっとの思いで口を開くと、俺は帰還を提案した。
行きはオスタードに揺られての行程だったが、４人とも活動拠点はパルノに設定しているので帰りは転送を使って一気に飛ぶ事が出来る。

「そうね。戻りましょうか。ちょっとトラブルもあったけど、なかなか素敵な所だったでしょ?ねっ!?」

得意気に胸を張るセシルに「おいおい。お前がそれを言うかー?」と汐音が突っ込む。

…楽しかったはずの美しい青い谷での想い出は、最悪の形で俺の記憶に刻まれる事になったのだった。

55．コベントリーにて（前書き）

ミーアのターンです。

55．コベントリーにて

『ただいまー！』

結局、母とあたしが再びＭＬＯの世界に戻って来たのは午前０時を回ってからだった。

とりあえず数時間前まで一緒にプレイしていたヴォイドさんに、一番にあいさつをしておく。

『おぅ。おかえり！　２３時過ぎには戻るって言うてた割には遅かったな。もうみんな揃っとるで？後はミーアちゃん待ちや。はよ戻っといで。』

『えっ？みんな？』

素早くフレンドリストに目を通して見てちょっと驚いてしまった。

だって、あたしのフレンドリストに登録されてる人達全員がコベントリー住宅街にある我が家に集結していたのだから。

…一体何事っ！？

ちなみにあたしが今いるのは、パルノの西側の一角にある『火竜の吐息亭』を出た辺りだ。

ここでヴォイドさんと話していて月猫が合流して来たんだけど、ちょうどその時、母が帰宅して来た為にあたしはこの場でログアウトしてしまった。

あの時のヴォイドさんの月猫に対するソワソワした態度からして、その後の２人が一体どうなったのかもかなり気になってたりするんだよね。

今、直接本人に聞いてみたいような気もするけど、さすがに失礼だと思うので、後でこっそり２人の様子をウォッチングさせてもらう

事にしよう。
ちなみに、あたしとほぼ同時にログインした母の方は前回のログアウトしたのがコベントリーの自宅だった為、既にみんなと合流しているようだった。

『わかった。すぐに戻るね』

早速マイホーム帰還機能を利用して自宅へと戻る事にする。
考えてみたらこの機能を使うのって初めてだ。軽い浮遊感と共にあっと言う間に転送は完了し、あたしは自宅前に立っていた。
システム系の「転送」って、一応足元には魔方陣が出るには出るんだけど、時空魔法で飛んだ時と違って魔力の波動が少しも感じられない気がする。…何て言ったらいいのかな？もっと無機質な感じがするんだよね。
あ！そう言えば、エドワードさんに転送してもらった時も似たような感じだったなぁ。って事は、バトラーの転送も魔法とは違うのかな？

「ただいまー」

家の中へ入って行くと、早速エミリーさんが白い猫耳をぴょこぴょこさせながら出迎えてくれた。

「お帰りなさいませお嬢様。皆様お待ちかねでございますよ。」

そう言って案内されたのは、いつものリビングではなくダイニングの方だった。どうやら、ちょうどみんなで昼食をとっていたところだったらしい。

「おっ、おかえり」

「あ！ミーアだ。おかえりー」
「おかえりなさい」
「遅いわよ！？ミーア」

みんな口ぐちに出迎えてくれる。…にしても、あたしを入れたら総勢８人かぁ。さすがに賑やかだ。

「今ね。お互いに自己紹介が終わったとこだよ。」

セシルがそう言いながら薄紫のツインテールの髪を揺らす。

「あ！あたし達、月猫とヴォイドさんから話を聞いて、フェルデンティアへの旅に同行させてもらうつもりでお邪魔したの。ユキノさんとミーアのお留守中に勝手に上がり込んじゃってごめんね。」

「気にする事ないわ。ヴォイドくんが連れて来たご友人なら、受け入れるようにってエドワード達にも言ってあるから。」

と母が微笑えむ。

…そう言えばこの家に初めて来た時に、「部外者は勝手に敷地内に立ち入れないようにセキュリティが設定されてる」とか何とか言ってたっけ。

「それって、ひょっとして俺やリディアちゃんが知り合いを連れて来ても入れてもらえるようになってるって事か？」

長船さんの言葉にも母は頷く。

「ええ。そうよ？だって、もう家族みたいなものだしね。変な人を

連れ込んだりはしないだろうって、信じてるの。」

「それはまた随分と買ってくれたもんだな。ありがたい事だとは思うけど、そこまで無条件に信用しちまって大丈夫なのか？」

…確かに。　普段の慎重な母の姿を知っている娘のあたしとしては、正直これはちょっと意外な気がした。

「ふふ。種明かしをしちゃうとね。あまりにおかしな客だったら、エドワードがちゃーんと摘み出してくれるっていう確信があるからなの。」

「なるほど。」

あー！そう言う事ね。それなら納得出来る気がする。
っていうか、あれ？　…そう言えば、まだ帰って来てからエドワードさんの姿を見てないなぁ。どうしたんだろ？

とりあえず空いてる席に腰掛けながら、周りを見渡してみる。
リディアはセシルと汐音を相手におしゃべりながらも、相変わらず旺盛な食欲でムシャムシャと食べてるし、長船さんと母は今後どういうルートでフェルデンティアに入るか考えてるみたいだ。
月猫とヴォイドさんは……何て言っていいのか、様子が変だった。
何だろう？街で別れた時にはあんなに月猫に夢中！って感じだったヴォイドさんが、今は月姫の視線を避けているようにすら見える。
…2人の間に何があったのかな？

そんな事を考えていたら、カタンとドアが開いて小さな男の子が入って来た。6歳くらいだろうか？
綺麗なブロンドのくりくりの巻き毛に、つぶらで賢そうなグリーン

の瞳をしたまるで天使みたいな可愛い少年だ。
一人前にエドワードさんそっくりの黒いバトラースーツを着て、身体に似合わない大きなワゴンに食後のお茶を載せて運んで来ている。
…うん？　エドワードさんそっくりのスーツ？？　もっ、もしかしてこの子って！？

「あっ！ミーアお嬢様、お帰りなさいませ。お出迎えにも上がれず大変失礼いたしました。」

「あのっ！？…もしかして、エドワード…さんですか？」

恐る恐る聞いてみる。

「はい、お恥ずかしながら。慣れないこのような姿の為、不調法を致しますがお許しくださいませ。」

そう言ってぴょこん！と頭を下げてみせた。
こ…これは！
うん。間違いない。犯人はうちの母だ。

「お母さんっ！　またエドワードさんに時のキャンディを舐めさせたのね？」

母の方をチラリと睨むと、どこ吹く風で「だって、前のキャンディの効果が切れてたんだもん。」とかしれっと言ってるし。

「おいおい。いい大人のクセして『だって』とか『だもん』とか言うなよ。」と隣で長船さんも呆れている。

「えー。でも、可愛いでしょ？　ちびエドワード。」

確かに、短い手足を使って一生懸命みんなにお茶をサーブしてくれているちびエドワードさんの姿は、すごく可愛かった。

当人としては粗相が無いようにと必死なんだろうとは思うんだけど、体の大きさと調度類とのサイズが噛み合ってなくて、まごまごしている様子がたまらなく愛らしい。

…うぅ。悔しいんだけど、ちょっと母の出来心が理解出来てしまった気がする。

お茶を飲んで一息ついたところで、長船さんがみんなの顔を眺めながらこう言った。

「さて、じゃあそろそろ、お互いの情報を擦り合わせて置く事にしようか。」

◇◆◇

フェルデンティアの酪農ギルドから受けた依頼の話はみんな知ってるので割愛する事にして、まず最初は、あたしとリディアがジェナイ先生に連れられて、サン・ラモンの森で課外授業を受けた話からだった。

「…なるほど。サン・ラモンの森には本来いるはずも無いワーグの

群れと駆け落ちしたはずの片割れの男の亡骸があったと言う訳か。」
「はい。おそらく犯人は時空魔術を使ってワーグを召喚して、その人を襲ったんじゃないかと思います。」

あたしとリディアの話を受けて、ヴォイドさんが補足して来る。

「街で聞いた噂によると、どうもその失踪した要人ってのはこの国のお姫さんらしいで？ライフェンベルクの第2公子との婚姻を控えとったのに、恋人だったイケメン男爵と手と手を取り合って駆け落ちしたらしい。」
「だけど、駆け落ちした2人の行方はパルノの魔術師ギルドによって把握されていたのよね？　なのに、彼らの監視の目を掻い潜って2人は再度失踪し、男爵の方だけが何者かによって殺されてしまった。と」

母も顎に手を当てながら聞いていた。

「時空魔術を扱える者ならば、確かに誘拐もお手の物だと思うわ。やはり犯人は時空魔術師ってことかしらね？」

「魔術師と言えば、私とヴォイドさんが遭遇した事件の黒幕にも怪しい魔術師が絡んでいました。」

そう言って月猫が語り出したのは、山賊達に襲われていた田舎娘の話とそれを迎えに来た騎士とその主人の話、山賊達に誘拐を依頼した怪しげな魔術師の話だった。

「この国にはサン・ラモンあたりにしかいないはずの山賊達と、誘拐を依頼した魔術師か。気になる話だな。…ひょっとして、そいつ

らが依頼を受けたのってパルノじゃなくて、サン・ラモンでだったんじゃないか？」

長船さんの言葉に、月猫が怪訝そうな顔をする。

「どういう意味ですか？　エポナが襲われたのはパルノですよ？あの山賊達は『ほんの2日程前にこの娘を攫えと依頼された』と言ってました。もし、依頼を受けたのがサン・ラモンでの事だったとしたら、まだパルノに辿り着いているはずがありません。」

「…それはどうだろう？山賊どもに依頼したのが、時空魔術師だったとしたら？」

「……時空魔術師？ひょっとして、その男がサン・ラモンから山賊達をパルノへ転送させたって事ですか？」

月猫の言葉にあたしは思わず反論してしまう。

「そんなのありえないよ。だって、ジェナイ先生は言ってた。自分以外の他の者を『転送』させるのは時空魔法の中でもかなり高度な魔術だから、冒険者以外では扱えるような人間は滅多にいないって。サン・ラモンの森でワーグを召喚した時空魔術師と山賊をけしかけた魔術師…この国にそんなに高位の時空魔術師がごろごろしているとは思えないなぁ。」

話を聞いていた汐音も口を挟んで来る。

「なら、犯人は冒険者の可能性もあるって事ですか？」

「いや。もっとシンプルに考えたらええやん。その2つの事件の時

空魔術師を別人と考えてるからややこしくなるんやろ。おそらくその時空魔術師っていうのは、同一人物なんとちゃうか？」

ヴォイドさんの言葉に、母も頷きながらこんな事を言った。

「そうね。それに犯人が冒険者っていう可能性は無いと思うわ。だって、サン・ラモンの森には男爵の亡骸が残されていたんでしょう？　冒険者が倒したのだとしたら、そもそも亡骸が残るはずがないもの。」

55．コベントリーにて（後書き）

うーん。文章整理出来てなくて読み辛いですね。
納得いってないので、ひょっとしたらこのページ書き直すかも。

56．絡む糸

「…なるほど。言われてみれば確かにな。ミーアちゃんから聞いた時は軽く聞き流してたんやけど、そのジェナイとかいう魔導師はサン・ラモンの森で確かに『亡骸』を発見した。って言うとったんやな？」

改めてヴォイドさんに確認されて、あたしは必死になって記憶の糸をたぐり寄せた。

「ええと。正確には『亡骸の一部』って言ってたと思います。」

「実際に見た訳やないから何ともよう言わんけど、やっぱりそういう言い方をするって事はドロップアイテムが残されていたとかではなく純粋な意味で『亡骸の一部』やと考えていいと思う。そもそもドロップアイテムやったら、回収せんとしばらく放って置いたら勝手に消えてしまうしな。…となると、少なくともそのイケメン男爵の殺害現場には冒険者はいなかったと考えていいんちゃうかな？」

「なぜそう言い切れるんです？」

納得いかない顔で汐音が食い下がる。

「俺がこのＭＬＯをプレイ開始してからこれまでに経験して来たクエストは、何も魔物ばかりが相手って訳とちゃうかってん。盗賊に襲われた小さな村の用心棒をやるクエとか、商隊の護衛につくクエとか…まぁいろいろとやって来た訳や。もちろん敵が人間でそいつらを倒さないかんっていうような場合も

あったし、護り切れずに目の前で襲われた民間人が殺されてしまうようなケースもあった。
でも、それがどんな場合でも目の前で息絶えた対象は亡骸なんて残さずにみんなキラキラ光って空に昇って消えて行ってた。魔物でも人間でも例外なくな。
まぁ、これはゲームやしそういうもんなんやろうなって思って、俺も特にその事については何の疑問も持ってへんかった。」

…ところがある時、とある小さな集落を魔物から護るという依頼を受けたヴォイドさんが現地に到着してみると、魔物に襲われまさに命を落とそうとしていた老人に遭遇してしまったのだそうだ。
老人とヴォイドさんとの間にはまだ結構な距離があったのにも関わらず、老人は息絶えた瞬間たちまち光の粒子となって跡形も無く消え去ってしまった。
その為にヴォイドさんは老人と長年連れ添ったという奥さんに随分酷く責められ泣かれてしまったらしい。

「…何でもその婆さんから聞いた話やとな。直接その死に関与したかどうかに関係なく、『冒険者』の視線に晒されていると、この世界の住人達は死の瞬間に何の痕跡も残さず消え去ってしまうという事らしいねん。俺ら冒険者は彼らが身につけていた一部のアイテムをドロップとして拾う事も可能やけど、この世界の住人には触れる事すら出来へんようになってしまうらしいわ。」

お婆さんの悲しみは、ヴォイドさんがその老人を護る事が出来なかったという事ではなく、彼がたまたまその死を目撃してしまったが故に、亡骸も遺品も残らなかった事に起因していたのだ。

「そう言う意味でも『冒険者』っていうのはこの世界の住人達からは疎ましがられてるところがあるみたいやな。確かに力はあるから

何かあった時には頼っては来るんやけども、内心あまりよくない感情を持ってる連中も少なくないんちゃうかって気がするわ。」

あたしはジェナイ先生の事をふと思い出した。
確かに先生も冒険者の事を語る度に苦々しい顔をしていた。きっと彼らにも何らかの複雑な感情があるのだろう。

長船さんがテーブルに広げた地図のサン・ラモンの辺りをコツコツと指で弾きながら言う。

「となると、事件の犯人はやっぱりこの世界の住人である時空魔術師だという事になるな。…けど、この世界でそれだけの術を使いこなせる魔術師の数となると限られて来る。サン・ラモンという共通の符合もある事だし、やはり同一人物と考えた方がいい訳か。」

その言葉に月猫が疑問を唱えた。

「だとしたら、どうしてその時空魔術師はエポナを襲わせる必要があったんでしょうか？　エポナは単に貴族の後妻に入る為に片田舎の村からパルノに呼ばれただけですよ？」

うーん。その辺がよくわからない。財産狙いなのかな？
にしては、ヴォイドさんの話だと山賊たちに依頼をした魔術師って言うのはかなり羽振りがいいみたいだったし。
そんな事を考えていると、母がゆっくりとこんな事を言う。

「…ねぇ？　その子って本当に誰かの後妻さんになるはずだったのかしら？　実は失踪したソフィー姫の代わりに、ライヒェンベルクの第2公子に嫁入りさせる為の替え玉として呼ばれたのかも知れないわよ？」

なるほど。言われてみれば確かにそうかも知れない。ヴォイドさんに見せてもらった絵姿は確かに貴族の奥方様としては若すぎるとあたしでも思ったし、亡くなってたったの1ヶ月で再婚だなんて不自然すぎるもの。

「そっかぁ！確かにそれなら一番納得できるね。」

それまで黙って聞いていたリディアもうんうんと頷いている。

「でも、それって謎の時空魔術師が山賊達に襲わせようとしたのは本当にエポナちゃんだったのかなぁ？謎の時空魔術師が本当にサン・ラモンにいたんだとしたら、替え玉の存在なんて知らなかったような気がするんだよね。　案外その時空魔術師、ソフィー姫に逃げられちゃって、実は行方をこっそり捜している！とかだったりして。」

その言葉に、みんなは一斉にリディアの顔をしげしげと眺めたのだった。

◇◆◇

「…まぁ、この件に関しては現時点ではこれ以上の事は推測する事しか出来無さそうだな。今後、ライヒェンベルクに行けば、新たな情報が掴めるかも知れん。また何かあったら情報共有する事にしよう。」

長船さんの言葉に一同は頷いた。

「あ！そうそう。長船に大事な事を言うの忘れるとこやった。実はここに来る前にな、俺ら、姫と汐音とセシルの４人で『青の谷』に行って来たねん。」

「『青の谷』？　わざわざあんなとこに何しに行ったんだ？」

長船さんは怪訝そうな顔をしていた。

「いやっ…それはその…単に４人で狩り行っただけや！　まぁそれはいいとしてやな！そこで俺と姫の２人はおかしな爺さんに出会ったんや。」

…どうでもいいけど、さっきからヴォイドさん、さりげに月猫の事、姫って呼んでるよね？
ヴォイドさんって第一印象では、どもりがちでボソボソと喋ってて、動きも挙動不審だったから、「ちょっとオタクっぽい不気味な人」ってイメージだったんだけど、なんか今は少し落ち着いた気がする。
関西弁を気にしなくなったせいなのか、よく喋るようになったし。
人ってこんな短期間であっさり変われちゃうものなんだろうか？…
やっぱり月猫となんかあったのかな？

「おかしな爺さんって？」

長船さんが訊ねると、月猫が答える。

「ツルハシを持っていて、採掘をしに来ていたみたいでしたよ。」

今ひとつわからないと言う顔で首を傾げる長船さんに向かってヴォイドさんが続けた。

「その爺さん、自分の事をＢ．Ｂ．バルドーっていう武器職人のバトラーやって言うとった。」

「何っ！？」

「うそっ！？ホントに！？」

長船さんと母がほぼ同時に声を上げる。

「嘘言うてどないすんねん。確かに稀代の武器職人『ＢＢＢ』のバトラーのホーリー・ススムンって名乗ったぞ。その爺さん、俺のこのバスタードソードを見て『これだけの物を作れる職人ならいつか《カタナ》を作れる日がくるかも知れん』って言ってな、俺が長船の話をしたら『我が主はいつでもあなたのお越しをお待ち申し上げている』と伝えてくれって言って消えて行ったんや。」

「…そうか。ありがとう。と言う事はやっぱり伝説の刀鍛冶はＢＢＢなんだな。…フェルデンティアへ行けば逢えるのか。」

長船さんは嬉しそうだったけど、母は納得してないようだった。

「ベベちゃんがフェルデンティアにいるっていうの？…でもフレンドリストではログインしてない事になってるのに…」

大抵のネトゲでは、フレンドリスト情報は、ユーザー側の設定によってＯＮ／ＯＦＦする事が出来るようになっている。親しい友人同士の間でも、たまには干渉されずにプレイしたいような場合もある為だ。

母としては、親しかったであろう友人に拒絶されたようで寂しいに

違いない。
こちらから連絡をとろうにもＯＦＦ設定になっていれば、個別チャットを送る事も出来ないだろうし。
…って、あれ？

「お母さん、個別チャットは無理だとしても、そのＢＢＢさんにメールを送ってみたら？」

母は悲しそうな顔で首を振った。

「ダメ。実はログインしてすぐに昔のフレンドには全員メール送ってあるのよね。今のところ誰からも返事が返って来てないわ。…そもそも開封確認も返って来てないから、読んでもいないんだと思う。」

それを聞いて長船さんが口を挟んだ。

「それも不自然な話だな。いくらＯＦＦ設定にしてるとは言っても、１５年ぶりにフレンドからメールが来たりなんかしたら、普通なら気になって開封くらいしそうなもんだろうに。…よほど自分がログインしていると知られたくない事情でもあるんだろうか？」

母はますます眉根に皺を寄せてしまった。

「や、えっと。実はＢＢＢさんはログインしてなかったんだけど、バトラーさんだけが活動してたって事かもよ？」

とあたしが必死でフォローしたのに、

「それはないわ」

「それはない」

あっさりと母と長船さんの2人に否定されてしまう。

「なんで？」

「雇用しているプレイヤーがログインしていない時、バトラーは他のプレイヤー達には姿が見えなくなる仕様なのよ。バトラーにはルーチンワークを設定してプレイヤーの代わりに調達系の第一次生産に従事させる事が出来るって話をしたでしょ？　プレイヤーがログインしてもいないのに、大勢のバトラーが勝手にマップで活動していたとしたら、資源の取り合いにもなるし、サーバーに負荷が掛って他のプレイヤーにとっては迷惑になるわ。実際問題、バトラーが実装されるまでは似たような採取系ＢＯＴが大量にいたの。」

「つまり、主人がログインしてへん時はバトラーは透明人間みたいなもんやっちゅう事か。」

…と言う事は、やっぱりＢＢＢさんはＯＦＦ設定にしてこの世界にひっそりと活動しているという事になってしまう。

「…まぁいいわ。直接逢ったらきっちり問い詰めてやる事にするから。」

そう言ってにやっと笑った母の横顔はかなり凶悪だった。

56．絡む糸（後書き）

最年長だから偉そうに仕切ってるけど、実の所なーんにもしてない長船さんだったり。

57．いざライヒェンベルクへ

ポン！と膝を叩いて、母が勢いよく立ちあがった。

「さて、それじゃ話もまとまった事だし、ちゃっちゃとライヒェンベルクに向かいましょうか？こんな風に全員が顔を揃えてる機会っていうのもなかなか無いだろうしね。」

「えっ！？もう行くの？何か旅の準備とかしたりしなくても平気？」

慌てるあたしにエドワードさんがにっこりと微笑み掛けて来る。

「ミーアお嬢様がご心配なさるお気持ちはわかりますが、ライヒェンベルクは観光地ですので商店もたくさんございますし、どこにでも銀行がございますのでいつでも倉庫をご利用になる事が可能です。それに、皆様方の旅に必要な物は一通りわたくしが持って参りますのでご安心いただいてよろしいかと。」

万能わんこバトラーのエドワードさんがそういうのならきっと大丈夫なのだろう。…今はちびっこ化しちゃってるけどね。

「じゃ、行きましょうか。エミリーまた留守番よろしく頼むわね。」

「かしこまりました。お気をつけて行ってらっしゃいませ。」

そう言ってさっさと家の外へと出て行ってしまう母の姿に、慌ただしくみんなも席を立って後を追う。

「ええっ！？」

「ちょっ！ユキノさん待って」

「…ひょっとして、ユキノさんって超マイペースな人だったりする？」

うっ否定できない。みんなごめんね。

まごまごしてたら家を出たのは結局あたしが一番最後になってしまった。

飛び出した玄関先の庭には、既にみんながずらっと並んでいた。

ゆっくりと全員の顔を見渡して母が言う。

「よし。これでみんな揃ったわね？　それじゃあ今からライヒェンベルク行きの転送の魔方陣を出すわ。魔方陣が出たら適当に順番に上に乗っかって行って。

全員を飛ばしたら、最後に私が行くからそれまでは向こうに着いてもあまりうろちょろしないでね？」

「わかった。けど、その魔方陣って具体的にはライヒェンベルクのどのあたりの座標なんだ？」

長船さんの質問に母は悪戯っぽい笑みを浮かべると、「それは行ってみてのお楽しみ」とだけ言って素早く呪文を詠唱し始める。

あっと言う間に長船さんの足元に魔方陣が完成して、問答無用で彼の姿が消えた。

…って言うか、何今の！？　詠唱から魔方陣の完成までめちゃくちゃ早かったんだけど。

「ささ。順番に乗って乗って。」

巨大な魔方陣はキラキラと輝きながらゆっくりと回っている。
前にジェナイ先生が出してくれた時みたいに急速に小さくなって行く様子は無かった。
それに先生が出した魔方陣よりもサイズもかなり大きいし、陣を描いている光もくっきりしているような気がする。
…これが熟練冒険者の実力って事なのかな？
そうこうしている間に次々とみんなは魔方陣の上に乗り、ゆっくりと消えて行った。
「ミーア、あなたで最後よ。行きなさい」
そう促されて、転送の魔方陣の上へと移動する。魔方陣のサイズはさっきよりも少し小さくなっていたけれど、まだ消えてしまうまでには余裕があるみたいだった。

◇◆◇

「うわっ！何ここっ！」
転送の際に思わず閉じてしまっていた目を開いて、大声をあげてしまう。
そこは切り立った崖の上だったのだ。
遥か下の方に、美しい白い砂浜と青くきらめく海が見える。
「ね？びっくりだよね。なんかここ、ちょっと特殊な場所みたいだよ？」

リディアの声に振り返ると、背後にはヤシ（？）で作られた壁の無い簡易コテージのような建物が立っていて、みんなはその中や周囲を思い思いに見て回っているみたいだった。

「特殊って？」

「そのコテージの裏に回ってみればわかるんだけど、ここに来るための道が無いみたい。」

「？」

意味がわからなくて、実際にコテージの裏手に回ってみる事にする。コテージの裏は海側のような切り立った崖ではないものの、尖った岩が並ぶ山肌が続いていて、とても歩いては昇って来られるようには見えなかった。…おそらくこれはオスタードでも無理だろう。どうやらここは陸の孤島になっているようだ。

「驚いた？」

いたずらが成功した子供のように、母がはしゃいだ声を掛けて来る。

「ユキノさん、ここって一体どこなんですか？」

月猫の問いかけに「ふふふ。秘密のデートスポットその1ってとこかなー？」などと答えている。

背後から長船さんが呆れたような声をあげた。

「なるほどな。ここは時空魔法のワープか転送でしか来れない場所なんだろ？　何かの拍子にたまたま見つけて、ちょくちょくデートにでも使ってたってところか？」

「うーん。たまたまって訳でもないけどね？　私、こういう隠れスポット探すの趣味だから。時空魔法でランダムにワープしてると、たまーに普通には行けないような場所に出ちゃう事があって、それがおもしろいのよねぇ」

確かに、風景を作り込んであるゲーム程たくさんのオブジェクトが設置されている為、上空や周囲に実際にはプレイヤーが入っていけない領域というのが存在している。
あたしが以前にやっていた別のネトゲでも、たまに通常手段では行けないような場所に出てしまう事があった。それはバグみたいなものだったけど、このＭＬＯでは時空魔法を使えばある程度意図的にそういう場所に出る事も可能らしい。

汐音がセシルの腰に腕を回したまま話しかけて来る。

「確かに絶景だし、デートするにはいい場所だとは思うんですが、この後どうするんですか？…俺達フェルデンティアに向かうはずなんですよね？」

「あぁ。そうね。とりあえず今夜はあのビーチに立っているホテルに泊まるつもりよ。」

そう言って母はビーチサイドに立っている白いホテルを指差した。

…って、汐音はそういう事聞いた訳じゃないと思うんだけどなぁ？

「とりあえず、今日1日はのんびりして明日から行動開始する事にしましょう。それじゃ、みんなをビーチに下ろすわね。」

言うが早いか、母は汐音とセシルに素早く魔法を掛けていた。瞬時に崖下の白い砂浜に2人の姿が移動したのが見える。
あ、今のは「小ワープ」か！　なるほど。

「お母さん。あたしも手伝うわ。」

あたしも手早く他のみんなに「小ワープ」を掛けて飛ばして行く。
「小ワープ」は転送先が目視出来る時だけに使える魔法だ。ちなみに「中ワープ」は目標地点が見えなくても同一マップ内なら飛ぶ事が出来る魔法。母がさっき言ってたランダムワープっていうのは、この「中ワープ」の事だろう。それ以上の距離になると、座標を記録して「転送」で飛ぶ事になる。

「あ、わたしは自分で飛ぶね。」

リディアは自分で「小ワープ」を使って飛んで行く。
全員を下ろした後、母とあたしもビーチへと降り立った。
青い海と白い砂のコントラストが本当に美しい。

「うわっ！　ほんとにあのホテルに泊まるの？」

崖の上からではわからなかったけれど、改めて下から眺めて見るとビーチサイドに立つホテルは思っていた以上に大きくて高級感が溢れていた。パルノの街の小さな宿屋とは全然雰囲気が違う。まさに南国のリゾート！って感じだ。
白い壁の2階建てで屋根にはオレンジ色の瓦が葺かれていて、ビーチに沿って長く左右へと広がったその姿はまるで翼を広げた鳥のようだ。

ヴォイドさんが母の顔を覗き込みながら、不安そうな声をあげる。

「でもこんな大所帯でいきなり行って、部屋なんか取れるもんなんか？」
「…うーん。どうかしら？　多分大丈夫だとは思うんだけど。とりあえず行ってみましょうか。」
うわー。今、ヴォイドさんすっごくツッコミたそうな顔してたよ！？そりゃそうだよね。母も泊まるって言ってはみたものの、確実に部屋が取れるっていう自信は無いっぽいし。…本当に大丈夫なのかなー？
あたし達はぞろぞろと連れ立って、ホテルへと入っていったのだった。

◇
◆
◇

ホテル内部は人で溢れていた。
「…大変申し訳ございませんが、ただいま満室となっております。ゲオルク公子とソフィー姫のご婚儀の影響で、おそらくこの首都ライフェン近郊の宿泊施設はどこも似たような状態だと思いますよ？」
あたし達の目の前で受付嬢に話しかけていた人が、あっさりと宿泊を断られてホテルをすごすごと出て行ってしまった。
受付嬢の話だと、どうやらここはライフェンベルクの首都ライフェンの近郊みたいだ。
ロイヤルウェディングを一目見ようと、現在首都にはたくさんの観光客が押し寄せて来ているって事なのかな？

「ねぇ？やっぱり無理そうだよ？　ユキノさんどうするつもりなのかな？」

セシルも心配そうに母の動向を見つめている。

そんな母はつかつかと受付嬢の元まで行ったかと思うと、いきなりこう言ったのだった。

「ユキノ・ウォールバンガーよ。支配人はいるかしら？」

57．いざライヒェンベルクへ（後書き）

おかん随分エラそうです。

ちなみにライフェン近郊のビーチは、バリのヌサドゥアあたりをイメージしてます。

58．三つの公国と傀儡皇帝

「…支配人をですか？　少々お待ちくださいませ。」

怪訝な顔で受付嬢がバックヤードへと下がっていくと、「じゃ、とりあえずその辺にでも座って待ってましょうか？」と、母はさっさとロビーラウンジに向かって歩いて行ってしまう。

「ちょっとお母さん！　いきなり支配人さんなんて呼びつけてどうするつもりなの？」

母が旧ＭＬＯをプレイしていた時代からは既に１８０年もの歳月が経過しているのだ。過去にこのホテルの関係者に知り合いがいたのだとしても、さすがにもう存命しているとは思えなかった。

「大丈夫。ちょっと泊まれるか聞いてみるだけよ？」

「え？　でも、さっき目の前で他のお客さんが断られてたのに？」

心配そうなセシルをよそに「取りあえず待ちましょ。ここのケーキおいしいのよ？…昔と変わってなければね。」と、母は平然とウェイターを呼んだのだった。

◇
◆
◇

しばらくラウンジで落ち着かない時を過ごした。

みんなが何を聞いても母は笑って受け流すだけだったし、まだ宿泊出来ると決まった訳でも無いのにこんな高級そうなホテルのラウン

ジでのんびりと寛ぐなんて事、ちょっとあたしには出来そうにも無い。それはみんなも同じ気持ちだったようだ。

…リディアだけはホテルご自慢のケーキを頬張ってご満悦だったみたいだけど。

「大変お待たせして失礼致しました。ユキノ・ウォールバンガー様。」

背後から掛かった声の主に、一斉にみんなの視線が注ぐ。

そこにはオリーブ色の肌にゆるくウェーブの掛かったダークブラウンの髪の紳士が立っていて、真っ直ぐ母の方を見ていた。

「ええ。急に来て申し訳ないんだけど、部屋を用意してもらいたいの。出来るかしら？」

「…9名様でしょうか？…左様でございますね…ただいま通常の客室は満室になっておりまして」

困惑したような素振りを見せる支配人にエドワードさんが言った。

「わたくしの事は数に入れていただかなくて結構ですよ。8人という事でお考え下さい。」

…うーん？1人減ったくらいで状況が変わるとも思えないんだけど？

「畏まりました。それでしたら、インペリアルスイートをご用意させましょう。続き部屋に人数分のベッドをご用意させますので、お部屋のご用意が出来るまではどうぞビーチでおくつろぎ下さい。」

ええええっ!?　うそっ!?　なんでっ?

「…おい。１８０年振りに突然現れて、こんな高級リゾートにあっさり部屋が取れるユキノって一体何者なんだよ。それもどこのホテルも満員っていうような時にだぞ?…しかも、インペリアルスイートって…王族とかの超ＶＩＰが泊まるような部屋なんじゃないのか?」

長船さんの言葉に母も頷く。

「そうね。普段は王族などが利用しているはずだわ。今回も、ひょっとしたら式へ招待された外国の貴賓客が宿泊しているんじゃないかって心配してたんだけど、どうやら大丈夫だったみたいね。」

それを聞いていた支配人さんが言葉を濁した。

「…それが、本来ならインペリアルスイートはノルテリエ帝国の皇帝陛下がご利用いただいているはずだったのですが、昨晩こちらにはお越しにはならないというご連絡が入りまして…」

あーやっぱり予約入ってたんだ?　でもキャンセルになったっていうならラッキーだったかな。

「それでは私はこれで。何かございましたらいつでもお呼びくださいませ。」

足早に去っていく支配人の後姿を見つめながら、月猫さんが呟いた。

「ノルテリエ帝国?それってどこだったかしら?…そんな国あった?」

…あれ？　言われてみれば確かに聞いた事ないかも。地図にもそんな国載ってなかったと思うし。

「あーそうか。姫たちはパルノイエからのスタートやし、知らんでもしゃーないな。ノルテリエっていうのは大昔に繁栄してた大帝国らしいで？　一応、現在でもオプヴァルデン・フェルデンティア・ライヒェンベルクの三公国がこの帝国に所属してる事になってるな。と言っても、長い歴史の中で三公国の自治力が上がって、逆にノルテリエ帝国自体はすっかり弱体化したせいで、今となってはノルテリエは名前だけが残っとるようなもんみたいやけど。」

ヴォイドさんの解説に母が補足を入れる。

「そうね。私がプレイしていた頃には既にノルテリエは名前だけの形骸国家に成り果ててたわ。…むしろまだ皇帝陛下なんてものが存在していた事の方が驚きだわね。」

「へぇ。形骸国家の皇帝陛下かぁ…象徴天皇みたいなものなのかなぁ？」

リディアの呟きをヴォイドさんが即座に否定して来た。

「いや。そんな可愛らしいもんとちゃうみたいやで？　皇帝とは言ってもほんまに名ばかりの存在で、公務とかは一切させてもらえんと、ノルテリエの（って、この場合はオプヴァルデンの首都のノルテリエの事なんやけどな？とヴォイドさんは補足した）郊外の何処かにあると言われている離宮に一生閉じ込められたままで生涯を終えるらしい。…一応、大義名分の為に血縁だけは途絶えさんようにされてるらしいけどな。」

…血縁だけは途絶えないようにして一生幽閉って…随分、酷い話じゃない？

リディアとヴォイドさんの会話が続く。

「あれ？　でも、そんな人が結婚式に出席する為にこのホテルを予約してたのっておかしくない？　幽閉されてるんでしょ？」

「あぁ、それな。多分、オプヴァルデンのハッタリやと思うわ。」

はったり？　どういう意味だろう。

「オプヴァルデンは今までにも何度も皇帝の名前を使って、各国の公式行事に参加する素振りだけ見せて、『急に体調が悪くなった』とか何とか言ってドタキャンをするって事を繰り返しとるみたいや。」

「うわー。ノルテリエの皇帝って完全にオプヴァルデンにいいように操られちゃってるんだね。そんな事やってて他の二公国は何も言って来ないものなの？」

「オプヴァルデンは高い軍事力を持った国やからな。フェルデンティアとライヒェンベルクが結託したところで、戦争になったとしたら勝ち目が無いって思っとるんちゃうやろか？」

何だかよくわからないけど、このＭＬＯの世界にもなかなか複雑な国家間の事情ってものが存在しているみたいだ。

ひょっとして、ゲームの中で戦争とか起こっちゃったりするのかな？

「へぇ。…にしてもヴォイドくんは随分詳しいのね。カムバック組のおさぴょんと私よりもいろいろな事を知ってそうだわ。」

「確かに。俺も昔、随分いろいろとクエストは受けた覚えはあるんだが、そこまでこの世界の内情を見聞きした記憶がないな。…ひょっとすると、新生ＭＬＯになってより詳しい世界観が作りこまれたせいで、クエストやＮＰＣ達との会話で得られる情報量が増えてるって事なのかもな。…にしても、ヴォイドは新規ユーザーの割には短期間で随分と強くなってるみたいだし、こなしたクエスト数も半端じゃなさそうだ。」

母と長船さんが感心したようにヴォイドさんの方を見ると、彼は複雑そうな表情を浮かべた。

「…あー俺、第1次、第2次とクローズドβ期間中、まるまる有休取ってひたすら廃プレイしとったからなぁ。さすがに今月はもう休み取れんかったから、大人しくしとるけど。」

第1次クローズドβテストは2月上旬、第2次クローズドβテストは3月中旬だったはずだ。確かに3ヶ月連続で1週間以上の大型休暇を取るのなんて、社会人としてはかなり無謀だと思う。下手したらエンドレス休暇に突入してしまうかも？

何か物言いたげにじっと見つめていた月猫の視線からスッと顔をそらすと、ヴォイドさんは思い出したように母に話を戻した。

「そうそう！そんな事よりユキノさんや！　さっきの支配人との一件、一体どういう事や？　いきなりインペリアルスイートに泊まれるユキノさんって一体何者なんや？」

「…あぁそれね。」

さりげなくウェイターを呼んで、お代わりを催促しながら母が呟く。

って！　お母さーんー！！　いつの間にかちゃっかりお酒なんか飲んでるしっ！！

「私ね。このホテルのオーナーなの。」

「「「「ええええええっ！？」」」」

思わずみんなして声を上げてしまった。

「ちょっと！　やめてよ。こんなところで大声出さないで。」

いや、でもこれはびっくりするでしょ！？

「…ユキノさんって…金持ちや金持ちやとは思っとったけど、まさかホテルのオーナーやったとは…。

…何て言うか、もうここまで行くとスケールが違い過ぎて訳がわからんなってくるわ。」

「私だって、別に最初からお金持ちだった訳じゃないわよ？　ただキンシップメンバー達はいわゆる『古参』の強烈なメンバー達だったし、いろんな狩場に行ってかなり稼いでいたんだと思う。私自身は生産職を選んだせいで装備とかにお金を掛ける必要性も無かったから、地味に生産品の売上でじわじわと小金が貯まって行ったって感じかな？」

「えっ！？　生産やってるだけで、お金ってそんなに貯まるものな

んですか？」

月猫が身を乗り出して聞いている。…すごい食い付きっぷりだ。月猫って生産に興味あったのかな？

「…うーん。その辺は市場動向を見極めるセンスも必要になって来ると思う。どれだけ安価で素材を手に入れられるかってところも大きいしね。そういう意味で私は本当に恵まれていたのよ。素材を提供してくれる仲間がたくさんいたからね。」

そっかぁ。そんなにうまく行くはずも無いよね。

月猫は明らかにがっかりしたような様子でさらに質問を続けた。

「なら、どうやってそこまでユキノさんはお金持ちになれたんですか？」

「…それもね。仲間達のお陰なの。このゲームって『相続』って言う制度があるのよね。何らかの都合でＭＬＯをプレイ出来なくなった状態になった時、それまでに蓄えた資産を他のプレイヤーに譲る事が出来るの。」

「えっ？それじゃ引退した人たちの財産を引き継いだって事ですか？」

「…そういう事。私としては、財産なんかいらないから、もっとみんなと一緒にいたかったんだけどなー。」

そう語る母の横顔はやっぱり淋しそうだった。

「で、私としては、万が一みんなが戻って来た時には元通り資産を

返してあげたかったから、目減りさせたりしないように必死に資産運用してたって訳。」

59．彼と彼女の水着姿

「資産運用…ですか？」

月猫が不思議そうに聞き返す。

「そう。ある時、私が倉庫を使おうと思って銀行に立ち寄ったら、奥からお偉いさんっぽい人が出て来て『ユキノ様。これだけの資産をお持ちなのでしたら、是非投資してみてはいかがですか？』なーんて勧められちゃったのよね。」

そんな母の言葉に、長船さんが驚いたように声をあげた。

「えっ！？　でも、このゲームで投資が出来るなんて話、俺は一度も聞いた事がないぞ？　ＷＩＫＩや攻略サイトでもそんな情報は見た事も聞いた事も無いんだが。」

カムバックユーザーの長船さんでも知らないような事なんだ？って事は投資とか資産運用っていうのは旧ＭＬＯの世界でも一般的じゃなかったって事なのかな。

母はそんな長船さんの言葉をスルーして月猫との会話を続ける。

「月猫ちゃんは、このＭＬＯの世界で銀行にお金預けておくと、毎年3月には利息が支払われるようになってるっていうのは知ってる？」

「…いえ。知りませんでした。」

あたしも知らなかった。プレイを開始したばかりのあたし達からしてみれば、1年に1度なんて随分と気の長い話に思えてしまう。実際の所、ゲーム内時間ではまだ夏だから3月までは当分先だ。

「でもこの利息ってのは、預金上限額がいっぱいだと銀行に収まりきらない訳だから、振り込みされない事になっちゃうの。だから、どうも銀行の預金が上限額に到達した時点で『投資』に関するクエストが発生するようになってるっぽいのよね。」

「じょっ…上限額いっぱいっ！？」

月猫の声が裏返るのも無理はない。銀行の上限額なんて確かとんでもない金額のはずだ。

あたし達のような新規ユーザーには、ちょっと想像する事もぴんと来ないような大金だった。

「そう。だから、ＷＩＫＩや情報サイトに投資の話題が無かったのも無理も無いわ。

多額の資産を持つ人間というのは、ただそれだけで羨んだり妬んだりされたりする事が多いっていうのは何となく想像出来るでしょ？このクエストを受けられる条件はあまりに特殊だし、情報サイトにこの事が漏れれば、誰がどこに投資を行ったなんて事は、あっさり特定されてしまっていたでしょうね。

投資を行うという事は、都市や国に大きな変化が起こるという事でもあるから、情報が漏れれば自分達の都合のいいように干渉しようとする輩がどうしても出て来るものよ。

だから、ゲーム内でも投資に関しては極秘事項だったし匿名性が保たれるようになっていたの。」

「…ふーん。何やようわからんけど、他人にバレるとロクな事ない

から、金持ちのプレイヤーはひっそりとあちこちに投資してたって事か？」

「有体に言えばヴォイドくんの言う通りよ。実際に投資に参加してるプレイヤー達の間ではある程度の情報共有はされてたんだけどね。ま、そんなこんなで私はここのホテルのオーナーでもあるって訳なのでしたー！」

うーん…さらっと言ってるけど、ひょっとしてうちの母ってこのゲーム内では（金銭的に）とんでもない規格外の人だったりする…のかな？

◇◆◇

「そんな話はいいとして、せっかくライヒェンベルクに来たんだから楽しまなくちゃ。あなた達水着は持ってるのかしら？」

えっ！？　どうなんだろ？
裁縫スキル持ちの母の事だ。このキャラの倉庫も探せば水着くらい入っていそうな気もするんだけど…。でも、なーんか嫌な予感するんだよね。

「わたし、水着持ってないです。」
「あ、私もー！」
「俺も今までひたすら戦闘系のクエばっかり受けてたから、そんなもんには縁が無かったしなぁ。」

みんなが口々に言う中、長船さんがボソリと呟いた。

「…持ってると言えば持ってるんだが…いや、でも…うーん。」
「えっ!?なんや長船、水着持ってるんか？　男物の水着ってどんなんなんや？　見して見して。」
「あっ!あたしもちょっと見てみたいです。」
「わたしもわたしもー!!」

期待に目を輝かせ、みんなして長船さんの周りを取り囲む。

「うっ…いやその。そんな大したもんじゃないし…やっぱ恥ずかしいから止めとく」
「えー!何言ってるんですか!?」
「そんなの男らしくないですよっ？」
「そうそう!男やったらすぱっと男らしく着替えんかいっ!」

みんなから責め立てられ、たじたじとなった長船さんがついに観念した。

「…わかった。お前ら絶対笑うなよ？　絶対だぞ？」

何度も念押しする長船さんに、みんなは黙ってコクコクと頷く。

次の瞬間、みんなの輪の真ん中には真っ赤なフンドシを1枚まとっただけの姿に装備変更した長船さんが立っていたのだった。

「「「「……」」」」

「うわー　変態や。変態がおる!」
「なっ!!　違うっ!　これはフレンドからもらった単なるネタ装備でっ」

「言い訳するなんて男らしくないわね。」
「ほんとほんと！」
「…いや、でも日本男児って感じで格好良いですよ。職人の長船さんにはぴったりと言うか何と言うか…」
汐音が一応必死でフォローを入れては見るものの、女性陣の視線はやっぱり冷たかった。
「えー！？　やだぁ」
「ぷっ…ごめんなさい。やっぱり耐えられないわ。あはははは」
「くそーっ！　お前ら覚えてろよ！」
そう言い残すと、長船さんは赤ふん姿のままビーチに向かって走り去ってしまったのだった。

◇◆◇

「うそー　あの格好のまま行っちゃったよ？」
呆気に取られてセシルが言うと、「馬鹿は放っときましょう」と母も冷たく言い放つ。
…長船さん、やっぱりちょっと可愛そうだったかも？
「けど、いくら何でもさすがにフンドシってのはちょっとなぁ。」
汐音が言うと、他のみんなもうんうんと頷いている。

「そう言えば、ユキノさんって裁縫スキル持ちなんですよね？　ひょっとして水着もいろいろ在庫持ってたりしますか？」

月猫が聞くと、母はこめかみを指で押さえながら答えた。

「…うーん。無い事も無いんだけど…。ほら、旧ＭＬＯって２Ｄ描画で３頭身のキャラだったでしょ？…そのせいで、なんと言うか…昔作った装備はリアル化してみるとデザインが奇抜っていうか、ネタっぽくなっちゃってる物が結構多いのよね。だから、あんまりおさぴょんの事を笑えないかもよ？」

そう言って母が倉庫から出して見せてくれた水着は、どれもこれも「一体誰がこんなの着るの！？」って言いたくなるようなデザインだった。…まさか貝殻ビキニの実物を手に取るような機会があるとは思わなかったよ。

唯一まともっぽかったのが黒のビキニくらい？　でも、それもやたらと布の面積が小さいシロモノだったし。母や月猫が着るならともかく、あたしやセシルが着たらあっと言う間にズレ上がって来てしまいそうな気がする。

…くっ貧乳なんかじゃないもん！　単に成長過程なだけなんだからねっ！

「確かにこれはちょっと…どれも着れそうに無いかも…」

セシルとリディアの顔には明らかに落胆の色が現れていた。

「そうねぇ。素材と工房があれば適当に作ってあげらなくもないんだけど、せっかくここまで来てるんだから現地調達すればいいんじ

ゃない？　このホテルにもショップは入っているし、街まで出れば、いくらでもおしゃれな物を売ってる店があると思うわよ？」

母が言うと、ぽんと手を叩いてセシルが俄かに立ちあがった。

「あっそれもそっか！　なーんだ。確かにその手があったよね。汐音～！　私の水着選んでくれるー？」

そう言って嬉しそうに汐音の腕に抱きつくと、そのままさっさと2人して買い物へと行ってしまう。

残されたあたし達が呆気に取られていると、今度は月猫がヴォイドさんの指先をそっと握って彼の耳元で囁いた。

「あの…私もヴォイドさんに、私に似合いそうな水着を選んでもらいたいな…なんて。」

頬を赤らめつつ、もじもじしながらそんな事を言っちゃってるしっ！！

あれっ？　月猫ってこんなキャラだったかなぁ？

なんかもっとこう…クールな合理主義者って感じだったような気がするんだけど？？

…うーん。あたしの勘違いだったんだろうか？　それともヴォイドさんと出会って何らかの心境の変化でもあったのかな？

「えっ！？　俺にっ！？」

ヴォイドさんは寝耳に水といった様子で面食らっていたけれど、しばらくすると「姫に似合う水着か…」とブツブツと呟きながら考え込み始めた。

…そう言ってる彼の目線が、さっきからチラチラと母の水着コレクションの中の1枚、白のゼッケン付きスクール水着の上を泳いでいるような気がするのはきっと気のせいですよねっ！？　うん。断じて気のせいだと思いたい。

「ミーア～　あたし達も水着見に行こっ！？」

リディアもそう言うと、あたしの腕をぐいぐいと引っ張って来た。

「わかったわかった。もうっリディアってば！あんまり引っ張ったら痛いってば！　お母さん、あたし達もちょっと行って来るね！」

母とちびエドワードさんに向けて小さく手を振ると、あたし達も街へと買い物に出かけたのだった。

60．ライフェンビーチの夜（前書き）

ヴォイドくんのターン。

60．ライフェンビーチの夜

「あの…私もヴォイドさんに、私に似合いそうな水着を選んでもらいたいな…なんて。」

そっと指先を握られて、上目遣いで見つめられながら姫にそんな風に言われた俺は一瞬固まってしまった。

「えっ！？　俺にっ！？」

思わず声が上擦ってしまう。

…一体どういうつもりなんやろか？

姫には結婚したいと思っている男がいるはずだ。なのに、敢えて第三者である俺に似合いそうな水着を選ばせるというのは、おそらくこの場にいないその誰かさんの為に、男の目線で見て受けそうな物を選んでくれ。という事なんだろう。

あー！すげぇムカついて来た。なんで他の男に見せる為の水着なんか選んでやらなあかんねん。

姫に一番似合う水着？　そりゃ俺としては、スク水で恥じらう姫の姿とか激しく見てみたい気がするんやけど、さすがにそれはあくまで妄想の範囲内に抑えて置かないと確実に変態扱いされてしまう。俺がそんな姫の姿を妄想している事は、決して悟られる訳にはいかない。（※バレバレです）

「わかった。どんな水着が姫に似合うのかようわからんけど、俺が選んでいいって言うんなら、がんばって選ばさしてもらうわ。」

そして、姫に手を引かれるままライフェンの街にショッピングに出掛ける事になってしまったのだった。

◇◆◇

しかーし！　女物の水着を一緒に選ぶっていう事の意味を俺はちゃんと理解していなかった。
華やかな色合いが溢れる女物の水着売り場なんて、当然周りにいるのも女ばかりだ。
俺のような１９０ｃｍを超える熊のような大男なんて、店内で浮きまくってどうしようもない。
…しかも俺、全身がちがちの鎧装備で背中には巨大なバスタードソードまで背負ってるしな。

「ねぇ？　こっちとこっち、どっちがいいと思う？」
「えっ！？　うーん。…み、右？」

何かもう…すっかり頭が真っ白になってしもて、何をどういう基準で選んでいいものやらさっぱりわからん。
しかも、「じゃ、ちょっと試着してみるね？」とか言って姫が試着室に入って行く度に、ぽつんと１人取り残され、店内の女たちにジロジロと見られる居たたまれなさと言ったら…。
別に何も悪い事はしてへんはずやのに、「すみません！俺が悪うございましたっ！」と謝って逃げ出してしまいたくなるような衝動に駆られてしまう。

しばらくするとシャッと音を立てて試着室のカーテンが開いた。

「…どうかな？」

照れくさそうに姫が笑う。白いレースがあしらわれた黒のビキニは少しゴスロリ風味で姫のイメージにぴったりだった。
いやもうパーフェクトです！眼福です。丼3杯は堅いです（？）
正直なところ姫は何を着ていても美しすぎるので、そもそも俺には選びようが無いのだ。

「…うーん。ヴォイドさんさっきから上の空だね。ひょっとして私の水着を選ばされるのなんて気に入らなかった？」

心配そうな表情で、下から姫が俺の顔色を覗き込んで来る。
おおぅふ！そんな角度で覗きこまれたら、胸の谷間ががががっ！
ごふっ

俺は動揺を抑えつつ必死で答えた。

「そういう訳とちゃうんやけど、こういう店に入った事無いもんやからどうにも落ち着かんくて。…しかも俺の格好、めっちゃ周囲から浮いとるやろ？」

チラッと俺の背中のバスタードソードに目をやりつつ、納得したように姫は頷いた。

「それもそうだね。確かにこんなリゾート地じゃ、ヴォイドさんみたいな格好だと落ち着かないのも無理は無いか。
ねっ？せっかくだから、ヴォイドさんの服も見に行こうよ。私がばっちり全身コーディネイトしてあげる！」

なにぃぃ!?　俺の服ですとーー!?
自慢じゃないが、服なんてもん現実世界じゃユニク○とし○むら以外で買った事が無い。
ゲーム内ではいつも実用一辺倒の装備しか身に付けた事なかったし、ファッションにこだわってるような他の連中みたいに街装備と戦闘装備を分けるなんて事はそもそも考えた事すら無かった。
普通の服なんか着たら、センスの無さがバレバレになってしまいそうでちょっと怖い。

「いや、でも姫の水着は?」
「うん。コレに決めたわ!　今まで試着した中でヴォイドさんの反応が一番良かったから。」

…へ!?　俺の反応?
そう言われても、今までと同じような反応しか返していないような…って、もしかして!?　胸の谷間に俺が動揺したのがバレたって事なんじゃ!?
ひぃぃぃ!　穴があったら入りてぇ。

その後、姫の水着の会計を済ませた俺は、彼女に腕を引かれてライフェンの街のあちこち連れ回される羽目になったのだった。

◇◆◇

気が付くと、既に日はとっぷりと暮れてしまっていた。

なんてこった！　せっかくわざわざ水着を買ったてのに、もう泳ぐような時間とちゃうやん。
姫の水着姿をたっぷり堪能する計画ががががっ！！
…ってあれ？　よく考えたら姫の水着姿なら今日は散々いろんなデザインのものを見たっけか。

「ヴォイドさん、大丈夫？　あちこち引っ張りまわしたせいで疲れちゃった？」

疲れた。正直、激しく疲れた。
まさか女の子と買い物するのが、オーガの群れと１６時間耐久ガチンコした時よりも遥かに疲れるものだとは思いもよらなかった。

「大丈夫やで。けど、すっかり遅なってしもたな。この分やと、ＶＲ組はぼちぼち寝てしまうんちゃうか？」

ＶＲユーザーである長船達はゲーム内時間で夜９時くらいになるときっちり眠ってしまうのだ。
そして翌朝７時頃までは何があっても起きて来ない。

「うーん。帰らないとだめかなぁ？どうせＶＲ組は一旦寝ちゃったら１時間近く起きて来ないでしょ。このままのんびり夜のビーチで話でもしようよ。」

わざわざユキノが支配人を呼び出してまで押さえたインペリアルスイートがどんな部屋なのかは気になるところではあったが、確かにその誘いは魅力的だった。
と言うかマジでかなり疲れたので、ゲーム内での事とは言え、もうあまり動きたくない。

「そやな。みんなとはもうパーティー組んであるから、いざとなれば何とでも連絡取れるやろし、このまま今夜は別行動でもいっか。」

『このまま夜釣りに行く事にしたから部屋には戻らない』とだけパーティーチャットで報告すると、姫と2人、海の上に張りだした岩場へと並んで腰かける。

「その服、よく似合ってるよ」

俺は今、姫が全身選んでくれた物を身につけていた。背中に剣が無いのはどうにも心もとないような気もするが、たまにはこういうのも身軽でいいかも知れない。

「ありがとう。正直服の事なんかようわからんから助かったわ。この体はリアルでの俺の体型とかなり違うから、どんなんが似合うんかもさっぱりやったし。」

筋肉ががっちりと付いたその体型のせいで、ヴォイドの体に似合う服を選ぶのはなかなか大変だったのだ。
まじまじと姫は俺の顔を覗き込むと、「それもそっか。リアルとは違ってて当たり前だよね。ヴォイドさんってリアルではどんな人なの？」と聞いて来る。

「…どんなって言われてもなぁ。少なくともここまでデカイ熊男とはちゃうで？背は低くはないとは思うけど、運動とかせえへんからどっちかって言うと華奢な部類やろな。」

「ふーん。リアルでのヴォイドさんにも興味あるなぁ。見てみたいよ。」

頼むから俺の瞳を見つめながら、そんな誤解させるような事を言わんといてくれ。

「…ねぇ？　私ね。本名は『薫』って言うんだ。ヴォイドさんは何て言うの？…出来れば下の名前だけでいいから教えてくれたら嬉しいな。」

ええっ!?　何でまたそんなリアル情報をいきなりっ!?

俺は思わずギョッとして、まじまじと隣に座る姫の顔を覗き込んだ。

「いきなりこんな事言い出して引いちゃった？　うーん、何て言えばいいのかな。ヴォイドさんて私の事『女神』だの『姫』だのって言ってくれるでしょ？　だけど、私はヴォイドさんの事を『ヴォイドさん』としか呼べないし。ヴォイドって呼び捨てしちゃうのも何か違うような気がするし。出来れば2人きりの時は、本名で呼べたらな…なんて思っちゃったの。ダメかな？」

いや、ダメとかどうとかそういう問題じゃないような気もするんやけど…。

でも先に彼女の本名を聞いてしまった以上、こっちが言わないって言うのもフェアじゃない気がする。

まぁ下の名前くらい言ったところで、同じ名前のヤツなんて日本には五万といるだろうし、特に差し支えも無いか。そう思って、俺は本名を名乗る事にする。

「…『恭平』や。」

ぼそりと一言だけ呟くと、途端に姫はパッと満面の笑みを浮かべた。

「そっか。『恭平』さんって言うんだ。」

俺の瞳を覗き込みながら、「恭平さん。…恭平。」としみじみ反芻している。

うぉっ！あかん！　破壊力ありすぎやろそれは。

ただでさえヤバいのに、「ねぇ？私の事もちょっと『薫』って呼んでみてくれないかな？」なんて言ってくるし！

これで誤解するなって言う方が無理や。

…俺はこの際、姫が他の男と結婚したがっているという話はすっぱり忘れようと思ったのだった。

60．ライフェンビーチの夜（後書き）

着々と姫の罠に掛りつつあるヴォイドたん。

61．渋谷薫の場合（前書き）

今夜は姫視点。

61．渋谷薫の場合

目の前にいる大男の顔を上目遣いで覗き込みながら、「恭平さん。…恭平。」とゆっくりと繰り返してみる。

もちろん己の姿が男に与える効果は十分に計算した上での行動だ。

ネトゲで出会うような男なんてみんな同じだ。

「○○さんって優しいね」「すごーい！カッコいい！」「頼りがいがあるね」とおだてて持ち上げ、ちょっと思わせぶりに頬を赤らめ上目遣いでじっと見つめて「私だけを見て欲しいな」「大好き」などと囁けば、誰も彼もおもしろいくらいあっさり落ちる。

この男、ヴォイドの第一印象も似たような物だった。

初めて出会った瞬間から馬鹿みたいに突っ立ったままこっちを見つめていたし、端々から滲み出ている感情を隠そうともしていなかった。

『姫』だなんて呼ぶものだから、面白半分に「私だけの騎士になって欲しい」と試しに言ってみたら、あっさりと承諾してその剣を自分へと預けて来た。

…やっぱりこいつも今まで知り合った直結厨達と同じか。…くだらない。心底そう思った。

ネトゲをやっていると、しばしば「直結厨」に遭遇する。

ゲームを楽しむというより、もっぱら異性との交流や出会いを求めているようなプレイヤー、ゲーム内での擬似的な恋愛、もしくはリアルでのセフレを探しているような連中の事だ。

こういう連中の代表的なパターンとしては、ゲームとはなんら関係のない個人的、プライベートな話をやたらしたがったり、すぐに相手の性別や年齢、住んでいるところを聞きたがったりするのだが、知り合ってまだ間がないうちは単にフレンドリーな人とも見分けがつけにくい。

狩りの手伝いをしたり、ゲーム内のアイテムや装備品（レアや課金アイテム）なども気前よくくれたりして相手の気を惹こうとするので、一見すると太っ腹で面倒見がいいようにも見えたりもする。調子に乗ってそれらの好意を受け取っていると、やがてプライベートな関係を求めてしつこく付き纏って来たり、粘着されたりもする。相手に断られると逆上してストーカー行為に走ったり、誹謗中傷を始めたりと本当にロクなことがない連中なのだ。

月猫姫こと渋谷薫（しぶたにかおる）が初めてプレイしたネトゲで最初に親しくなった相手も、いわゆるそういう「直結厨」の1人だった。

初心者だった薫に何かとアドバイスしてくれて、積極的にレベル上げも手伝ってくれた。

いろんな狩り場へも連れていってもらったし、高額なレア装備や課金アイテムも次々とプレゼントしてくれた。「なんて太っ腹で面倒見がいい人なんだろう！」とただ素直に感動していたのだ。

本名や年齢、住んでいる地域などの個人情報を訊かれた時も、あくまでフレンドリーで自然な会話の流れの中でだったので何の警戒も無しにあっさり答えてしまっていた。

けれど、そこからが悲惨だった。

ログインすればその瞬間に隣に現れてどこにでもしつこく付いて来るし、他の人達と会話をしたり、一緒に出掛けようとしたりすれば、必ず妨害をしてくる。

仕方無しに諦めて2人だけで出掛ける事にすれば今度は「リアルで逢いたい」とその1点張り。

…こいつ、「女」だと認識してロックオンして来たって事か！

ようやく理解した時には既に手遅れだった。
ちなみにそのゲームで最初に選んでプレイしていたキャラは、可愛らしい美少女系の容姿を持っていたので薫はキャラクターのデザイン上のイメージを崩したくなくて、何となく一人称に「私」を使っていた。
慣れないチャット入力が苦手でボイスチャットを利用していたのだが、元々の声質が少し高めのハスキーボイスだったのでどうやら「中の人＝女性」だと認識されたらしい。

そこにトドメとなったのが本名だ。
「渋谷　薫」という名前は、男とも女とも取る事が出来る。
直結野郎が、薫の事を「自分にとって都合のいい存在＝何も知らない女の子」と認識したのも無理は無かった。

薫は相手の誤解を正すべく、必死で自分が男である事、普通にゲームを楽しみたいと思っている事を告げた。
が、相手は最初の一言を聞くなり逆上してしまい、後はもうまともに会話にならなかった。

「俺を騙したのか！　このクソネカマ野郎がっ！！」

散々罵られて、晒しスレにも晒された。一方的に勘違いして言い寄って来られていただけなのに、完全にこちらが悪者扱いと言う訳だ。
所属していたギルドからも追放され、溜まり場にも出入り禁止にされてしまった。

悪評が出回ったせいで野良パーティーに参加しようとしても断れるようになったし、欲しいアイテムがあっても交渉すら出来なくなった。

新しいギルドに移ったり親しい友人が出来たりするたび、その直結野郎がどこからともなく現れて干渉して来て、友人達にある事ない事を吹きこんで中傷するせいで、結局まともにプレイする事が出来なくなり、そのキャラはデリートせざるを得なくなってしまった。

その後は一度気持ちをリセットして、ファーストキャラで得た財産を元に別アカウントで新キャラを作成し、それなりに楽しくゲーム自体はプレイする事が出来るようにはなったのだが、やはり生まれて初めてプレイしたネトゲでの最初の出会いがそんな感じだったという事は、薫の中でしっかりとトラウマになって根を張ってしまっていた。

意図的にネカマを演じていた訳じゃなかったにしろ、結果的にそうなっていのだし、その事で得た代償はプラス面・マイナス面の両極共に大きかった。

…勝手に勘違いされたあげく、あそこまで罵られて酷い目に遭うんなら、もういっその事開き直って自分から演じてしまえばいいんじゃね？

そう思って開き直ってネカマを完全に演じ始めたのは、基本的に男のキャラをプレイしている時よりも、可愛い女の子キャラをプレイしている方が見た目にも癒されるし、やっていて楽しかったというのもある。

最初の頃はいつバレるかと気が気では無かったものの、慣れてしまえば人間関係の裏側や馬鹿な男のあしらい方なども徐々に見えて来るようになった。

そうやってネカマを演じ続けるうちに、いつしか馬鹿な直結野郎共の要求をうまく制して自由自在に扱い、資産を巻き上げるという「黒ネカマ」スタイルの現在の「月猫姫」が形成されていったのだった。

ちなみに、薫が今までに他のネトゲで男達から巻き上げた資産はかなりの額にのぼる。
薫はゲーム内で得た資産をさっさとＲＭＴで売り捌き、現金へと変えていた。

既に薫にとってネトゲは純粋にゲーム内容を楽しむ為のものではなく、小遣いを稼ぐ為の単なる手段へと成り果てていたのである。

◇
◆
◇

「…ねぇ？恭平　何考えてるの？」

目の前の大男は手持ち無沙汰そうにインベントリから釣り道具を取り出すと仕掛けをチェックしていた。

この男は何を考えているのか今ひとつよく解らない。
自分の事をいきなり「女神」と呼んで崇拝する素振りを見せて来たり、剣を捧げて騎士にしてくれと言って来たかと思ったら、結婚にはまるで興味がないなどと言ったりもする。
こっちがこれだけわかりやすくアピールしてやっているのにも関わらず、青の谷以降はスルーしたり意識的に顔をそむけたりしてばかりだ。

何か無意識のうちに相手にとって気に入らない事をしてしまったのかとも思ったが、宝石類やドロップ類、水着やアクセサリー、洋服の買い物など随分とあっさり与えてくれたり、時折恥ずかしそうに顔を赤らめている事を思うと、どうやら自分に対する好意が無くなったという訳でもないのだと思う。
かと言って、駆け引きが出来るようなタイプの人間にはとても見えないので、まったくもって訳がわからないのである。

「姫は夜釣りをした事あるか？」

ヴォイドはいきなり何の脈略も無く、そんな話をし始めた。

…釣りねぇ。今目の前にいる騎士様の財布を釣りあげようと必死になってるところだけどね。
そんな事を考えながら適当に返事をする。

「やった事ないかも。釣りスキルってどうやって覚えるのかも知らなかったし。」
「あぁ、ちゃうちゃう。ゲーム内の話と違ってリアルでの話や。」
「うーん、リアルでも夜釣りはした事ないなぁ。釣り自体あまり縁がないもの。」

これは嘘では無かった。インドア派の薫は釣りなど興味が無かったし、普通の女の子「渋谷薫ちゃん」も釣りに縁が無かったとしても不思議ではないだろう。

「そうか。でも、やってみると結構おもろいで？　特にゲーム内ではリアルでは釣れるはずもないような種類の魚とか大物が掛ったりするしな。」

そう言って竿を手渡してくる。

「えっ！？　私も釣るの？」

「狩りとかクエストもいいけど、たまにはこういうのもええやろ。やってみ？」

「ええっ！　でも釣りスキルなんか持ってないよ？」

「大丈夫、パーティーメンバーに釣りスキル持ちがいれば『指導』効果ですぐにスキル上がるから。」

…別に釣りスキルなんか上げたくもないんだけどな。

そうは思っても、ここはやはりこの男の機嫌を取っておきたい。

相手の方から「結婚したい」という気持ちにさせて、積極的に貢いでもらう必要性があるからだ。

「わかった。やってみるね。竿はどういう風に握ったらいいのかな？」

そう言って、ロッドを握る自分の手の上にヴォイドの手を重ねてそっと握らせたのだった。

61．渋谷薫の場合（後書き）

おっと最後ちょっと下ネタ入ってしまったわい。

62. 釣りバカップル日誌（前書き）

ヴォイドくんのターン

62．釣りバカップル日誌

竿はどういう風に握ったらいいのかな？…竿はどういう風に握ったら…竿は…

ハッ！　いかんいかん。

思わず「俺の竿を握って下さい」とかお願いしそうになってしまった。

…落ち着けっ俺！

ロッドを握る姫の手を適当に修正すると、「別に握り方とかそこまで気にせんでいいから、気楽に楽しんで釣ればええんちゃうか？」とだけ言ってサッと手を離す。

姫は何やら少し不満気な顔をしながらも、「ふーん？そういうもんなの？ところで、夜釣りって大体何が釣れるの？」と聞いて来る。

「そうやなぁ。俺もライヒェンベルクで釣るのは初めてやから、実際釣ってみるまではようわからんけど、一応基本的にこの世界の釣りも現実世界で釣れる魚の生態を模写しとるみたいやで？多分、今やったら夏やからチヌとかアナゴとかガシラとかかな？たまに現実にはありえへんような大物が掛ったりもするけどな。」

「…チヌとガシラって知らない。」

「あぁそうか。チヌは黒鯛、ガシラはカサゴの事や。関西での呼び名やな。」

そんな話をしながらも2人して岩の上から釣り糸を垂らす。

リアルでだとこんなシンプルな仕掛けで複数のターゲットを狙うのは無謀な話だが、やはりその辺はゲームだ。待つ間も無く、すぐに

姫の竿にアタリが来た。

「あっ！引いてる！どうしよう恭平！？　どうしたらいい？」
「引きに合わせて竿を上げてリールを巻いて」
さり気無く彼女の後ろから抱え込むようにして竿を握り、サポートする。

釣れたのは小さなクサフグだった。
…はっきり言ってどうしようもない雑魚なのだが、それでも姫は大喜びしている。

「うわっ！すごいっ　私でもいきなり釣れたよ？　よしっ今度はもっと大物を狙うぞー！」

などと、にわかに張り切り出した。
確かに今までにアウトドア系をあまりやった事が無かったのなら、こういう遊びもまた新鮮なのかも知れない。

続けて2度目のヒットが来たのも姫の方の竿だった。しかも、今度はかなり大きいアナゴだ。ビギナーズラックというやつだろうか？

「きゃー！すごいっ！どうしよう？私、釣りの才能あるかも！？」
とすっかり大はしゃぎだ。

一応隠そうとしてはいたようだが、最初のうち姫はどう見てもあまり釣りに乗り気には見えなかった。
それがどうやら今では本気ですっかり夢中になっているらしく、海に半ば体を乗り出した格好で眉間にしわを寄せ、真っ暗な水面で揺れる浮きを見失うまいと必死に睨みつけている。
無意識なのだろうが、物凄い形相になってしまっている姫の姿を見

て俺は思わず笑ってしまった。

「えっ!?何っ?」

「いやっ　姫って普段はクールやのに、なんや可愛らしいところもあるんやなーと思って。」

「はっ!?」

どうやら俺の言葉は姫にとっては寝耳に水だったようだ。

「もちろん普段の『女の子っぽい女の子』してる姫も可愛いのは可愛いんやけど、今の姫はなんて言うか、地が出てるって言うか…自然な感じで可愛い。」

「なっ!?」

姫の顔色がサーッと血の気が引いたみたいにみるみると変わっていった。…あれ?俺なんかまずい事言ったんやろか?

「あのっ!?そんなにまじまじ見ないで?恥ずかしいからっ」

そう言って照れくさそうにフイッと視線をそらした姫は、すっかり"また"いつもの姫"に戻ってしまっていた。

…なんや?　別に取り繕ったりせんでもええのに。地が出るのがそんなに恥ずかしいんかな?

どうやら地を晒してしまった事を後悔しているようだ。

ちょっとツッコミを入れてみたい気もするが、そこはスルーしておいた方が親切というものだろう。

平気で本名を教えてきたりする割には中の人は案外慎重派なのかも知れない。

ごちゃごちゃと考えたところで、俺には女心の機微などわかるはずも無いので、あまり気にしない事にしてその後も2人して黙々と釣り続けた。

◇◆◇

気が付くと、徐々に空が白み始めていた。
広い大海原に少しづつ太陽が上がって来るのが見える。

「綺麗！」

朝焼けがライフェンの海と白い砂浜をオレンジ色に染め上げていた。
しばし呆然と日の出を眺める。
この世界の風景描画は本当に美しい。これだけ精巧なグラフィックを作るにしてもどこかモデルになるような場所があったんだろうか？

「あっ！　恭平っ　引いてるよ？」

指摘され、慌てて竿を握り直す。

「うわっ！　なんやコレ？めっちゃ大物やぞ！」

竿が激しくしなって、引きがとんでもない事になっている。普通だったら、こんな岩場では釣れるはずも無いような大物が掛った証拠だ。
ラインが切れなければいいが…。いや、むしろ竿が折れる心配をし

た方がいいかも知れない。

「あっ！見えて来たよ？」

姫の言葉に、俺は必死に竿と格闘しながら水面を覗き込む。
黒い魚影がすごい勢いで泳ぎまわっている姿が見えた。

姫にも手伝ってもらって必死で釣りあげる。１ｍを超えるとんでもない大物だった。

「うわっ！？何コレっ？…マグロ？　こんな岩場からマグロが釣れるのっ？」
「いや、普通は釣れへんし。…ま、その辺はゲームやしな。たまにはこういう事もあるやろ。
っていうか、コレマグロとちゃうで。」
「え？そうなの？」

どうやら姫はあまり魚の事は知らないらしい。まぁ釣りなどに興味が無ければ、魚なんざスーパーで切り身になったヤツくらいしか目にした事ないのが普通だろう。

「失敬だな。ＹＯＵは！」

突然、憮然とした声が掛った。

「はっ！？　…今の誰？」
「ここだここ。吾輩はここにいるぅぅ。」

2人してキョロキョロと周囲を見渡してみるも、誰かがこの岩場に近づいて来た様子もなかった。

「…え？どこ？」

「ここだここ。ＹＯＵ達の真下を見てみろぉぉ」

…真下！？　言われるままに視線を真下へと落とす。

そこにはたった今釣りあげたばかりの大物が横たわっているだけだ。

「吾輩はマグロなどでは無いぞ？　れーっきとしたカツオだ！」

「うわっ！？　魚っ？　恭平っ！　魚がしゃべってるよ！！！」

横たわったカツオの口がパクパクと動いて、次々に言葉を紡ぎ出している。

しかも、無駄に巻き舌でいい声だ。（ＣＶ：若本規夫）

姫はすっかり動転してしまって、俺の腕を掴んで引きずり倒しそうな勢いだった。

「そんなに驚かないでくれたまえ。吾輩はこう見えても、れーっきとした『ゲームマスター』だ。」

「「は！？」」

2人して間抜けな声をあげてしまう。

…確かに、今までにプレイしたゲームの中にも、いろんなキャラクターやモンスターなどに扮したＧＭが現れたというケースはあった。

そういうＧＭはイベントＧＭと呼ばれていて、ゲームを盛り上げる為に戦闘系イベントなどを開催したりするものなのだ。

いやでも、まさか釣りあげたカツオがＧＭっていうのは……いくらなんでもコレはないだろう。

「今、ＹＯＵ達、ひそかに失敬な事を考えただろう？　こう見えても吾輩は立派な海の眷属だぞ？
ちなみに姉は貝類の眷属で名前はサザ…」
「うわー！みなまで言うな！」
「なぜ止めるのだ？　ちなみに妹も立派な海藻類の眷属だぞ？　名前はワカ…」
「もういいです！わかりました。信じますから！」
「そうか信じてくれるのか。それは良かった。では、吾輩の事は『謎のゲームマスターＫ』とでも呼んでくれたまえ。」

…なんなんだ。このカツオ。

「で？　その謎のゲームマスターＫさんが、一体ここで何を？」

冷やかな目線で姫がカツオを睨みつける。そうだ。それを俺も聞きたい。

「いやぁ　はっはっはっ！　せっかくライフェンの海に行くのだから、どうせなら思う存分泳いでやろうと思って、この姿を選んだまでは良かったのだが、陸に上がってイベント告知をしようにも、うまく身動きが取れなくてねぇ。」

…そりゃ、カツオだからな。

「どうしたものかとほとほと困まりはてていたところ、何やら岩場の下からたまらなくいい香りがして来るではないか。吾輩は無我夢

中でそのエクセレントな香りにかぶり付いたのだよ。そして、今に至るという訳だ。はっはっはっ」

ちょっ！ＧＭっ！　すっかり魚類になりきって餌の匂いに負けたんかい！

「と言う訳ですまないのだが、ちょっとばかり熱くなって来たから、ＹＯＵ水を掛けてくれないかい？」

「いやいやいや。普通カツオやったら、とっくに死んでるやろ！」

「…ま、その辺はＫＩＡＩという事で。」

姫は微妙な顔をしてむっつりと黙りこんでいた。呆れかえって突っ込む気力も出ないのだろう。

俺は仕方無しにカツオを抱えあげると、浜辺に連れて行きパシャパシャと水を掛けてやる事にする。

「はぅーん　あっあっ　気持ちいいー！　らめぇー」

くっ！今猛烈に殺意が沸いて来た。

もういっそ捌いて刺身にしてもいいやろか？　…ＧＭやけど。

62．釣りバカップル日誌（後書き）

ちなみに魚類のゲームマスターは実在します。
昔、某ゲームで「壁に突き刺さって抜けなくなったから助けてくれ」と謎の魚がプレイヤー達に頼み込むという意味不明なＧＭイベントがありました。
知ってる人は知ってるかな？

63．老いと若さ

「ふぅ生き返った。やれやれ、魚類の暮らしというのもなかなか制限が多くて困る。ところでＹＯＵ達、ここで出会ったのも何かの縁だ。名前をお聞かせ願えるかね？」

どうやら満足したのか、謎のカツオ野郎はいきなり俺達の名前を聞いて来た。

せっかく海に浸かっているのだから普通に泳ぐなりなんなりすれば良さそうなものを、相変わらず浅瀬に身を横たえ、半身を海水に付けた状態で口をパクパクさせて喋っているというシュールな姿である。

「名前？　俺はヴォイド。こっちは月猫姫だ。」

「ＧＭを助けて名前を聞かれたって事はひょっとして何か特典があったりとかします？」

姫が興味津々で身を乗り出して来てカツオを覗き込んでいた。

…魚類に迫る女の子って言うのも、普通なかなか見る事が出来ないシチュエーションだと思う。

「いや。特に何もない。はっはっはっ　何となく聞いてみただけだ。思わず期待しただろう？」

きっぱりとカツオ野郎が言い切るとチッ！と舌打ちの音が聞こえた。

姫の方にチラッと目線をやると一応笑顔を浮かべてはいるものの、目が全く笑っていない。

「さて、それでは今からイベントの告知をしようと思う。良かった

らＹＯＵ達も参加して行くといい。」
「イベント？　そう言えば、さっきも何かそんな事言ってたわね。」
カツオは大きくエラをひくつかせたかと思うと（ひょっとしてアレは深呼吸か！？）大声で叫んだ。
――ぴーんぽーんぱーんぽーん！
『ラ～イヒェンベルクのレディースエンドジェントルメン！　聞こえているかね？　吾輩は謎のゲームマスターＫという者だ。』
どうやらライヒェンベルクと限定して発言している辺り、エリアチャットのようだ。
と言う事は、イベントっていうのはライヒェンベルク限定で行うつもりなのだろうか？
『今からゲーム内時間の３時間後、ＭＬＯ暦１７４０年８月６日ＡＭ１０：００よりライヒェンビーチに於いて「第３回○×クイズ選手権大会」を行ないたいと思う。我こそはと思うものは是非参加して欲しい！』
「ちょっ！イベントってクイズかよっ！？　なんか強いモンスターが現れて討伐するとかそういうのんとちゃうんかっ！？」
…地味だ。あまりに地味すぎる。しかも第３回って？　いつの間にそんなのやってたんやろ？
何しろ突発的な小規模ＧＭイベントの場合、公式サイトにも何の情

報も載らない事が多いのだ。
攻略サイトなどにも「〇〇に今日ＧＭ出てたぜ」とか書かれる程度で、イベントの詳細までは紹介されていない事が多い。

『ただ今から、ライヒェンベルクの各都市入口横に会場への転送ゲートを設置する。イベント終了後は自動的に元いた場所に戻れるように手配するので安心して欲しい。ちなみにクイズへは２名１組でエントリーしてもらう。成績上位５組までに豪華賞品を用意しているので奮って参加願いたい。』

それまで黙って聞いていた姫がすかさず口を挟んで来た。

「ねぇ？謎のゲームマスターＫさん。豪華賞品って具体的には何がもらえるのかしら？」
「ふむ。一応助けてもらった恩義もある事だ。ＹＯＵ達には特別に教えてもよかろう。上位５組には賞金と特賞として『時空の砂時計』を用意している。」
「『時空の砂時計』？　何それ？」

姫はきょとんとして聞き返していたが、俺はその名前に聞き覚えがあった。
確かユキノさんとミーアちゃんが所持しているアイテムだ。

「キャラクターの肉体上の時を止めるっていうアレかっ！？　確か旧ＭＬＯ時代に長時間プレイしたユーザーだけに配布されたっていう特典アイテムやって聞いたけど…。」
「まさしくそれだ！　ＹＯＵ、若いのになかなかよく勉強しているようだな。　ならば、クイズ上位入賞も決して夢ではないと思うぞ？」

姫は微妙な顔をして首を傾げていた。

「…それって、そんなに希少価値の高いものなの？　全く聞いた事ないんだけど、高額で取引されてたりとかするアイテムだったりとか？」

「いや、それは無い。」

カツオはびちびちと跳ねながら答える（ひょっとしてソレは首を振っているつもりなのか？）

「時空の砂時計は１キャラクターに付き１個だけ所持する事が可能で、トレードする事も捨てる事も出来ないアイテムだ。」

「…え？捨てる事も出来へんのか？」

それは初耳だった。と言う事は、ずっと効果が継続し続けてミーアちゃんなどは永遠に成人出来ないという事になってしまうんではないだろうか？

「捨てる事は出来ないが、効果のＯＮ／ＯＦＦを設定する事が出来る。時のキャンディと組み合わせれば自分の好きな年齢で時を止める事が可能だ。

ＹＯＵ達はまだ若い冒険者だから実感出来ていないかも知れないが、この世界では常に時が流れている。…やがてこの先、誰もが老いていく事になるのだ。

いくら熟練の冒険者とは言え、老齢になってくるとスタミナが落ち、様々な能力にマイナスの補正が現れるようになる。冒険者たる者、誰もが円熟した年齢で時を止めてしまいたいと強く願うようになるものなのだ。」

「えっ！？　年を経ると、マイナス補正が付くようになるの？」

姫がびっくりして声をあげる。
確かに公式サイトにもあまりその辺りの事は詳しく書かれていないのだが、俺が長船から聞いた話によると、ランダムで視界が悪くなったり、移動速度が急激に落ちたり、麻痺状態になったりとステータス異常が頻繁に起こるようになってかなり面倒な事になるらしい。

「左様。だから、歳を経る事の恐ろしさを理解しているベテランユーザーほど喉から手が出るほど欲しがっているアイテムと言えるだろうな。」

カツオは得意気にびちびちと尾を振ると、「では吾輩は今から転送ゲートを開く事にする。せっかくだから、ＹＯＵ達もここでイベント開始まで見て行くといい。なんだったら、イベントが終了後は吾輩を海へ帰してもらえると非常に助かる。」などと勝手な事を言っている。

「ちょ！待てや。誰もイベント参加するなんて言うてへんやろ？今リアル時間は何時や思てるねん。１時回っとるぞ？　ＶＲモードユーザーはいいかも知れんけど、ゲーム内時間で１０時からの開催するんやったら、イベント終わる頃には２時回ってまうやろ？　さすがにそこまで俺は起きてる自信ないぞ！？」

一般的なネトゲのイベント開催時間としては、かなり異例と言える時間帯だろう。
ＧＭとは言え、中の人は所詮はサラリーマンかアルバイトだ。
普通のゲームならばこんな深夜にＧＭが現れる事など滅多にない。
やはりこの辺も眠りながらプレイ出来るというＶＲを採用しているＭＬＯならではと言う事なのだろうか？

「ほう。ＹＯＵは３Ｄモード接続ユーザーであったか。ならば、無理強いは出来まいな。
まぁこのクイズ大会もこれで終わりと言うものでも無い。またいずれ次の機会もあるだろう。無理のないように適度な睡眠を取るようにしてくれたまえ。」

カツオは慇懃無礼な態度でそう言った。
…くそっ！こいつ内心、ＶＲバイザーも買えない貧乏人めって見下しとるやろ。めっちゃムカつくわ。

――フォン！

『恭平、もう眠い？　寝ちゃうの？』

姫が個別チャットで話しかけて来た。　さすがにＧＭの前で本名を呼ぶ訳にもいかないしな。

『いや、今はまだ眠くはないんやけど…　２時過ぎまでとなると、ちょっと自信ないな』
『…イベント出るの無理そう？』

…あぁ、姫はイベントに出たいんやな？
クイズ大会に興味があったとはちょっと意外な気もするが、おそらく時空の砂時計に魅かれたのだろう。
姫の美しさが永遠のまま保たれるというのなら、騎士たる俺としても努力するにやぶさかではない。
それに２人１組という条件が付いている以上、先に寝たいから１人で参加しろとは言う訳にもいかないだろう。

『大丈夫。２人でエントリーしよか。』

俺がそう答えると、姫は満足そうに満面の笑みを浮かべて俺の腕に抱きついて来たのだった。

６４．足止めのライヒェン（前書き）

ミーア視点です。

64．足止めのライヒェン

ここライヒェンハーベイホテルのインペリアルスイートは、とにかくとんでもない部屋だった。
本館から少し離れた海上に張り出して建てられているヴィラはまるで青い海にぽっかりと浮かんでいるかのように見える。
キングサイズのベッドが据えられた広々とした主寝室の隣には、海を望む巨大なジャグジー付きメインバスルームがあり、中央に位置する巨大なリビングルームの床部分はガラス張りで泳いでいる魚達が見えるようになっていた。
その他にもゆったりとしたダイニングルームと、それぞれに専用のバスルームが付属した2つのサブベッドルームが繋がっている。
今回は大人数で宿泊したいと希望したので、リビングルームの中央をパーテーションで区切り、さらに2台のベッドを入れ総勢8名が宿泊出来るように整えられていた。

実は昨夜は、部屋割をどうするかでその場に残っていたメンバーの間で一悶着あったのだ。
主寝室はカップル向けのキングサイズベッドで、後の部屋は全てシングルベッドが2台づつという部屋割。
ここは当然、公認カップルでもある汐音とセシルが主寝室かな？と思っていたらリディアがこんな事を言い出した。

「わたし、ミーアと一緒に寝たいなー♪　で、メインのベッドルームはやっぱり長船さんとユキノさんだよねっ？　後は汐音とセシル、ヴォイドさんと月猫って事でおっけーかな？」

長船さんが慌ててリディアを止める。

「ちょっマテマテマテ！　いくらなんでも、俺とユキノが一緒のベッドっていうのはまずいだろ？
汐音とセシルはともかくとして、ヴォイドと月猫もまだそういうのじゃ無いんじゃないか？　俺はヴォイドと一緒の部屋にしてもらうから、女性陣は女性陣で適当に部屋割してくれればいい。」

「えっ！？　でも長船さんとユキノさんって夫婦なんでしょ？　なんかまずかった？
…ああっ！そっか。やだっ！　わたしったら、気付かなくてごめんなさい。長船さんとヴォイドさんってやっぱりそういう関係だったんだね。そんなに一緒に寝たかったなんて気が付かなかった。やだもう！」

とか顔を赤らめて頬に手を当てて腰をクネクネさせてるし。

「いやマテマテ！　話をそっち方面に持って行くな。ややこしくなるから！　って言うか、根本的な誤解をしてるようだが、俺とユキノは夫婦なんかじゃないぞ？　つい最近知り合ったばかりの関係だ。」

「えっ？そうなんだ？　なんかあまりに自然体だから、てっきり夫婦だとばかり思ってたよ。…って事は長船さんはミーアのお父さんじゃないの？」

そっか…リディア、あたしと長船さんの事親子だと思ってたのかぁ。

「ちがうよー？あたしのお父さんは昔に引退しちゃったプレイヤーさんなんだってさ。」

「そうなんだ？でも、長船さんとユキノさんと一緒にいると、お父さんとお母さんと一緒にいるみたいですごく落ち着くんだよね。な

んかホントの家族みたい。」

リディアの言葉に母が嬉しそうに微笑んだ。

「あら。嬉しい事言ってくれるじゃない？私もリディアちゃんの事本当の娘みたいに思ってるわよ。この世界では私の事、母親だと思ってくれていいからね？」

「はい！ありがとうございます。」

…長船さんの方はどう思ってるんだろ？　そう思ってチラっと見てみると何だか複雑そうな表情で頭を掻いている彼の姿があった。

結局、主寝室は公認カップルでもある汐音とセシルに譲る事にして、後は長船さんとヴォイドさん、あたしとリディア、母と月猫という部屋割で決着が付いた。

「いいか！お前ら、いくら夫婦だからってあんまりイチャつくんじゃねーぞ？　一応、子供もいるんだからな？」

就寝前には長船さんが汐音とセシルに向かって何度も釘を刺してたけど、あたしとリディアはやっぱりお子ちゃま扱いなのね。…なーんか激しく納得いかないなぁ。

…けれど、そんな風に散々部屋割で頭を悩ませたいうのに、結局昨夜はとうとうヴォイドさんと月猫の２人は戻って来る事はなかったみたいだった。

◇◆◇

「おはよう！」

あたしがリビングルームへと入って行くと、リディアが濡れた髪をタオルで拭きながら主寝室の方から出て来たところだった。

「あれ？　リディア、汐音達の部屋でお風呂入ってたの？」

「うん。海の見えるジャグジーサイコーだったよ？ミーアも入って来たら？」

「えっ？…でも新婚カップルが部屋にいるんじゃ？」

おそるおそるメインベッドルームの方を覗き込んでみたけれど、そこには誰の姿も無かった。

「…あれ？あの2人は？」

「汐音とセシルは3Dモードプレイヤーでしょ？　リアル時間だと結構いい時間だから、あたし達が夜寝てた間に落ちたみたいだよ。ミーアにもおやすみメール来てなかった？」

そう言われて慌ててメールをチェックしてみる。

確かにセシルから明け方近くに「そろそろ眠くなって来たから落ちるね。おやすみなさい」とメールが入っていた。

「あ、ほんとだ。わたしのところにもメール来てるわ。そっか。リアルではもう1時過ぎだもんね。明日も学校あるだろうし、寝ないとキツイかー。でも、せっかくこんないい部屋に泊まれたのに、ちょっともったいないよね。」

ＶＲモードでプレイしているあたし達と違って３Ｄモードだとこのまま寝る訳にもジャグジーを楽しむ訳にもいかないのだから、多少の温度差があるのは仕方がないのかも知れない。
でもあたしはせっかくＶＲモードでプレイしているんだから、その恩恵をたっぷり甘受すべく、特大ジャグジーを堪能させてもらっちゃおっと！

そう思い立っていそいそと服を脱ぎ始める。
とは言ってもゲーム内での事だ。モラルの問題があるから完全な裸になる事は出来ない。
あたしは昨日購入した水着を身につけると、海が見える特大のバスタブに飛び込んだのだった。

◇◆◇

『ラ～イヒェンベルクのレディースエンドジェントルメン！　聞こえているかね？　吾輩は謎のゲームマスターＫという者だ。』

突然そんなアナウンスが聞こえて来たのは、あたしとリディアがダイニングでのんびりと朝食をとっている時の事だった。
リビングには母が昨日の支配人さんを呼んでいて、長船さんと共に現在のライヒェンベルクの状況や今後の旅の為のルート確認などの質問をしていたようだ。

『今からゲーム内時間の３時間後、ＭＬＯ暦１７４０年８月６日ＡＭ１０：００よりライヒェンビーチに於いて「第３回○×クイズ選手権大会」を行ないたいと思う。我こそはと思うものは是非参加して欲しい！』

あたし達はきょとんとして「クイズ？」と顔を見合わせる。

『ただ今から、ライヒェンベルクの各都市入口横に会場への転送ゲートを設置する。イベント終了後は自動的に元いた場所に戻れるように手配するので安心して欲しい。ちなみにクイズへは2名1組でエントリーしてもらう。成績上位5組までに豪華賞品を用意しているので奮って参加願いたい。』

給仕をしてくれていたエドワードさんにもちゃんと謎の声は聞こえていたようで、彼は頷きながらこう勧めて来た。

「そのようでございますね。どうやらゲームマスター主催のイベントが行われるようですよ？今回は戦闘系イベントでは無くクイズイベントとの事ですから、お2人で参加されてみてはいかがですか？」

ちょっとおもしろそうな気もするんだけど、あたし達はこれからフェルデンティアに向けての旅に出発する事になっているのだ。

パーティーで行動すると決まっている以上、あまり勝手な事も出来ないだろう。

そう思っていたら、突然パーティーチャットでヴォイドさんが話し掛けて来た。

『おはよう。ちょっとええか？』

『あ、ヴォイドさんおはよ！』

『あら？外泊組さんおはよう。』

くすくすと笑いながら母がちゃかすと、月猫の声も聞こえて来た。

『おはようございます。昨晩は2人して勝手してすみませんでした。

』

どうやら月猫もヴォイドさんと一緒にいるみたいだ。

『さっきのアナウンス、みんなも聞いたか？』

『クイズイベントがどうのってやつの事か？』

『そうそれやそれ！　なんか俺ら、やっかいな事に巻き込まれてしもてな、その謎のゲームマスターＫとかいうヤツと今一緒におるねん。』

ヴォイドさんと月猫の話を要約するとこうだった。

昨夜から海釣りをしていたらたまたまＧＭと出会ってしまい、イベントへの参加と手伝いを頼まれてしまったとの事。その為、今日ここを出発して旅に出るのは無理そうだという事、それからＧＭから聞いた情報によると成績上位者５組１０名に贈られる豪華賞品というのは賞金と時空の砂時計らしいという事だった。

『出発の日程についてはあまり気にしなくてもいいわよ。』

母があっさり告げた言葉にヴォイドさんは驚いた声を上げている。

『えっ？気にせんでええって？…なんでや？』

『さっき、このホテルの支配人を呼んで現在のライヒェンベルクの状況を聞いてみたの。そしたら、ロイヤルウェディングの余波が思わぬところにも現れている事がわかったわ。』

どういう事だろう？あたしとリディアは顔を見合わせつつ、母の言葉の続きを待った。

『今、ライヒェンベルクからフェルデンティアを抜けるメインの街

道はロイヤルウェディングの影響でライフェンベルク公室が通行を制限してるらしいのよ。
現在この国へはたくさんの商人や観光客が流れ込んで来ているわ。それらを自由に受け入れるかわりに出国する際にはかなり厳重なチェックが行われているみたい。特に冒険者には厳しい行動制限が課せられているのだそうよ。…メインルートが使えないということになると、細くて馬車も通れないような切り立った山道を通る必要があるわ。そうなるとどうしても走竜（オスタード）が必須になってくるわね。』

『なら、何とかして早めに全員分のオスタードを入手せなあかんって事か？』

『それも今はちょっと無理そうね。このライヒェンベルクはオスタードのレースが有名だって話はした事あったわよね？
今回のゲオルク第2公子とソフィー姫のロイヤルウェディングを記念して、明日の午後、ライヒェンの市内全域で大規模なオスタードレースが開催される事になっているの。
その影響で不正防止の為にレースが完全に終了して配当金の支払いが完了するまでは、現在国内全域でオスタードの売買が全面的に禁止されている状況らしいわ。つまり、どうあがいても明後日の昼までではオスタードが手に入らないから私達はこのライヒェン周辺に足止めを食らうしか無いって訳。』

『…それって、騎乗許可書を取得する為の騎乗訓練のクエも受けられへんって事か？』

『そうみたい。不正防止の為にレース関係者以外は厩舎に近づく事も禁止なんだそうよ。』

６４．足止めのライヒェン（後書き）

馬車＝オスタードが曳いている車と解釈してください

65．午前10時。

『汐音とセシルはオスタード持ってるし、姫は当面俺が乗せて行くからいいとして…。
ってちょっと待てよ?よく考えたら、ミーアちゃんとリディアちゃんってまだ未成年やったよな?って事は、レースが終わってオスタードの売買が解禁になったとしても、購入するのは無理なんとちゃうんか?』

へぇ…セシル達、もうオスタード持ってるんだ?
ん?　って言うか、今さり気無くヴォイドさん「姫は当面俺が乗せて行く」とか言ってなかった??
…あの2人って、ほんとにどんな関係なんだろ?

ちなみにオスタードの購入には、騎乗許可書の発行と成人している事（16歳以上）が必須条件として掲げられている。
購入する事は出来ないっていう建前になっているのに、何故か入手さえしていれば未成年でも騎乗する事は可能なのだそうだ。
この辺りの事情は旧MLOの世界では1アカウントにつき1頭のオスタードを所有していて親キャラや子（孫）キャラで共有していたという頃の名残みたい。

ヴォイドさんの言葉に長船さんも心配そうな声を掛けて来た。

『問題はそこなんだよな。さっきユキノとも相談していたんだが、とりあえず未成年の2人にはダメ元で時のキャンディを使って大人の姿になった上で市場に出向いてもらおうとは思っているんだが…。まぁおそらくムリだろうな。』

ええっ!?　お母さんと長船さんってばそんな無茶苦茶な事考えてたんだ!?
っていうか、それって詐欺じゃん!?　捕まっちゃうよ?

『システム上の問題やし、そらどう考えてムリやろ。最悪、長船とユキノさんのオスタードに2人乗りしていくしかないんとちゃうか?』

ヴォイドさんの言葉に母が即座に反論してくる。

『私のオスタードはパルノ産の小型タイプだから2人乗りは無理だわ。』
『俺の方は乗ろうと思えば何とか乗れない事も無いだろうとは思うが…そこまで馬力があるタイプでも無いし、長距離を旅するとなるとさすがに厳しいだろうな。』

3人の会話を聞いていたリディアが思わず口を挟んだ。

『あの、オスタードを代理購入をしてもらうとかは出来ないんですか?』
『残念ながらオスタードは1人1頭しか所有出来ないし、ユーザー間でのトレードは出来ない仕様になっているんだ。』

それもあっさりと長船さんに否定されてしまう。

『そうなのよねぇ。新しいオスタードを買って乗り換えようと思ったら、今まで愛用していたオスタードはＮＰＣに売却するしか無いのよ。』
『けど、今後の旅の事を考えると、俺とユキノは大型のオスタード

に乗り換える事も検討した方がいいのかも知れないな。』

『…そうね。そうするしかないのかな？』

うーん。長船さんのその申し出に母はどうやら乗り気じゃないみたい。

それもそうだろうなぁ。うちの母の性格からして、長年付き合って来た自分のオスタードには格別な愛着があったとしてもおかしくないもん。きっと手放すのはツライに違いない。

『まぁその辺は市場が開いてから考えたらええんとちゃうか？乗り換える言うたかて、そもそもこのライヒェンブルクに2人乗り出来るような大型のオスタードがいるかどうかもわからんのやし。』

『それもそうだよね。とりあえず、ロイヤルウェディングが落ち着いてから考える事にしようよ。』

あたしがそう相槌を打ったのと、月猫が慌てたように声を上げたのはほぼ同時だった。

『わっ！何だか急にたくさんの人が集まって来たわよ？　この人達全員ＧＭイベントに参加するつもりなのかしら。…ライヒェンベルクにもこんなにたくさんの冒険者がいたのね。』

『わわっ、わりぃ！　謎のゲームマスターＫが「移動を手伝え」ってうるさいから、そろそろ俺らも行くわ。せっかくやし、みんなもＧＭイベント参加したらどうや？　長船とユキノさんはベテランやし、クイズもちょろいんとちゃうか？』

そう言ってパーティーチャットを終わらせると、ヴォイドさんと月猫はＧＭイベントの手伝いに行ってしまったみたいだった。

◇◆◇

――午前９時５０分。

結局あたし達も、ＧＭイベントにエントリーする為にライヒェンビーチへと出て来ていた。
ビーチは既にたくさんの冒険者たちで埋め尽くされ、以前に何かで映像を見た事がある中国の海水浴場みたいだった。
ううう。なんか人混みに酔っちゃいそうだ。

この世界の一般観光客たちは、一体何事が起きているのか訳がわからない。といった様子で、ただ遠巻きに眺めていて近づいて来ようとはしない。
確かに冒険者には鎧や武器などで武装したままの無骨なスタイルの人が多いから、この集団にはあまり関わりあいになりたくないんだろうなぁ。

「あ！いたいた。ヴォイドさん達だ。」

リディアの声に思わず彼女の目線の先を追うと、そこには確かにヴォイドさんと月猫が２人寄り添って立っていた。
意外な事に、彼はその背中にトレードマークの巨大なバスタードソードも背負っていなければ、いつもの鎧姿でも無かった。
茶色と紺色のチェック柄の麻のジャケットに、茶色の麻のシャツを合わせたちょっと落ち着いたデザインのカジュアルスタイルだ。ちょっと意外だったけど、なかなかおしゃれで似合っている。

…けど、問題はそのファッションじゃなかった。

「ナニアレ!?」

ヴォイドさんの右手には、何故か巨大なカツオがぶら下げられていたのである。

怪しい…すごく怪しすぎる。

なんて言うか、クマみたいなヴォイドさんがこんな風に魚の尾っぽのところ持ってぶら下げてると、鮭を捕まえて来た熊そのものって感じだ。…なんか北海道土産の木彫りの熊みたい。

出来れば他人の振りをしたいような気もするけれど、目があっちゃったからにはどうしようもない。

ああ聞きたくない。けど、聞かないでそのままって言うのもなんか怖いから恐る恐る聞いてみる事にする。

「ヴォイドさん…その魚何!?」

ヴォイドさんと月猫が答えようと口を開いたのよりも早く、びちびちと体をくねらせながら巨大カツオが抗議して来る。

「失敬だな!ＹＯＵは!　吾輩こーそが偉大なるゲームマスター謎の男ミスターＫであるぅ」

「はぁ?」

あまりの事にぽかんとしてしまった。

「…えっあっ?ゲームマスターぁ?この魚がぁ!?」

どうやら周りにいた他の冒険者達もまだこの事に気が付いていなかったらしく、あたし達の会話を聞きつけてあっと言う間に周囲には人だかりが出来ていた。

「おいおい。ＧＭってあの魚なのかよ？マジか？」
「いや、あの赤毛のデカイ奴が本体だろ。って事は隣の女もＧＭか？」
「魚なんか持って突っ立ってるやがるし、どんな変態だよ！って思ってたらまさかのＧＭだったとは」

などとザワザワと話す声が聞こえて来る。
あーぁ、さり気にヴォイドさん変態呼ばわりされちゃってるよ。
でも…傍から見れば、確かにどう見てもおかしな人に見えるもんなぁ。

そんな中、長船さんが謎の巨大魚に向かって話しかけた。

「…ひょっとしてゲームマスターＫって、旧ＭＬＯ時代にもゲームマスターやってたＫと同一人物か？」
「お？ＹＯＵは吾輩の事を知っているーのか？　これは嬉しい事だはっはっはっ」
「っていうか、まだこのゲームの運営に関わってたんだな。…てっきりバイトだとばかり思ってたのに。」
「失敬だな！ＹＯＵは！　あの頃は確かにバイトでしかなかった吾輩だが、今ではれっきとした正社ｉ…おぉっと！　ついうっかり口が滑ってしまった。今の言葉は忘れてくれたまえ！　そんな事はいいとしてそろそろ始めたいと思う。」

そう言って巨大カツオはヴォイドさんの右手にぶらぶらと下げられ

たまま、体を大きく揺すって大声を張り上げた。
…うーん。やっぱりシュール過ぎる。
――ぴーんぽーんぱーんぽーん！
『あーあー！　レディースエンドジェントルメン！　大変お待たせしてすまない。ではこれより「第３回〇×クイズ選手権大会」のエントリーを行いたいと思う。』
て言うか、なんでヴォイドさんあの謎のゲームマスターＫとかいうカツオを握らされてるんだろ？
その辺に下ろしたらダメなのかな？…不気味過ぎるよ。
『クイズ参加希望者は、メニュー画面を開いてイベントエントリーを済ませて欲しい。尚今回は２人１組での参加が条件となっている。ペアの名前の入力も忘れずに済ませてくれたまえ。』
言われるままに、あたし達はイベントエントリー画面を開いて入力していった。
ちなみに、今回は長船さんとリディアペア、母とあたしという組み合わせだ。
リディアの方はあたしと組みたがってくれたんだけど、今回の上位入賞者に贈られる商品が「時空の砂時計」だという事だったので、既にこのアイテムを所持しているあたし達と組んでしまうと、万が一入賞したとしても、賞品がうまく受け取れない可能性があるかも知れないわよ？などと母が言い出したのだ。
それを聞いた長船さんは即座にリディアとペアを組む事を希望して来た。

「ここは一発、何が何でも『時空の砂時計』を手に入れてやるぞ！」

興奮した様子の長船さんに、リディアも目を丸くしている。

「長船さん、すごい気合の入りっぷり～！　時空の砂時計ってそんなにいいものなの？」

「…そりゃーな。老いの苦しみってのは実際に年食ってみないとわかんねーもんなんだよ。」

なんだかすっごくシミジミ言われてしまった。

確かに、リアルでもゲーム内でも子供のあたし達にとってはまだちょっと実感するのは無理…かも？

66．ビーチで○×クイズ

冒険者達がそれぞれイベントエントリーを終えた頃、ヴォイドさんの手の下でびちびちと体を捻りながらカツオが叫んだ。

『ルールはいたって簡単だ。今から吾輩の出すクイズに答えて欲しい。クイズの答えは○か×の二択であ～る。制限時間内にどちらかのエリアに分かれてくれたまえ。
尚、クイズの解答については友人などと相談してもらっても構わない。』

冒険者達のざわめきが一際大きくなった。

「おい！それってソロプレイヤー不利だろ？」

あちこちからそんな不満の声が聞こえてくる。
当然ゲームマスターKにも聞こえていたようで、彼（？）はフッと笑うとこう告げた。

『もちろんこのミッシングリンク・ｏｎｌｉｎｅの世界はソロでプレイしても十分楽しめるように作られている。
だが、いざという時頼れる仲間がいるという事もまた冒険者としての重要な実力のひとつと考える事が出来るだろう。』

確かにそれは言えてるかも？
そもそもこのイベントに参加する時点でペアを組まなきゃならない訳だし、ひょっとして他人との共存能力とかもさりげなくチェックされてるとかだったりして。

『それではＹＯＵ達！そろそろゲームを始めようではないか！』

そうＧＭが叫ぶと、頭上に赤い巨大な光のリングが浮かび上がった。辺りを見渡すと、少し離れた所にも青い光で巨大な×マークがぽっかりと浮かんでいて、２つのマークの間はうっすらとした淡い白い光のヴェールで隔てられている。

『尚、ただいまよりゲーム終了まで転送関連の時空魔法についてはこちらで封印させてもらう。〇×それぞれのエリアへの移動は徒歩でおこなって欲しい。』

そりゃそうだよね。時空魔法使えたら正解が発表されてからワープする人とか絶対いそうだもん。

『では第１問！　当ミッシングリンク・ｏｎｌｉｎｅに於いて、プレイ開始時に選べる３拠点のうち、もっとも軍事力が高いと言われているのはオプヴァルデン王国である。〇か×か？』

あ！これは簡単だ。

初期拠点のオプヴァルデン、パルノイエ、フェルデンティアの三カ国のうち、１番の軍事国家は文句無しにオプヴァルデンだったはず。あたし達が今いるのはちょうど〇のエリアだから、どうやら今回は移動せずに済みそうだ。

そう思って余裕で構えていたら、ヴォイドさんが渋い顔をしてパーティーチャットで呟いた。

『…おい。答えは×や。ボケっとしとらんと移動するで？』

手にカツオをぶら下げたまま、そのままスタスタと×のエリアに向かって歩いていってしまう。

『えっ！ええっ！？　なんで？』

さっぱり訳がわからないものの、オプヴァルデン出身の彼がそう言うのなら、ひとまずここは彼に付いて行った方がいいような気がする。

慌ててヴォイドさんの背中を追いかけ×のエリアへと飛び込んだ直後、境界線を表している白く透き通っていた光の壁が強い輝きを放ってグンと高くなり、向こう側のエリアが全く見えなくなってしまった。

『タイムアップだ。それでは第１問の答えを発表する。答えは×。プレイ開始時に選べる３拠点のうち、もっとも軍事力が高いと言われているのはオプヴァルデン王国ではなく、オプヴァルデン公国であ～るぅ！』

周囲がワーッとどよめいた。

…ってええっ！？

『ったく、１問目からひっかけ問題か！　こりゃ一筋縄じゃいかんかも知れんな。』

そうヴォイドさんがボヤいたのと同時に、境界線上の白い光の障壁が消え去ったかと思うと、また薄い光の膜へと変化した。

消えた壁の向こう側を目にした冒険者達がまたざわめき始める。
そこについ先程までいたはずの大勢の冒険者達が、忽然と姿を消してしまっていたのだ。

『それほど驚かなくてもいい。不正解者の諸君には元いた場所にお帰りいただいたまでだ。
…しかし、思った以上に数が減ったな。今回の挑戦者には、どうやら注意力が足りない者が多かったようだ。』

GMの言葉に周囲をキョロキョロと見渡してみると、確かに参加者の数は一気に1／3程に減っていた。

『尚、今回のゲームでは敗者復活戦などを行う予定は無い。残念ながら不正解になってしまった諸君はまたの機会を待って欲しい。…では、時間も無駄にするのもなんだ。サクサクと進めよう。』

『第2問！三大属性魔法のうち、雷魔法がもっとも威力を増すのは冬の雨天である。〇か×か？』

さっきは自信たっぷりだったヴォイドさんも、今度は自信が無いようで首を捻っている。
でも、今度はあたしとリディアの得意分野だ。
何しろ魔術師ギルドでこの辺りの話はジェナイ先生やロドニィ先生にたっぷりと聞かされたしね。

『答えは×だね。このままここにいればOKだよ』

リディアが得意気に言うと、母も『そうね。雷属性がもっとも強化

されるのは夏の雨天だから×であってるわ』と頷いている。

先程と同じように白い障壁が現れ、ＧＭによって正解が告げられまた何人かの冒険者達が消えていった。

その後続けて出題されたクイズも全てこのＭＬＯの世界の設定に関する問題で、その度にかなりの数の冒険者達が姿を消していく。

第１０問を過ぎ、残っている人数が３０組くらいになった頃だった。

「…なぁおい？　あのデカイ赤毛のヤツが持ってる魚がＧＭなんだろ？　アイツに付いていけば最後まで残れるんじゃねーの？」

ヴォイドさんの姿に気が付いた他の冒険者達が彼の周りを取り囲むようにして、問題の度に一緒に移動するようになってしまった。

何問か進むうちに、２０組くらいまでは数が減ったもののその後はみんなあたし達のグループにくっついて移動しているので、一向に数に変動がない。

『…ふーむ。ＹＯＵ達、何か勘違いしているようであ～るが、この赤毛の冒険者に吾輩は運搬してもらっているだけであって、正解を教えている訳ではないぞ？　この冒険者は自分の意思でクイズに参加している。よって、途中で間違えて脱落していく可能性も大いにある。まぁ、万が一脱落した場合でも最後まで運搬だけは付き合ってもらうつもりではいるのであ～るが！』

そのＧＭの言葉にヴォイドさんが思わず声をあげる。

「ゲッ！まじかよ！？間違っても最後まで俺は付き合わされるんか？」

「元々ＹＯＵ達はこのライヒェンビーチにいたのだから、さほど問

題もあるまい？」

などとＧＭは随分勝手な事を言っている。

けれど、ヴォイドさんの手の下から体を捻って周囲を見渡すと「…ふむ。そろそろ頃合いか」と呟いた。

『では、これより第２ステージへと移動したいと思う。ＹＯＵ達、覚悟を決めて付いて来るように。』

そんな声が聞こえたかと思うと、あたし達は一斉に白緑色の眩い光に包まれ、白い砂浜の上からどこかへと飛ばされたのだった。

◇
◆
◇

次の瞬間あたし達が立っていたのは、海に浮かぶ小さな島の上だった。

「…ここどこ？」

どうやら周りの冒険者達も初めて来る場所だったらしく、不審そうに周囲を見渡している。

島の中央には小高い丘があり、そこにはぽっかりと地中に向けて洞窟が口を開いているのが見えた。

…あれはダンジョンかな？

『お母さん、長船さん、ここどこだかわかる？』

メニューを見て位置情報をチェックしてみたものの、『ライヒェンベルク公国南西部～ライヒェン海上』としか出ていない。

『うーん。詳しい事まではよくわからないが、各国周辺の海上にはマップには載っていない小さな島が点在しているんだ。それらの島々は、旧ＭＬＯ時代、船や水泳スキルで周辺まで近づいてもプレイヤーは上陸する事が出来ないオブジェクト扱いになっていた。いずれ実装される新エリアへの入口を作る為だとか、こういうイベント用のエリアとして普段は封印されてるとかいろいろな噂はあったんだが、実際に上陸した事があるって話は聞いた事が無いな。』

という事は、今回のイベントの為に用意された特別なエリアかも知れないって事か。

『それではこれより、ＹＯＵ達には２人１組でこのダンジョンに入ってもら～う。途中様々な仕掛けがしてあるが、それらを切り抜けられるか否かの可能性は２つに１つ。

…つまり○×クイズと同じ２択と言う訳だ。それではＹＯＵ達の健闘を祈る。』

67. 離れ小島のダンジョン（前書き）

ヴォイドくんのターン

67．離れ小島のダンジョン

『それではこれより、ＹＯＵ達には2人1組でこのダンジョンに入ってもら～う。途中様々な仕掛けがしてあるが、それらを切り抜けられるか否かの可能性は2つに1つ。
…つまり○×クイズと同じ2択と言う訳だ。それではＹＯＵ達の健闘を祈る。』

謎のゲームマスターＫの言葉に促されて、小さな島にぽっかりと口を開いた洞窟へと順番に冒険者達が降りて行く。
まだ日も高く洞窟の開口部からも十分な明かりが差し込んでいるように見えるのに、冒険者達が洞窟の内部へと1歩足を踏み入れた途端、彼らの背中はふっと消え失せたかのように見えなくなってしまう。
中の気配を窺おうにもダンジョンからは物音ひとつ聞こえて来ない。
列へと並ぶ興奮を押し殺したような冒険者達の話し声と、周囲の海原から寄せては返す波の音だけがただ辺りを包みこんでいた。

ゲームマスターＫと共に、列の最後尾に立って次々と洞窟へと吸い込まれていく冒険者達の列を眺めていると、前の方に並んでいた長船とリディアちゃんが洞窟の中へと降りて行く後ろ姿が見えた。

『長船！　中はどんな感じや？』

慌ててパーティーチャットで声をかけてみるも、長船からは何の反応も帰って来ない。

『…おい！長船？　リディアちゃーん？』

ひょっとして聞こえてないんやろか？
そんな俺の思惑にユキノさんも同調してこんな事を言った。

『この分だとダンジョンの内部はチャットの制限が行われてるのかも知れないわね。…〇×クイズでは仲間同士の協力でクイズを解かせて、ダンジョン内では個々の判断力を試すつもりなのかしら？』

…個々の判断力か。
一体中には何が待ち受けている事やら。

そんな事を考えている内に冒険者の列は徐々に数を減らしていき、残るはユキノさんとミーアちゃんの組と俺と姫だけになってしまった。

『私達の番ね。それじゃ行って来るわ。また後で逢いましょう。』
『お先でーす！』

ユキノさんとミーアちゃんは手を振ると、ダンジョン内へと降りて行く。
２人の背中を見送ってしばらく呆けていると、手の中のカツオがびちびちと跳ねながらこう言った。

「さて、ＹＯＵ達がさーいごの１組であ～る。ここから先はＹＯＵ達２人だけで行くのだ。吾輩の事はそこの潮溜まりに置いて行って

くれたまえ。」

GMの言葉に、姫がちょっと驚いたような声を上げる。

「えっ!?　途中でクイズを間違えたとしても、最後まで運搬だけは付き合ってもらうつもりだ。とか言ってませんでしたか?」

「もちろんそのつもりであ〜る!だが、吾輩とて命は惜しいからな。YOU達がこのダンジョンから出て来るまでは、ここでそっと生温かく見守っている事にするよ。」

「ちょーマテや。生温かく見守るてなんや?　…てか、命が惜しいて、中はそんなヤバい事になっとるんか?」

「この道を行けばどうなるものか、危ぶむなかれ。危ぶめば道はなし。踏み出せばその一足が道となる。迷わず行けよ。行けばわかる!」

マジかよ!?

けど、確かに手にカツオ持ってダンジョン内を歩くよりは置いて行く方がまだマシってもんかも知れん。

俺は言われるままに、洞窟の入口脇にあった潮溜まりのようなところにカツオをそっと横たえると水をぱしゃぱしゃと掛けてやった。

「はぅぅん!　やっ　あぁん　気持ちいぃー」

いちいちイラッとするな。この魚類。

…ん?待てよ?　この潮溜まりって最初からあったっけか?

何かが引っ掛るような気がしたが、俺の思考は急き立てるようなＧＭの声に遮られた。

「さぁ、急がないとあまり時間はないぞ？　ＹＯＵ達も早くダンジョンに入るのであ～る。」

あまり時間がない？
早い者勝ちって事なんやろうか？
けど、それやと最終組の俺らはかなり不利なんじゃ？
それとも単なる時間制限か？

そんな事を考えていると、姫にぐいっと腕を引っ張られた。

「恭平、急ごう？」

◇◆◇

慌ただしく洞窟内へと飛び込むと、漆黒の闇が広がっていた。
背後にはぽっかりと海に向かって大きく入口が開いているはずなのに、たった１歩踏み込んだ洞窟の中で既に何の光明も見る事が出来ない。
辺りはしんとしていて天井から落ちる雫がぴちょんぴちょんと音を立てているだけだ。
俺達よりも先にこの洞窟の中に降りていっているはずの約２０組、４０人近い冒険者達は一体どこへ消えてしまったのだろうか？

「…静かだな。」

俺はインベントリから魔晶石ランタンを取り出すと、カチリと灯りを点した。
姫も同じように頭上にポッと灯りを点したのが見える。

「おっ？　そのティアラ改造してもらったんか？」

「うん。長船さんに相談したら、その場でパパっと小さめの光の魔晶石を埋め込んでくれたの。あの人ほんとに器用だね。ちょっとびっくりしちゃった。」

「へぇ。デザインもほとんど影響受けてないし、ええ感じやんか？　ちょうどいいサイズの魔晶石があって良かったな。」

「ミーアがサン・ラモンの森で報酬に沢山もらったからって分けてくれたのよ。」

サイズは小振りなものの、その魔晶石は眩しい光を放っている。どうやらかなり強い光の魔力が籠められているようだ。これもミーアちゃんの魔力なのだろうか？

２人分の魔晶石の光によって照らし出された洞窟を見渡すと、内部の壁は黒いごつごつした岩肌を晒していた。
入口から奥へと続く道は、ゆるやかな下り坂となって降りていっているのが見える。

「見て？」

そう言って姫が照らし出した足元は、どうやらライヒェンのビーチと同じ柔らかい白い砂のようだ。

…ん？　ビーチと同じ砂地！？　変だ。

「…先に入ったはずの連中の足跡がない。」

「ね？　先発隊がいるにしては、この洞窟はいくらなんでも静かすぎるもの。多分、１組１組それぞれが別の独立したダンジョンへと送り込まれたんじゃないかしら？」

いわゆるプライベートダンジョンというヤツである。

なんとなくそんな予感はしていたが、案の定か。

「カツオのヤツ、命が惜しいとかなんとか言うとったな。…念の為に戦闘装備に変更しておいた方がいいかも知れん。」

手早く装備を変更しながら姫の方を振り返ると、いつの間にか彼女もその手にしっかりと愛用のデスメイスを握っている。

「見て！これも長船さんに改造してもらったの」

「へぇ。ロッドの部分を収縮出来るようにしてもらったんか？　それならこういう狭い空間でも振り回せるやろし、良かったな。」

嬉しそうに得物を見せてにっこりと微笑む姫の顔を見て、俺は何故かチリッと胸が痛んだ。

「って、あまりのんびりしてる暇は無いかもよ？　私達はただでさえ他の組に比べると遅れを取っているんだもの。急ぎましょう？」

彼女はそう言うと、至極当然のように俺の左腕に腕を絡めてスタスタと歩き始める。

…ってええ！？

これってやっぱ、「ランタン持ってたら手を繋げへん」って俺が言うたからか？

こんな暗いところで2人きり。

そんなにぴったりと密着されたら、どうにも意識しない訳にいかない。

「いやいやいや、姫っ！？　ちょー待ってや」

「…何？」

俺が抗議の声をあげると、姫は不機嫌そうに眉をぴくりと上げてこっちを睨む。

お？　怒ってる顔も可愛いな。

意識的ににっこりと笑ってる顔よりも、やっぱ姫はこういう素が出てる時の表情の方が可愛いわ。

って、いやいやいや！そうじゃなくて！

「ここはどんな仕掛けがあるかわからんダンジョンやで？　気が急くのもわかるけど、そんなスタスタ歩いてたらトラップがあったとしても気付かんと引っ掛ってしまうんとちゃうか？」

姫の両肩をやんわりと掴むと、一旦立ち止まってじっと瞳を覗き込んで説得を試みる。

諦めたように姫は大きく息をついた。

「…わかった。確かにその通りね。急がば回れとも言うしね。」

「そや。わかってくれたらいいんや。この先何があるかわからんし、お互い周囲に気を配って歩いていこな。」

俺は大きく頷くと、またくるりと前を向いて歩きだそうとした。

――カチッ！

「えっ！？　今何か音がしなかった？」

「…した。　カチッて言った。」

恐る恐る俺は今踏み出した右足をゆっくりと持ち上げてみる。

…そこには、いかにもトラップですよ！と言わんばかりの丸いスイッチが隠れていたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0835y/

ミッシングリンク・online

2011年12月27日00時46分発行